ISSN　1881-2643
香美市文化財調査報告書第１輯

刈谷我野遺跡 Ⅱ

－個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2007.3

高知県 香美市教育委員会

香美市文化財調査報告書第１輯

刈 谷 我 野 遺 跡 Ⅱ

－個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2007.3

高知県 香美市教育委員会

序

刈谷我野遺跡は、香美市香北町太郎丸字後口屋敷に所在する今から約8880～8600年前（炭素14年代）の縄文時代早期の遺跡です。平成15年度晩秋から断続的に発掘調査が行われ、香北町制の時から引き継いだそれらの調査成果を本年度ようやく報告書として皆様にお伝えできることはこのうえない喜びです。

当遺跡は香美市や物部川流域はもちろん全国でも希少な定住遺跡であり、現代に生きる我々が普通に行っている“居を構えて生活する”という生活様式を列島で初めて獲得した時期の様相を知るうえで貴重な資料を提示いたしました。

当遺跡の調査成果及び出土遺物はもちろんのこと、物部町・香北町・土佐山田町でこれまで調査された様々な文化財資料や各町に所在する文化財は、今を生き、未来に生きようとする我々の道標となるものであります。また、健全な地域と社会の形成及び地域とその歴史を正しく理解するのに必要不可欠なものであり、これらの文化財及び歴史資料を保護･継承し、それらの活用とそれらに対する理解促進に努めるのが当市教育委員会に課せられた大きな責任であります。

末尾になりましたが、本書刊行までに様々な形でご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げると共に、本書が香美市の文化財に対する理解と歴史を正しく理解するための基礎的資料として活用されることを願います。

高知県香美市教育委員会

教育長　　原　初 惠

例　　言

1．本報告書は、香北町教育委員会が平成15年度から平成17年度にかけて断続的に実施した個人住宅建築に伴う刈谷我野遺跡の発掘調査報告書である。平成18年３月１日に香北町は物部村・土佐山田町と市町村合併を行い香美市となったため、香美市教育委員会が整理作業を引き継ぎ本報告書を発行するものである。

2．所在地　高知県 香美市 香北町太郎丸字後ロ屋敷721・722

3．調査面積　830㎡

4．調査体制

平成15年度

香北町教育委員会　教育長　梶原正道
教育次長　岡村博公
社会教育係長　吉本浩二
臨時埋蔵文化財調査員　松本安紀彦(平成15年12月１日～)
臨時測量員　上田幸正(平成15年12月10日～平成16年３月31日)

平成16年度

香北町教育委員会　教育長　梶原正道
教育次長　岡村博公
社会教育係長　日和佐干城
臨時埋蔵文化財調査員　松本安紀彦

平成17年度

香北町教育委員会(～平成18年２月28日)
教育長　梶原正道(～平成17年５月14日)
岡村彰三(平成17年５月15日～平成18年２月28日)
教育次長　久保和昭
社会教育係長　日和佐干城
社会教育係　小松慶久
非常勤埋蔵文化財調査員　松本安紀彦

香美市教育委員会　本庁(平成18年３月１日～)
教育長　原初惠
教育次長　福島勇二
生涯学習課長　山崎泰広
社会教育係　野町貴弘
文化財保護係　小林麻由

香北分室(平成18年３月１日～)
分室長　中村真知子
係長　日和佐干城
非常勤埋蔵文化財調査員　松本安紀彦

平成18年度

香美市教育委員会　本庁
教育長　原初惠
教育次長　福島勇二
生涯学習課課長　山崎泰広
社会教育係　野町貴弘
文化財保護係　小林麻由

香美市教育委員会 香北分室
分室長　中村真知子
係長　日和佐干城
非常勤埋蔵文化財調査員　松本安紀彦

5．調査期間

(１)試掘調査　平成９年２月17日～２月21日(町内遺跡発掘調査)
平成10年１月20日～３月31日(ほ場整備事業に先立つ調査)

（２）本調査　　平成15年度　10月６日～11月７日（第１次調査）
　　12月１日～平成16年１月30日（第２次調査）
　　平成16年度　５月20日～６月10日（第１次調査）
　　７月15日～７月26日（第２次調査）
　　平成17年度　12月１日～16日

６．本書の第Ⅰ～Ⅴ章・Ⅶ章の執筆及び全体の編集は松本安紀彦が行った。第Ⅵ章は国立歴史民俗博物館年代測定研究グループのご厚意により、玉稿を賜った。

７．発掘調査及び整理作業で、下記の方々の協力を得た。
（発掘調査）　平成15年度　千頭将彦 宗石富恐 出原功 宮本敏夫 武内秀美 山崎祐子 横田壽子
　　吉川誠喜 吉川徳子 恒石通子 池田壽夫 近森眞稔
　　平成16年度　宗石富恐 横田壽子 吉川誠喜 吉川徳子 恒石通子 池田壽夫 近森眞稔
　　平成17年度　宗石富恐 吉川誠喜 吉川徳子 池田壽夫
（整理作業）　平成15年度　楠瀬憲子
　　平成16・17年度　門脇菜乃花 山中美代子　自然化学分析業務委託:㈱古環境研究所
　　平成18年度　井澤久未 竹崎寛将　　石器実測業務委託:㈱アルカ
（重機運搬）　原田建設

８．発掘及び報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関から助言・教示、資料調査のご協力を賜った。ここに記して感謝するものである。（敬称略　五十音順）
泉拓良（京都大学）　今田秀樹（大分県日田市教育委員会）　岩永哲夫（宮崎県埋蔵文化財センター）
大下明（雲雀丘学園）　岡村博公（香美市香北町中央公民館館長）
岡本桂典（高知県立歴史民俗資料館）　遠部慎・小林謙一・西本豊弘（国立歴史民俗博物館）
河瀬正利（広島大学）　角張淳一（㈱アルカ）　木田真・酒井雅代（鳥取県智頭町教育委員会）
熊谷博志（奈良大学）　坂井秀弥（文化庁）　清家章（高知大学）
瀬口眞司（滋賀県埋蔵文化財保護協会）　忽那敬三・島田和高（明治大学博物館）
下條信行（愛媛大学）　多田仁・兵頭勲（愛媛県埋蔵文化財調査センター）
谷口康浩（国学院大学）　田部剛士（三重県鈴鹿市考古博物館）　玉田芳英（文化庁）
敦賀啓一郎（福岡県北九州市自然史歴史博物館）　出原恵三・廣田佳久・前田光雄・森田尚弘・山本哲也・久家隆芳・坂本憲昭（高知県埋蔵文化財センター）　中越利夫（広島県東城市時悠館）
丹羽佑一（香川大学）　畠中宏一（高知県立追手前高校吾北分校）
深野信之（鹿児島県姶良町教育委員会）　町田勝則（長野県埋蔵文化財センター）
松田直則（高知県教育委員会）　松村信博（高知市立朝倉中学校）　矢野健一（立命館大学）
山崎真治（佐賀県佐賀市教育委員会）　大分県教育委員会　大分県野津町教育委員会
大分県九重町教育委員会　鹿児島県姶良町教育委員会　鹿児島県立埋蔵文化財センター
鹿児島県上野原縄文の森　高知県教育委員会　（財）高知県埋蔵文化財センター
国立歴史民俗博物館年代測定研究グループ　高知県立歴史民俗資料館
鳥取県智頭町教育委員会　㈱古環境研究所　㈱アルカ

９．土器実測及び拓本は松本安紀彦の指導のもと、竹崎寛将・井澤久末が行った。石器実測は報告№195～213・312～318・320～326・360～366・369・370・402～413・415・416・423～427・507・621・622・673～681・762は㈱アルカの成果品、319・414は田部剛士氏のご厚意による。それ以外の石器については松本安紀彦が行った。

10．遺構方位は磁北である。

11．出土遺物については、平成15年（2003年）度調査を「03-KK」、平成16年（2004年）度調査を「04-KK」、平成17年（2005年）度調査を「05-KK」としてそれぞれ注記し、関連図面・写真と共に、香美市教育委員会香北分室で、遺物台帳作成のうえで保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　遺跡周辺の地理的歴史的環境 …… 3
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
第Ⅲ章　平成15年度調査の概要及びその成果 …… 5
　第１節　平成15年度調査の概要
　　１．調査区の設定
　　２．調査の方法
　　３．基本層序
　　４．包含層及び各検出面の概要
　第２節　第３層出土遺物
　第３節　第４層出土遺物
　第４節　第３・４層一括出土遺物
　第５節　表面採集遺物及び平成15年度調査SK２埋土水洗出土遺物
第Ⅳ章　平成16年度調査の概要及びその成果 …… 55
　第１節　平成16年度調査の概要
　　１．調査区の設定
　　２．調査の方法
　　３．基本層序
　　４．包含層及び各検出面の概要
　第２節　第４層中検出SK１及びSK１出土遺物
　第３節　第４層出土遺物
　第４節　表面採集・撹乱遺物
第Ⅴ章　平成17年度調査の概要及びその成果 …… 66
　第１節　平成17年度調査の概要
　　１．調査区の設定
　　２．調査の方法
　　３．基本層序
　　４．包含層及び各検出面の概要
　第２節　第３層中検出SK１遺構図及びSK１出土遺物
　第３節　第４層上面検出遺物集中１・２、SX２、土器個体３について
　　１．遺物集中１出土状況図及び遺物集中１出土遺物
　　２．遺物集中２及び遺物集中２出土遺物・遺物集中１・２一括出土遺物
　　３．SX２遺構図及びSX２出土遺物
　　４．土器個体３出土状況図及び土器個体３出土遺物
　第４節　第３層一括出土遺物
　第５節　第４層上層出土遺物
　第６節　第４層下層出土遺物
　第７節　第４層一括出土遺物

第８節　トレンチ出土遺物(西トレンチ・東トレンチ・北トレンチ)
第９節　表面採集及び撹乱出土遺物
第Ⅵ章　高知県香美市刈谷我野遺跡の炭素14年代測定 …… 101
第Ⅶ章　まとめ …… 106
第１節　香美市の縄文時代早期遺跡について
第２節　刈谷我野遺跡の無文土器について
第３節　刈谷我野遺跡の有文土器－山形押型文を中心に－
第４節　刈谷我野遺跡の剥片石器について
第５節　刈谷我野遺跡の礫石器について
第６節　南四国における縄文時代早期の様相についてⅡ－刈谷我野式の提唱とその意義－

挿　図　目　次

第１図　高知県香美市(物部町・香北町・土佐山田町)位置図 …… 1
第２図　香美市香北町内遺跡位置図 …… 2
第３図　香北町刈谷我野遺跡範囲、調査区位置図及び縄文時代早期遺構分布図 …… 6
第４図　平成15年度　東壁土層図 …… 7
第５図　平成15年度調査　第３層出土　無文土器口縁(口縁部無文：報告No.１～29) …… 10
第６図　平成15年度調査　第３層出土　無文土器口縁(口縁部有文：報告No.30～60) …… 11
第７図　平成15年度調査　第３層出土　無文土器口縁(口縁部有文：報告No.61～89) …… 12
第８図　平成15年度調査　第３層出土　無文土器胴部～底部(報告No.90～102) …… 13
第９図　平成15年度調査　第３層出土　無文土器胴部(報告No.103～110) …… 14
第10図　平成15年度調査　第３層出土　無文土器胴部(報告No.111～114) …… 15
第11図　平成15年度調査　第３層出土　無文土器胴部～底部(報告No.115～120) …… 16
第12図　平成15年度調査　第３層出土　山形押型文土器(報告No.121～150) …… 18
第13図　平成15年度調査　第３層出土　山形押型文土器(報告No.151～161) …… 19
第14図　平成15年度調査　第３層出土　ポジティヴ楕円押型文土器(報告No.162～176) …… 20
第15図　平成15年度調査　第３層出土　格子目押型文土器(報告No.177～184) …… 21
第16図　平成15年度調査　第３層出土　異形押型文土器(報告No.185～189) …… 21
第17図　平成15年度調査　第３層出土　撚糸文土器(報告No.190～194) …… 22
第18図　平成15年度調査　第３層出土　剥片石器(石鏃・楔形石器：報告No.195～213) …… 23
第19図　平成15年度調査　第３層出土　礫石器(磨石・敲石：報告No.214～219) …… 24
第20図　平成15年度調査　第３層出土　礫石器(石皿：報告No.220) …… 25
第21図　平成15年度調査　第４層出土　無文土器ドット分布図 …… 27
第22図　平成15年度調査　第４層出土　無文土器口縁(報告No.221～255) …… 28
第23図　平成15年度調査　第４層出土　無文土器口縁(報告No.256～260)・胴部(報告No.261・262) …… 29
第24図　平成15年度調査　第４層出土　無文土器胴部(報告No.263～265) …… 30
第25図　平成15年度調査　第４層出土　無文土器底部(報告No.266・267) …… 31
第26図　平成15年度調査　第４層出土　山形押型文土器ドット分布図 …… 32

第27図　平成15年度調査　第４層出土　山形押型文土器(報告№268～294) …… 33
第28図　平成15年度調査　第４層出土　ポジティヴ楕円押型文土器ドット分布図 …… 34
第29図　平成15年度調査　第４層出土　ポジティヴ楕円押型文土器(報告№295～302) …… 35
第30図　平成15年度調査　第４層出土　異形押型文土器(報告№303) …… 35
第31図　平成15年度調査　第４層出土　格子目押型文土器ドット分布図 …… 36
第32図　平成15年度調査　第４層出土　格子目押型文土器(報告№304～307) …… 36
第33図　平成15年度調査　第４層出土　撚糸文土器ドット分布図 …… 37
第34図　平成15年度調査　第４層出土　撚糸文土器(報告№308～311) …… 38
第35図　平成15年度調査　第４層出土　剥片石器ドット分布図 …… 39
第36図　平成15年度調査　第４層出土　剥片石器(尖頭状石器・石鏃・スクレイパー：報告№312～319) …… 40
第37図　平成15年度調査　第４層出土　礫石器ドット分布図 …… 41
第38図　平成15年度調査　第４層出土　礫石器(磨石・敲石：報告№320～325) …… 42
第39図　平成15年度調査　第４層出土　礫石器(磨石・敲石：報告№326～329) …… 43
第40図　平成15年度調査　第４層出土　礫石器(石皿・台石：報告№330・331) …… 44
第41図　平成15年度調査　第４層出土　礫石器(石皿・台石：報告№332～336) …… 45
第42図　平成15年度調査　第３・４層一括　土器(報告№337～359) …… 47
第43図　平成15年度調査　第３・４層一括　石器(報告№360～370) …… 48
第44図　平成15年度調査　表面採集　土器(報告№371～381) …… 50
第45図　平成15年度調査　表面採集　土器(報告№382～401) …… 51
第46図　平成15年度調査　表面採集　剥片石器(石鏃・二次加工剥片・スクレイパー：報告№402～414) …… 52
第47図　平成15年度調査　表面採集　礫石器(磨石・敲石：報告№415～419) …… 53
第48図　平成15年度調査　表面採集　礫石器(石皿・台石：報告№420～422)・SK２埋土水洗出土剥片石器(石鏃：報告№423～427) …… 54
第49図　平成16年度調査　調査区平面図及び遺構分布図 …… 56
第50図　平成16年度調査　東壁土層図 …… 57
第51図　平成16年度調査　SK１遺構図及び出土遺物垂直分布図 …… 59・60
第52図　平成16年度調査　SK１出土無文土器(報告№428～444) …… 62
第53図　平成16年度調査　SK１出土無文土器(報告№445～448) …… 63
第54図　平成16年度調査　SK１出土押型文土器(報告№449～486) …… 64
第55図　平成16年度調査　第４層出土土器(報告№487～490) …… 65
第56図　平成16年度調査　表面採集及び撹乱出土土器(報告№491～499) …… 65
第57図　平成17年度調査　北壁土層図 …… 66
第58図　平成17年度調査　第３層中検出遺構分布図 …… 67
第59図　平成17年度調査　SK１遺構図及びSK１出土遺物(報告№500～507) …… 68
第60図　平成17年度調査　第４層上面検出遺構分布図 …… 69
第61図　平成17年度調査　遺物集中１出土状況図及び出土遺物垂直分布図 …… 71・72
第62図　平成17年度調査　遺物集中１出土土器(報告№508～524) …… 73
第63図　平成17年度調査　遺物集中２出土状況図及び出土遺物垂直分布図 …… 75・76
第64図　平成17年度調査　遺物集中２出土土器(報告№525～538) …… 77

第65図　平成17年度調査　遺物集中２出土石器(石皿・砥石：報告№539・540)及び遺物集中１・２一括土器(報告№541～547) …… 78
第66図　平成17年度調査　SX２遺構図及び出土遺物垂直分布図 …… 79・80
第67図　平成17年度調査　SX２出土土器(報告№548～559) …… 81
第68図　平成17年度調査　土器個体３出土状況図及び垂直分布図 …… 82
第69図　平成17年度調査　土器個体３出土土器(報告№560～564) …… 83
第70図　平成17年度調査　第３層出土　土器(報告№565～579) …… 85
第71図　平成17年度調査　第４層上層出土　無文土器(報告№580～595) …… 86
第72図　平成17年度調査　第４層上層出土　山形押型文土器(報告№596～614) …… 87
第73図　平成17年度調査　第４層上層出土　ポジティヴ楕円押型文土器(報告№615～620) …… 88
第74図　平成17年度調査　第４層上層出土　石器(石鏃・磨石：報告№621・622) …… 88
第75図　平成17年度調査　第４層下層出土遺物ドット分布図 …… 89
第76図　平成17年度調査　第４層下層出土　無文土器(報告№623～644) …… 90
第77図　平成17年度調査　第４層下層出土　無文土器(報告№645～653) …… 91
第78図　平成17年度調査　第４層下層出土　押型文土器・撚糸文土器(報告№654～672) …… 92
第79図　平成17年度調査　第４層下層出土　石器(石鏃・磨石・敲石：報告№673～682) …… 93
第80図　平成17年度調査　第４層一括出土　土器(報告№683～693) …… 94
第81図　平成17年度調査　西トレンチ出土　土器(報告№694～715) …… 96
第82図　平成17年度調査　西トレンチ出土　土製品(報告№716) …… 97
第83図　平成17年度調査　東トレンチ出土　土器(報告№717～736) …… 98
第84図　平成17年度調査　北トレンチ出土　土器(報告№737～746) …… 99
第85図　平成17年度調査　表面採集及び撹乱出土遺物(報告№747～764) …… 100
第86図　香美市縄文時代早期遺跡位置図 …… 106
第87図　香美市土佐山田町　飼古屋岩陰遺跡出土土器 …… 107
第88図　香美市土佐山田町　開キ丸遺跡出土土器① …… 108
第89図　香美市土佐山田町　開キ丸遺跡出土土器② …… 109
第90図　香美市香北町　刈谷我野遺跡試掘調査出土遺物① …… 110
第91図　香美市香北町　刈谷我野遺跡試掘調査出土遺物② …… 111
第92図　香美市香北町　美良布遺跡表面採集土器 …… 112
第93図　香美市香北町　東下タナロ遺跡表面採集土器 …… 112
第94図　刈谷我野遺跡無文土器(Ａ群)分類図 …… 114
第95図　刈谷我野遺跡有文土器(Ｂ・Ｃ群)分類図 …… 116
第96図　刈谷我野遺跡　剝片石器分類図 …… 117
第97図　刈谷我野遺跡　礫石器分類図(磨石Ａ類・片刃礫器・環状石器) …… 119
第98図　磨石Ａ類出土遺跡分布図 …… 120

表　目　次

第１表　高知県香美市刈谷我野遺跡炭素14年代測定に関して採取した試料の情報 …… 104
第２表　高知県香美市刈谷我野遺跡炭素14年代測定に関して採取した試料の分析状況 …… 104
第３表　高知県香美市刈谷我野遺跡炭素14年代測定結果と較正年代一覧 …… 104
第４表　高知県香美市刈谷我野遺跡年代別測定グラフ …… 105
第５表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表１ …… 129
第６表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表２ …… 130
第７表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表３ …… 131
第８表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表４ …… 132
第９表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表５ …… 133
第10表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表６ …… 134
第11表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表７ …… 135
第12表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表８ …… 136
第13表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表９ …… 137
第14表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表10 …… 138
第15表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表11 …… 139
第16表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表12 …… 140
第17表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表13 …… 141
第18表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表14 …… 142
第19表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表15 …… 143
第20表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表16 …… 144
第21表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表17 …… 145
第22表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表18 …… 146
第23表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表19 …… 147
第24表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表20 …… 148
第25表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表21 …… 149
第26表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表22 …… 150
第27表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表23 …… 151
第28表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表24 …… 152
第29表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表25 …… 153
第30表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表26 …… 154

図　版　目　次

図版１－１　刈谷我野遺跡平成16年度調査第４層中検出状況（北調査区） …… 157
図版１－２　刈谷我野遺跡平成16年度調査検出SK１完掘状況 …… 157
図版２－１　刈谷我野遺跡平成16年度調査東壁土層（北調査区） …… 158
図版２－２　刈谷我野遺跡平成16年度調査東壁土層SK１部分 …… 158
図版３－１　刈谷我野遺跡平成16年度調査第５層上面検出状況（南調査区） …… 159

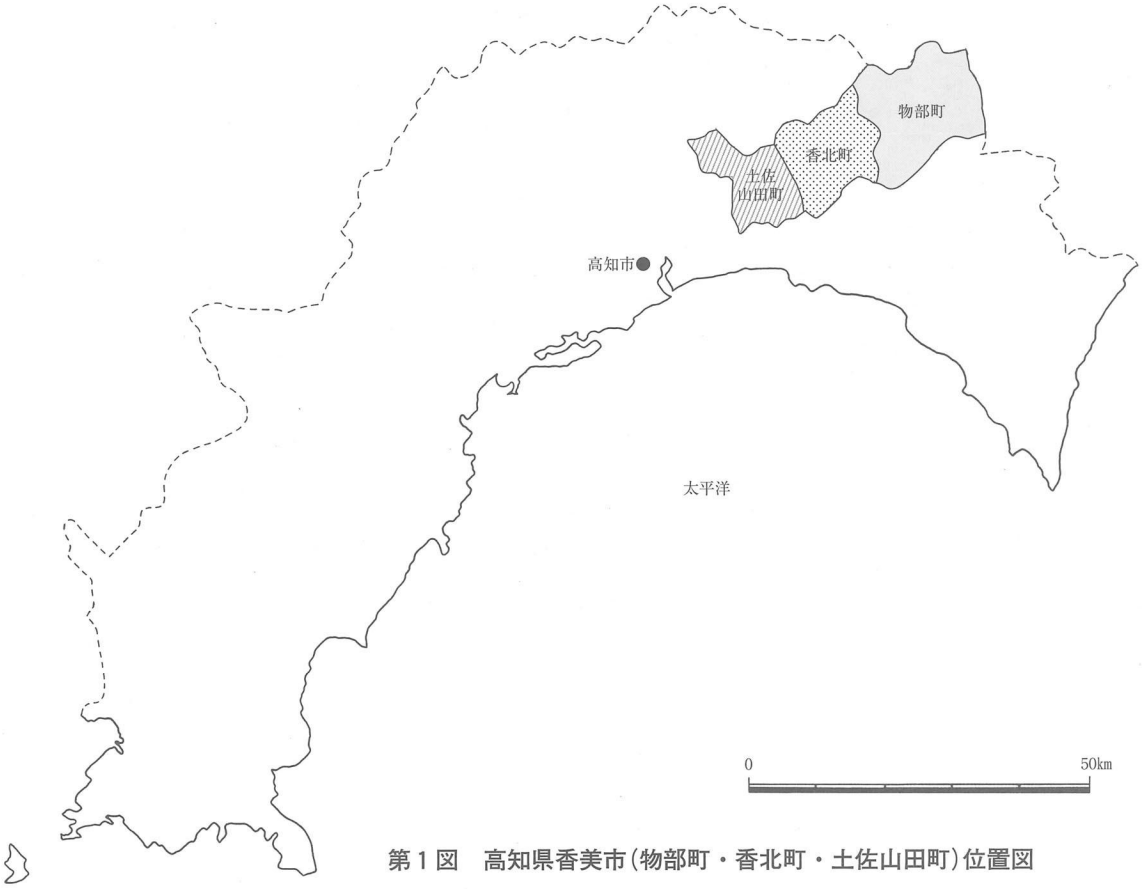
図版３－２　刈谷我野遺跡平成16年度調査東壁土層（南調査区）…… 159
図版４－１　刈谷我野遺跡平成17年度調査第３層中検出状況 …… 160
図版４－２　刈谷我野遺跡平成17年度調査第３層中検出SK１完掘状況 …… 160
図版５－１　刈谷我野遺跡平成17年度調査第４層上面検出状況 …… 161
図版５－２　刈谷我野遺跡平成17年度調査第４層上面検出遺物集中１・２出土状況 …… 161
図版６－１　刈谷我野遺跡平成17年度調査第４層上面検出SX２検出状況 …… 162
図版６－２　刈谷我野遺跡平成17年度調査SX２出土状況 …… 162
図版７－１　刈谷我野遺跡平成17年度調査土器個体３出土状況 …… 163
図版７－２　刈谷我野遺跡平成17年度調査第６層上面検出状況 …… 163
図版８　刈谷我野遺跡　報告No.１～38 …… 164
図版９　刈谷我野遺跡　報告No.39～89 …… 165
図版10　刈谷我野遺跡　報告No.90～114 …… 166
図版11　刈谷我野遺跡　報告No.115～139 …… 167
図版12　刈谷我野遺跡　報告No.140～176 …… 168
図版13　刈谷我野遺跡　報告No.177～194 …… 169
図版14　刈谷我野遺跡　報告No.195～220 …… 170
図版15　刈谷我野遺跡　報告No.221～260 …… 171
図版16　刈谷我野遺跡　報告No.261～281 …… 172
図版17　刈谷我野遺跡　報告No.282～311 …… 173
図版18　刈谷我野遺跡　報告No.312～329 …… 174
図版19　刈谷我野遺跡　報告No.330～354 …… 175
図版20　刈谷我野遺跡　報告No.355～370 …… 176
図版21　刈谷我野遺跡　報告No.371～401 …… 177
図版22　刈谷我野遺跡　報告No.402～427 …… 178
図版23　刈谷我野遺跡　報告No.428～454 …… 179
図版24　刈谷我野遺跡　報告No.455～486 …… 180
図版25　刈谷我野遺跡　報告No.487～507 …… 181
図版26　刈谷我野遺跡　報告No.508～530 …… 182
図版27　刈谷我野遺跡　報告No.531～540 …… 183
図版28　刈谷我野遺跡　報告No.541～559 …… 184
図版29　刈谷我野遺跡　報告No.560～579 …… 185
図版30　刈谷我野遺跡　報告No.580～614 …… 186
図版31　刈谷我野遺跡　報告No.615～640 …… 187
図版32　刈谷我野遺跡　報告No.641～657 …… 188
図版33　刈谷我野遺跡　報告No.658～678 …… 189
図版34　刈谷我野遺跡　報告No.679～693 …… 190
図版35　刈谷我野遺跡　報告No.694～715 …… 191
図版36　刈谷我野遺跡　報告No.716～727 …… 192
図版37　刈谷我野遺跡　報告No.728～761 …… 193
図版38　刈谷我野遺跡　報告No.762～764 …… 194

第Ⅰ章　調査に至る経緯

刈谷我野遺跡は高知県香美市香北町太郎丸字後ロ屋敷に立地する。昭和63年に太郎丸遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地に指定されたが、平成８年及び平成10年に行った試掘確認調査により、縄文時代早期の遺跡として注目を集めた。その後、地域より遺跡名変更の声があがり、太郎丸遺跡から刈谷我野遺跡へと変更されている。

平成15年に当遺跡内において個人住宅建築が計画され、建築により破壊を受ける範囲について同年10月から発掘調査を行った。当初は高知県教育委員会の指導のもとで調査を行っていたが、調査が進むにつれて予想を上回る遺物の出土と遺構の存在が明らかになったため、香北町教育委員会が主体となって調査を進めることとなった。平成16年には個人住宅への進入路敷設のために破壊を受ける部分の調査、平成17年には井戸掘削のために破壊を受ける部分の調査を平成15年度調査に引き続いて香北町教育委員会が行っている。

物部川流域の縄文遺跡は南国市田村遺跡群(中期初頭～後期)、香美市土佐山田町町田堰東遺跡(早期前葉)、香美市土佐山田町林田シタノヂ遺跡(中期末～後期初頭)、香美市香北町美良布遺跡(早期・晩期中葉)などが知られるのみであったが、本遺跡及び本遺跡より遡ること約３km地点に位置する東下タナロ遺跡(早期・後期・晩期)の存在は、縄文時代でも古い時期の遺跡が流域及び河岸段丘上に所在する可能性を十分に考慮しなければならないことを示している。



第１図　高知県香美市(物部町・香北町・土佐山田町)位置図

香美市香北町内遺跡位置図

1	猪野城跡	12	ホオノキ遺跡	23	有瀬城跡
2	永瀬(山本)城跡	13	宮の前遺跡	24	日ノ御子経塚
3	清爪城跡	14	吉野遺跡	25	西オソバ遺跡
4	曽城跡	15	前田の土居遺跡	26	美良布遺跡
5	府内遺跡	16	五反田遺跡	27	中屋敷遺跡
6	根須城跡	17	西の町遺跡	28	東笹岡遺跡
7	谷相城跡	18	大小合遺跡	29	五百蔵遺跡
8	永野遺跡	19	朴ノ木遺跡	30	堂の前遺跡
9	柳ノ本遺跡	20	東下タナロ遺跡	31	萩野遺跡
10	永野城跡	21	田尻遺跡	32	刈谷我野遺跡
11	仁井田遺跡	22	有光城跡	33	白川城

第２図　香美市香北町内遺跡位置図

第Ⅱ章　遺跡周辺の地理的歴史的環境

第１節　地理的環境

刈谷我野遺跡は、町内を貫流する物部川によって形成された左岸最大の河岸段丘である美良布の入り口そして物部川の支流である萩野川が本流に合流する地点に立地している。

物部川は高知県と徳島県の県境に程近い三嶺山(標高1893m)系に源を発している。物部町の所在する上流域は極めて急峻な山間部であり、それらを縫うように細かい蛇行を繰り返しながら下流へと流れる。香北町の所在する中流域では左岸を中心に幾つもの河岸段丘が発達しているが、これは左岸が四万十帯に属しており、物部川左岸からの支流が蛇行を繰り返しながら緩やかに流れたため、段丘上に小扇状地が発達していることに由来する。

土佐山田町杉田付近で物部川の流れはほぼ90度南へ転進し、それとともに急峻な山間地は終わる。同町神母木(いげのき)付近からは川幅を大きく広げて、南国市・香南市野市町に広がる高知平野及び香長平野を潤し、太平洋へ注ぎ込む。

この川には、江戸時代に野中兼山によって山田堰が作られ、用水が開発された。現在の高知平野穀倉地帯の形成は、この水利工事無くしては成り立っていないのであり、野中兼山と工事に携わった民衆の力は現在の高知県の礎になったと言える。時代が下り、この川は下流域と中上流域を結ぶ交通路としての役割を果たしていたが、治水と発電目的の杉田ダムが建設されたため、その役割を国道に譲った。本来の河床は現在の川面より20mほど下にあると考えられる。

山の植生は、目に見える限りほとんどが杉檜の植林である。そのため、植林以前の植生がどうであったかを知るべくもないが、自然科学分析及び現在の植生から常緑樹や落葉樹の混交樹林であったことが推測される。

刈谷我野遺跡は、物部川そして萩野川を支えつづけた豊かな森林資源に恩恵を受けた縄文人の遺してくれた貴重な歴史的文化的資産であると言える。

第２節　歴史的環境

香北町内で埋蔵文化財包蔵地として指定されているのは33箇所である。旧石器時代は永野に位置する永野長岡遺跡が挙げられる。縄文時代になると遺跡数が増え、永野長岡遺跡・仁井田遺跡・東下タナロ遺跡・美良布遺跡が挙げられる。弥生時代の遺跡は刈谷我野遺跡・五百蔵遺跡・堂の前遺跡・東笹岡遺跡・中屋敷遺跡・美良布遺跡・西オソバ遺跡・朴ノ木遺跡・仁井田遺跡・五反田遺跡・田尻遺跡が挙げられる。

とりわけ美良布遺跡は縄文時代晩期から弥生時代全般を通じて集落を形成しており、継起的に発展したと考えられる。しかし、縄文時代早期の「蔦島式」と考えられた無文土器の出土やそれと同時期と考えられる表面採集遺物が確認されていることから、遺跡の起源は縄文時代早期に遡る可能性が指摘できる。また、大川上美良布神社の社宝で重要文化財である２個の突線紐式銅鐸が神社の

南にあったとされる金洞寺に伝わっていたという伝承や、出土したのが五百蔵地区であるという伝承がある。しかし、どのような経緯で伝わり、いつ大川上美良布神社に納められたものなのかについては記録がない。ただ江戸時代初期の時点で既に大川上美良布神社に納められていた記録が残っている。この銅鐸が遠隔地より埋納のためにわざわざ搬入されたものでないと考えるならば、それを所有そして埋納したと考えられるのは現段階では美良布遺跡だけである。南四国中央部においては南国市田村遺跡群が大集落として有名であるが、美良布遺跡はそれに次ぐ規模の政治的宗教的に発達した弥生集落であった可能性が極めて高い。

古墳時代に帰属する集落遺跡及び古墳は確認されていない。しかし、弥生時代後期末の土器は頻繁に出土し、田尻遺跡の試掘調査では同時期の遺物集中地点が確認されている。また、美良布遺跡の発掘調査では古墳時代の甕が包含層より出土しているため、土佐山田町に数多く所在する古墳の造営を支えた人々の集落があった可能性を考慮しておく必要がある。

古代～平安時代の遺跡は現在のところ確認されていない。しかし「川上様」として知られる大川上美良布神社は平安時代初期の宮中年中行事や制度及び律令の施行規則を記した「延喜式」の神名帳に記録のある式内社である。周辺に「川上様」を支えた集落及び豪族の存在がうかがえるため、広域的に栄えた拠点的地域であった可能性が指摘できる。

中世～戦国時代にかけての遺跡は豊富であり、大きく分けて集落と城跡(平城・山城)に分けられる。前者に関しては府内遺跡・刈谷我野遺跡・五百蔵遺跡・堂の前遺跡・東笹岡遺跡・中屋敷遺跡・美良布遺跡・西オソバ遺跡・宮の前遺跡・朴ノ木遺跡・前田の土居遺跡・仁井田遺跡・五反田遺跡・西の町遺跡・柳ノ本遺跡・大小合遺跡が挙げられ、後者に関しては根須城跡・永野城跡・吉野城跡・朴ノ木遺跡・萩野城跡・有光城跡・有瀬城跡・白川城跡・轡城跡・谷相城跡・清瓜城跡・永瀬城跡・猪野城跡が挙げられる。高知は山城の多い土地であり、香北町も例外ではない。これらの城は土佐七雄の一雄である山田氏の勢力圏に収まっていたようであるが、山田氏が長宗我部氏に滅ぼされてからは、その傘下に収まったという。

近世になっては、野中兼山の改革以降、韮生野の他に美良布・上野尻・永野・清爪に新田が開かれた。それと共に産業が新興し、商取引が活発になっている。

近代では「ゴンドラの唄」で知られる歌人・吉井勇が香北町猪野々に逗留しており、逗留時に使用した庵「渓鬼荘」が移築復元されている。

第Ⅲ章　平成15年度調査の概要及びその成果

第１節　平成15年度調査の概要

１．調査区の設定

個人住宅建築に伴い、住宅基礎部分の工事を行う範囲を対象とする発掘調査である。水田区画を遺した状態であったので、それに則して畦畔を境に西区画をⅠ区、東区画をⅡ区として設定した。それぞれの調査区に任意の４ｍグリッドを設定し、公共座標からグリッド杭に座標値を与えた。

２．調査の方法

第１次調査においては、耕作土及び床土を重機で剥ぎ取った。その後、遺物が確認できる層まで重機で剥いでから人力掘削に切り替え、包含層一括で遺物を取り上げた。その結果、表面採集遺物・包含層１一括(本書における第３層)・包含層２一括(本書における第４層)の資料が得られている。Ⅱ区においては包含層２を検出していく途中で、礫が集中して検出されるようになったため“集石遺構”として認定し、そこを遺構検出面と捉え、精査を行った。遺構及び貴重であると判断された出土遺物については４ｍグリッドに基づき、平面実測を行った。またⅠ区とⅡ区の境界においてはSK２と称する大形土坑がトレンチによって確認されたため、そこで確認された掘り込み面つまり本書における第５層上面まで掘削を行って検出した。その過程でSK１及びSK４が検出された。

第２次調査においては第４層上面で検出された礫の集中を、石皿・台石及び磨石・敲石の多さから“遺物集中群”として捉えた。平面実測に従い、個々に番号を付け、レベル高を計測しながら取り上げを行った。その後に遺構を検出・掘削し、遺構実測は個々の遺構について平面及び断面実測を行い、遺構配置図については遺構の上場を光波で測量し、座標平面図に反映させた。遺物は第４層について個々に出土した地点を記録に残すため、光波取り上げを行った。

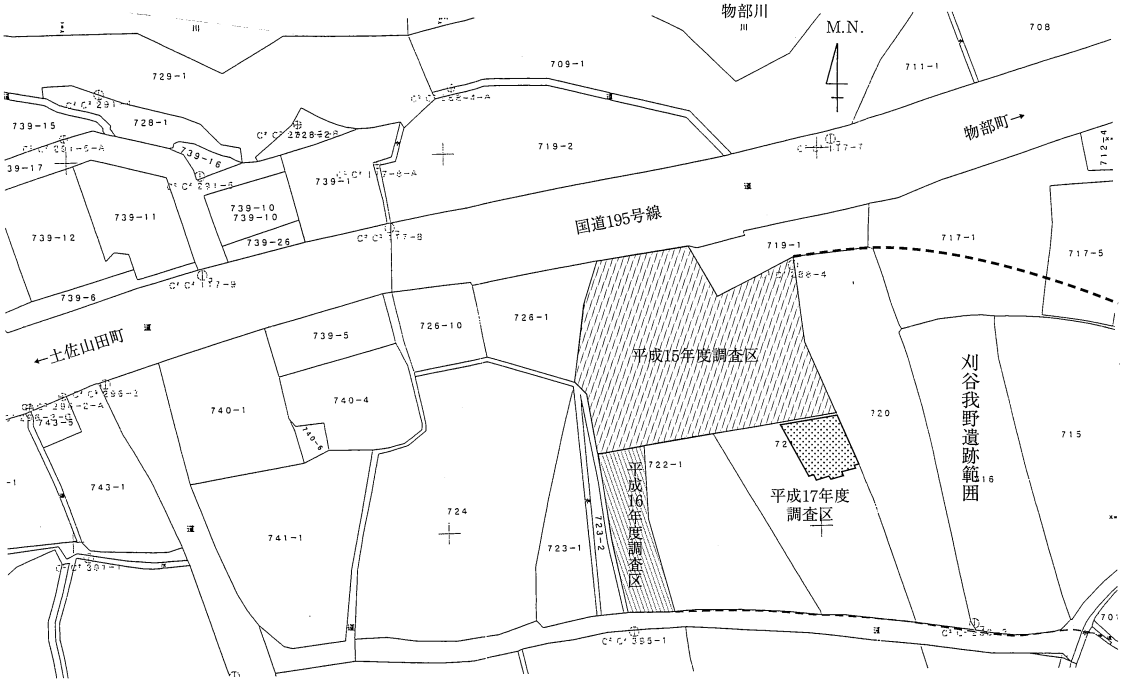
３．基本層序

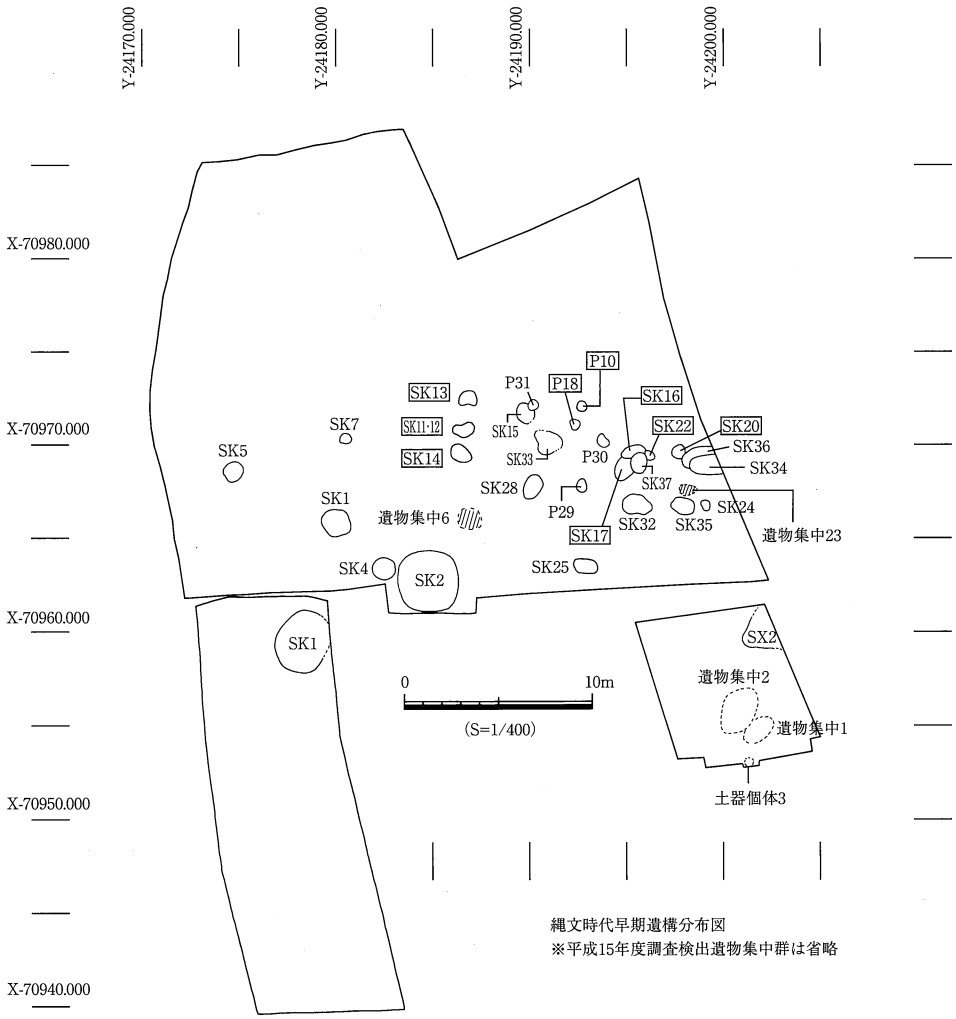
現在の地表面から第３層までの深さは約25cmである。層序は第１層から第９層に分けられ、第３層から第５層が遺物包含層である。遺構の検出は第４層上面及び第５層上面で見られた。水平堆積を基調とするが、地形は東から西へと緩やかに傾斜している。

第１層…水田耕作土。

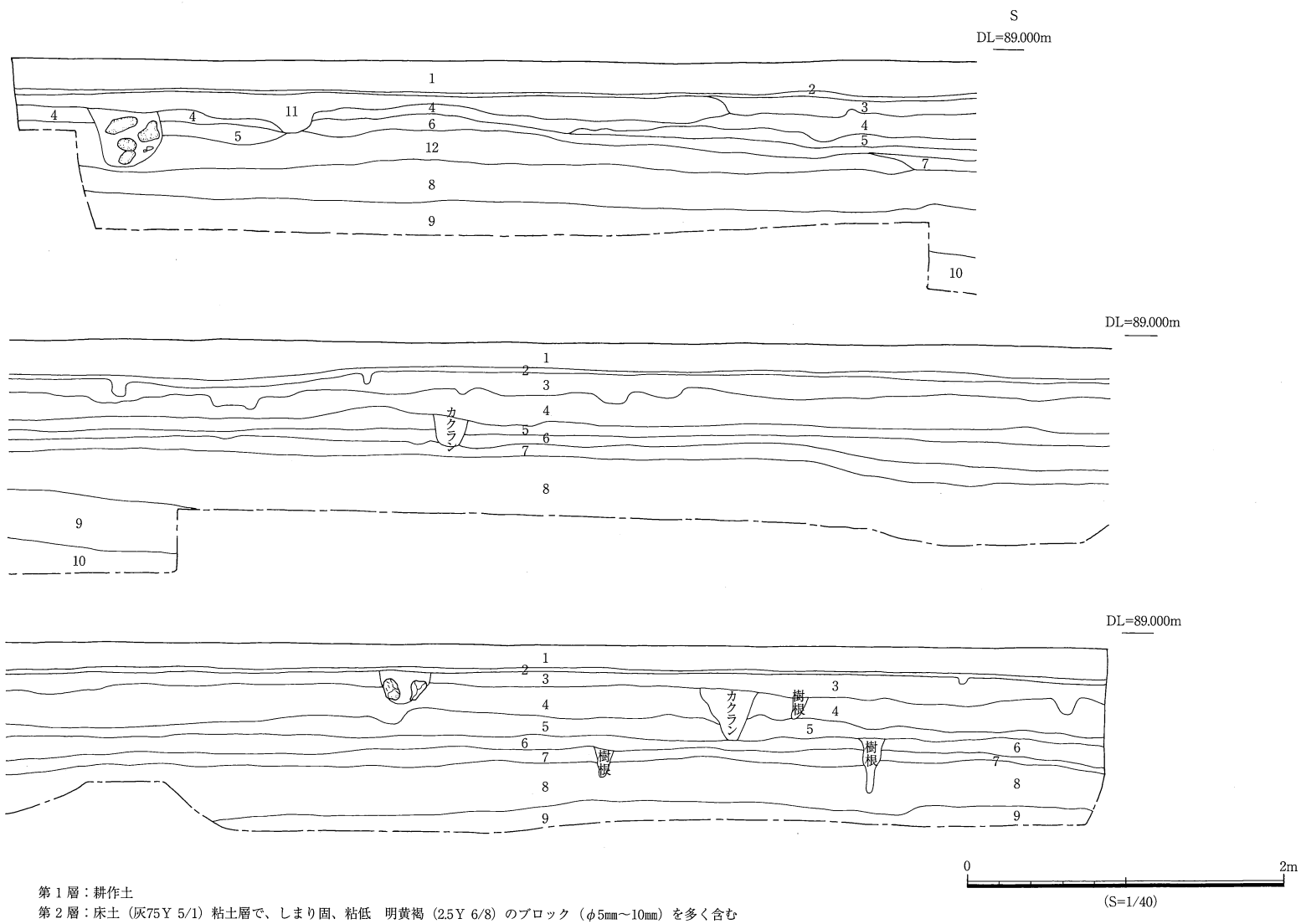
第２層(灰色7.5YR5/1)…床土。

第３層(黒色10YR2/1)…遺物包含層である。上層からは弥生時代後期の土器や中近世の陶磁器が出土している。中層から下では縄文時代早期の遺物が多数確認された。尚、この層において鬼界アカホヤ火山灰が確認されている(古環境研究所2005)。所謂“クロボク”と言われる層であり、火山灰の土壌化が進んだものとして考えられる。しまりはそれほど強くなく、粘性は低い。３～５cm大の礫を含む。





第３図　香北町刈谷我野遺跡範囲、調査区位置図及び縄文時代早期遺構分布図



第4図　平成15年度　東壁土層図

第１層：耕作土
第２層：床土（灰75Ｙ 5/1）粘土層で、しまり固、粘低　明黄褐（2.5Ｙ 6/8）のブロック（φ5mm～10mm）を多く含む
第３層：黒ボク（黒10ＹＲ 2/1）層　しまり柔、粘低　3～5cm大の砂粒を多く含む　早期遺物も有
第４層：褐色土層（黒7.5ＴＲ 2/1）しまりやや固、粘低　早期包含層、1～5mm大の白色粒を多く含む　2～4mm大の赤色粒（明赤褐5ＹＲ 5/6）を多く含む
第５層：黒褐土層（10ＹＲ 3/2）しまり柔、粘無、砂質土層　1～3mm大の砂と4層の混和層　早期包含層
第６層：灰黄褐土層（10ＹＲ 4/2）しまり柔、粘無、砂質土層　2～5mm大の砂と5層の混和層
第７層：黄褐色土層（2.5Y 5/3）砂質土層で、～2mm大の砂で構成される。しまり固、粘無　8層との混和層
第８層：黄褐色土層（2.5Y 5/3）シルト層で、しまり若干強、粘強
第９層：灰色土層（10Y 5/1）砂質土層で、1mm大の砂粒で構成。しまり弱、粘無
第10層：砂礫層　人頭大の礫と～10mm大の砂が混じる層
第11層：黒褐色土層（10ＹＲ 3/1）第3層と第4層の早期包含層が混じった層、明黄褐ブロックで深み、深く耕作が及んだことが考えられる。
第12層：黒色土層（オリーブ黒7.5Y 3/2）5mm大の砂と40cm大までの礫を含む層、基層は第7層と考えられる。

※「刈谷我野遺跡Ｉ」第3図ではＤＬ=197.000mとなっている。
正しくはＤＬ=89.000mである。

第４層(黒色7.5YR2/1)…遺物包含層である。縄文時代早期の遺物が多数確認された。しまりはやや強く、粘性は低い。１～５㎜大の砂礫及び２～４㎜大の赤色砂礫(赤褐5YR5/6)を多く含む。

第５層(黒褐色10YR3/2)…遺物包含層である。縄文時代早期の遺物が確認できるが、第３・第４層に比べると出土量は格段に少ない。しまりは弱く、粘性は低い。１～３㎜大の砂礫を多く含み、第４層と第６層の混和層の可能性が考えられる。

第６層(灰黄褐色10YR4/2)…無遺物層である。しまりは弱く、粘性は無い。２～５㎜大の砂礫を多く含む。

第７層(黄褐色2.5Y5/3) …無遺物層である。しまりはやや強く、粘性は無い。２㎜大の砂粒を多く含み、第６層と第８層との混和層として考えられる。

第８層(黄褐色2.5Y5/3) …無遺物層である。シルト質であり、しまりはやや強く、粘性は強い。

第９層(灰色10YR5/1)…無遺物層である。１㎜大の砂粒を多く含む。しまりは弱く、粘性は無い。

第10層(黒褐色10YR3/1)…撹乱土層である。２～４層が混じる。２層に含まれる明黄褐ブロックを含む。

第11層(オリーブ黒色7.5Y3/2) …無遺物層である。５㎜大の砂礫と40㎝大の岩を含む。

４．包含層及び各検出面の概要

第３層上層は中近世の陶磁器及び弥生時代の遺物が混在していたため、耕作等の開発行為が及んだと考えられる。アカホヤ火山灰のピークが観察された第３層の中層から第５層までが縄文時代早期の遺物包含層であると考えられるが、主な遺物包含層は第３層及び第４層であって、第５層からの出土量は少なく、小破片が多い。

遺構検出面は第４層上面及び第５層上面であった。第４層上面では土坑11基・ピット２基が検出され、第５層上面では土坑17基・遺物集中２基が検出された。第６層上面では遺物集中２基が検出されたが、いずれも撹乱を受けており、構築時期と正確な形状については不明である。遺構については『刈谷我野遺跡Ⅰ』(松本2005)を参照いただきたい。遺構の大半は第４層より上から掘り込まれている可能性が高いが、そこでは遺構埋土と第４層の土色が極めて類似しており、遺構検出は難しい状況であった。

調査区全体で器種識別が可能であった土器の出土総数は4521点であって、器種識別ができなかった土器片を含めると8000点を超える。その内、無文土器の出土量は3994点であるのに対して、押型文土器・撚糸文土器は517点、弥生時代の土器は10点である。よって無文土器が圧倒的多数であると言える。

引用文献

古環境研究所　2005　「第Ⅴ章　香北町 刈谷我野遺跡における自然科学分析　第1節 刈谷我野遺跡における火山灰分析」『香北町埋蔵文化財発掘調査報告書第３集　刈谷我野遺跡Ⅰ－個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』63-69頁　香北町教育委員会

松本安紀彦　2005　『香北町埋蔵文化財発掘調査報告書第３集　刈谷我野遺跡Ⅰ－個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』　香北町教育委員会

第２節　第３層出土遺物（第５～20図）

第３層から出土した器種識別可能な土器片数は1646点である。その内訳は無文土器1496点、押型文土器130点（山形押型文77点、ポジティヴ楕円押型文38点、格子目押型文10点、異形押型文５点）、撚糸文土器20点である。剥片石器は石鏃18点と楔形石器１点、礫石器は磨石・敲石６点と台石１点であって、土器・石器合わせて220点を図示した。

１～120が無文土器、121～189が押型文土器、190～194が撚糸文土器、195～213が剥片石器、214～220が礫石器である。土器の口縁部は個体識別を行った上で全点図示し、胴部・底部も個体識別を行った上で実測に耐えうる破片と器形が復元可能な破片を図示した。石器については全点図示している。

無文土器は１～89がその口縁部、90～120がその胴部・底部であり、口縁部は口縁部文様を有さないものと有するもの、胴部・底部は器面調整が二枚貝条痕のものとナデのものにそれぞれ大別できる。

１～29は口縁部文様を有さない。器面調整は１～４が二枚貝条痕であるのに対し、５～29はナデである。口縁が外傾・外反すると考えられるものが大多数であるが、２・13・18・24は直立すると考えられる。

30～89は口縁部文様を有する。文様を有する部位に差異が見られ、そのうち30～82は内面に、83・84は外面に、85～89は上面に、それぞれ文様を有する。内面に文様を有するものは直行文・左斜行文・右斜行文・刺突文に、外面に文様を有するものには左斜行文・刺突文に、上面に文様を有するものは左斜行文・刺突文にそれぞれ分けられる。

内面に文様を有するもののうち、30～38は直行文を施す。器面調整は30～32が二枚貝条痕であるのに対し、33～38はナデである。口縁は直立すると考えられるものがやや多く見られる。39～72は左斜行文を施す。器面調整は39～41が二枚貝条痕であるのに対し、42～72はナデである。口縁は外傾・外反すると考えられるものが多く見られる。73～77は右斜行文を施す。器面調整はナデのみである。口縁は直立すると考えられるものと外傾・外反すると考えられるものが見られるが、両者の割合に大きな差は見られない。78～82は刺突文を施す。器面調整は78が二枚貝条痕をナデで消すのに対し、79～82はナデである。口縁は外傾・外反すると考えられるものが多く見られる。

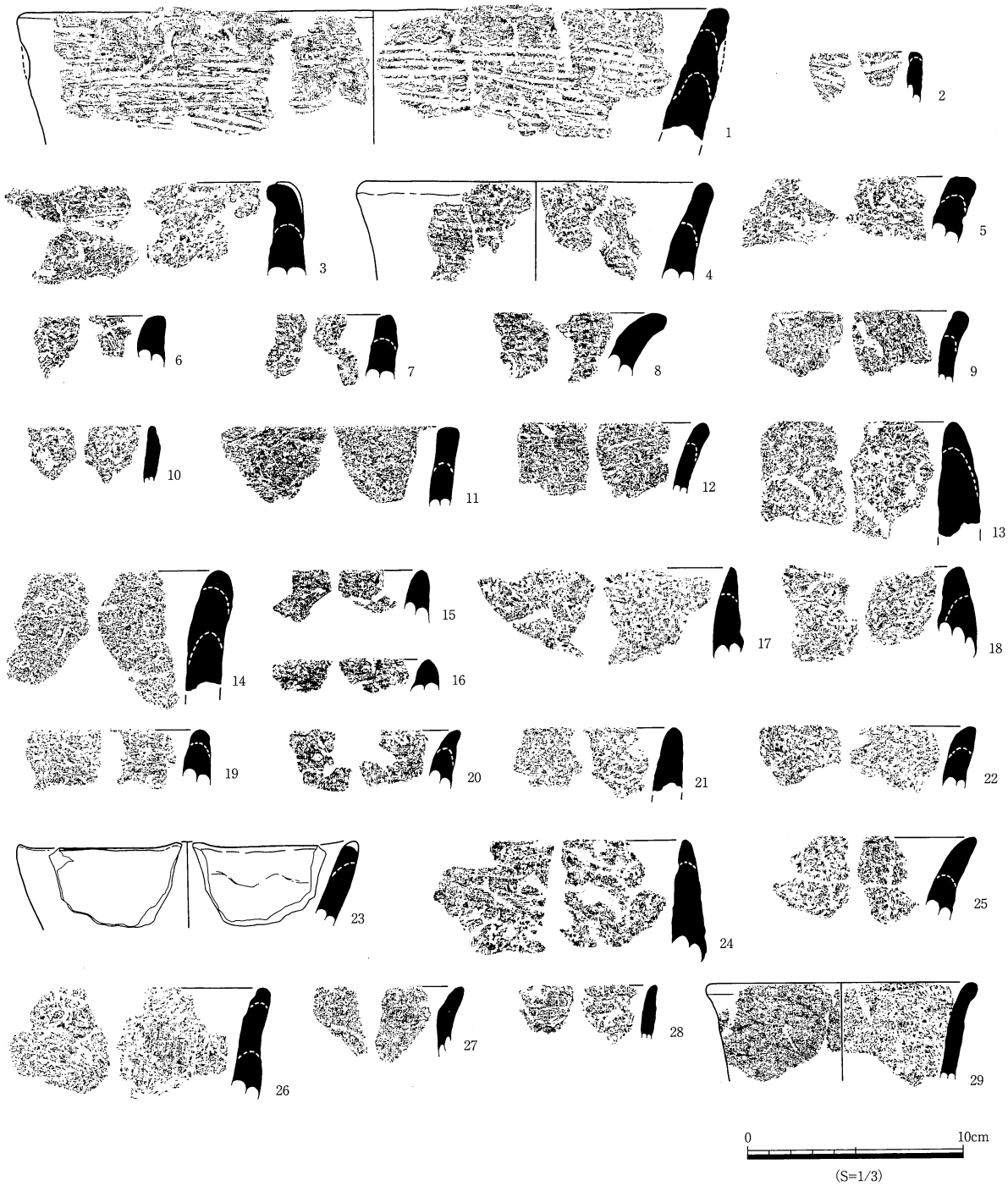
外面に文様を有するもののうち、83は左斜行文を施す。器面調整はナデであり、口縁はやや内湾すると考えられる。84は右から左方向への刺突文を施す。器面調整はナデであり、口縁は外傾すると考えられる。

上面に文様を有するもののうち、85～87は外面から内面へかけて左斜行文を施す。器面調整はいずれもナデであり、85・86は口縁が外傾するが、87は直立すると考えられる。88・89は刺突文を施す。88はΣ状刺突であり、押引文である可能性が考えられ、口縁は直立し、器面調整はナデである。89は円形刺突であり、口縁は外傾し、端部をやや強く外反させ、器面調整は二枚貝条痕である。

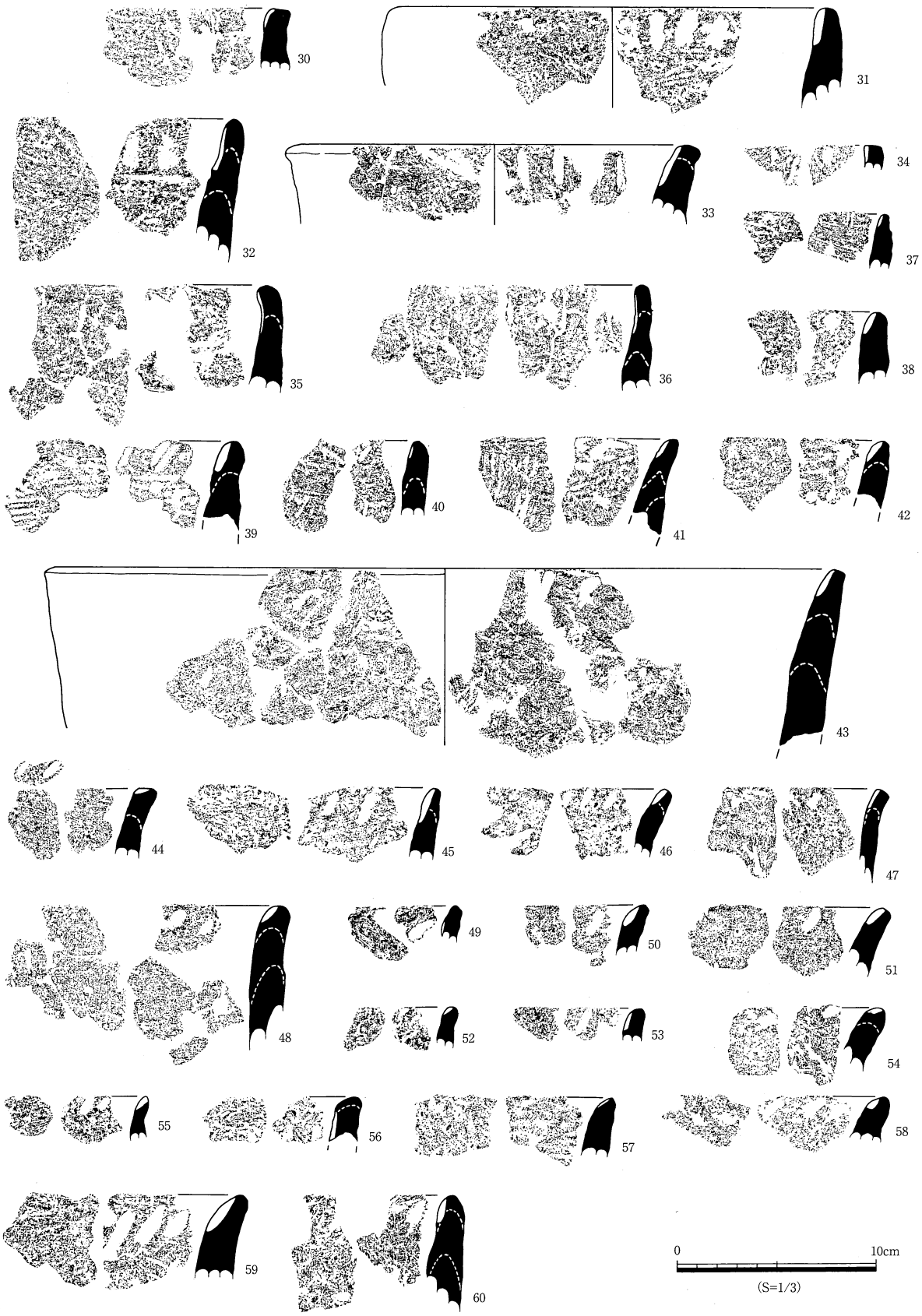
胴部・底部の器面調整は、90～100が二枚貝条痕、101～120がナデである。器面調整が二枚貝条痕であるもののうち、90～99が胴部、100が底部である。90は内面に右斜行文を有するため、口縁

直下の部位と考えられる。100は尖底を呈し、内面に付着した炭化物の年代測定(炭化物試料番号KCKH-34)により8630±40^{14}CBPという年代値が出ている。

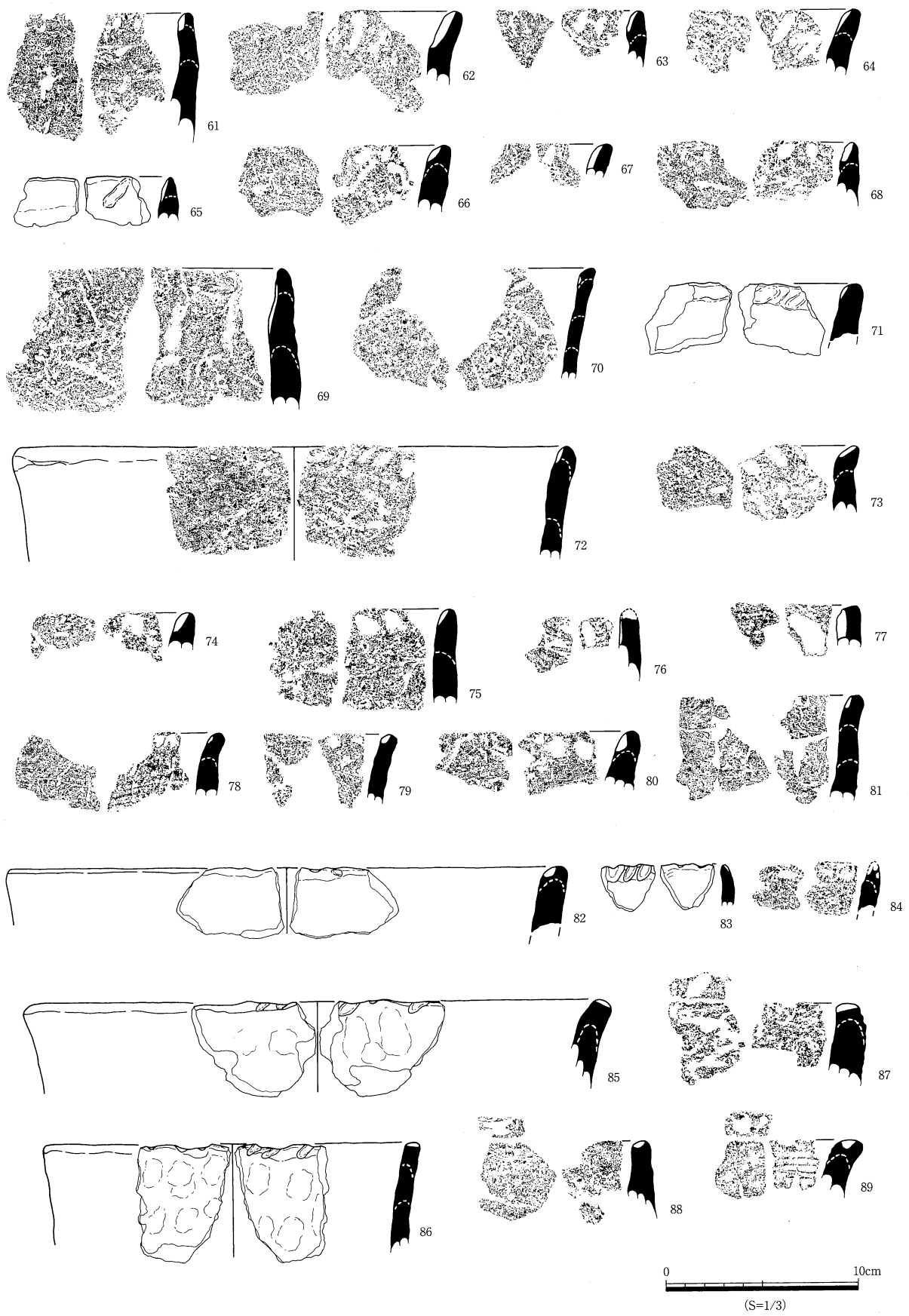
器面調整がナデであるもののうち、101～116及び118・119が胴部、117・120が底部である。これらのうち115～117及び118～120は同一個体と考えられ、109・110・115～117を見ると、胴中央部より上に最大径のある砲弾形の器形で尖底であることが分かる。118～120は薄手の無文土器であり、厚手の無文土器同様に尖底である。



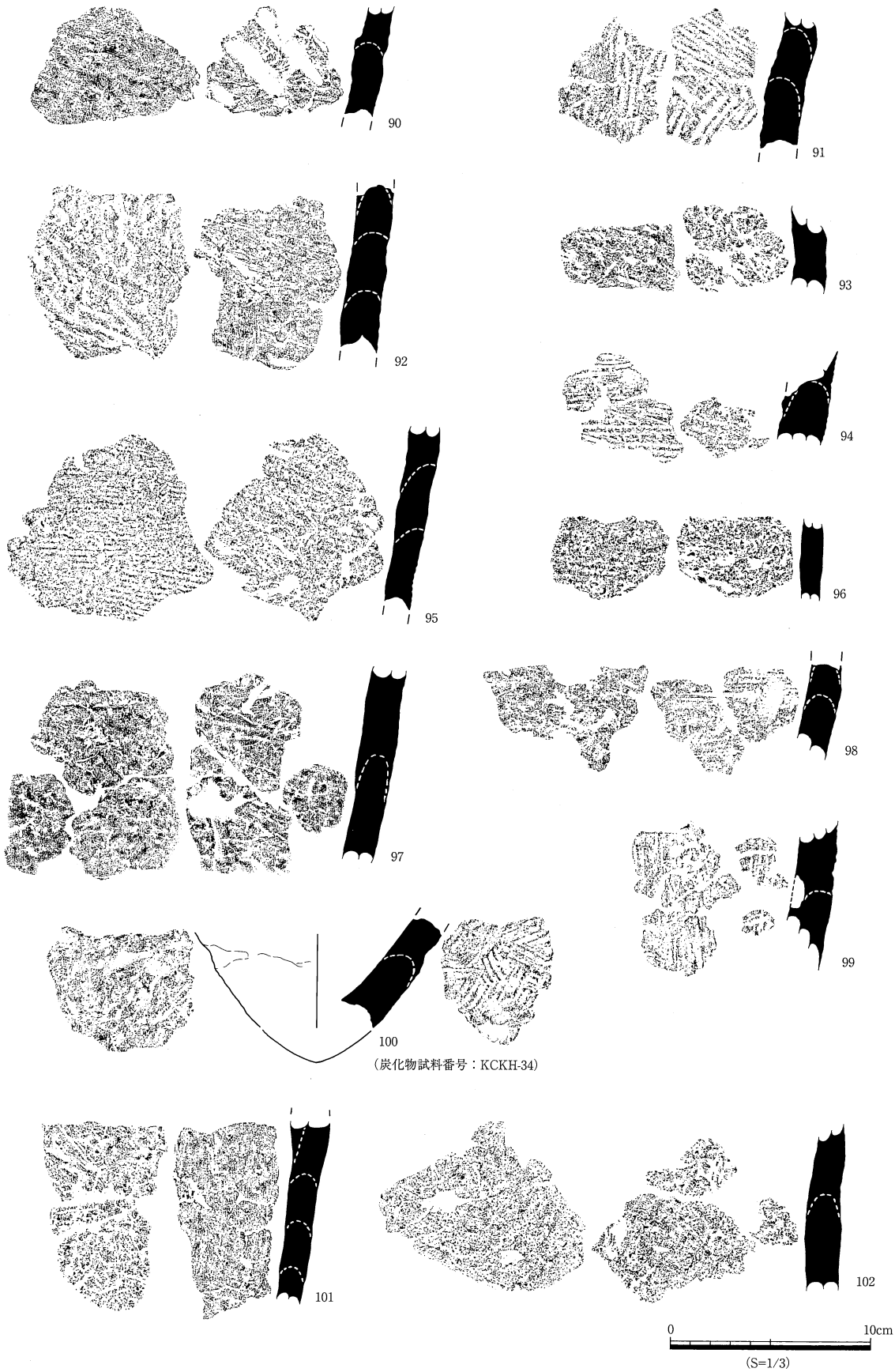
第5図　平成15年度調査　第3層出土　無文土器口縁(口縁部無文：報告No.1～29)



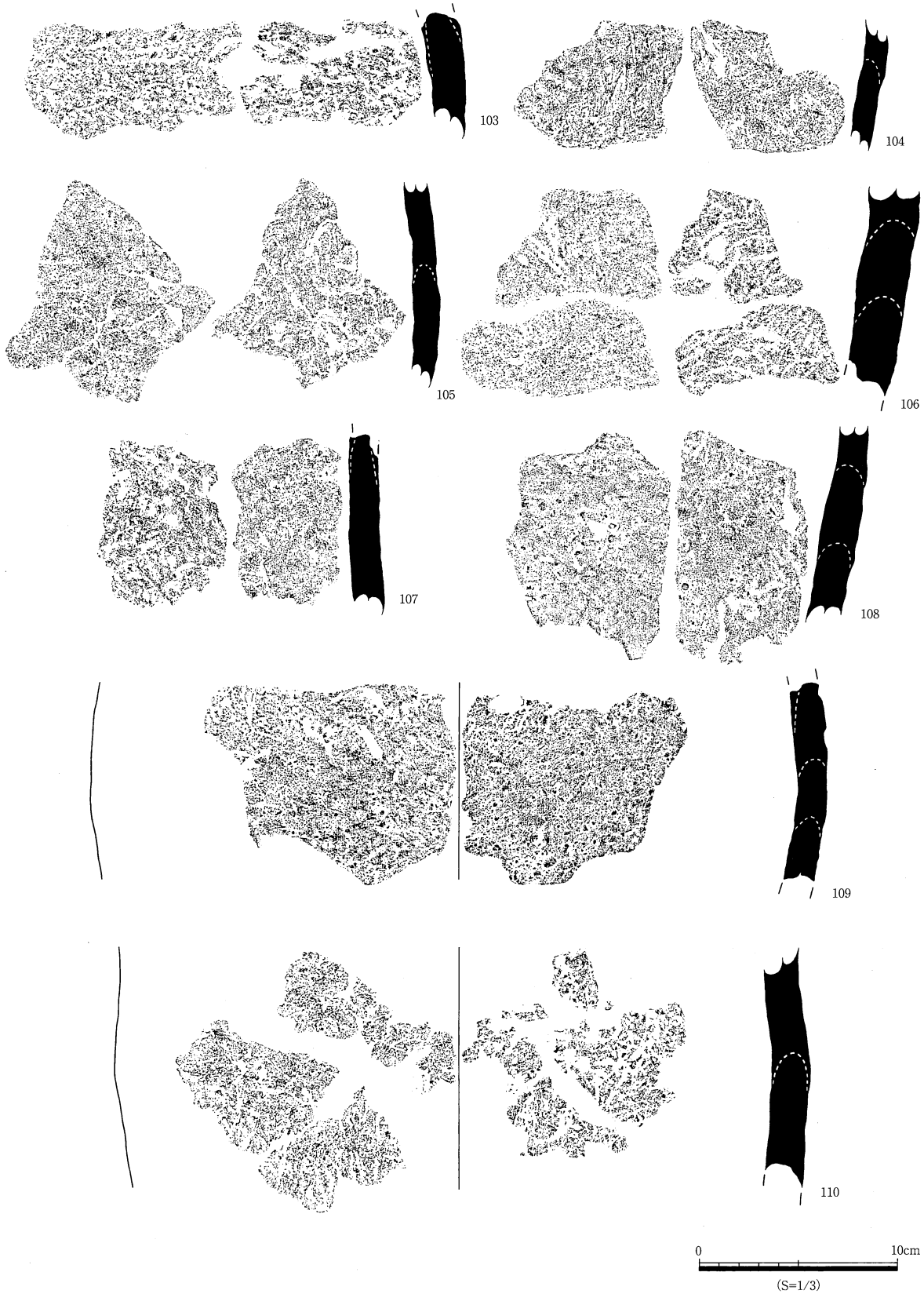
第６図　平成15年度調査　第３層出土　無文土器口縁（口縁部有文：報告No.30～60）



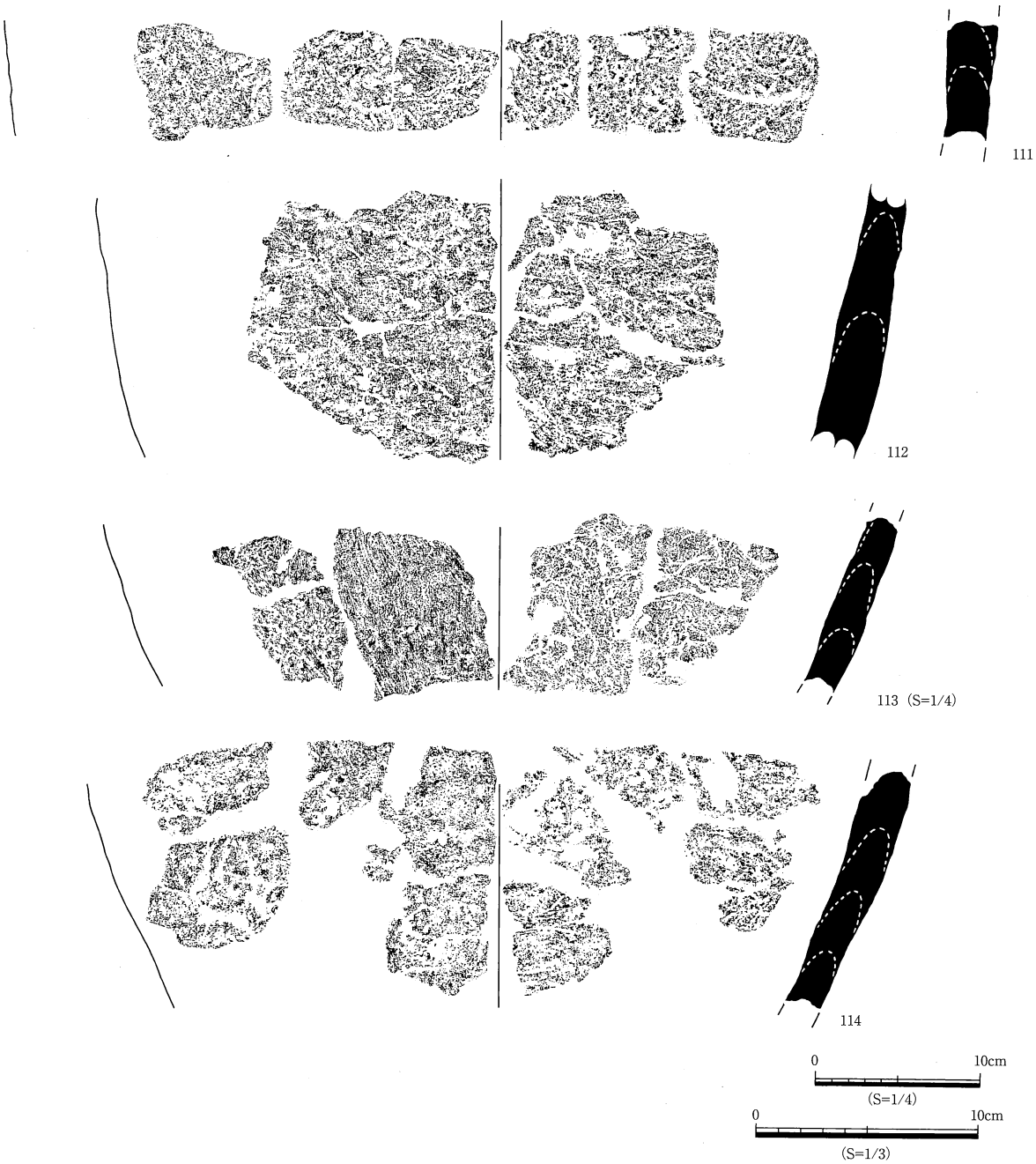
第７図　平成15年度調査　第３層出土　無文土器口縁（口縁部有文：報告No.61～89）



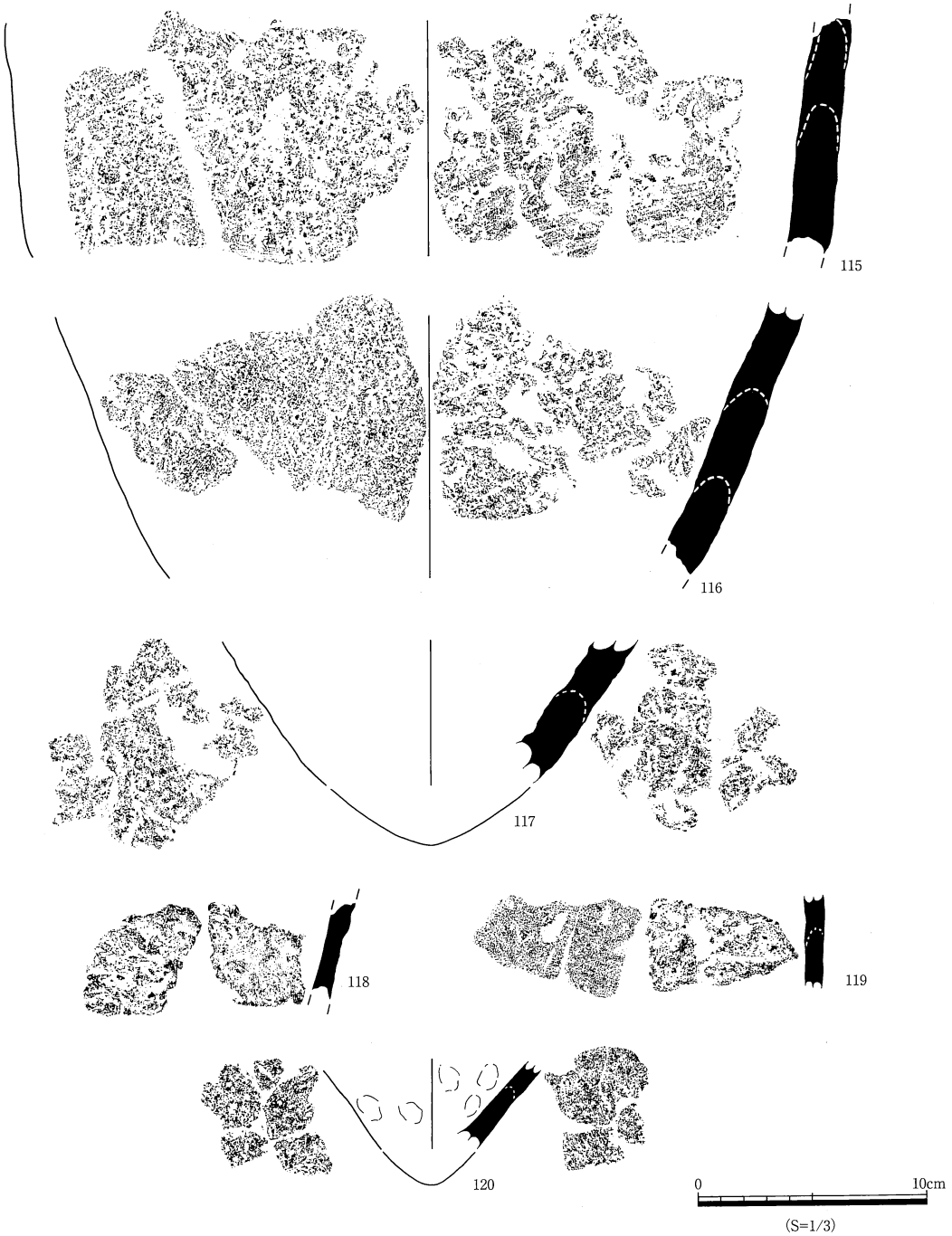
第８図　平成15年度調査　第３層出土　無文土器胴部～底部（報告No.90～102）



第９図　平成15年度調査　第３層出土　無文土器胴部（報告No.103～110）



第10図　平成15年度調査　第３層出土　無文土器胴部（報告No.111～114）



第11図　平成15年度調査　第３層出土　無文土器胴部～底部(報告No.115～120)

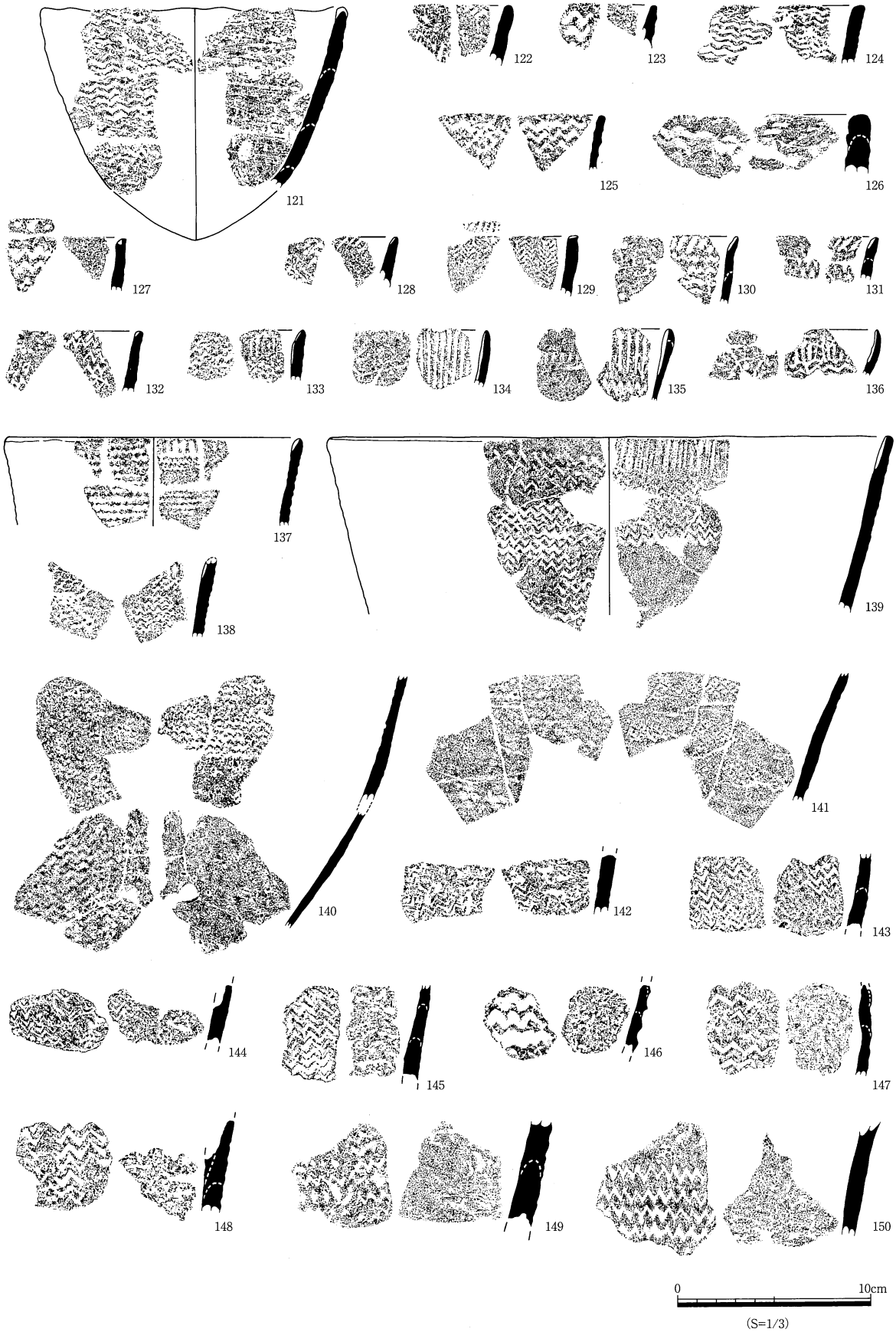
押型文土器はその模様によって細かく分けられ、刈谷我野遺跡においては山形押型文・ポジティヴ楕円押型文・格子目押型文・異形押型文が出土している。121～161が山形押型文、162～176がポジティヴ楕円押型文、177～184が格子目押型文、185～189が異形押型文である。

山形押型文(以下、山形文)は、丸い棒に山形の溝を刻んだものを原体とする。それを土器の表面に回転させて施した文様であって、第3層では原体を横位に回転させて施文するものしか確認されていない。121～139がその口縁部、140～161がその胴部・底部である。口縁部は口縁部文様を有さないものと有するものに分けられる。

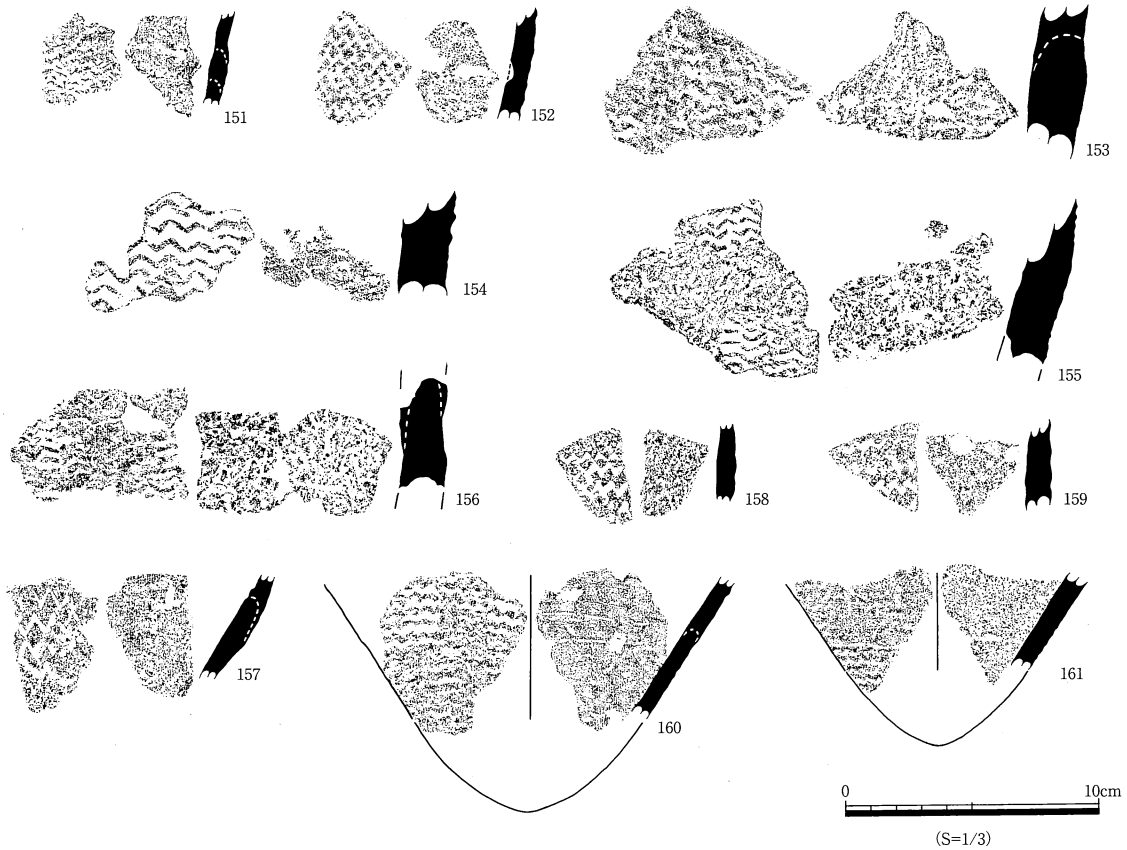
121～126は口縁部文様を有さない。外面のみに山形文を施文するものと内面にも山形文を施文するものに分けられる。121～123は前者であり、いずれも口縁部外面直下から施文している。121は、内面の調整が明瞭な二枚貝条痕であり、口縁が幾単位もの小波状を呈する。124～126は後者であり、いずれも口縁部外面直下から施文している。126の内面の文様は原体を回転させたものではなく、押圧したものと考えられ、器厚が他のものに比べて厚い。

127～139は口縁部文様を有する。外面のみに山形文を施文するものと内面にも山形文を施文するものに分けられる。127・128は前者であり、いずれも口縁部外面直下から施文している。口縁部文様は上面施文と内面施文に分けられ、127は上面に不鮮明な円形刺突を、128は内面に細い左斜行文をそれぞれ施す。129～139は後者であり、129～133・137・138は口縁部外面直下から施文しているのに対して、それら以外は口縁部外面直下に無文帯を有する。口縁部文様は上面施文と内面施文に分けられ、内面施文には左斜行文と柵状文の二種が見られる。129は上面施文であり、口縁部上面を面取った後に左斜行文を施す。130～139は内面施文であり、130～132は左斜行文を、133～139は柵状文をそれぞれ施す。柵状文にも137・138のようにハイガイやサルボウのような二枚貝の表面で押圧を加えて施文したようなものや、133～136・139のように比較的細長いものが認められる。上述したように口縁部外面直下に無文帯を有さないものと有するものが認められるなどの差異が認められるため、これらは将来的に時間差及び地域差を考慮する必要がある。

胴部のうち140～144は内面にも押型文を施文するため、口縁部付近の部位であると考えられる。胴部は胎土の特徴に差が見られ、145～156は胎土に繊維混入が見られる。この特徴は無文土器と類似する。とりわけ153～156は器厚も極めて厚く、無文土器と山形押型文土器の折衷として位置付けられる。140～144・157～161は砂質であり、口縁部内面に柵状文を有する押型文土器と類似した胎土である。



第12図　平成15年度調査　第３層出土　山形押型文土器（報告No.121～150）



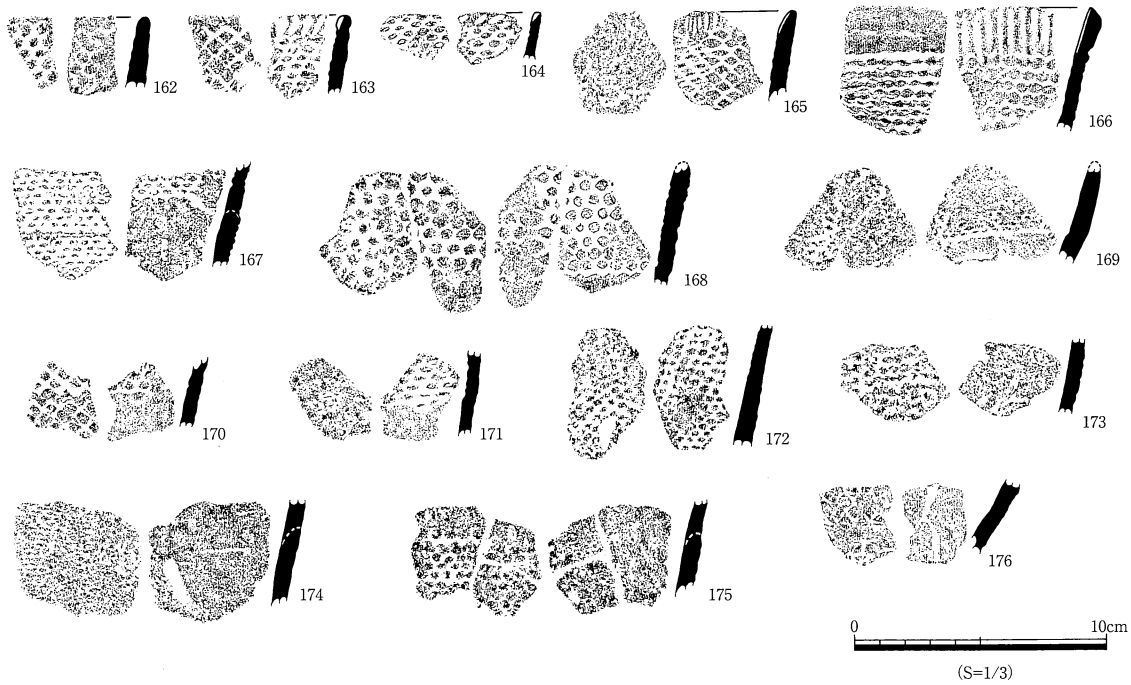
第13図　平成15年度調査　第３層出土　山形押型文土器（報告No.151～161）

ポジティヴ楕円押型文(以下、ポジティヴ楕円文)は、丸い棒に米粒ほどの大きさの窪みを幾つも刻んだものを原体とする。それを土器の表面に回転させて施した文様であって、第3層では原体を横位に回転させて施文するものが主である。162～166がその口縁部、167～176がその胴部である。口縁部は口縁部文様を有さないものと有するものに分けられる。

162は口縁部文様を有さない。内面にもポジティヴ楕円文を施しており、内外面共に口縁部直下から施文している。

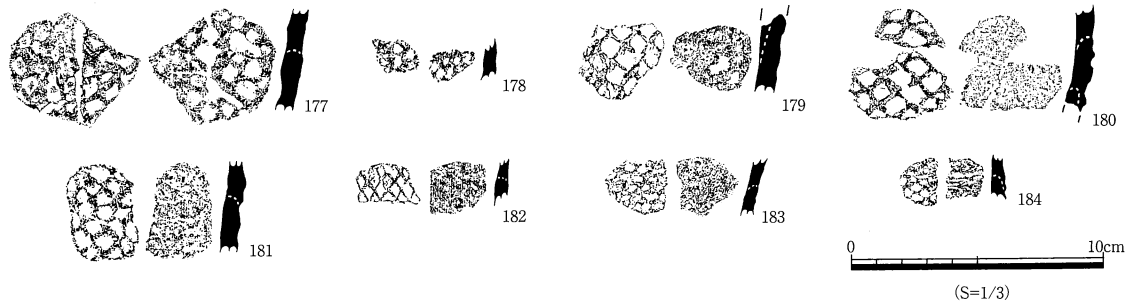
163～166は口縁部文様を有する。165の外面は摩滅しているため不明であるが、いずれも内外面にポジティヴ楕円文を施文する。163・164は口縁部外面直下から施文しているが、166は口縁部外面直下に無文帯を有する。口縁部文様はいずれも内面施文であり、163・164は左斜行文、165・166は柵状文を施す。山形文同様に柵状文にヴァリエーションが見られ、166は内面の柵状文と外面の無文帯が明らかに対応しているため、時間差及び地域差を考慮する必要がある。

167～176は胴部である。167～172は内面にも押型文を施文するため、口縁部付近の部位である。胴部は胎土の特徴に差が見られ、167・173に繊維混入が見られる他は砂質である。繊維を含むものは無文土器の胎土と類似している。



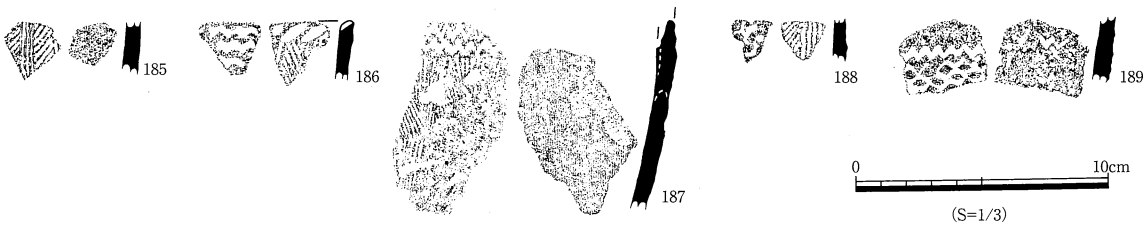
第14図　平成15年度調査　第3層出土　ポジティヴ楕円押型文土器(報告No.162～176)

格子目押型文(以下、格子目文)は、丸い棒に格子目状の溝を刻んだものを原体とし、それを土器の表面に回転させて施した文様である。いずれも胴部であるが、177・178は内面にも押型文を施文するため、口縁部付近の部位である。胎土は繊維混入が見られ、無文土器の胎土とほとんど同じであるが、178・184は砂質の傾向が強い。



第15図　平成15年度調査　第3層出土　格子目押型文土器(報告No.177～184)

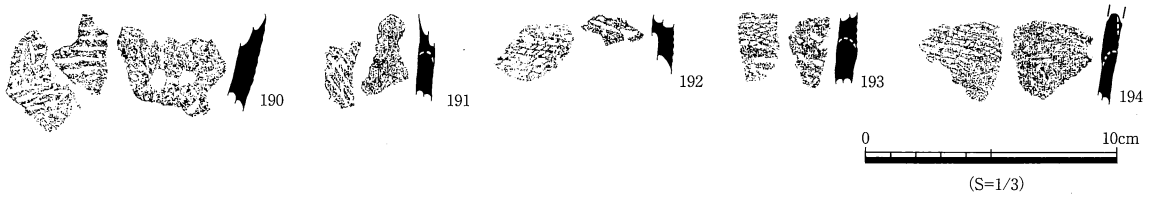
185～189は異形押型文である。185は胴部であり、外面に複合鋸歯押型文(以下、複合鋸歯文)つまり丸い棒に三角形モチーフを描き、その中に幾条かの溝を刻んで、それらを鋸の歯のように上下交互に配置したものを原体とし、それを土器の表面に回転させて施した文様である。186は口縁部であり、外面に山形文を施文するのに対して内面には複合鋸歯文を施文し、口縁部内面に左斜行文を施す。187は胴部であり、外面に山形文とその下に複合鋸歯文を施文する。188は内外面に押型文を施文するため、口縁部付近の部位であると考えられ、外面にポジティヴ楕円文を、内面には複合鋸歯文を施文する。189は内外面に押型文を施文するため、口縁部付近の部位であると考えられ、外面にポジティヴ楕円文を、内面には山形文を施文するが、外面のポジティヴ楕円文は山形文の山谷が重複したためにポジティヴ楕円文に見えている可能性が考えられる。



第16図　平成15年度調査　第3層出土　異形押型文土器(報告No.185～189)

撚糸文土器(以下、撚糸文)は、植物の茎ないしは蔓草などの繊維を撚ったものを原体とし、それを土器の表面で回転ないしは押圧させて施した文様であって、撚る回数によって複雑な縄文となる。中には丸い棒に原体を巻きつけてそれを回転・押圧させて施したと考えられる文様もある。

いずれも胴部であり、撚りは190・191が0段lの可能性が考えられ、192〜194が1段rである。



第17図　平成15年度調査　第3層出土 撚糸文土器(報告No.190〜194)

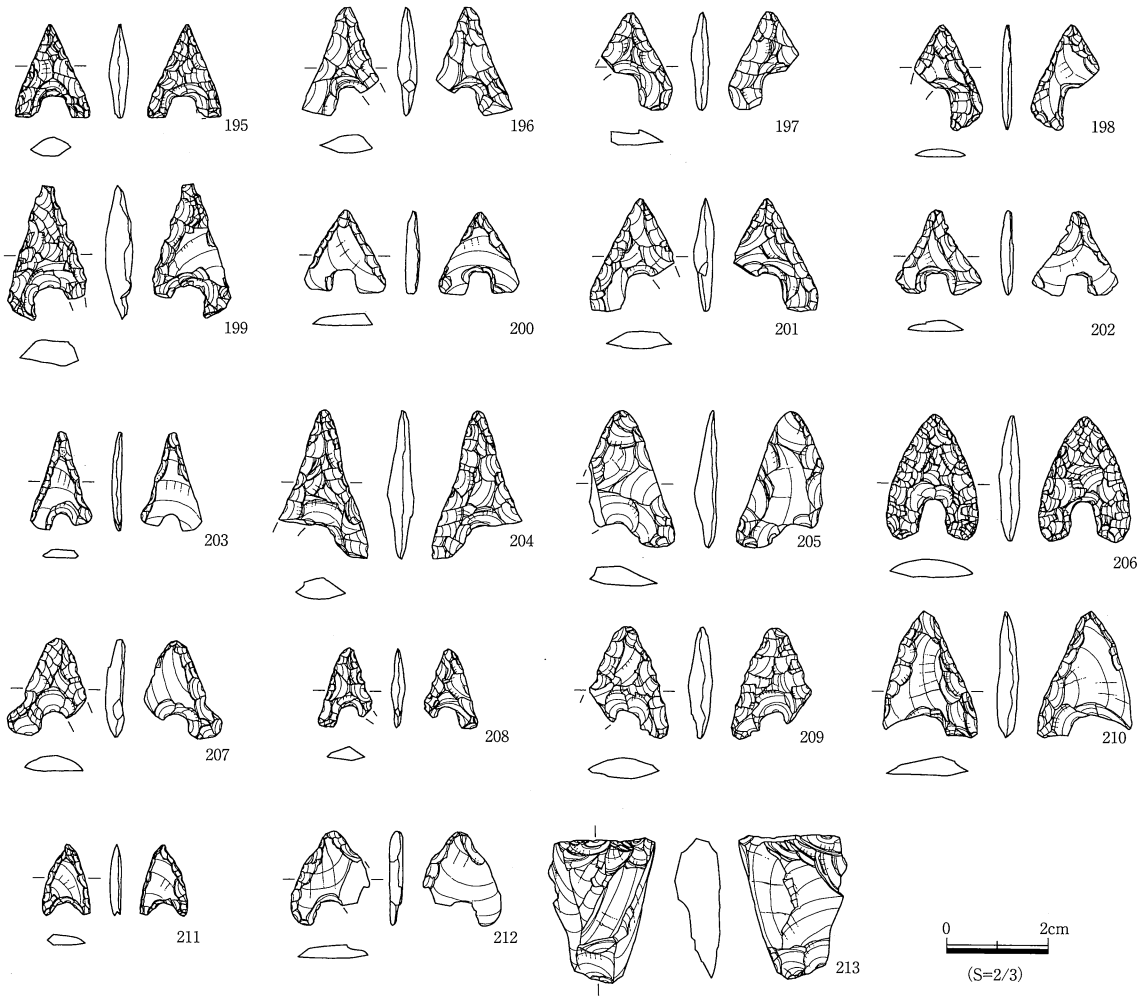
剥片石器は、それを製作するのに適した石材を叩き割り、その時に生じた剥片に更に細かい加工を加えて製作した利器である。195～212が石鏃、213が楔形石器である。

石鏃は全てが凹基式であり、石材は195～198・200～205・208・210～212がサヌカイト、199・206・209がチャート、207が水晶である。チャートは遺跡周辺で獲得可能であるが、サヌカイト・水晶は不可能であるため、遠隔地から搬入されたものである。

206は黒チャート及び白チャートが混じった部位を意図的に選択して加工しており、全体の約1/3が黒チャート、約2/3が白チャートという配分になっている。黒チャート部位には白チャートの貫入が左右対称に見られ、トロトロ石器の可能性が考えられるが、磨った痕跡は確認できない。それを模倣したものとして考えられる。

207は脚部根元に比較的大きな剥離を行っており、そこに抉りを入れることを意図した加工を行った可能性が指摘できる。

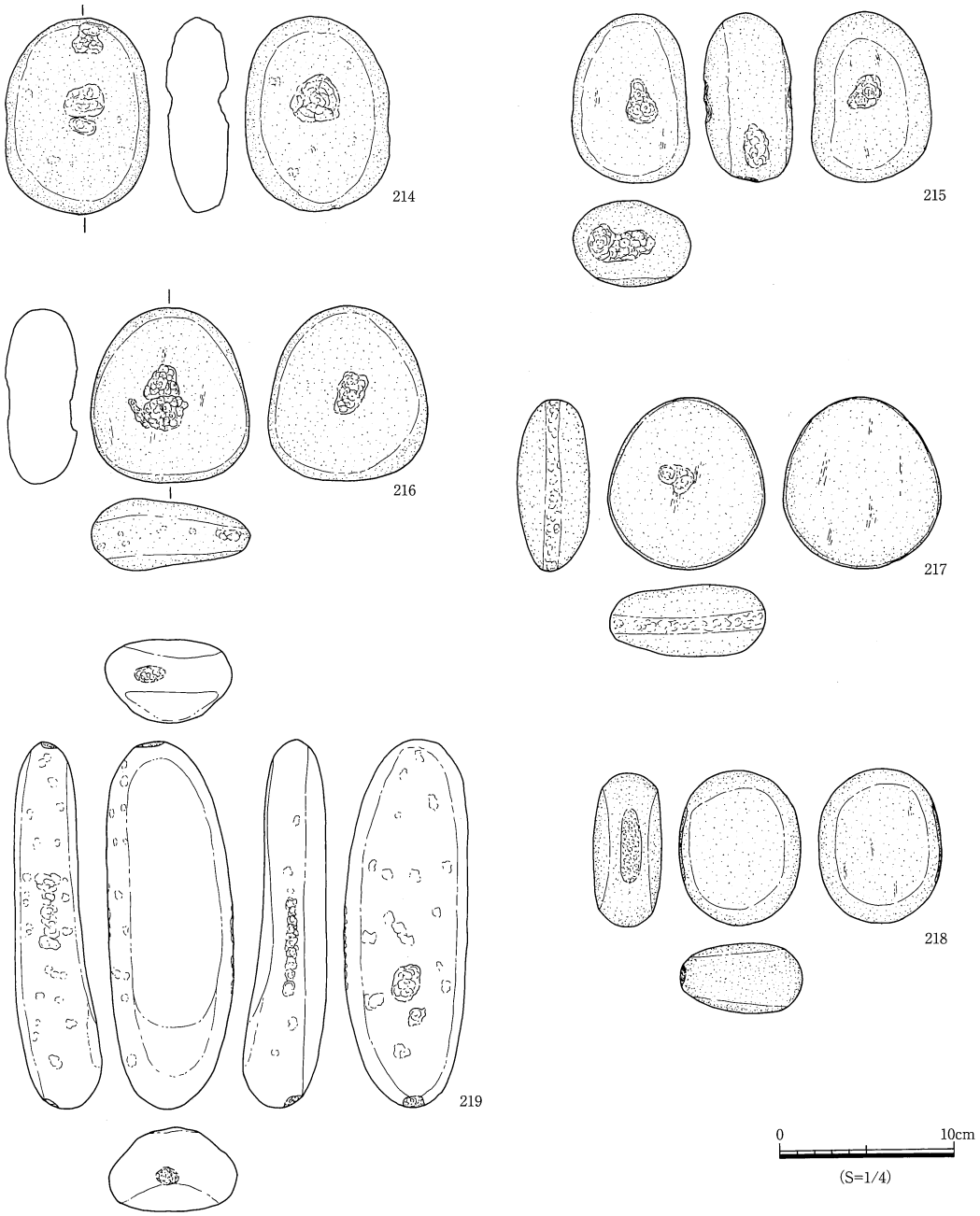
213は両極に階段状の剥離が見られるため、楔形石器として認定した。石材はサヌカイトである。



第18図　平成15年度調査　第３層出土　剥片石器(石鏃・楔形石器：報告No.195～213)

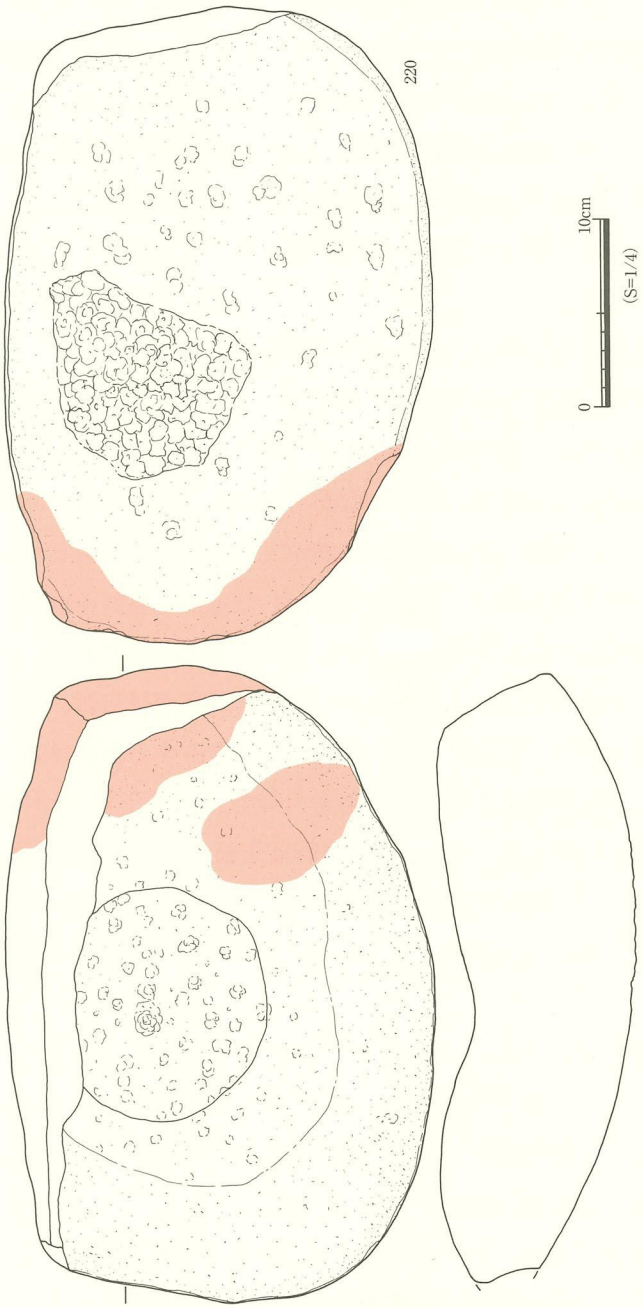
礫石器は、川原石などの転石を利用しており、その用途に応じて擦痕・敲打痕という使用痕が残るため、使用痕をもって機能を判断する利器である。214～219が磨石・敲石、220が石皿である。

石材は214～218が砂岩、219が緑色片岩であり、いずれも遺跡周辺で入手可能である。214～216は表裏に明瞭な敲打痕を有する。215は下端に明瞭な敲打痕を、216は側縁に浅くてまばらな敲打痕を有する。217は表面のみに敲打痕を有し、裏面は極めて滑らかな磨面を有する。218は左側縁のみに敲打痕が認められ、表裏には擦痕が認められる。219は撥状を呈しており、側縁及び裏面下側に敲打痕を有する。



第19図　平成15年度調査　第３層出土　礫石器(磨石・敲石：報告No.214～219)

220の石材は砂岩であり、遺跡周辺で入手可能である。表面が大きく円形に窪み、敲打痕を有する。裏面にも敲打痕を有するが、浅いものである。赤変しているため、被熱したと考えられる。



※赤彩部は被熱・赤変を示す。

第20図　平成15年度調査　第３層出土 礫石器(石皿：報告No.220)

第３節　第４層出土遺物（第21～41図）

第４層から出土した器種識別可能な土器片数は1082点である。その内訳は無文土器840点、押型文土器209点（山形文113点、ポジティヴ楕円文65点、格子目文31点）、撚糸文土器33点である。石器は剥片石器が８点（尖頭状石器３点、石鏃４点、スクレイパー１点）、礫石器が17点（磨石・敲石10点、台石・石皿７点）であって、土器・石器合わせて116点を図示した。

221～267が無文土器、268～307が押型文土器、308～311が撚糸文土器、312～319が剥片石器、320～336が礫石器である。土器の口縁部は個体識別を行った上で全点図示し、胴部・底部も個体識別を行った上で実測に耐えうる破片と器形が復元可能な破片を図示した。石器については全点図示している。

各遺物のドット分布図を見る限り、調査区の南東隅に集中する傾向がうかがえ、その分布域は平成15年度調査で検出された遺物集中群とほぼ重なる。各器種の分布域に大きな偏りは見られないが、無文土器が圧倒的多数を占め、山形文・ポジティヴ楕円文・格子目文・撚糸文は少数である。

無文土器は221～260がその口縁部、261～267がその胴部・底部であり、口縁部は口縁部文様を有さないものと有するもの、胴部・底部は器面調整が二枚貝条痕のものとナデのものに大別できる。

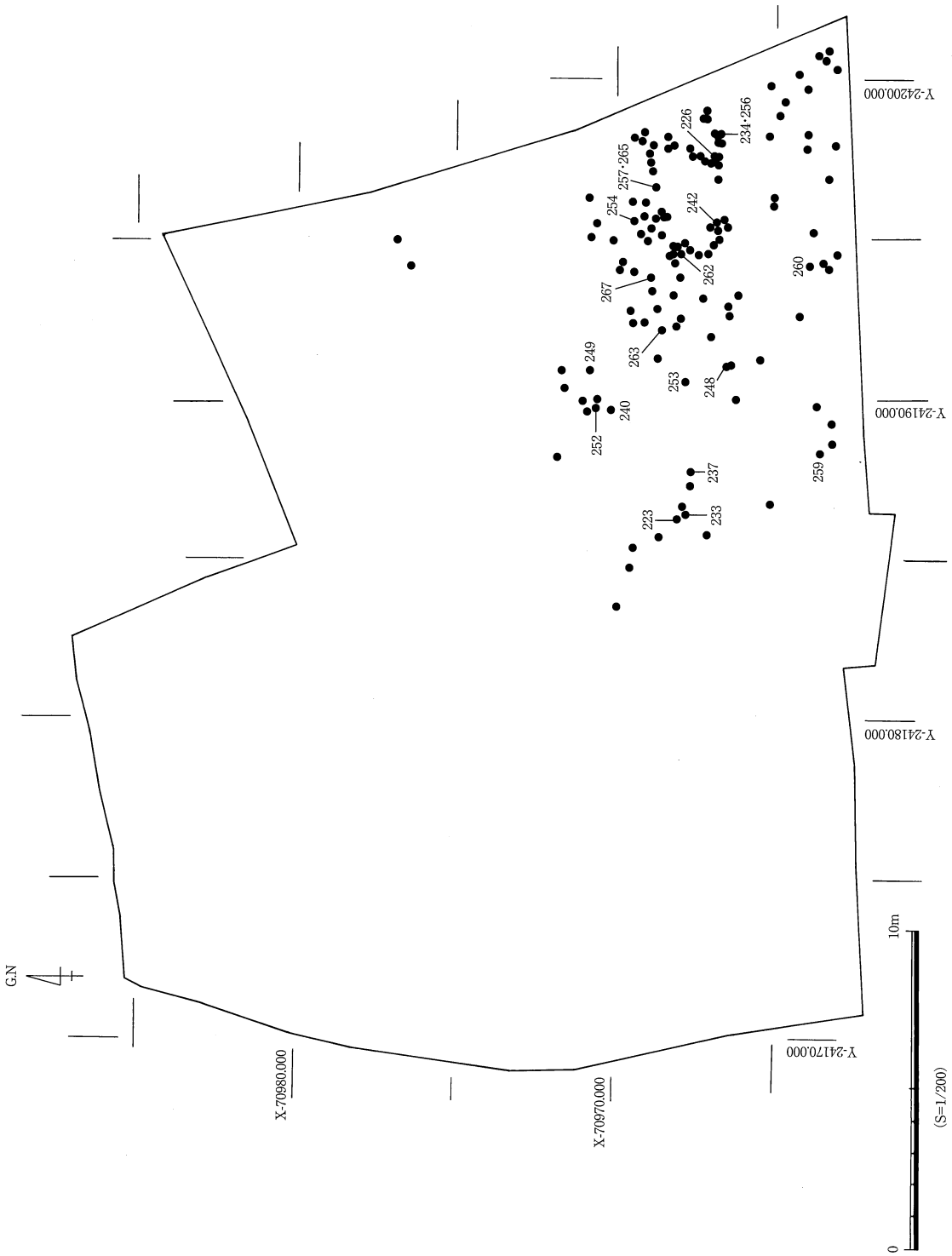
221～236は口縁部文様を有さない。器面調整は221・222が二枚貝条痕であるのに対して、他は全てナデである。口縁が外傾・外反すると考えられるものが大多数である。

237～260は口縁部文様を有する。文様を有する部位に差異が見られ、そのうち237～255は内面に、256～260は上面に、それぞれ文様を有する。内面に文様を有するものは直行文・左斜行文・右斜行文・刺突文に、上面に文様を有するものは押圧文・刺突文・押引文にそれぞれ分けられる。

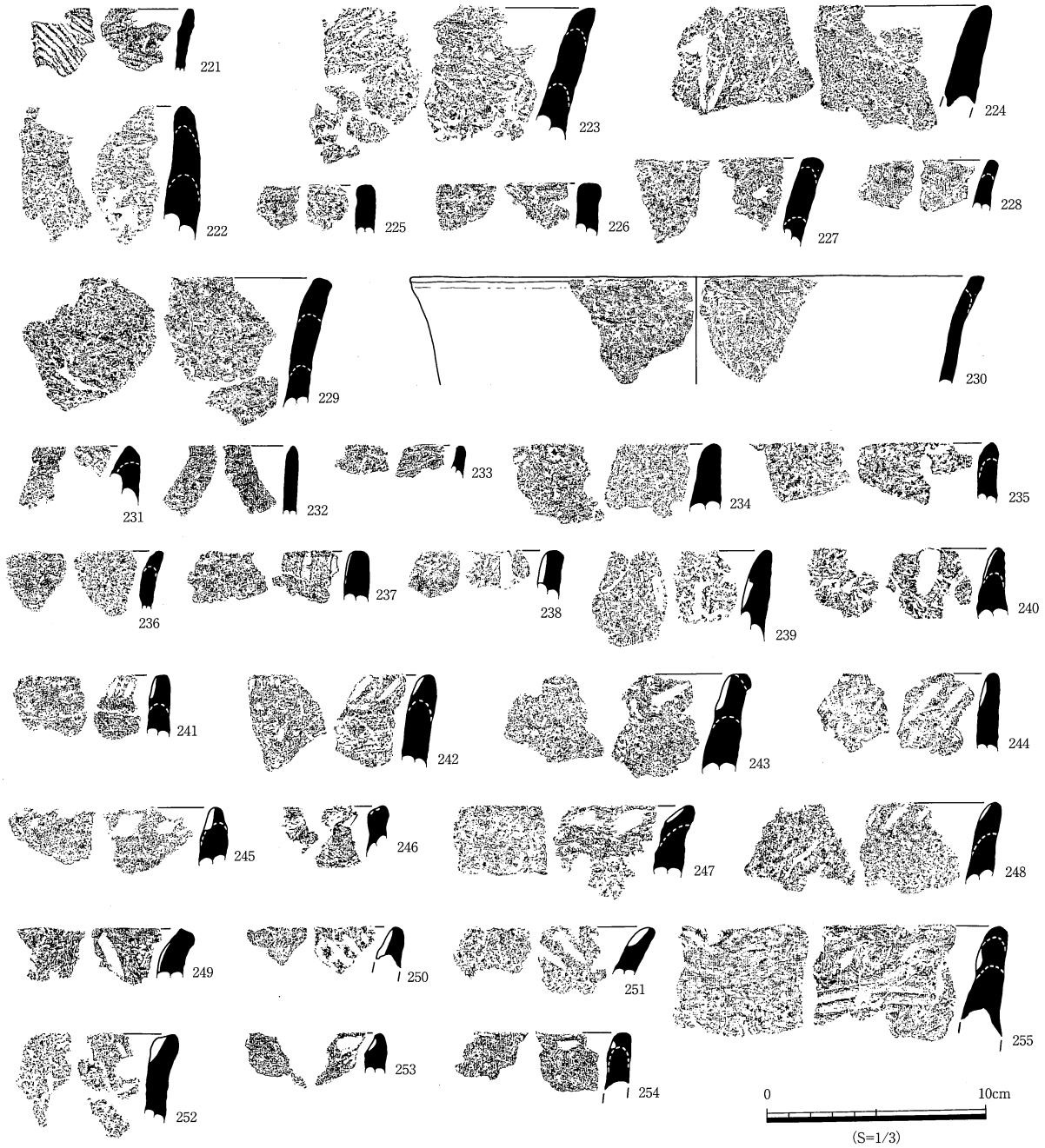
内面に文様を有するもののうち、237～240は直行文を施す。いずれも器面調整はナデである。241～248は左斜行文を施す。いずれも器面調整はナデである。249～252は右斜行文を施す。いずれも器面調整はナデである。253～255は刺突文を施す。器面調整は253・254がナデ、255が二枚貝条痕である。

上面に文様を有するもののうち、256は不鮮明ながらもやや右に斜行する押圧文を施す。器面調整はナデである。257～259は刺突文を施す。257は刺突の間隔が258・259に比べて幅広い可能性が指摘できる。いずれも器面調整はナデであるが、258のナデは植物茎を束ねたようなものが原体として考えられる。260は左から右方向への押引文を施す。

261～267は胴部・底部である。261～263の器面調整は二枚貝条痕である。263は外面の一部のみに二枚貝条痕が認められ、他の部分はナデで消されている。尖底を有する砲弾型の器形が考えられる。264～267はナデ調整である。265は砲弾型の器形を呈し、尖底である可能性が考えられる。266・267は底部である。266は尖底であり、267は当遺跡唯一の平底である。



第21図　平成15年度調査　第４層出土　無文土器ドット分布図



第22図　平成15年度調査　第４層出土　無文土器口縁（報告No.221～255）

第23図　平成15年度調査　第４層出土　無文土器口縁（報告No.256～260）・胴部（報告No.261・262）

第24図　平成15年度調査　第４層出土　無文土器胴部（報告No.263～265）

第25図　平成15年度調査　第４層出土　無文土器底部（報告No.266・267）

押型文土器は268～294が山形文、295～302がポジティヴ楕円文、303が異形押型文、304～307が格子目文である。

山形文は調査区南東隅に集中する傾向が見られるが密ではなく、出土量も無文土器に対して極めて少ない。268～281がその口縁部、282～294がその胴部である。口縁部は口縁部文様を有さないものと有するものに分けられる。

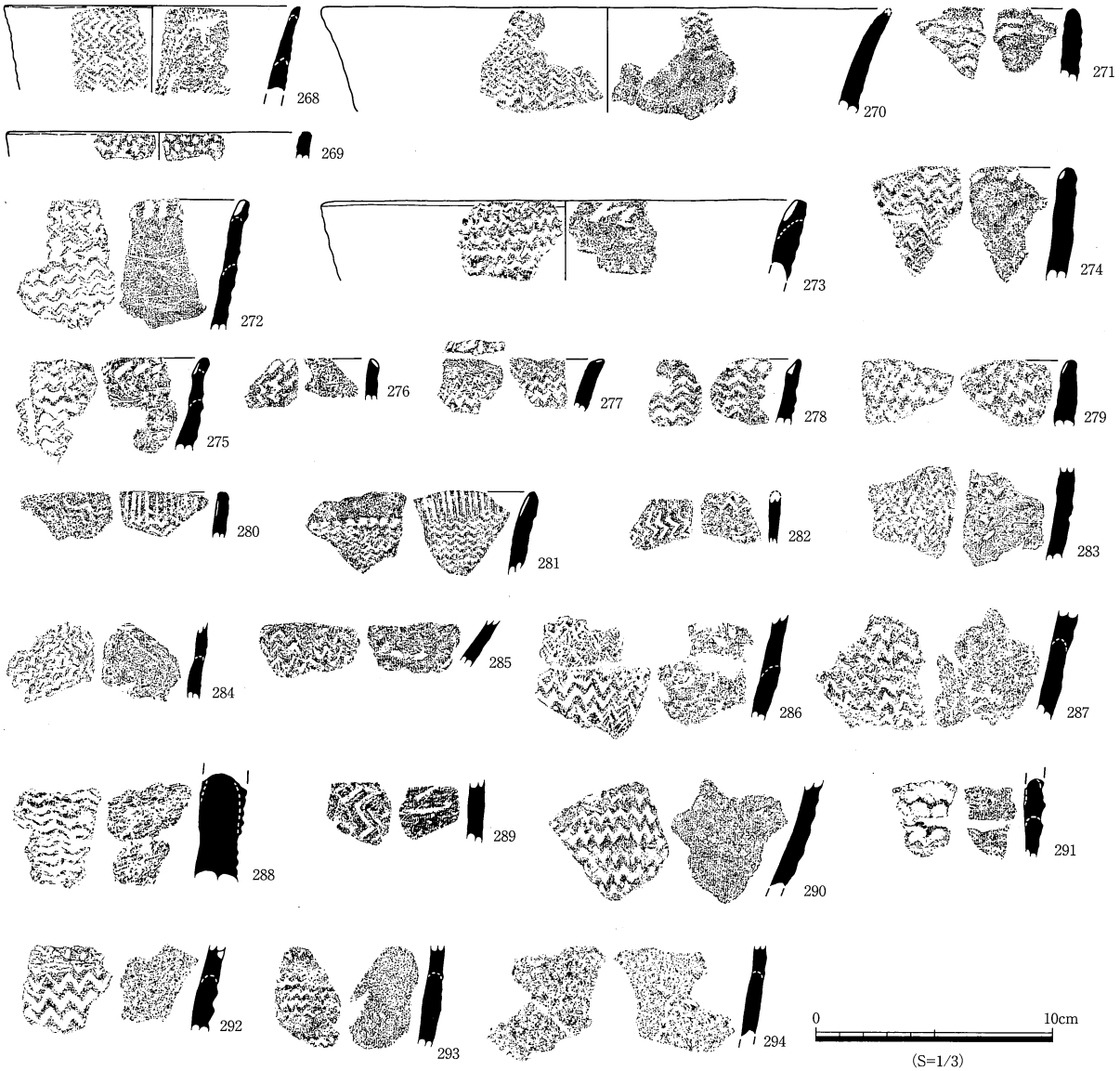
268～271は口縁部文様を有さない。外面のみに山形文を施文するものと内面にも山形文を施文するものに分けられる。268は前者であり、口縁部外面直下から原体を縦位に一回転させて施文し、その下に原体を横位に回転させて施文している。269～271は後者であり、いずれも口縁部外面直下から原体を横位に回転させて施文している。269は小さな山形文が山谷部分を向かい合うように上下に刻まれている原体で施文されたために格子目文のように見える。

272～281は口縁部文様を有する。外面のみに山形文を施文するものと内面にも山形文を施文するものに分けられる。272～276は前者であり、いずれも口縁部外面直下から施文している。口縁部文様は内面施文と外面施文が見られるが、内面施文には直行文と左斜行文に分けられる。272～275は内面施文であり、272は直行文を施す。口縁部外面直下から原体を縦位に一回転させて施文し、その下に原体を横位に回転させて施文している。273～275は左斜行文を施す。276は外面施文であり、左斜行文を施す。口縁部外面直下から原体を縦位に回転させて施文した後に口縁部文様を施している。277～281は後者であり、277～280は基本的に口縁部外面直下から施文しているのに対して、281は口縁部外面直下に無文帯を有する。口縁部文様は上面施文と内面施文が見られるが、内面施文には左斜行文と柵状文に分けられる。277は上面施文であり、口縁部上面を面取った後でそこにやや左に傾いた斜行文を施すが、押引文の可能性も考えられる。278・279は左斜行文を、280・281は柵状文をそれぞれ施す。

胴部のうち、282・283は内面にも山形文を施文するため、口縁部付近の部位であると考えられる。282は外面に原体を縦位に１回以上回転させて施文している可能性が考えられる。284は原体を縦位・横位に組み合わせて回転させて施文している。他のものは原体を横位に回転させて施文しているが、291の山形文はアーチ状を呈する。また、292は山形文施文部の上が無文になっており、そこに刺突と考えられるものを施している。胴部は胎土の特徴に差異が見られ、283～288・291・292は胎土に繊維混入が見られる。この特徴は無文土器と類似する。とりわけ288は器厚が極めて厚く、無文土

器と山形押型文土器の折衷として考えられる。また、294は金雲母が混入されており、西瀬戸内などの遠隔地から搬入された可能性が考えられる。

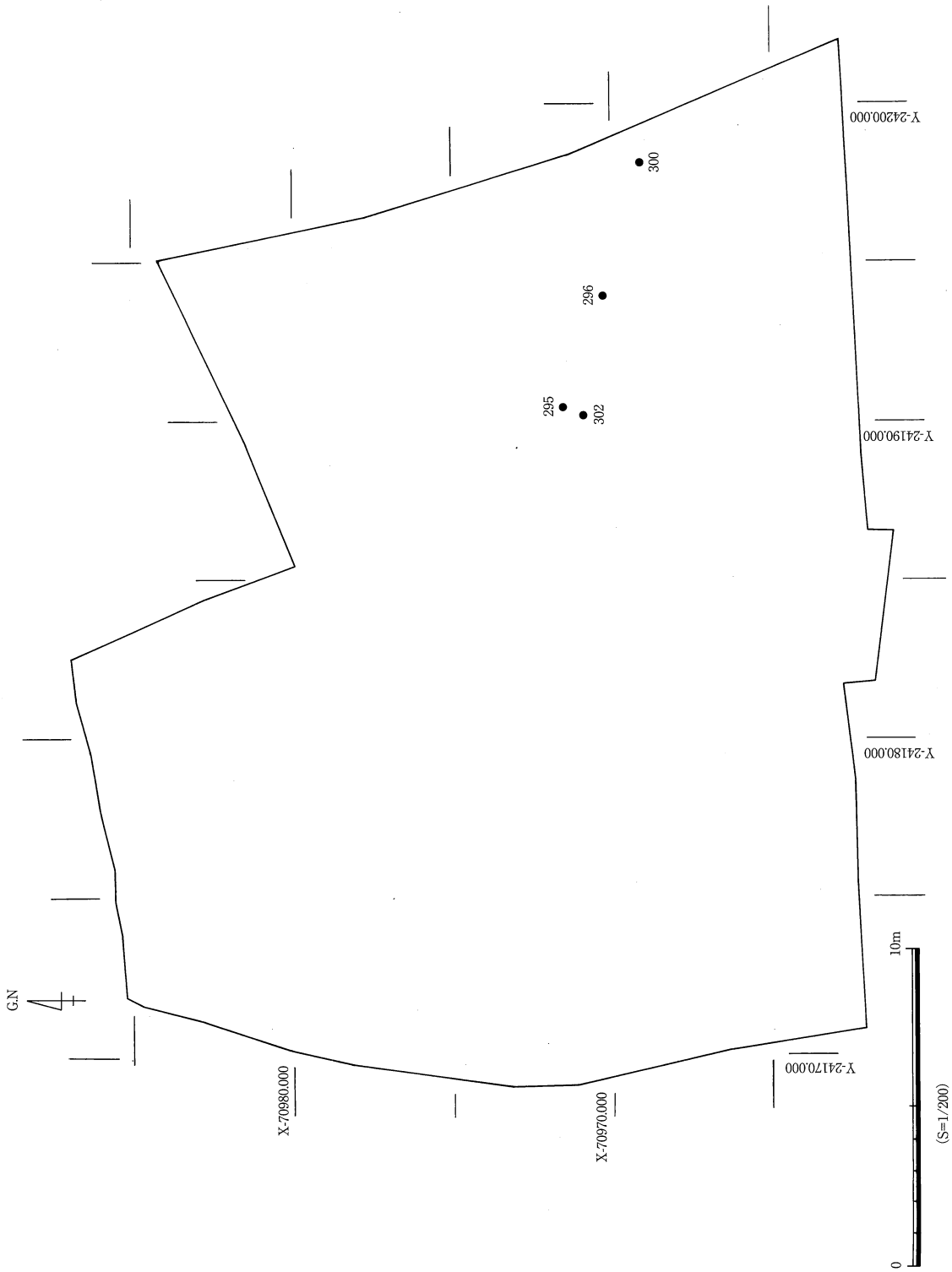
第26図　平成15年度調査　第４層出土　山形押型文土器ドット分布図



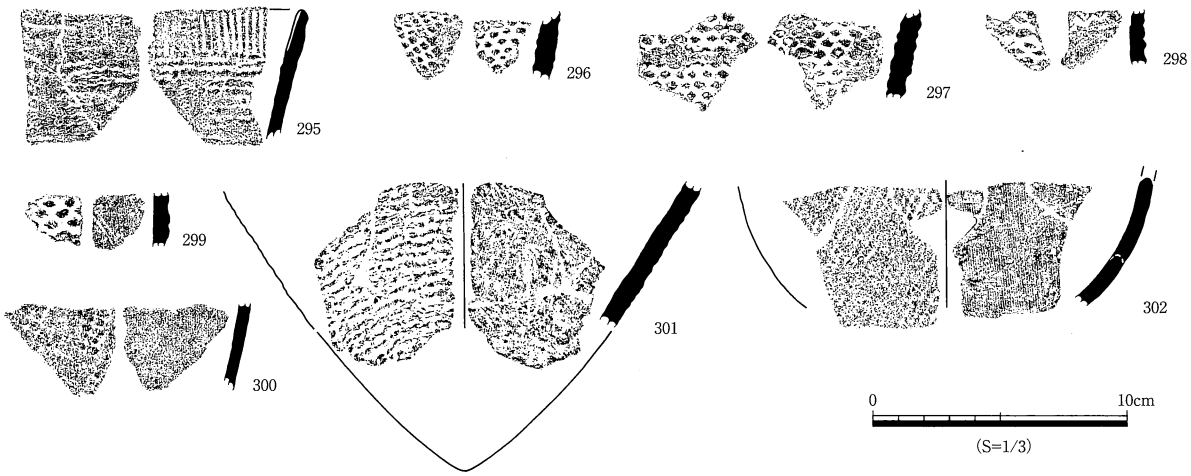
第27図　平成15年度調査　第４層出土　山形押型文土器（報告No.268～294）

ポジティヴ楕円文は、ドット分布図では明確な出土傾向は把握できず、出土量は山形文よりも少ない。295がその口縁部、296～302がその胴部である。

295は口縁部文様を有しており、内面にもポジティヴ楕円文を施文する。口縁部内面に柵状文を施し、それと対応するように口縁部外面直下に無文帯を有する。胴部のうち、296～298は内面にもポジティヴ楕円文を施文するため、口縁部付近の部位であると考えられる。297は外面に帯状の無文部分を有するが、帯状施文と考えるには幅狭であるため、押型文施文時に上下の配置に隙が生じたものとして考えたい。301・302は底部付近の破片であり、いずれも尖底になると考えられる。

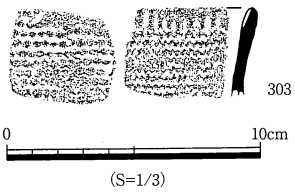


第28図　平成15年度調査　第４層出土　ポジティヴ楕円押型文土器ドット分布図



第29図　平成15年度調査　第４層出土　ポジティヴ楕円押型文土器（報告No.295～302）

異形押型文土器（報告No.303）は第４層一括出土である。口縁部内面に口縁部文様である柵状文を施し、外面にポジティヴ楕円文、内面に山形文を施文するが、口縁部外面直下には内面の柵状文に対応した無文帯を有する。

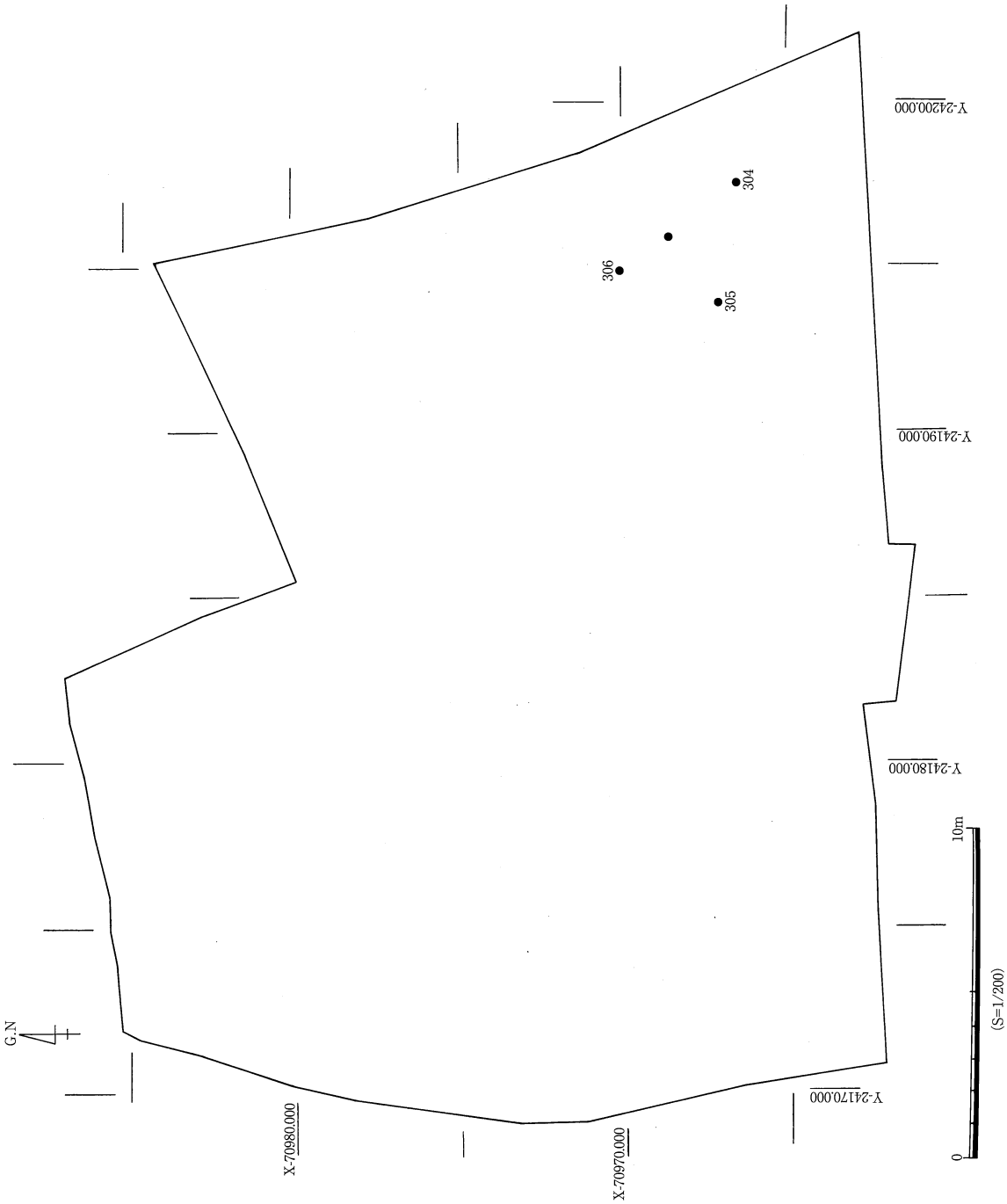


第30図　平成15年度調査　第４層出土　異形押型文土器（報告No.303）

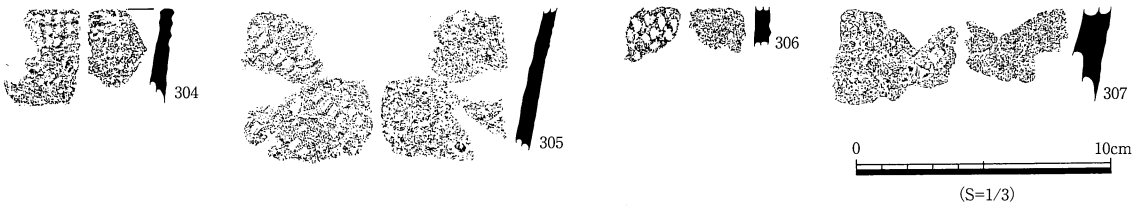
格子目文は、調査区南東隅からやや北に上がった地点で取り上げが集中しているが、点数が限られているため詳細は把握できない。304がその口縁部、305～307がその胴部である。

304は口縁部文様を有さない。口縁部直外面下のみに押型文を施文するが、極めて不鮮明な格子目であって、ハイガイやサルボウのような二枚貝の表面で連続して押圧を加えた文様の可能性も考えられる。

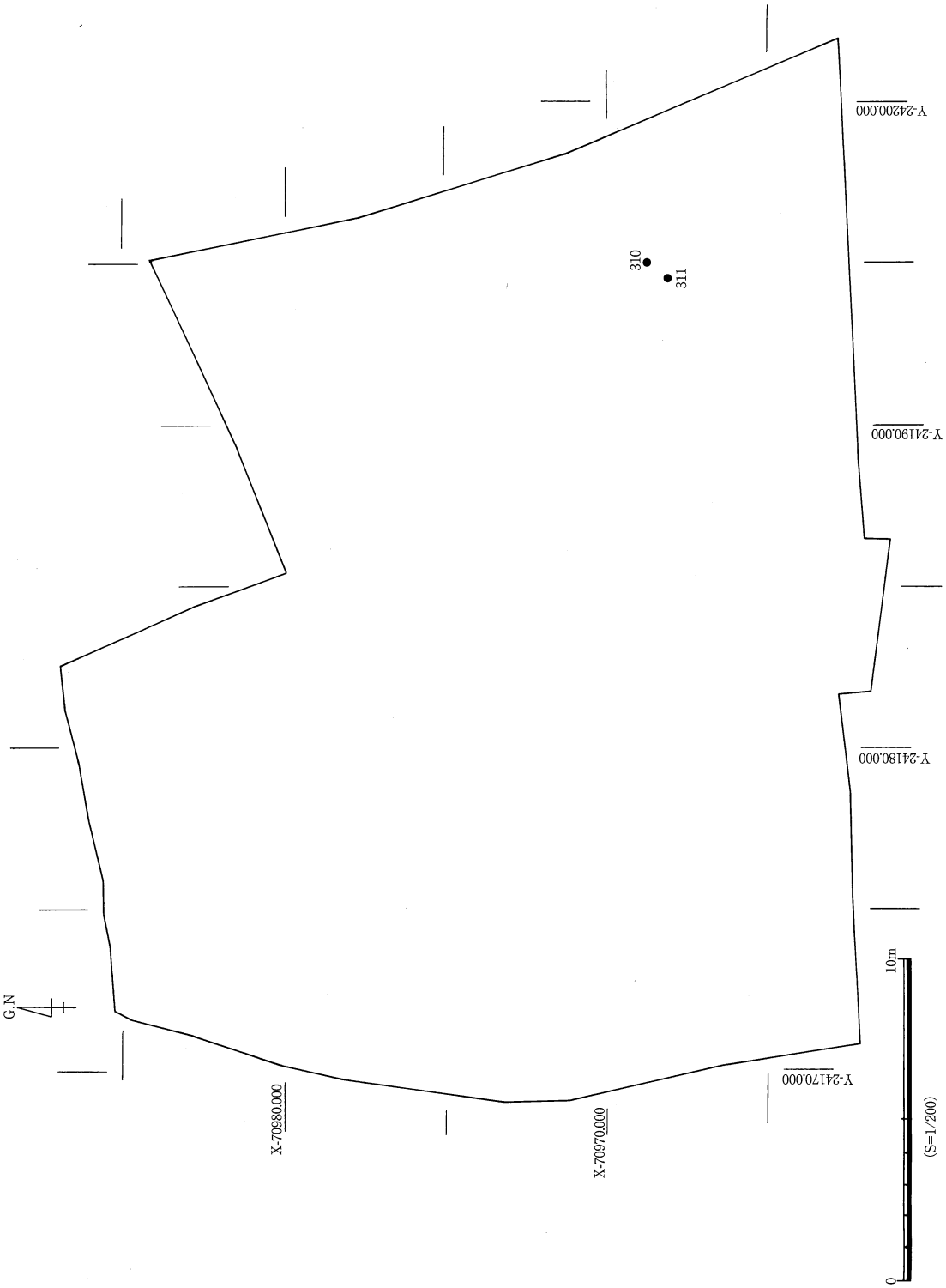
305の格子目は長方形であり、306は豆粒状、307は比較的整った方形であるが格子目中央部に小さな突出が確認できる。格子目文のヴァリエーションの豊富さを示している。胎土に差異が見られ、305は砂質であるのに対し、306・307は胎土に繊維を混入させる。胎土に繊維を混入させるのは無文土器と類似する。



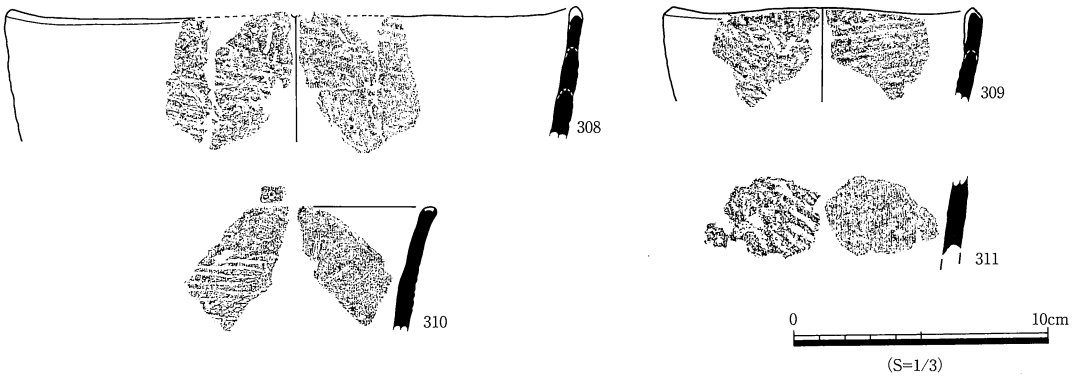
第31図　平成15年度調査　第４層出土　格子目押型文土器ドット分布図



第32図　平成15年度調査　第４層出土　格子目押型文土器（報告No.304～307）



第33図　平成15年度調査　第４層出土　撚糸文土器ドット分布図



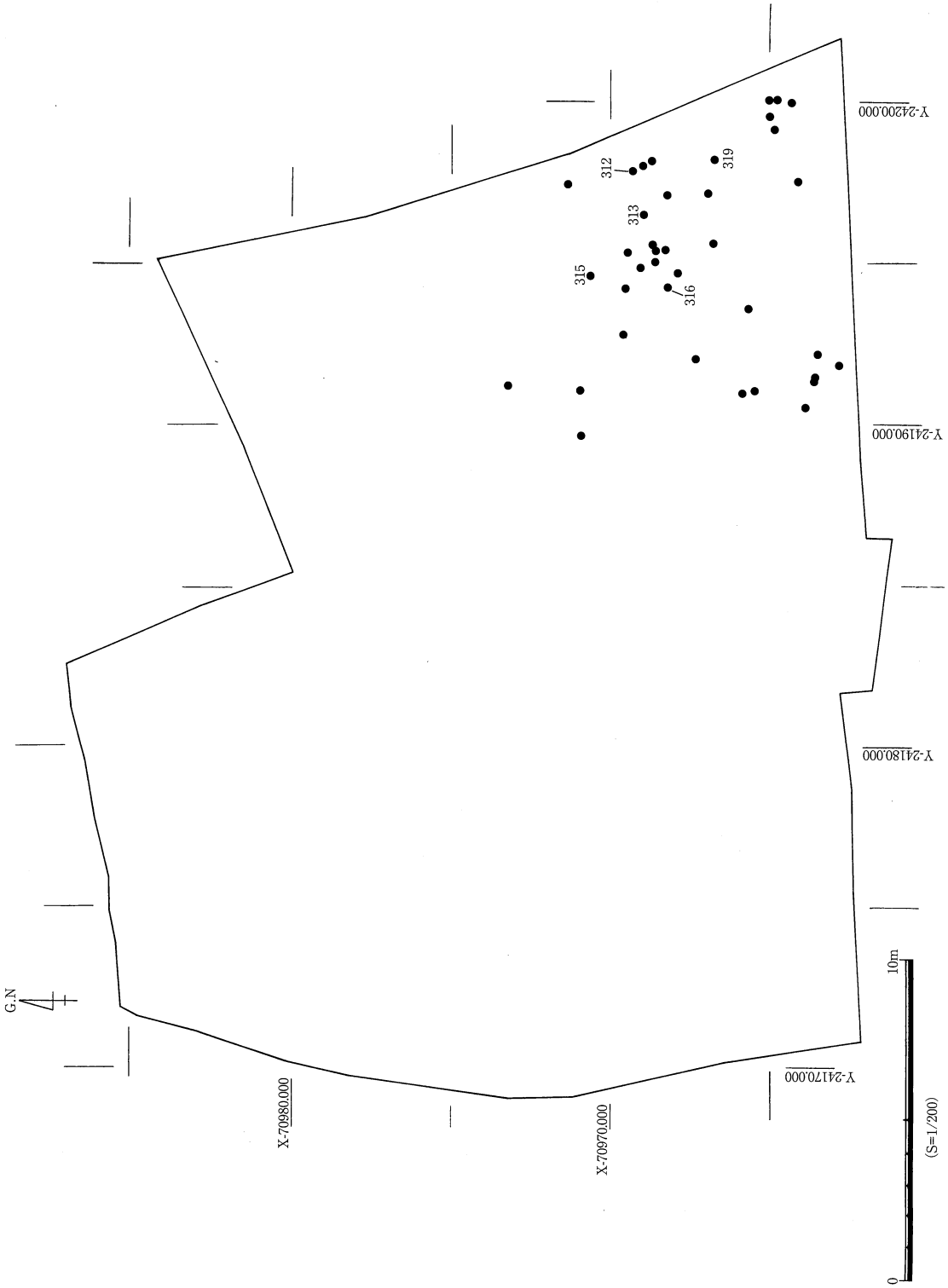
第34図　平成15年度調査　第４層出土　撚糸文土器（報告№308～311）

撚糸文土器に関しては、ドット分布図で明確な出土傾向は不明である。308～310がその口縁部、311がその胴部であって、口縁部は口縁部文様を有さないものと有するものに分けられる。

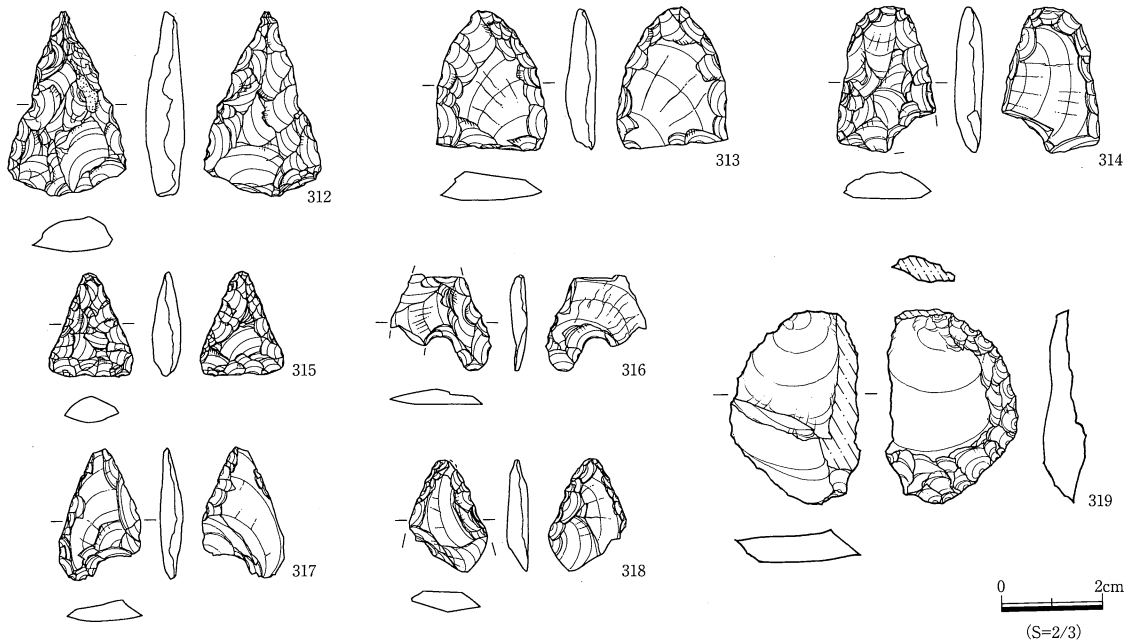
308・309は口縁部文様を有さない。両者とも内面にも撚糸文を施文し、波状口縁であること、口縁部外端に面取りを施すなどの非常に似通った特徴を示すが、内面の撚糸文の施文方向が異なっているため、別個体として認定した。撚りは１段ｒとして考えられる。

310は口縁部文様を有し、口縁部上面に竹管状工具による円形刺突を施す。口縁部からやや下がった部分から下に１段ｒとして考えられる撚糸文を施文する。

311は比較的大きな撚糸文である。撚りは右撚り・左撚りの判別はつかないものの０段として考えられる。



第35図　平成15年度調査　第４層出土　剥片石器ドット分布図



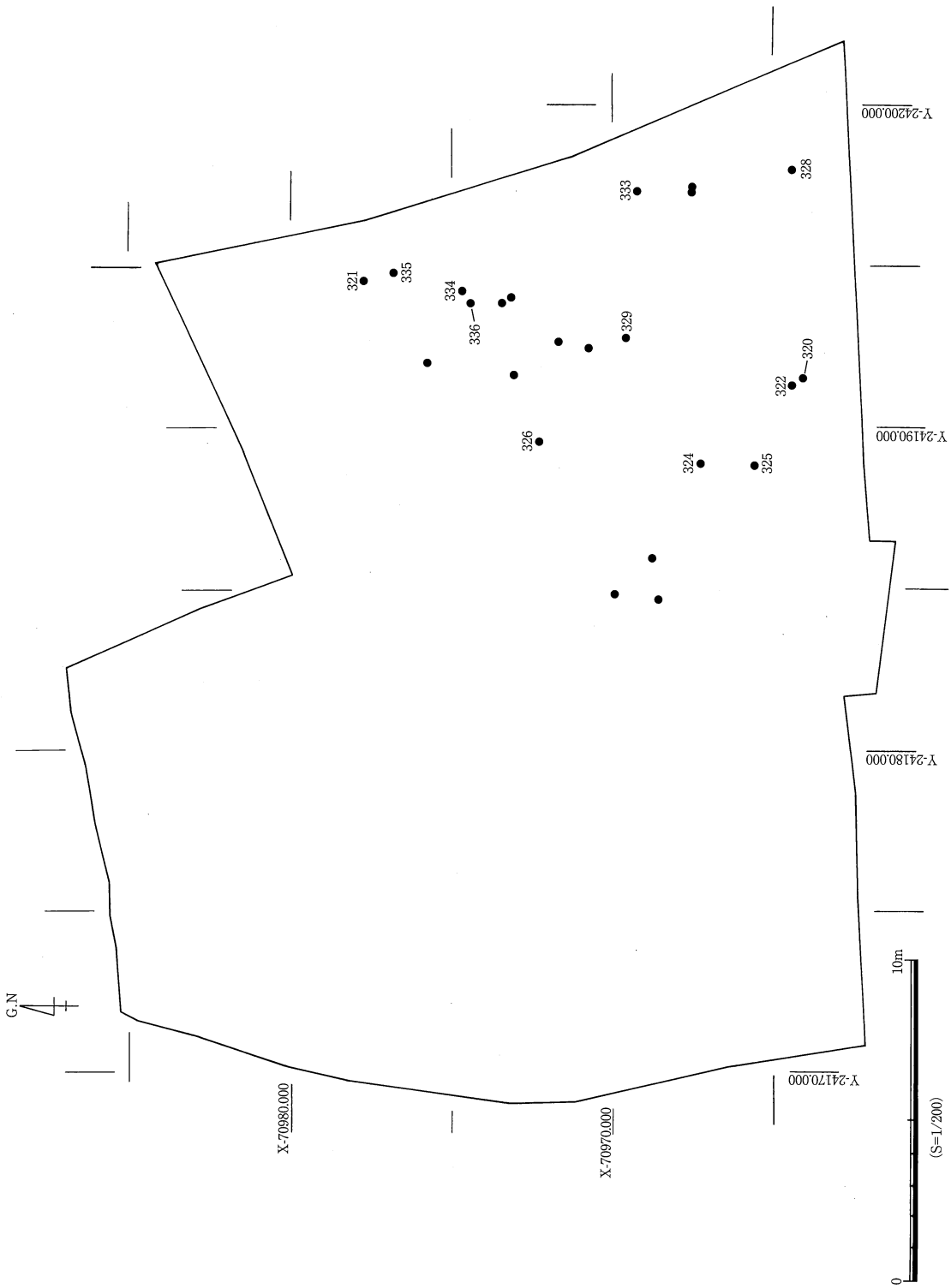
第36図　平成15年度調査　第４層出土　剥片石器（尖頭状石器・石鏃・スクレイパー：報告No.312～319）

312～319は剥片石器である。312～314は尖頭状石器、315～317は石鏃、318は剥離の程度及び大きさからして石鏃の先端部、319はスクレイパーである。

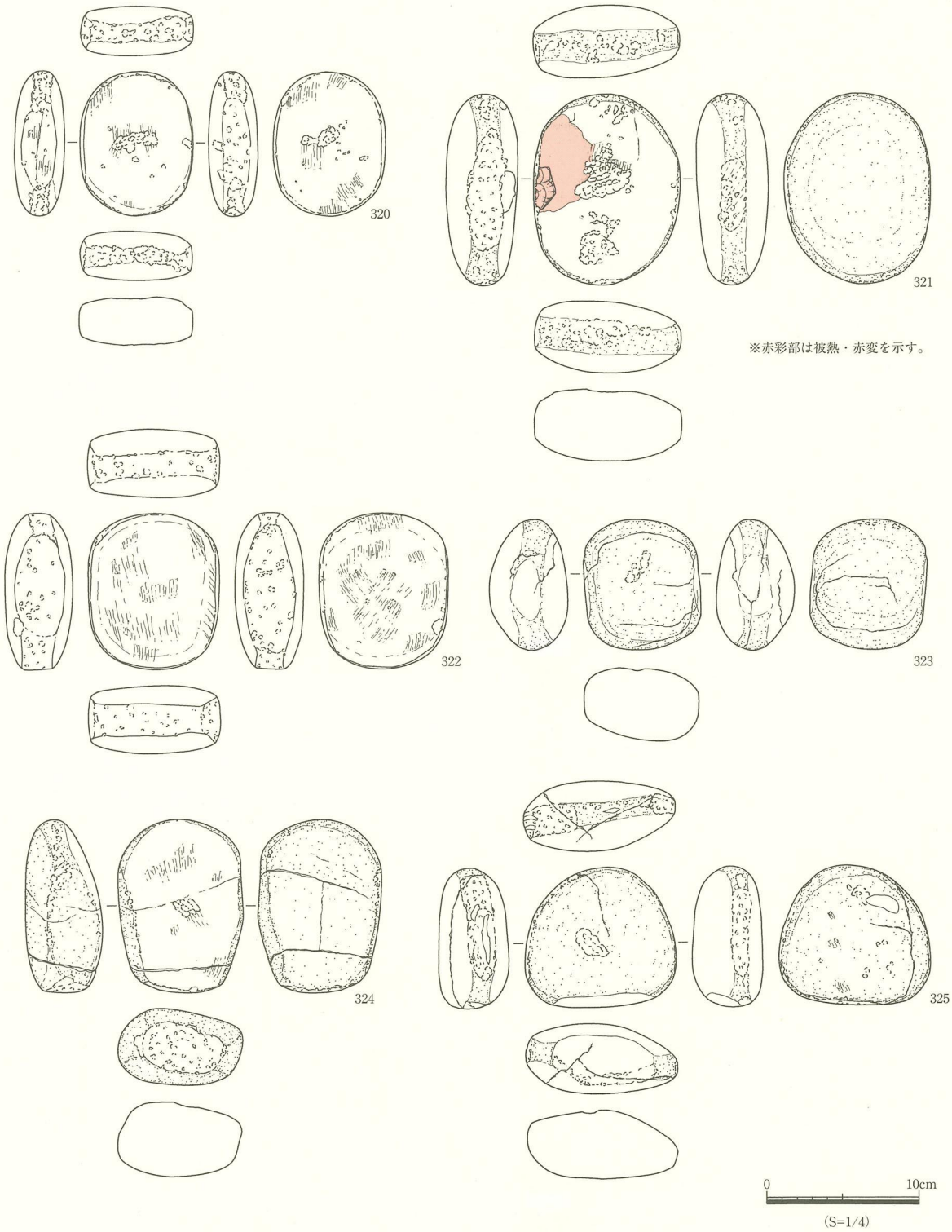
尖頭状石器の石材は312がチャート、313・314がサヌカイトである。312が凸基式であるのに対し、313は平基式である。314は凸基式である可能性が考えられる。314の先端は極めて鈍くなっているため、未製品ないしはリダクションの可能性が考えられる。後者の可能性の場合、先端が鋭いものとは異なる機能があったないしは後から異なる機能を与えられた可能性があることが考えられる。

石鏃は315が平基式であり、他は凹基式である。石材は315がチャートであり、他のものに比べて肉厚である。他はサヌカイトである。

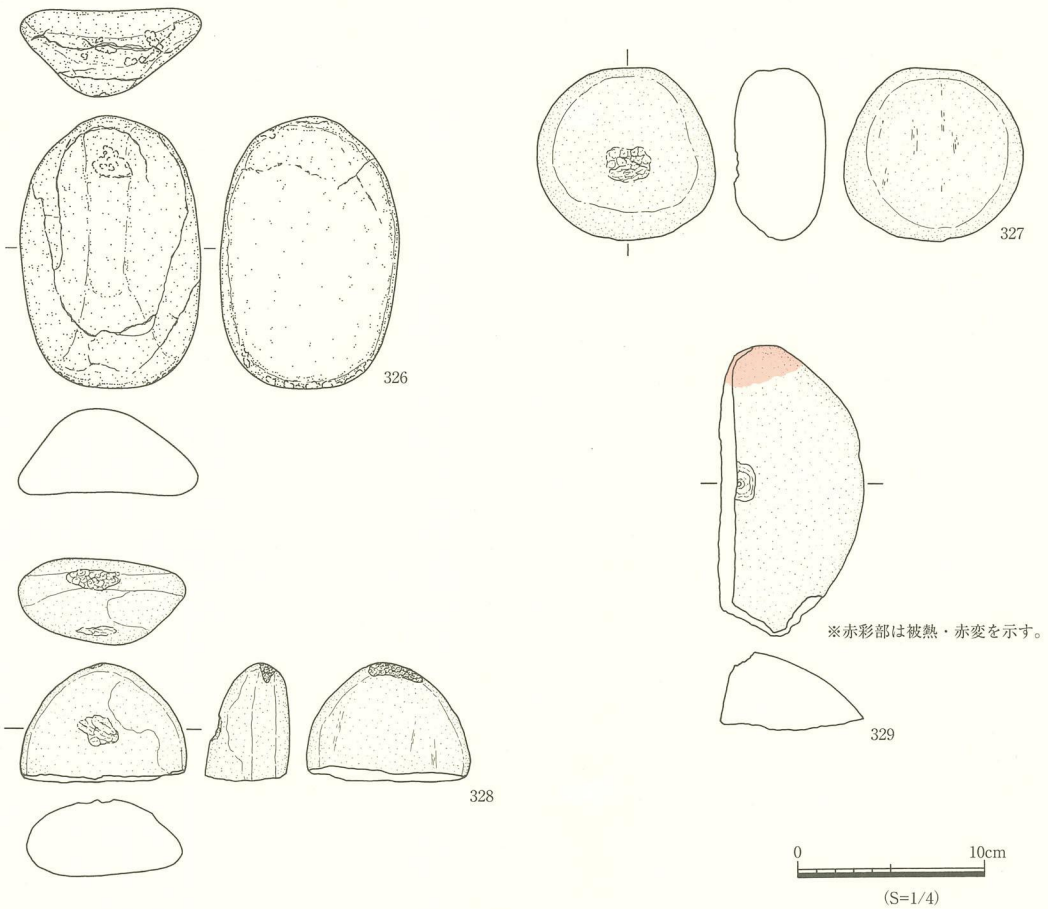
スクレイパーの石材はチャートであり、縦長剥片の縁辺部に鈍角で弧状の刃部を有する。



第37図　平成15年度調査　第４層出土　礫石器ドット分布図



第38図　平成15年度調査　第４層出土　礫石器(磨石・敲石：報告No.320～325)

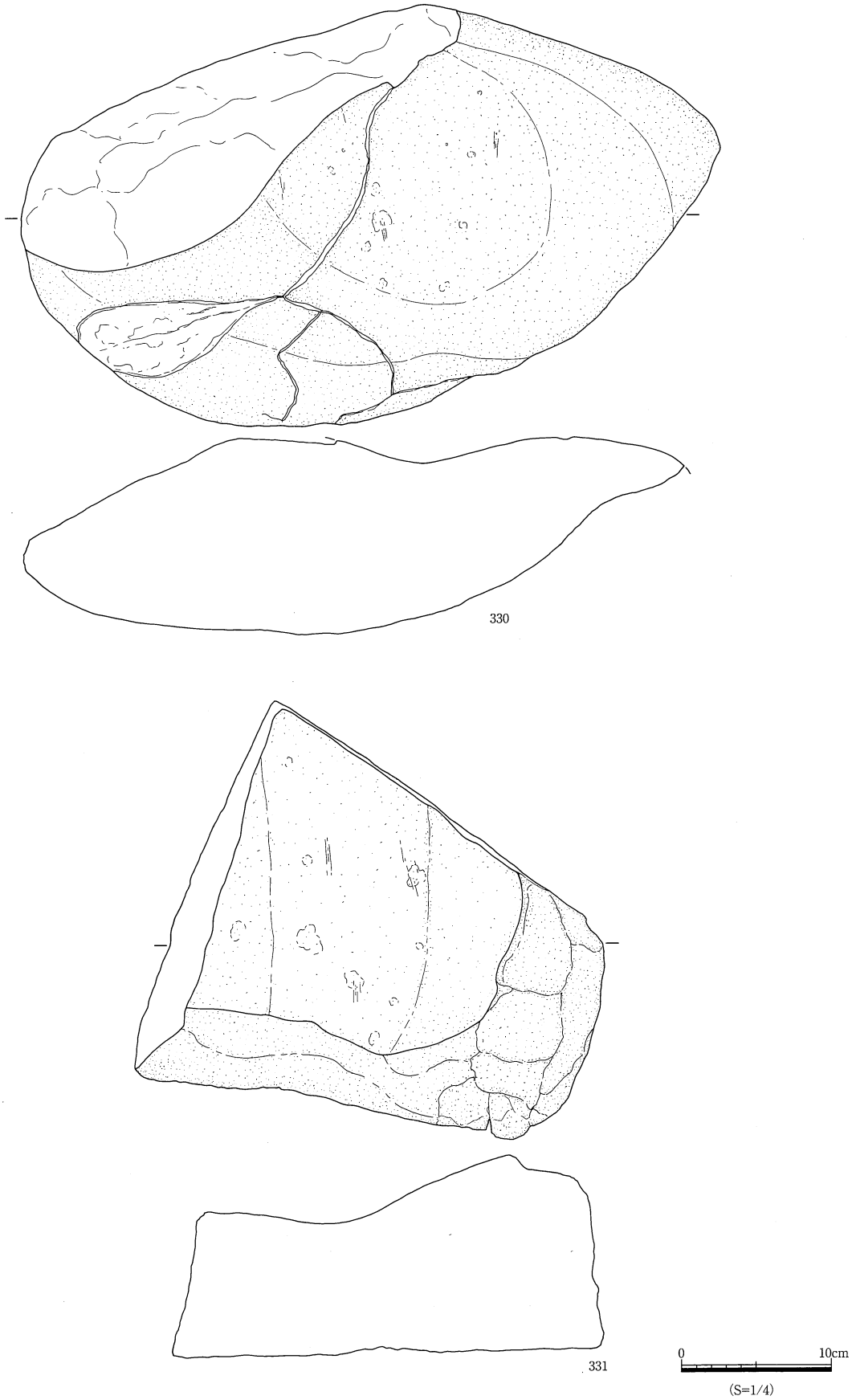


第39図　平成15年度調査　第４層出土　礫石器(磨石・敲石：報告No.326～329)

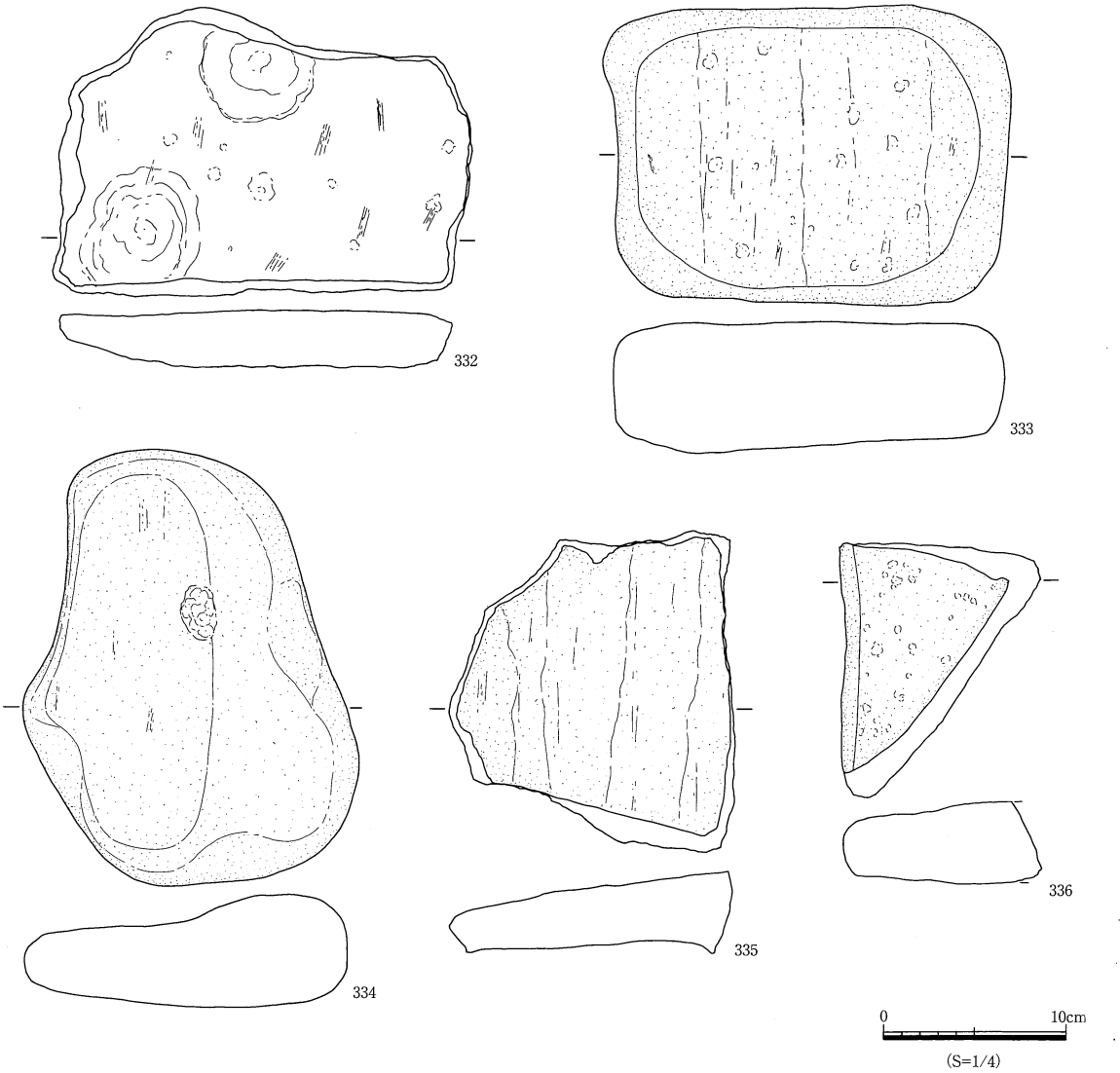
320～336は礫石器である。320～329は磨石・敲石、330～336は石皿・台石である。石材はいずれも砂岩である。

磨石・敲石は320～323が側縁とりわけ左右の側縁に明瞭な加工面を有し、隅丸方形ないしは長楕円といった整えられた形状を呈する。320は表裏に、321は表のみに比較的明瞭な溝状敲打痕を有する。320・321の磨痕と溝状敲打痕を観察する限り、表面を磨った後に溝状敲打痕が形成されている可能性が指摘できる。しかし、溝状敲打痕の縁の部分が鈍くなっている部分もあり、敲打痕が形成された後で更に磨られた可能性も考えられる。322は側縁に明瞭な加工面を有するが、表裏は極めて滑らかな磨面を有する。323は左右の側縁及び表裏に磨面を有するが、表には不鮮明な溝状の敲打痕を有する。

324は下端及び左側縁に明瞭な加工面を有し、表のみに磨面と不明瞭な溝状敲打痕を有する。325は下端に明瞭な加工面及び側縁に敲打痕を有し、表のみに溝状敲打痕を有する。326は表の上部に敲打痕を有する。327は表に楕円形の敲打痕を、裏に磨面を有する。328・329は破片であり、328は表に不鮮明な溝状敲打痕及び上部側縁に敲打痕を有し、裏には磨面を有する。329は擂鉢状の使用痕が認められ、火きり臼の可能性が考えられる。



第40図　平成15年度調査　第４層出土　礫石器(石皿・台石：報告No.330・331)



第41図　平成15年度調査　第４層出土　礫石器(石皿・台石：報告No.332～336)

330・331は緩やかなU字状の凹みを有しており、浅い敲打痕と擦痕が確認できる。332～336は敲打痕及び擦痕が確認できる。

第４節　第３・４層一括出土遺物（第42・43図）

第３・４層一括の個体識別可能な土器片数は1182点である。その内訳は無文土器1073点、押型文土器101点（山形文62点、ポジティヴ楕円文25点、格子目文14点）、撚糸文土器８点である。剥片石器は石鏃３点と楔形石器１点、礫石器は磨石・敲石７点であって、土器・石器合わせて34点を図示した。

337～354が無文土器、355～359が押型文土器、360～363が剥片石器、364～370が礫石器である。土器の口縁部は個体識別を行った上で全点図示し、胴部・底部も個体識別を行った上で必要なものを図示した。石器については全点図示している。

無文土器は口縁部のみ図示している。口縁部文様を有さないものと有するものに分けられる。337・338は口縁部文様を有さない。いずれも外傾すると考えられる。339～354は口縁部文様を有する。文様を有する部位に差異が見られ、339～349は内面に、350・351は外面に、352～354は上面にそれぞれ文様を有する。内面に文様を有するものは直行文・左斜行文・右斜行文・刺突文に、外面に文様を有するものは右斜行文・刺突文に、上面に文様を有するものは刺突文にそれぞれ分けられる。

内面に文様を有するもののうち、339は直行文を施す。器面調整はナデであり、外反する口縁部からやや下がった部分に焼成前穿孔を穿つ。340～344は左斜行文を施し、いずれも器面調整はナデである。口縁は外傾すると考えられるものが多数であるが、344は直立する。345～348は右斜行文を施し、いずれも器面調整はナデである。直立すると考えられるものが多い。349は浅い刺突を施す。器面調整はいずれもナデである。

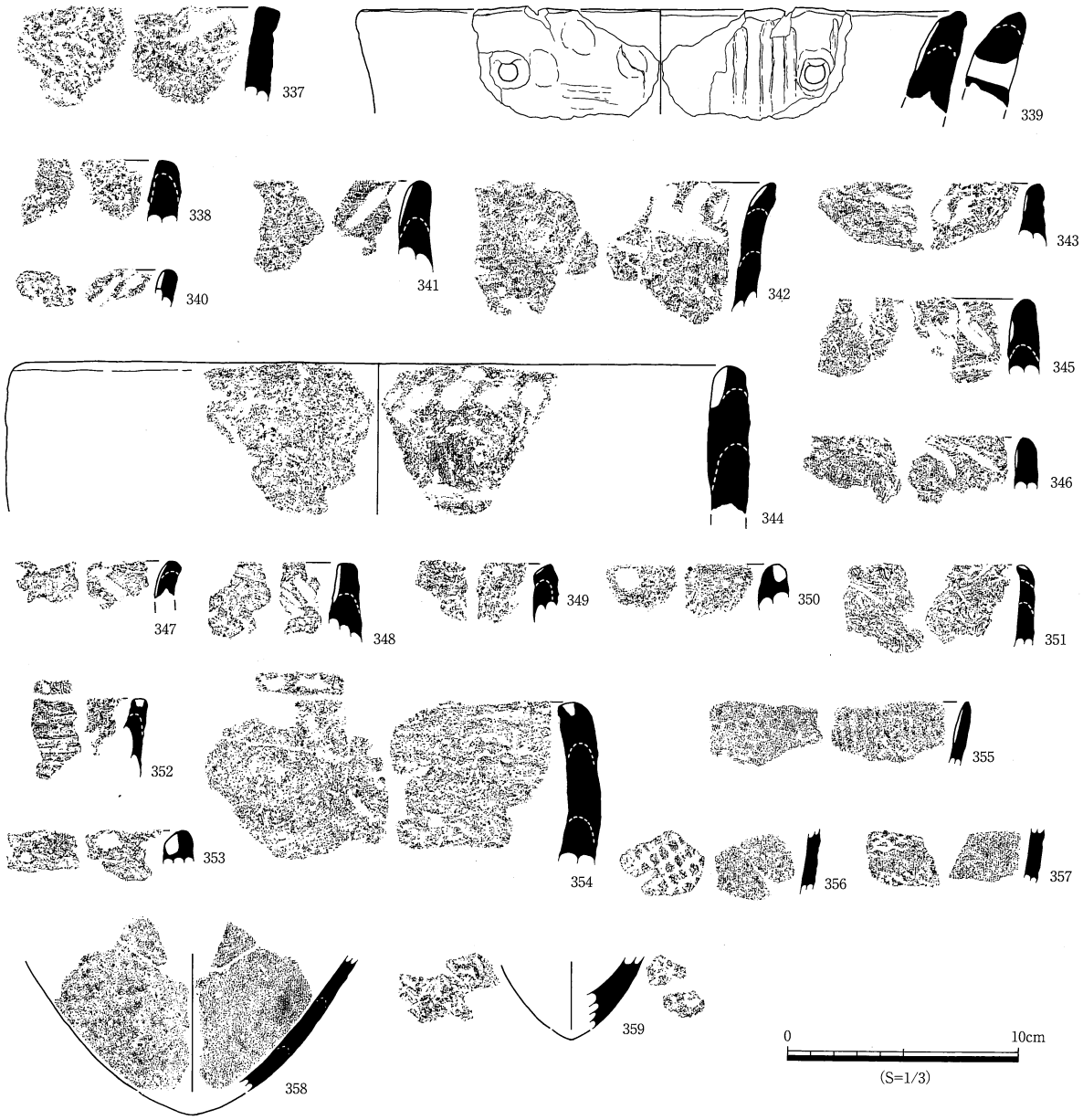
外面に文様を有するもののうち、350は刺突文を施し、351は極めて浅い右斜行文を施す。いずれも器面調整はナデである。

355～359は押型文土器である。355～357がポジティヴ楕円文、358・359が山形文である。

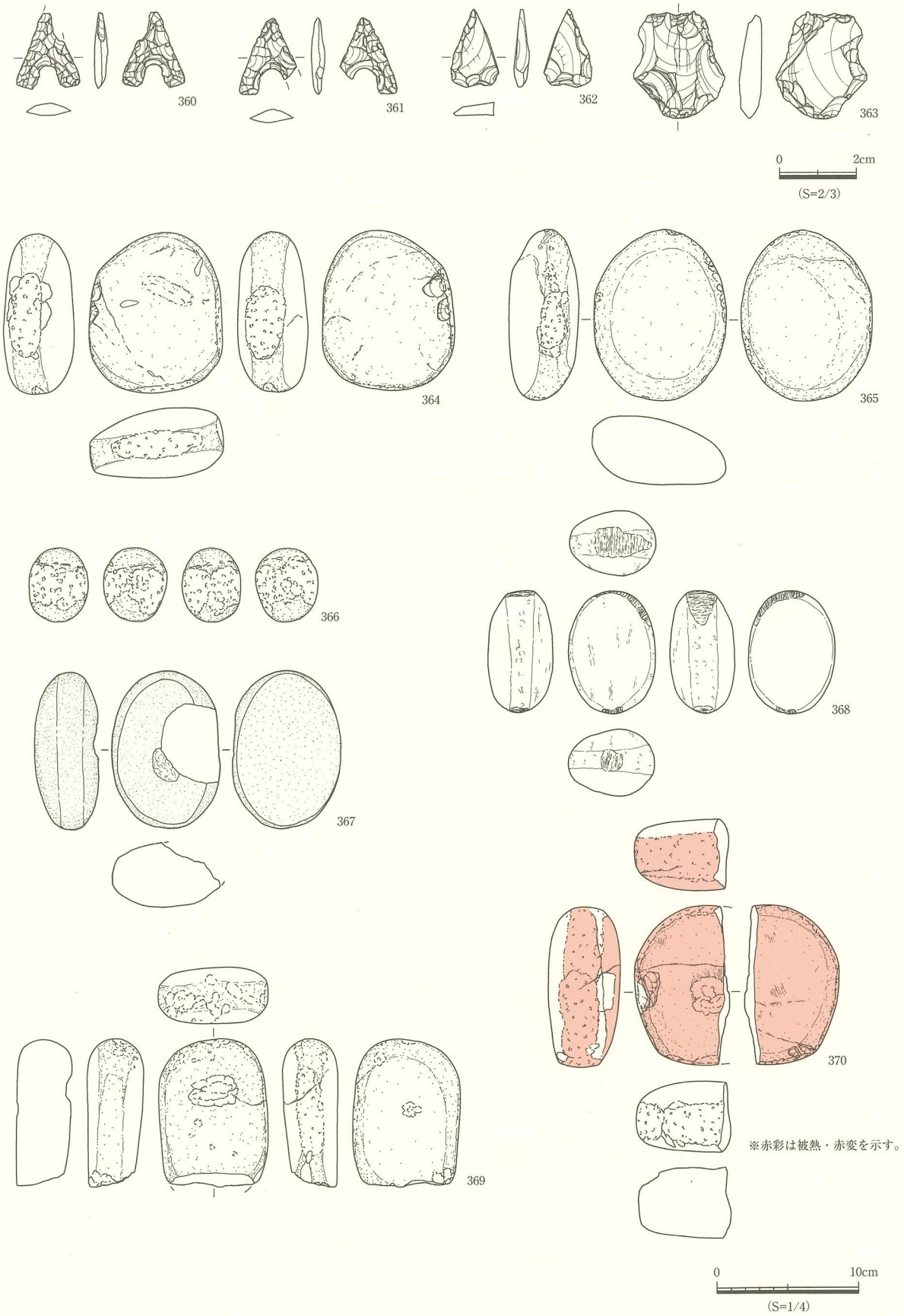
ポジティヴ楕円文は、355がその口縁部、356・357がその胴部である。355は外面にポジティヴ楕円文を施文し、内面に柵状文を施す。山形文はいずれも底部であり、尖底で、外面に山形文を施文する。

360～363は剥片石器であって、いずれも石材はサヌカイトである。360・361は凹基式石鏃である。362は石鏃の未製品の可能性が考えられる。363は両極に不鮮明ながらも階段状の剥離が認められるため、楔形石器として認定した。

364～370は礫石器である。いずれ磨石・敲石であり、石材は砂岩である。364は右側縁と下側縁に明瞭な加工痕を有する。365は右側縁に明瞭な加工痕を有する。366は側縁におびただしい敲打痕を有する。367は表に浅い敲打痕及び裏に磨面を有する。368は上下側縁に幾条もの溝状敲打痕を有し、表に磨面を有する。369は側縁に明瞭な加工痕を有する。370は側縁全体に敲打痕が認められ、下側縁には明瞭な加工痕を有し、表に敲打痕と擦痕及び裏に擦痕を有する。



第42図　平成15年度調査　第３・４層一括　土器(報告No.337～359)



第43図　平成15年度調査　第３・４層一括　石器（報告No.360～370）

第５節　表面採集遺物及び平成15年度調査SK２埋土水洗出土遺物（第44～48図）

表面採集で得られた個体識別可能な土器片数は611点である。その内訳は無文土器575点、押型文土器22点（山形文14点、ポジティヴ楕円文６点、格子目文２点）、撚糸文４点、弥生土器10点である。剥片石器は石鏃11点・スクレイパー１点と二次加工剥片１点、礫石器は磨石５点・石皿３点であって、土器・石器合わせて52点を図示した。

371～389が無文土器、390～400が押型文土器、401が撚糸文土器、402～414が剥片石器、415～422が礫石器である。土器の口縁部は個体識別を行った上で全点図示し、胴部・底部も個体識別を行った上で実測に耐えうる破片と器形が復元可能な破片を図示した。石器については全点図示している。

無文土器は371～387がその口縁部、388・389がその胴部であり、口縁部は口縁部文様を有さないものと有するもの、胴部は器面調整が二枚貝条痕のものとナデのものにそれぞれ大別できる。

371～375は口縁部文様を有さない。器面調整は371・372が二枚貝条痕であるのに対し、373・374はナデであって、口縁は緩く外傾すると考えられる。

376～387は口縁部文様を有する。文様を有する部位に差異が見られ、そのうち376～383は内面に、384～387は上面にそれぞれ文様を有する。内面に文様を有するものは直行文・左斜行文・右斜行文・刺突文に、上面に文様を有するものは刺突文にそれぞれ分けられる。

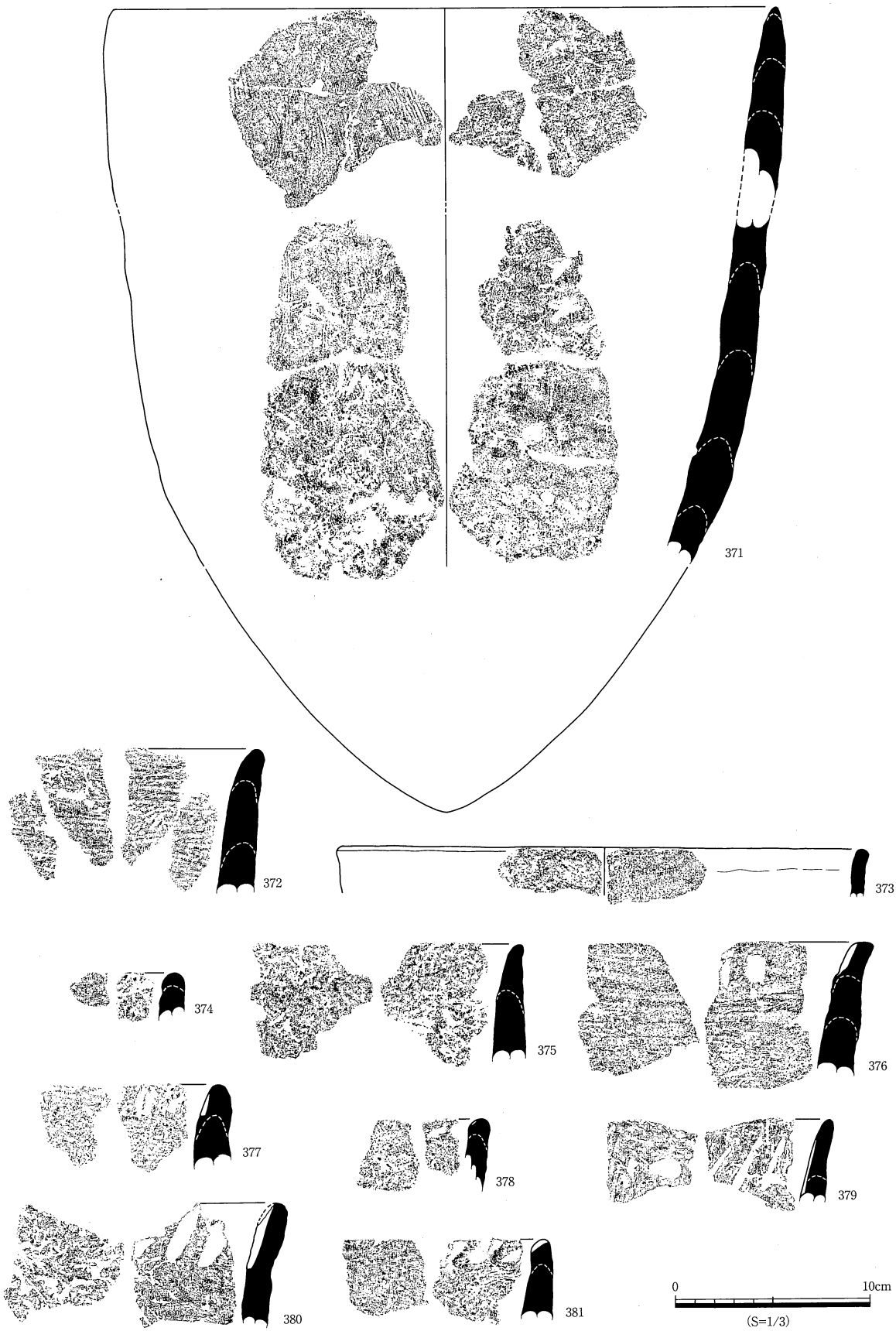
内面に文様を有するもののうち、376は直行文を施し、器面調整はナデである。377～381は左斜行文を施し、いずれも器面調整はナデである。382は右斜行の押圧文を施し、器面調整はナデであるが、指頭圧痕が目立つ。383は大きく外傾すると考えられ、器面調整はナデである。

上面に文様を有するもののうち、384・385は明瞭な円形刺突であり、385は面取りを行った後に施している。386は極めて不鮮明であり、D字状の押引を施した可能性も考えられる。387は大振りな円形刺突を施す。

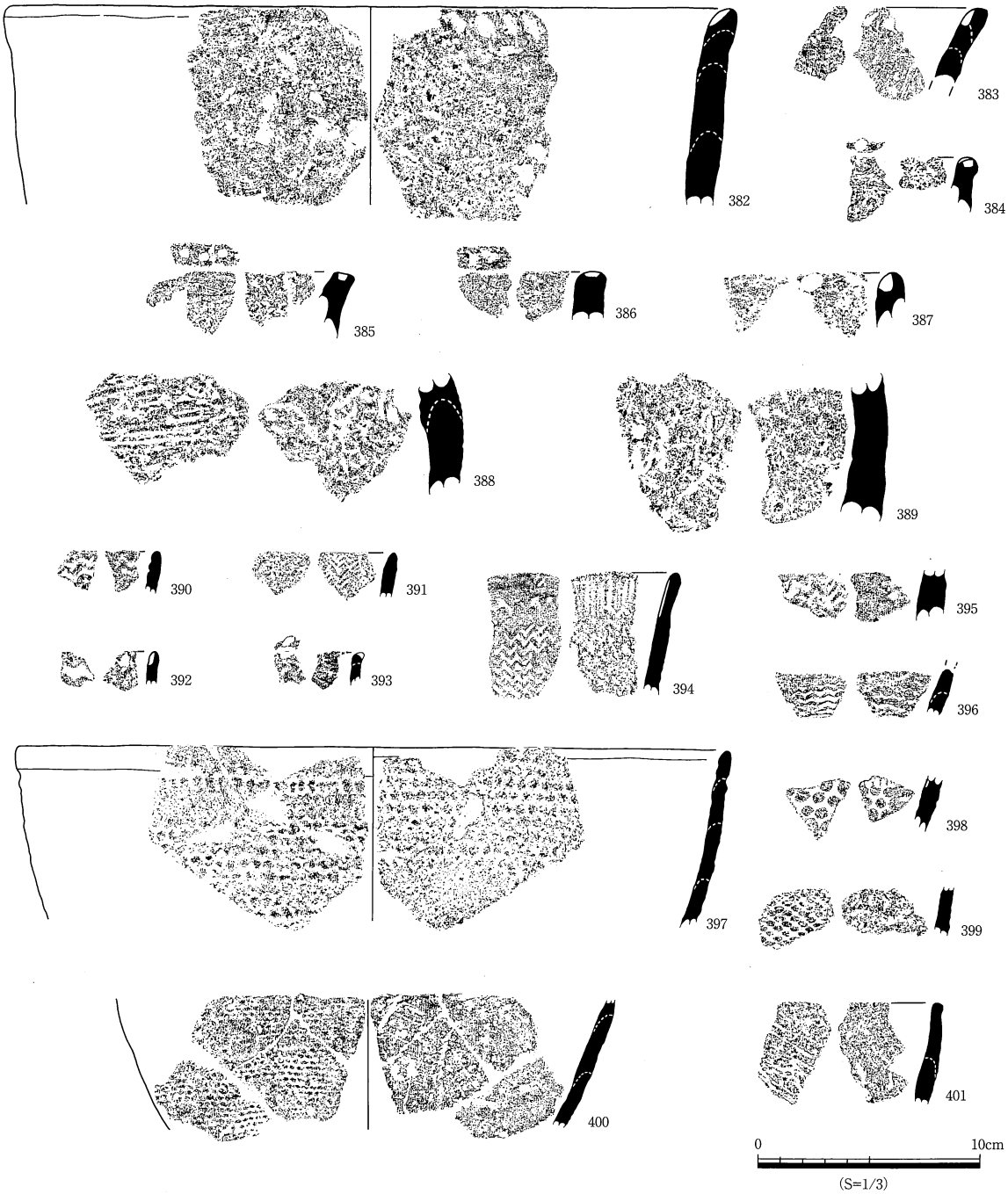
押型文土器は、390～396が山形文、397～400がポジティヴ楕円文である。

山形文は390～394がその口縁部、395・396がその胴部である。口縁部は口縁部文様を有さないものと有するものに分けられる。390・391は口縁部文様を有さない。391は外面が摩滅しているために不鮮明であるが、いずれも内外面に口縁部直下から押型文を施文している。392～394は口縁部文様を有する。外面のみに山形文を施文するものと内面にも山形文を施文するに分けられる。392・393は前者であり、392は内面に直行文を施す。393は外面に左斜行文を施す。いずれも口縁部外面直下から施文しているが、392は原体を横位に回転させて施文するのに対して、393は原体を縦位に回転させて施文している。394は後者であり、口縁部内面に柵状文を施す。口縁部外面に直下に無文帯を有しており、その下に山形文を施文している。395は厚手であり、胎土に繊維を混入させることからして、無文土器と山形押型土器の折衷として考えられる。396は内面にポジティヴ楕円様の押型文を施文するため、口縁部付近の部位であると考えられるが、この文様は山形文が潰れたものとして解釈した。

397～400はポジティヴ楕円文で、397はその口縁部である。口縁部文様を有さず、内面にも押型



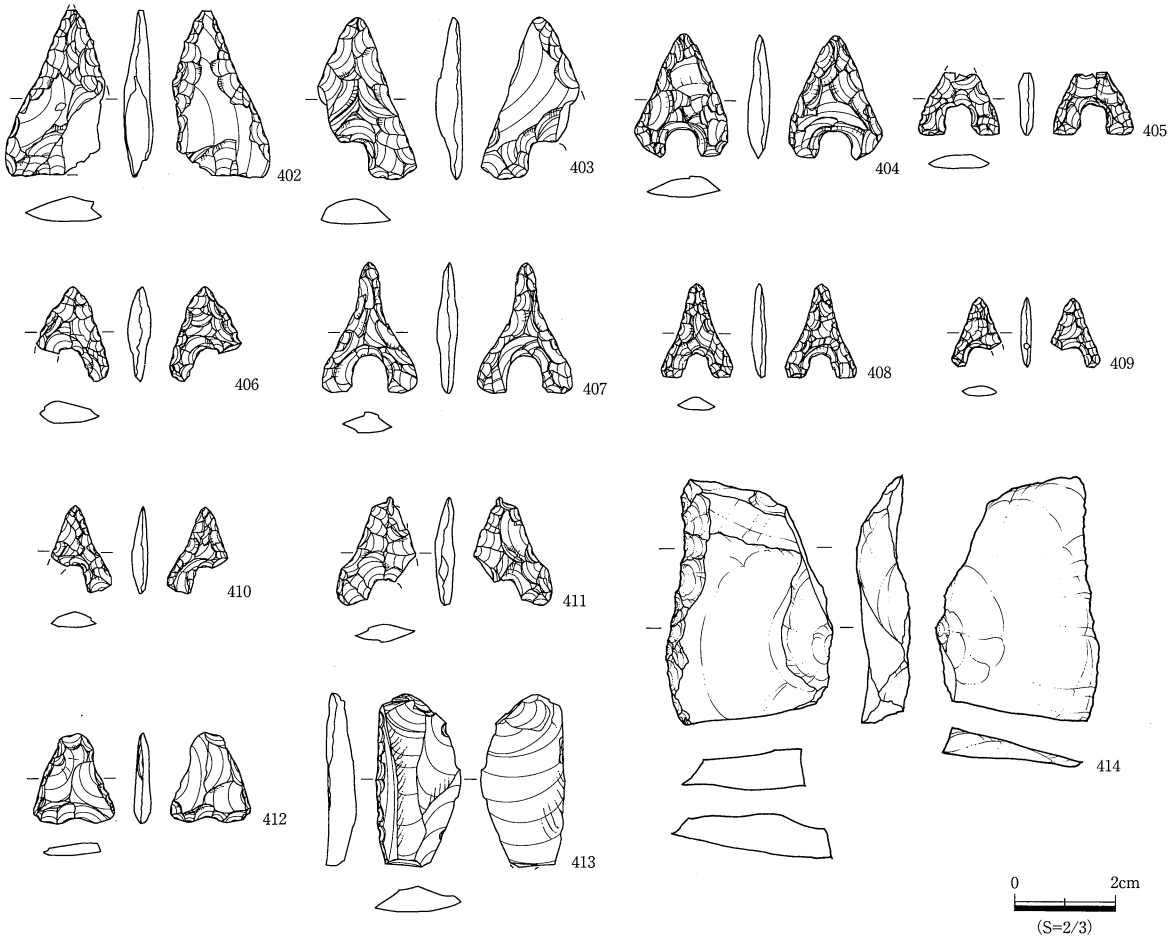
第44図　平成15年度調査　表面採集　土器（報告No.371～381）



第45図　平成15年度調査　表面採集　土器(報告No.382～401)

文を施文するが、口縁部外面に無文帯を有し、その下にポジティヴ楕円文を施文している。398～400はその胴部である。398は内面に柵状文と考えられるものを施し、その下に押型文を施文するため、口縁部付近の部位であると考えられる。

401は撚糸文土器の口縁部である。外面に0段の撚糸文を有する。



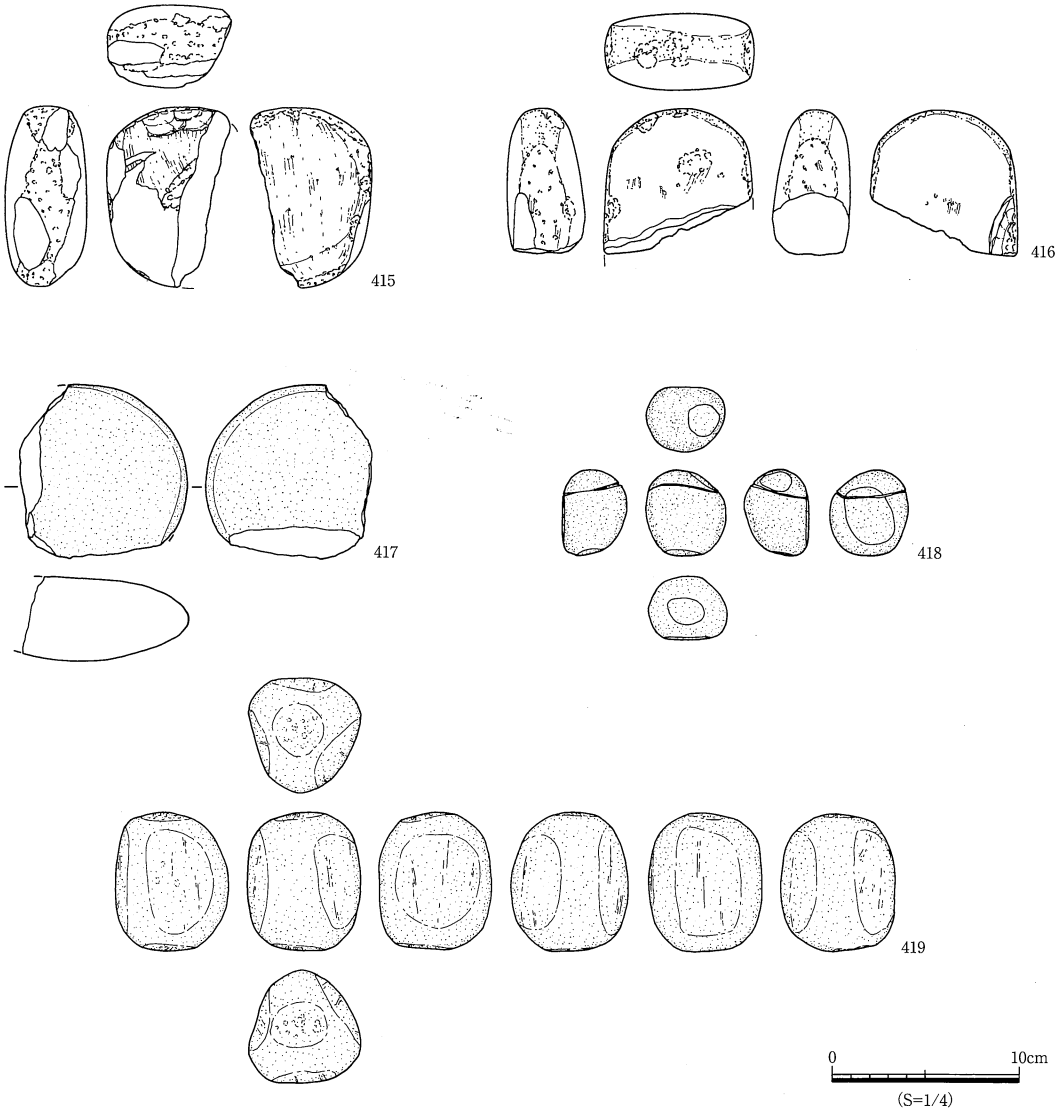
第46図　平成15年度調査　表面採集　剥片石器(石鏃・二次加工剥片・スクレイパー：報告No.402～414)

402～414は剥片石器である。402～412は石鏃、413は二次加工剥片、414はスクレイパーである。

石鏃は402が平基式である他は凹基式である。いずれも石材はサヌカイト製である。

二次加工剥片は縦長剥片の右側縁に細かい剥離を行っている。石材はサヌカイトである。

スクレイパーは大型の剥片石器であり、横長剥片の右側縁に刃部を作出している。石材はサヌカイトである。

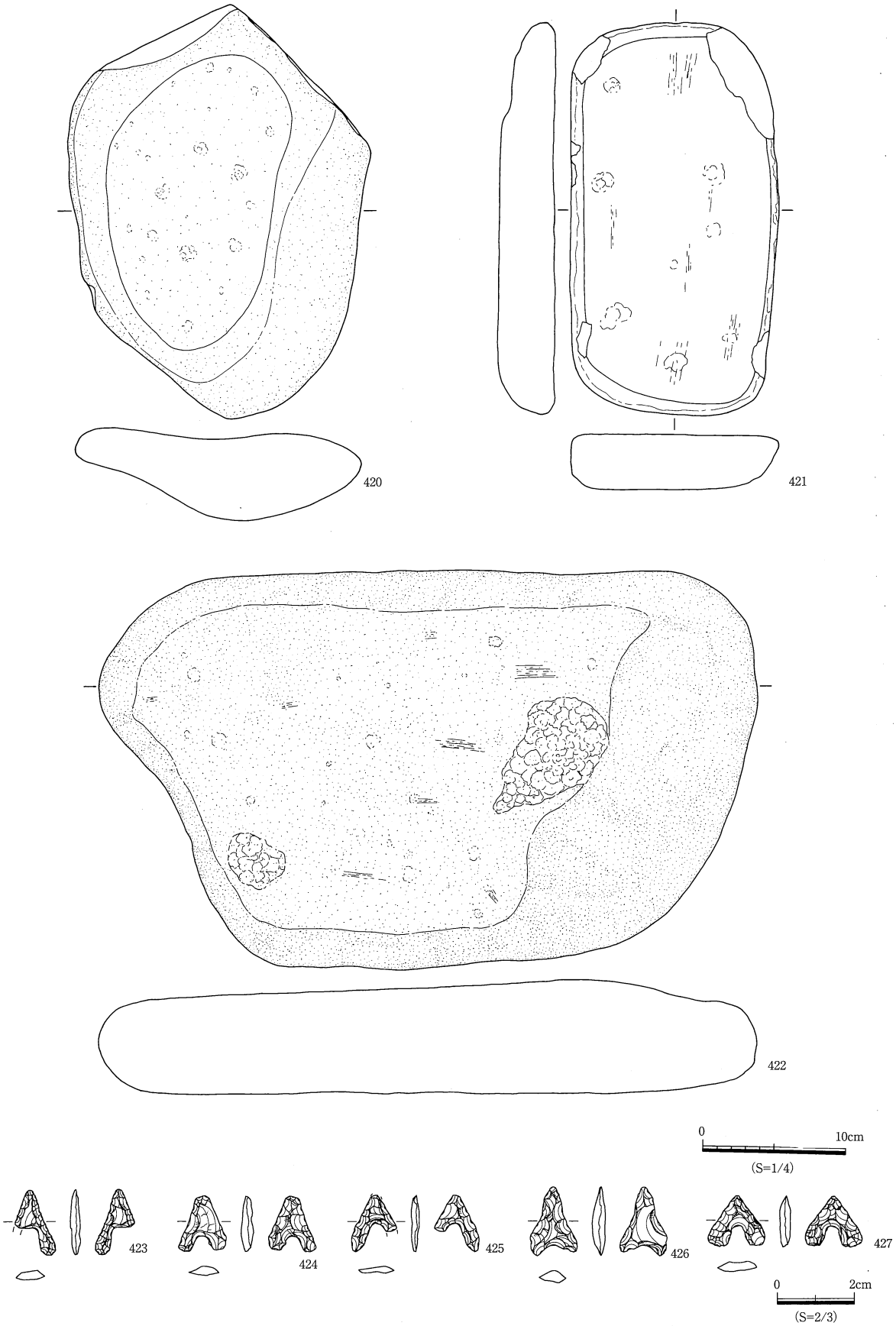


第47図　平成15年度調査　表面採集　礫石器(磨石・敲石：報告No.415～419)

415～422は礫石器である。415～419が磨石・敲石、420～422が石皿・台石である。415・416は側縁とりわけ左右の側縁に明瞭な加工痕を有し、隅丸方形ないしは長楕円といった整った形状を呈すると考えられる。いずれも表裏に擦痕を有するが、415の表には溝状になると考えられる敲打痕が、416の表には浅い敲打痕が見られる。417は円形であったと考えられ、表裏に擦痕を有する。418・419は特定の部位だけに敲打及び擦痕を有するが、顕著なものではない。形の整った礫を採取し、それを短い時間ないしは数回だけ使用した可能性が指摘できる。

420は中央が大きく窪み、浅い敲打痕も認められる。421・422はまな板状であり、両者とも浅い敲打痕と擦痕を有する。石材はいずれも砂岩製である。

423～427は石鏃であるが、平成15年度調査で検出されたSK 2の埋土を水洗した際に採集したものである。いずれも凹基式であり、石材はサヌカイトである。



第48図　平成15年度調査　表面採集　礫石器(石皿・台石：報告No.420～422)・
SK 2 埋土水洗出土剥片石器(石鏃：報告No.423～427)

第Ⅳ章　平成16年度調査の概要及びその成果

第１節　平成16年度調査の概要

１．調査区の設定

個人住宅建築に伴う進入路敷設の工事を行う範囲を対象とする発掘調査である。平成15年度調査区の南西隅から南へ、幅６m長さ21mにわたる約126㎡の調査を北部分と南部分の２回に分けて行った。調査区が小規模で幅が狭かったためグリッド設置はせず、平板測量及び光波測量を行った。

２．調査の方法

本調査区は平成15年度調査時における廃土置き場となっていたため、耕作土及び床土は既に除去されていた。平成16年春に廃土が搬出された後は、しばらく野ざらし状態になっていた。調査を開始するに当たって、撹乱された土壌を鋤簾で除去し、第３層を検出していったが、その層が既に重機による掘りすぎ及び調査区西端に設置されている石垣構築のために大きく撹乱を受けていることが判明した。よって、第３層は良好に残った部分だけを掘削し、第４層を掘削した。第４層掘削途中でSK１を検出したため、その高さでの精査を試みたが、他に遺構は検出されなかった。そのため、本調査における出土遺物は表面採集・撹乱、第３層、第４層そしてSK１からの出土遺物を得ることができた。

３．基本層序

本調査区において土層観察に適したのは東壁である。調査時点での地表面から遺物包含層までは10cmであった。層序は第１～７層に大別でき、その内第３層と第４層が遺物包含層である。遺構の検出は第４層中層であったが、本来は第４層上面から掘り込まれた可能性が考えられる。水平堆積を基調とする。

第１層…撹乱土層。平成15年度調査での廃土と第３層が混じった層。

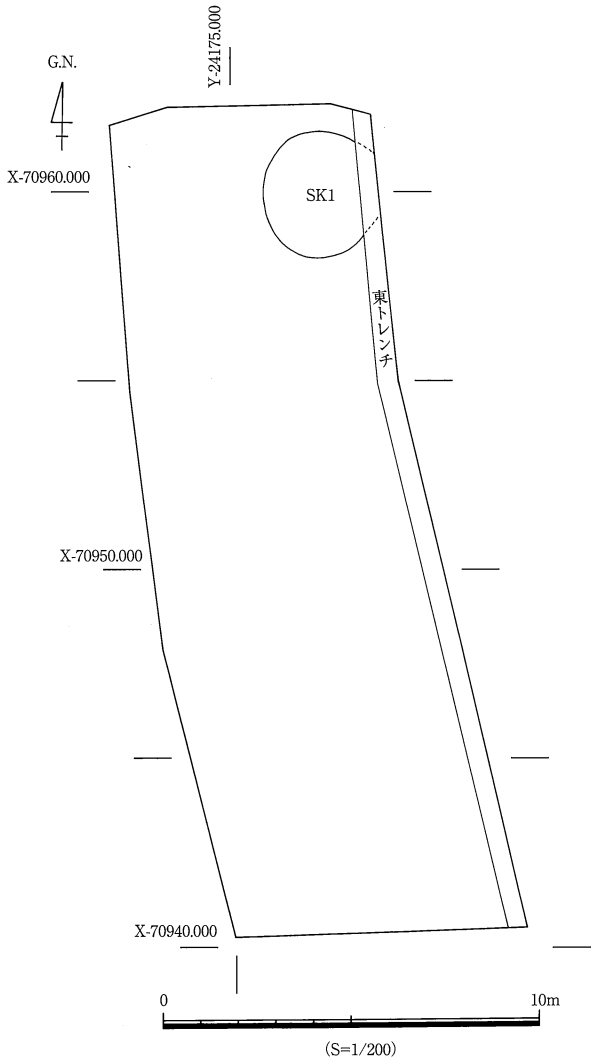
第３層(黒色10YR2/1)…遺物包含層である。平成15年度調査の第３層と同じ層である。所謂“クロボク”と言われる層であり、火山灰の土壌化が進んだものとして考えられる。しまりはそれほど強くなく、粘性は低い。３～５cm大の礫を含む。東壁では比較的遺存状況は良好であったが、調査区西になるほど廃土搬出及び石垣構築のために大きく撹乱を受けていたため、明確かつ良好な遺物の出土は見られなかった。

第４層(黒色7.5YR2/1)…遺物包含層である。平成15年度調査の第４層と同じ層である。縄文時代早期の遺物が確認された。しまりはやや強く、粘性は低い。１～５mm大の砂礫を多く含む。

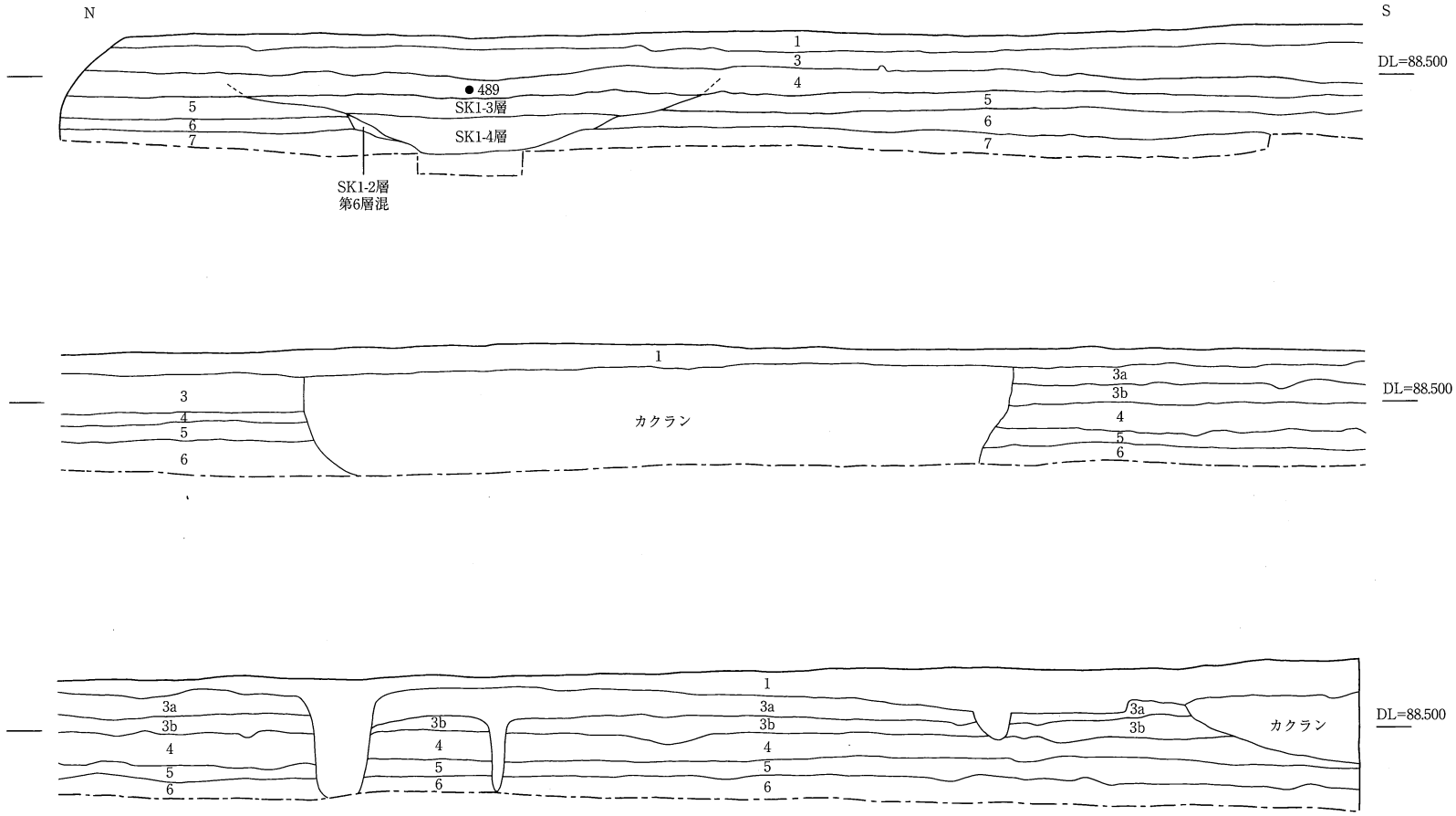
第５層(黒褐色10YR3/2)…無遺物層である。平成15年度調査の第５層と同じ層である。しまりは弱く、粘性は低い。１～３㎜大の砂礫を多く含み、第４層と第６層の混和層として考えられる。

第６層(灰黄褐色10YR4/2)…無遺物層である。しまりは弱く、粘性は無い。２～５㎜大の礫を多く含む。

第７層(黄褐色2.5Y5/3) …無遺物層である。しまりはやや強く、粘性は無い。２㎜大の礫を多く含む。



第49図　平成16年度調査　調査区平面図及び遺構分布図



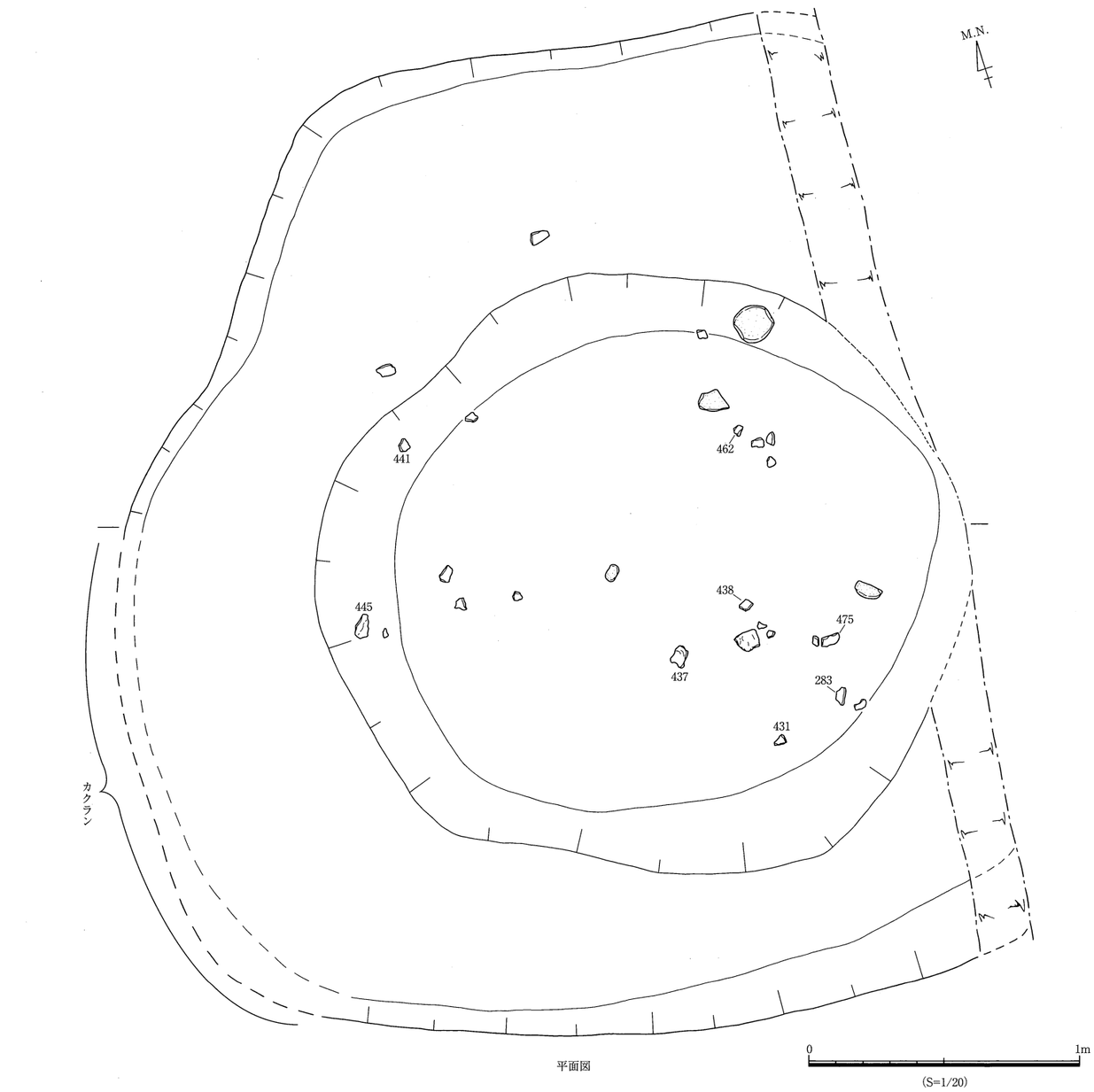
第1層：表土。平成15年度調査時の土砂積上・搬出時に形成された層。平成15年度調査における第1層（耕作土）と第2層（床土）及び第3層の混和土である。
第3層：黒ボク層（黒10ＹＲ 2/1）しまり柔、粘性低。3～5㎜大の砂礫を多く含む。南に行くにつれ、同質ではあるが鉄分吸着と思われる赤味を帯びた層が確認されたので、3a層とした。
第4層：褐色土層（黒7.5ＹＲ 2/1）しまりやや固、粘性低。1～5㎜大の白色砂礫及び2～4㎜大の赤色砂礫を多く含む。
第5層：黒褐色土層（黒褐10ＹＲ 3/2）しまり柔、粘性無。砂質であり、1～3㎜大の砂と4層の混和層である。
第6層：灰黄褐土層（灰黄褐10ＹＲ 4/2）しまり柔、粘性無。砂質であり、2～5㎜大の砂と5層の混和層である。

0　2m
(S=1/40)

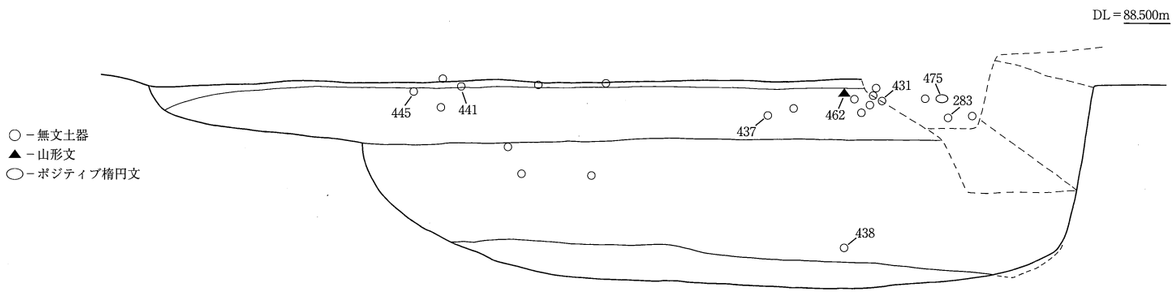
第50図　平成16年度調査　東壁土層図

４．包含層及び各検出面の概要

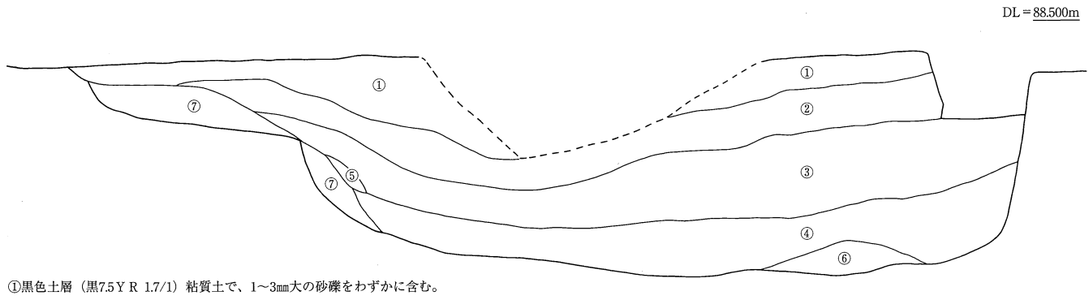
第３層は大きく撹乱を受けており、第４層も石垣工事による撹乱と倒木等による土壌の横転が著しく、遺物の遺存状態も極めて悪かった。よって、包含層出土遺物の出土地点での取り上げは断念した。そのような環境でSK１は幸運にも残ったと言える。この遺構の検出が第５層上面ではなく、それより上層からであることを確かめられたのは大きな成果であり、今後の刈谷我野遺跡における調査方法の大きな指針となった。



平面図



断面見通し及び出土遺物垂直分布図



土層図

①黒色土層（黒7.5ＹＲ 1.7/1）粘質土で、1～3㎜大の砂礫をわずかに含む。しまり強い。
②黒褐色土層（10ＹＲ 3/1）1～30㎜大の砂礫を多く含む。しまり強い。粘性低い。
③黒褐色土層（2.5Y 3/1）砂質土である。しまり強い。粘性低い。
④黒色土層（2.5Y 2/1）粘質土である。しまり弱い。粘性強い。
⑤黄色土層（2.5Y 6/3）砂質土である。包含層第6層の崩落によるもの。
⑥黄色土層（2.5Y 6/3）砂質土である。包含層第7層とSK1埋土4層の混和層
⑦包含層第5･6層の混和層。それぞれの崩落によるもの。

第51図　平成16年度調査　SK１遺構図及び出土遺物垂直分布図

第２節　第４層中検出SK１及びSK１出土遺物（第51～54図）

SK１は長軸約４ｍ、深さ約70cmを測る大形土坑である。調査区北東端で検出され、平成15年度調査SK２とは４ｍ程度しか離れていない。埋土は大きく分けて４層であるが、小破片が多く、無文土器と押型文土器が層を違えて出土する傾向は押さえられなかった。

平成15年度SK２と平成16年度SK１は規模や近接具合、包蔵する土器の特徴からして、ほぼ同時期に存在したことが考えられる。これらが元々一対であったのか、それとも一度刈谷我野を離れた後に再度この地に戻ってきた縄文人が一度廃絶した土坑の近くに再び同じ規模の土坑を構築したのか、それとも単なる偶然によるものなのかは不明である。しかし類例の増加に従い、中四国の縄文時代早期における定住はもとより住居とその集落の形態を紐解くことになるはずである。

SK１からは出土した器種識別可能な土器片数は234点である。その内訳は、無文土器132点、押型文土器100点（山形文79点・ポジティヴ楕円文８点・格子目文13点）、撚糸文土器２点である。そのうち無文土器21点、山形文23点、ポジティヴ楕円文８点、格子目文７点を図示した。

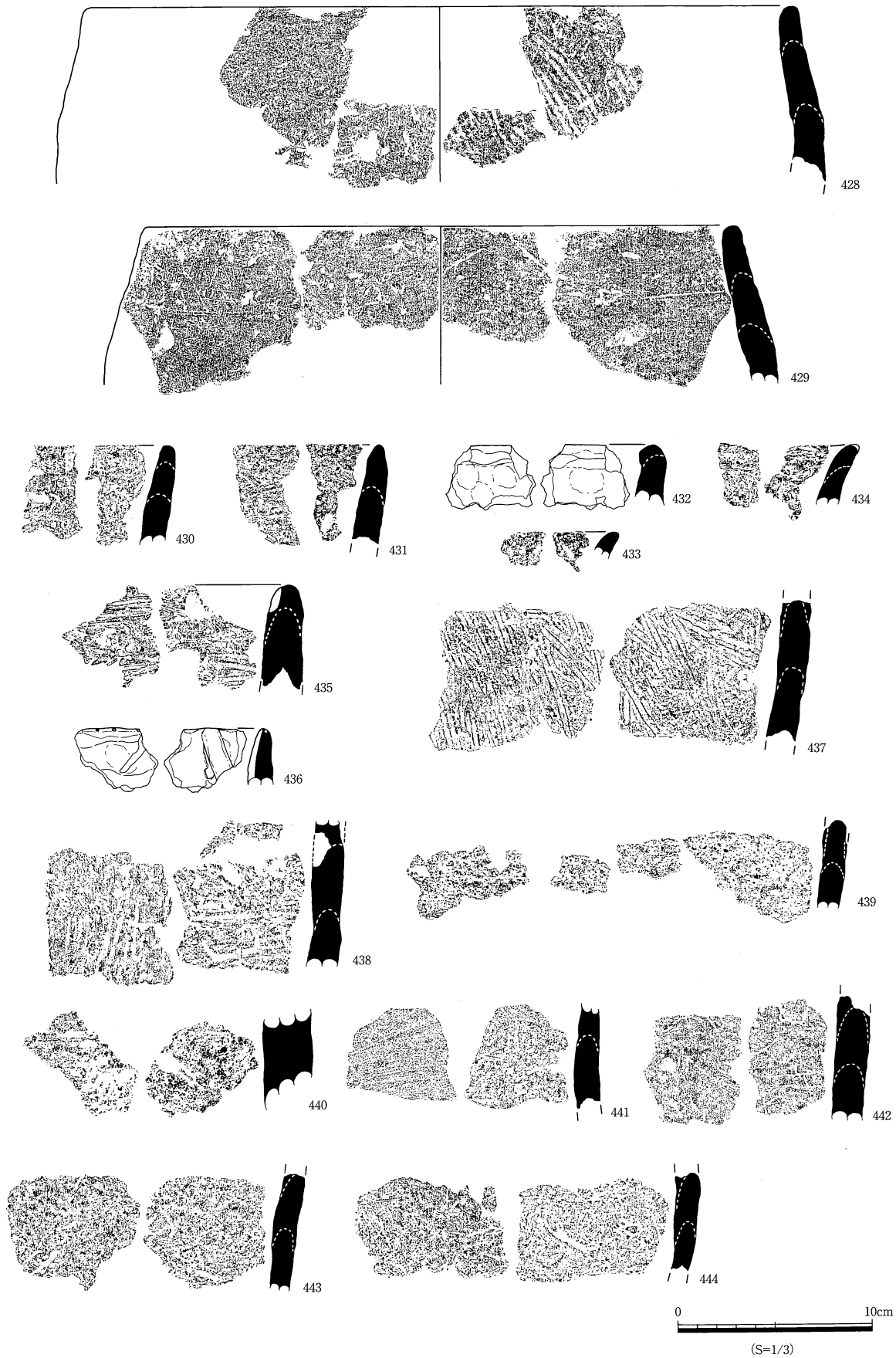
428～448が無文土器、449～486が押型文土器である。土器の口縁部は個体識別を行った上で全点図示した。

無文土器は428～436がその口縁部、437～448がその胴部であり、口縁部は口縁部文様を有さないものと有するもの、胴部は器面調整が二枚貝条痕のものとナデのものにそれぞれ大別できる。

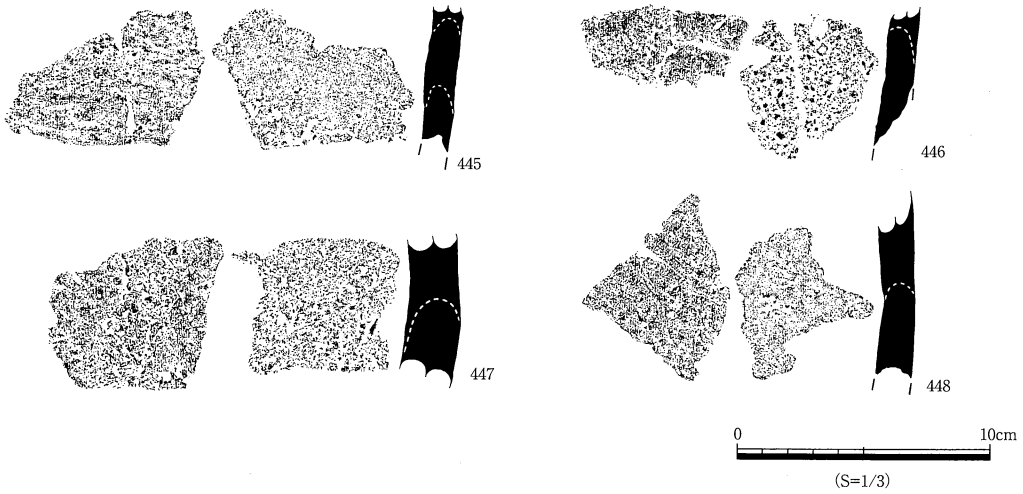
428～434は口縁部文様を有さない。器面調整は428が内面に二枚貝条痕を有するのに対し、他は全てナデである。基本的に器形は砲弾型であると考えられるが、口縁の立ち上がり方に大きな差が見られる。428・429は胴上部に最大径を有し、そこから内傾しながら立ち上がるが、いずれも口縁端部が極めて弱く外方向に反り返る傾向が見られる。それに対して430～434は外傾すると考えられるが、432のみ口縁端部が内傾する。

435・436は口縁部文様をいずれも内面に有する。435は直行文を施し、器面調整は二枚貝条痕であって、口縁はやや直立すると考えられる。436はやや太めの右斜行文を施しており、口縁部上面にも針先でつついたような極めて小さな刺突を連続して施している。器面調整はナデであって、口縁は直立すると考えられる。

胴部は437・438の器面調整は二枚貝条痕であり、439～448はナデである。両者の器厚を比べると後者のほうが薄い傾向が見られる。



第52図　平成16年度調査　SK１出土無文土器（報告No.428～444）



第53図　平成16年度調査　SK１出土無文土器（報告No.445～448）

押型文土器は449～471の山形文、472～479のポジティヴ楕円文、480～486の格子目文に分けられる。

山形文は449～454がその口縁部、455～471がその胴部・底部である。口縁部は口縁部文様を有さないものと有するものに分けられる。

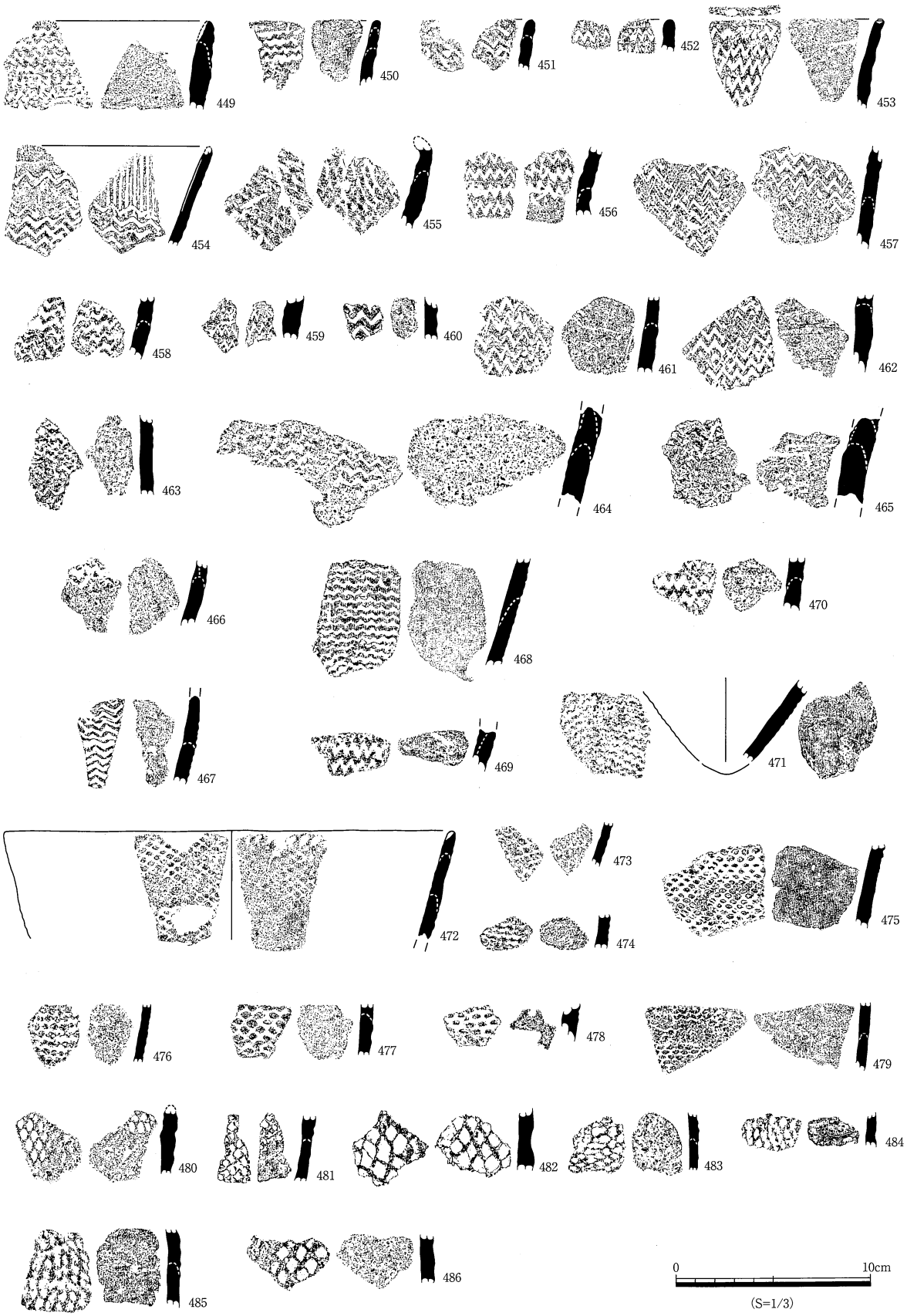
449～452は口縁部文様を有さない。外面のみに山形文を施文するものと内面にも山形文を施文するものに分けられる。449・450は前者であり、449は口縁部外端に面取りを有し、無文帯とする。451・452は後者であり、451は口縁部内端を削ぐような緩い面取りを有する。452は口縁部上面に緩い面取りを有する。いずれも口縁部直下から施文している。

453・454は口縁部文様を有する。外面のみに山形文を施文するものと内面にも山形文を施文するものに分けられる。453は前者であり、面取りを行った口縁部上面に刺突を施し、口縁部外面直下から施文している。454は後者であり、口縁部内面に柵状文を施す。口縁部外面に面取りを施し、そこを無文帯とし、その下に押型文を施文している。

胴部のうち455～459は内面にも押型文を施文するため、口縁部付近の部位であると考えられる。464・465は器厚が比較的厚く、無文土器と山形押型文土器の折衷として考えられるが、これまで見てきた折衷のものに比べると薄手である。471は底部であり、尖底を呈する。

ポジティヴ楕円文は472がその口縁部、473～479がその胴部である。472は口縁部内面に左斜行文を施し、内面にも押型文を施文する。外面の押型文が帯状に不鮮明な部分があるが帯状施文ではなく、製作時に意図せずして消えたものとして考えられる。

格子目押型文はいずれも胴部である。480～482は内面にも押型文を施文するため、口縁部付近の部位であると考えられる。

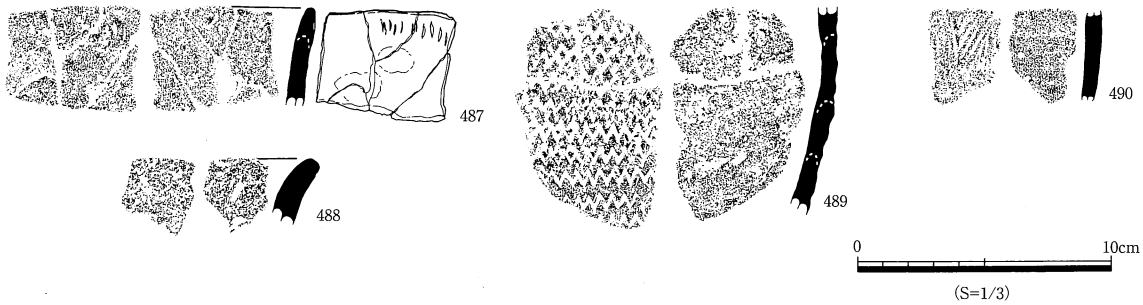


第54図　平成16年度調査　SK１出土押型文土器（報告No.449～486）

第３節　第４層出土遺物(第55図)

第４層からは出土した器種識別可能な土器片数は248点である。その内訳は無文土器224点、押型文土器23点(山形文14点・ポジティヴ楕円文４点・格子目文４点・複合鋸歯文１点)、爪形刺突様文土器１点である。爪形刺突様文１点・無文土器１点・山形文１点・複合鋸歯文１点を図化した。

487は口縁部外面直下に浅い爪形刺突様文を有する。この爪形刺突は明らかに文様を意識していると考えられる。ただし、草創期のものとは区別して考えたい。488は無文土器口縁部であり、器面調整はナデである。489・490は押型文土器胴部であり、489は外面に比較的整った山形文を、490は外面に大振りな複合鋸歯文を施文する。489は東壁第４層の地点から出土しているが、本来はSK１埋土中からの出土である可能性も考えられる。



第55図　平成16年度調査　第４層出土土器(報告No.487～490)

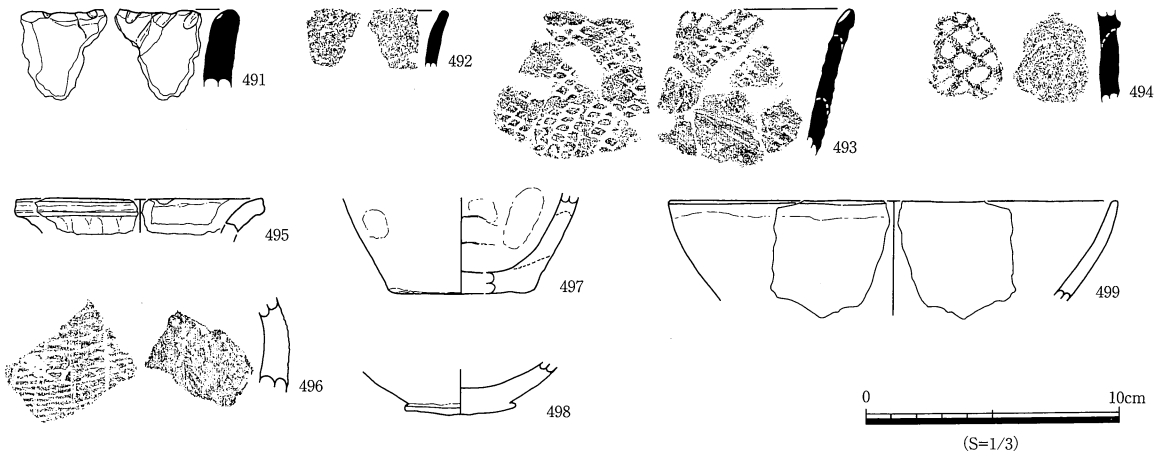
第４節　表面採集・撹乱遺物(第56図)

表面採集及び撹乱からは無文土器109点、押型文土器15点(山形文８点・ポジティヴ楕円文５点・格子目文２点)、弥生土器16点が出土している。

491・492は無文土器口縁部であり、491は口縁部内面に左斜行文を有する。

493・494は押型文土器である。493はポジティヴ楕円文口縁部であり、口縁部内面に左斜行文を施し、内外面に押型文を施文する。494は外面に格子目文を施文する。

495～499は弥生時代の土器である。495～498は壷そして499は碗と考えられる。器種組成そして496の器面調整がタタキとハケ目であることからして、弥生時代後期のものである。



第56図　平成16年度調査　表面採集及び撹乱出土土器(報告No.491～499)

第Ⅴ章　平成17年度調査の概要及びその成果

第１節　平成17年度調査の概要

１．調査区の設定

個人住宅建築に伴い、井戸掘削を行う範囲を対象とする発掘調査である。本調査区は、平成15年度調査時には既に重機掘削が行われており、第３層を大きく掘りすぎていた状況であった。

幅７ｍ長さ７ｍの約49㎡の調査を行った。調査区が小規模であったために、グリッド設置は行わず、光波測量を行い、遺構測量基準点の設置、調査範囲図、遺物分布図及び遺構分布図を作成した。

２．調査の方法

平成15年度調査以後、包含層保護のために敷いていた土壌を重機で除去し、遺物包含層検出を行った。残された第３層も重機のバケット痕等の撹乱が著しかったが、SK１を検出することができた。その後残された第３層を掘削し、第４層上面で遺物集中2基・性格不明遺構(以下SX)１基・土器個体１基をそれぞれ確認した。

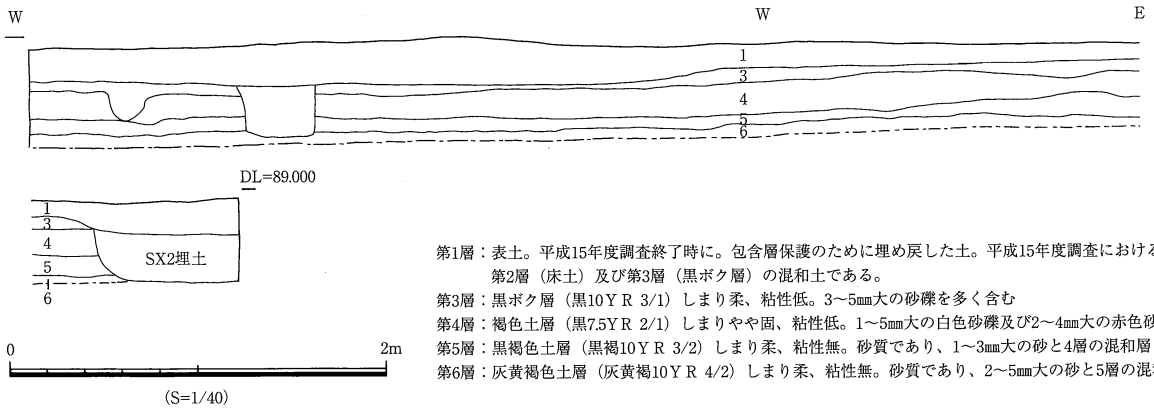
３．基本層序

第１層…表土。第１層～第３層の混入土。

第３層(黒色10YR2/1)…遺物包含層である。大半を平成15年度に掘削・破壊されており、撹乱も多い。平成15年度調査の第３層と同じ層であり、縄文時代早期の遺物を多く含む。しまりは強くなく、粘性は低い。２cm大の礫を含む。

第４層(黒色7.5YR2/1)…遺物包含層である。平成15年度調査の第４層と同じ層であり、縄文時代早期の遺物を多く含む。しまりはやや強く、粘性は低い。

第５層(黒褐色10YR3/2)…無遺物層である。平成15年度調査の第5層と同じ層であるが、遺物の出土は認められなかった。しまりは弱く、粘性は低い。１～３㎜大の砂礫を多く含む。



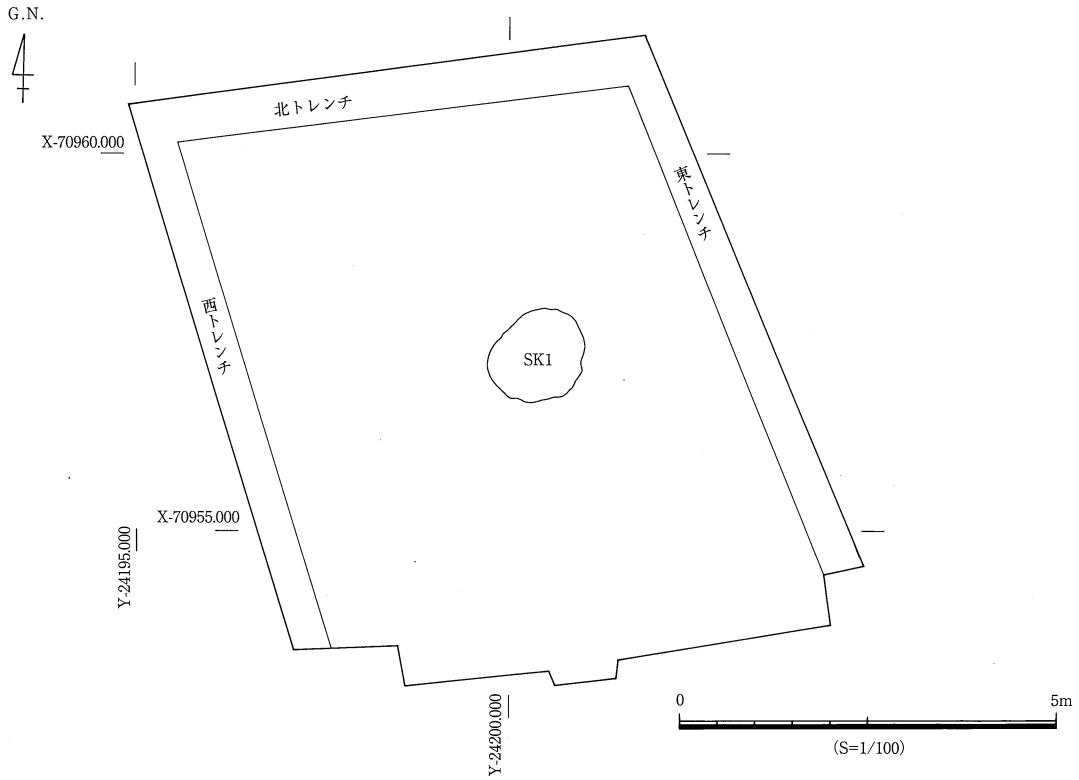
第1層：表土。平成15年度調査終了時に。包含層保護のために埋め戻した土。平成15年度調査における第1層（耕作土）、第2層（床土）及び第3層（黒ボク層）の混和土である。
第3層：黒ボク層（黒10ＹＲ 3/1）しまり柔、粘性低。3～5㎜大の砂礫を多く含む
第4層：褐色土層（黒7.5ＹＲ 2/1）しまりやや固、粘性低。1～5㎜大の白色砂礫及び2～4㎜大の赤色砂礫を多く含む。
第5層：黒褐色土層（黒褐10ＹＲ 3/2）しまり柔、粘性無。砂質であり、1～3㎜大の砂と4層の混和層
第6層：灰黄褐色土層（灰黄褐10ＹＲ 4/2）しまり柔、粘性無。砂質であり、2～5㎜大の砂と5層の混和層である。

第57図　平成17年度調査　北壁土層図

第６層(灰黄褐色10YR4/2)…無遺物層である。平成15年度調査の第6層と同じ層である。しまりは弱く、粘性は無い。２～５㎜大の礫を多く含む。

４．包含層及び各検出面の概要

遺物包含層は第３層と第４層である。いずれも縄文時代早期の遺物を包含していた。遺構検出面は第３層中及び第４層上面であった。



第58図　平成17年度調査　第３層中検出遺構分布図

第２節　第３層中検出SK１遺構図及びSK１出土遺物（第59図）

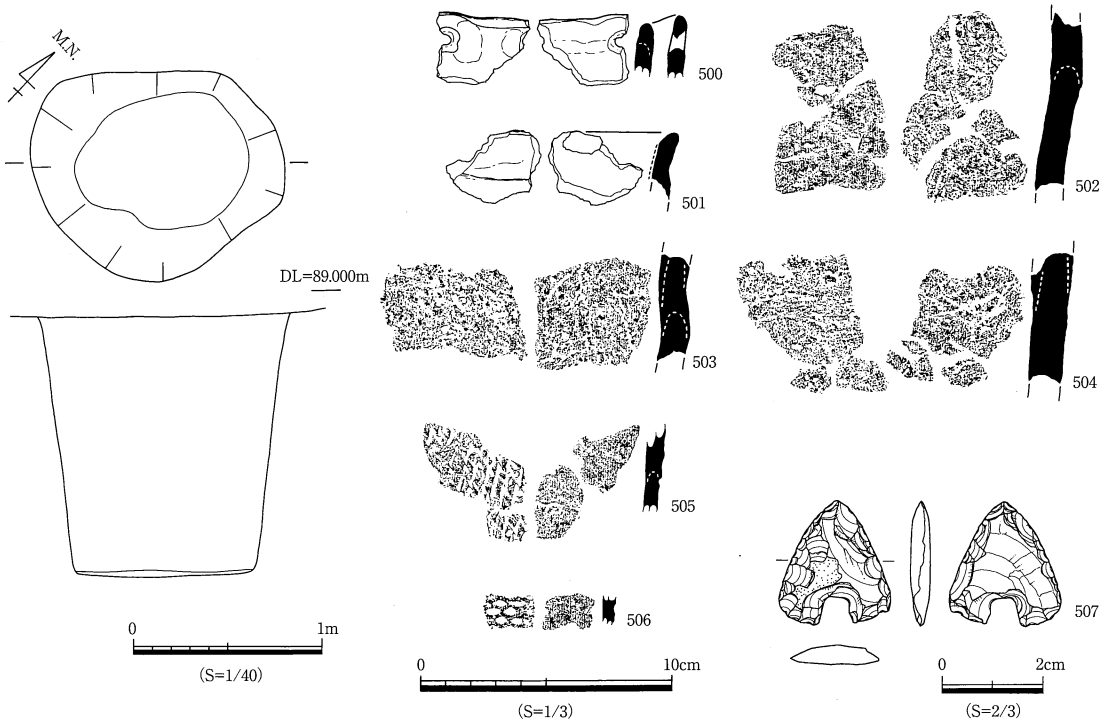
第３層中で検出した長軸134cm短軸111cm深さ138cmを測る土坑である。埋土は黒色（10YR2/1）単一であって、しまりは強く、粘性はやや高い。第3層が大きく削平されていたため、本来の掘り込みがどこからなのかが判別できないが、埋土が第３層と極めてよく類似するため、アカホヤ火山灰が降灰し、土壌化が進んでから掘り込まれたものとして考えられる。よって、縄文時代早期の遺構である可能性は極めて低いと考えられるが、出土遺物は縄文時代早期以外に帰属するものは認められなかった。出土した器種識別可能な遺物は69点である。

無文土器54点、押型文土器11点（山形文10点、格子目文１点）、石鏃１点、サヌカイト剥片３点が出土している。500～504が無文土器、505・506が押型文土器、507が石鏃である。

無文土器は500・501がその口縁部、502～504がその胴部である。口縁部はいずれも小片であるが、口縁部文様を有さないものと考えられる。500は穿孔部の口縁部が盛り上がり、突起状を呈するため焼成前穿孔と見間違うが、これは焼成後に穿たれた孔である。ただし、突起下に意図的に穿孔されている可能性もあり、一概に補修孔とするには慎重でありたい。

押型文土器は505が山形文、506が格子目文である。いずれも胴部である。

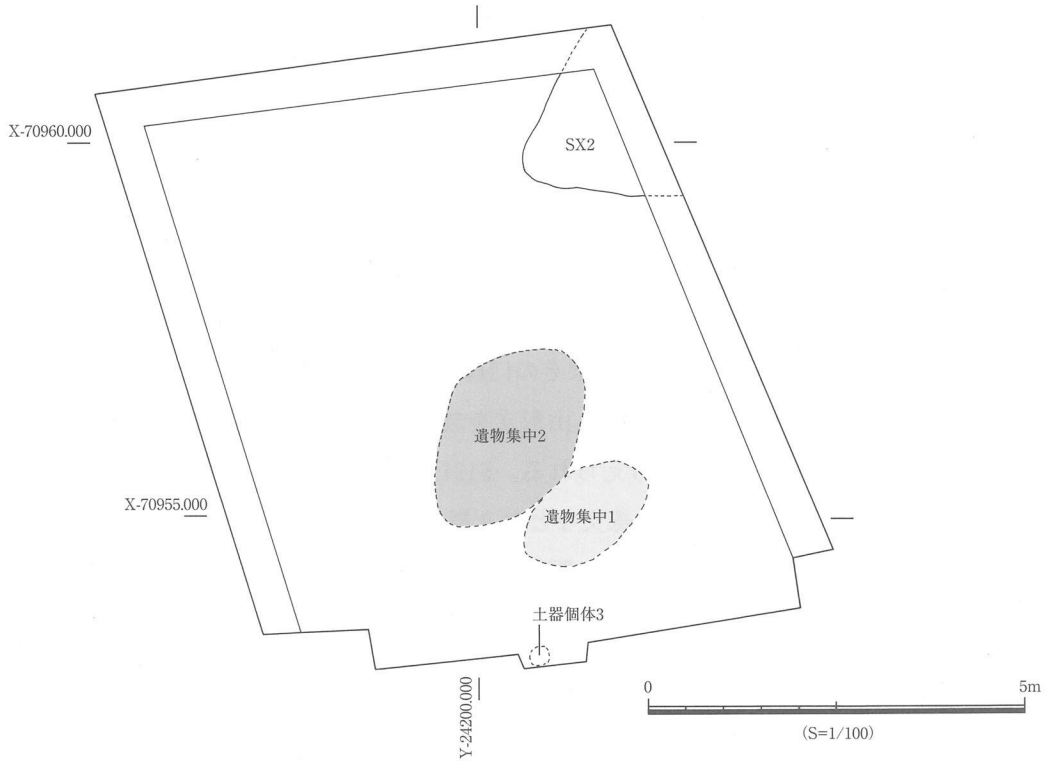
507は凹基式石鏃であるが、他の石鏃とは形状・剥離技術が異なっているように思われる。石材はチャートである。



第59図　平成17年度調査　SK１遺構図及びSK１出土遺物（報告No.500～507）

第３節　第４層上面検出遺物集中１（第61・62図）・２（第63～65図）、SX２（第66・67図）、土器個体３（第68・69図）について

第４層上面で検出した遺構は、遺物集中１・遺物集中２・土器個体３・SX２の４基である。



第60図　平成17年度調査　第４層上面検出遺構分布図

１．遺物集中１出土状況図及び遺物集中１出土遺物

第４層上面で検出した遺物集中の一つである。長軸160cm短軸100cmを測る。遺物集中１・２は大きく一まとまりであるように思われたが、比較的密に遺物が集中している部分とそうでない部分があり、それを遺物集中１と遺物集中２に分けて測量・遺物取り上げを行った。

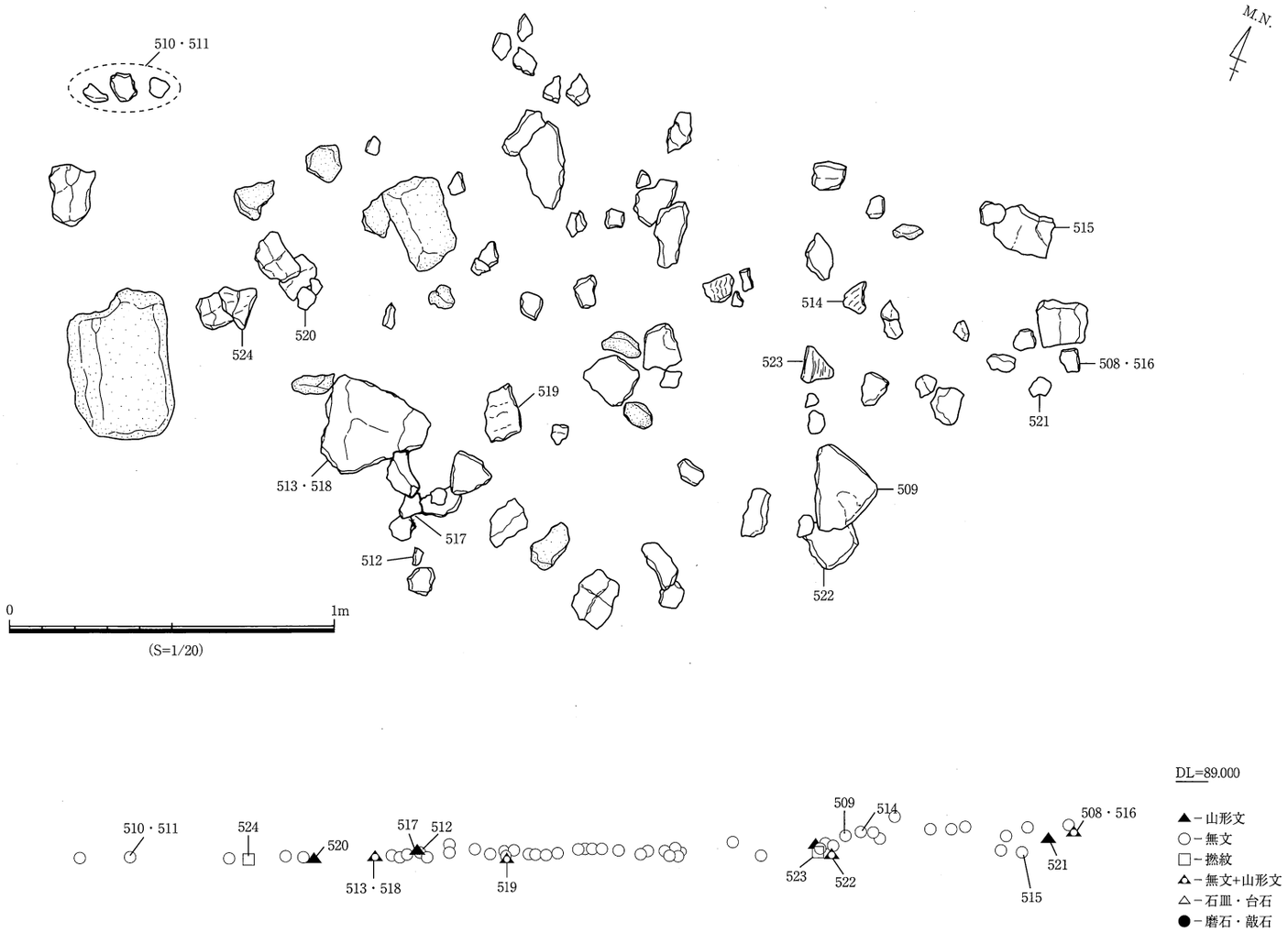
遺物集中１から出土した器種識別可能な土器は139点である。その内訳は無文土器127点、押型文土器10点(山形文10点)、撚糸文土器２点であり、その内17点を図示した。508～515が無文土器、516～522が押型文土器、523・524が撚糸文土器である。

無文土器は508～512がその口縁、513・514がその胴部、515がその底部である。

口縁部はいずれも口縁部文様を有し、508～511は内面施文、512は外面施文である。508・509は直行文、510は左斜行文、511は右斜行文、512は左斜行文を有する。いずれも器面調整はナデである。胴部は513の器面調整はナデ、514の器面調整は二枚貝条痕である。底部は515は尖底であり、器面調整はナデである。

押型文土器はいずれも山形文である。516はその口縁、517～522はその胴部である。516は口縁部文様を有さないが、内外面の口縁部直下から山形文を施文する。517は内面にも山形文を施文しているため、口縁部付近の部位であると考えられる。519は山形文の上に直行するような文様が確認できるため、山形文以外に格子目文・沈線文などの文様が伴う可能性が考えられる。

撚糸文土器は523がその口縁部、524がその胴部である。523は節の細かい１段ｒであり、補修孔を有する。524は１段ｒを有する。



第61図　平成17年度調査　遺物集中１出土状況図及び出土遺物垂直分布図

第62図　平成17年度調査　遺物集中１出土土器（報告No.508～524）

２．遺物集中２及び遺物集中２出土遺物･遺物集中１・２一括出土遺物

第４層上面で検出した遺物集中の一つである。長軸255cm短軸190cmを測る。遺物集中１・２は大きく一まとまりであったが、それを２つに分けて測量・遺物取り上げを行った。

遺物集中２から出土した器種識別可能な遺物は94点である。その内訳は無文土器82点、押型文11点(山形文10点、格子目文１点)、石皿１点、砥石１点である。また、遺物集中１・２の遺物を取り上げる最中及び清掃時にその範囲から出土したものを遺物集中１・２一括として取り上げた。遺物集中１・２一括で68点出土しており、その内訳は無文土器51点、押型文土器11点(山形文８点、ポジティヴ楕円文２点、格子目文１点)、サヌカイト剥片６点である。これらのうち23点を図示した。525～540が遺物集中２から出土したものであり、525～532が無文土器、533～538が押型文土器、539・540が礫石器である。

無文土器は525～530がその口縁部、531がその胴部、532がその底部である。525は口縁部文様を有さないと考えられ、器面調整はナデである。526～530は口縁部文様を有しており、いずれも内面施文である。文様は左斜行文・刺突文に分けられる。526～528は左斜行文を施し、529・530は刺突文を施す。いずれも器面調整はナデである。531の器面調整はナデである。532は尖底を呈し、器面調整はナデである。

押型文土器は533～537が山形文、538は格子目文である。

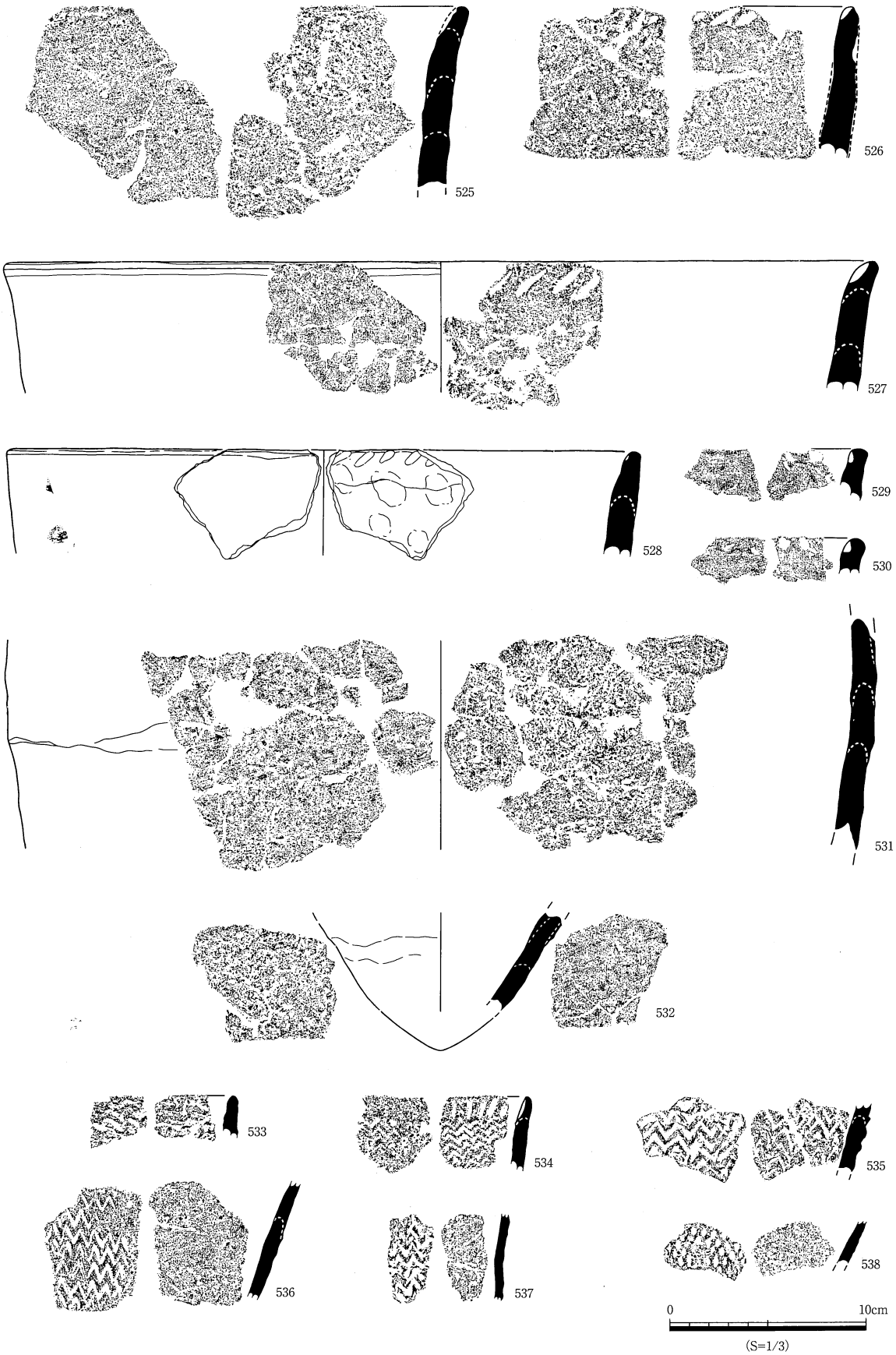
山形文は533・534がその口縁部、535～537がその胴部である。口縁部は口縁部文様を有さないものと有するものに分けられる。533は口縁部文様を有さず、534は口縁部内面に雑な直行文を施す。いずれも内外面に山形文を施文するが、533は口縁部直下から施文するのに対し、534外面は口縁部直下に無文帯を有し、その下に山形文を施文する。535は内面に押型文を施文することから口縁部付近の部位である。

格子目文は538の胴部片であり、米粒状である。

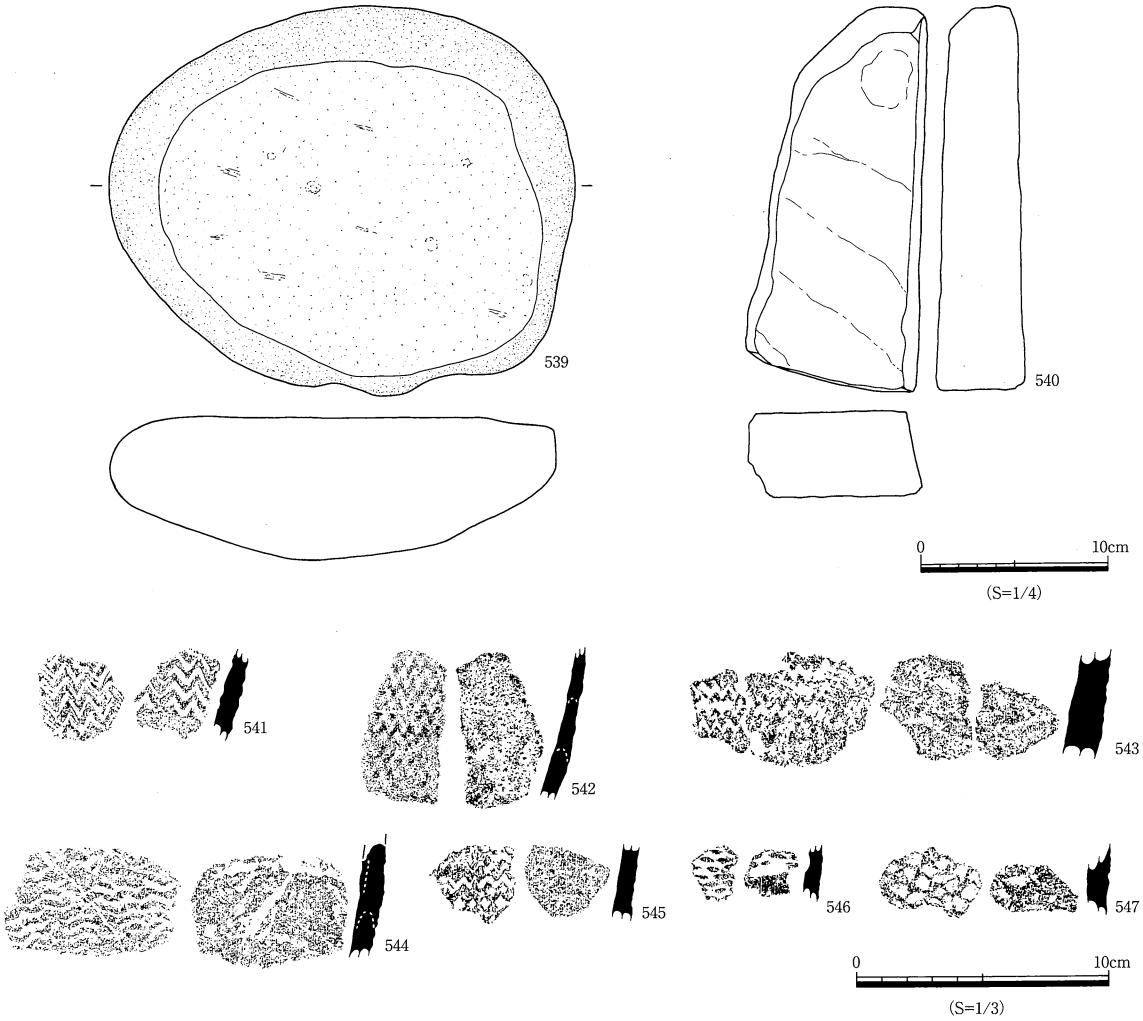
539・540は礫石器であり、539は石皿、540は砥石である。

541～547は遺物集中１・２一括遺物であり、いずれも押型文土器である。541～545は山形文、546はポジティヴ楕円文、547は格子目文である。541・546は内面にも押型文を施文しているため、口縁部付近の部位であると考えられる。

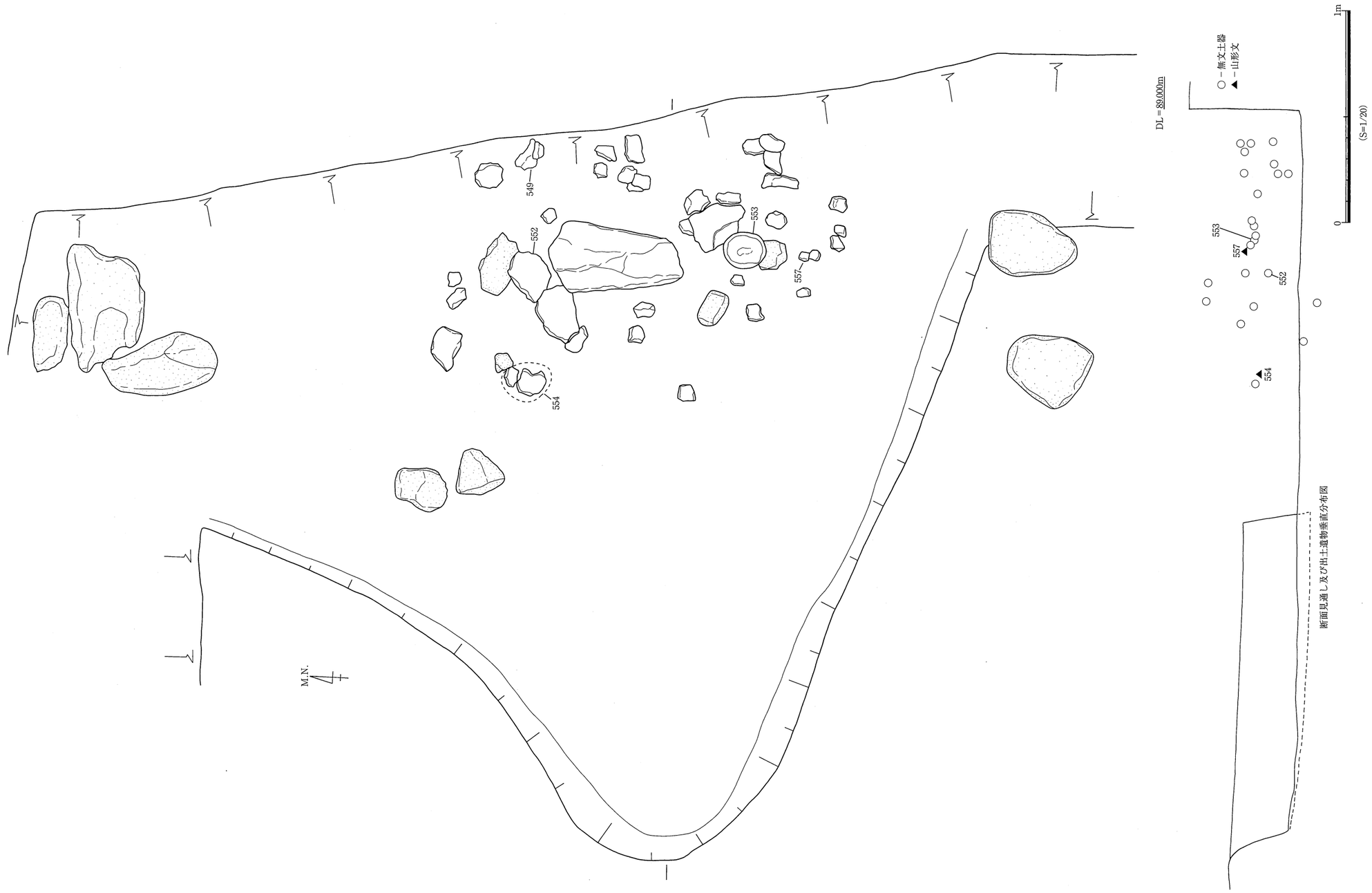
第63図　平成17年度調査　遺物集中２出土状況図及び出土遺物垂直分布図



第64図　平成17年度調査　遺物集中２出土土器（報告No.525～538）



第65図　平成17年度調査　遺物集中２出土石器（石皿・砥石：報告No.539・540）及び
遺物集中１・２一括土器（報告No.541～547）



第66図　平成17年度調査　SX２遺構図及び出土遺物垂直分布図

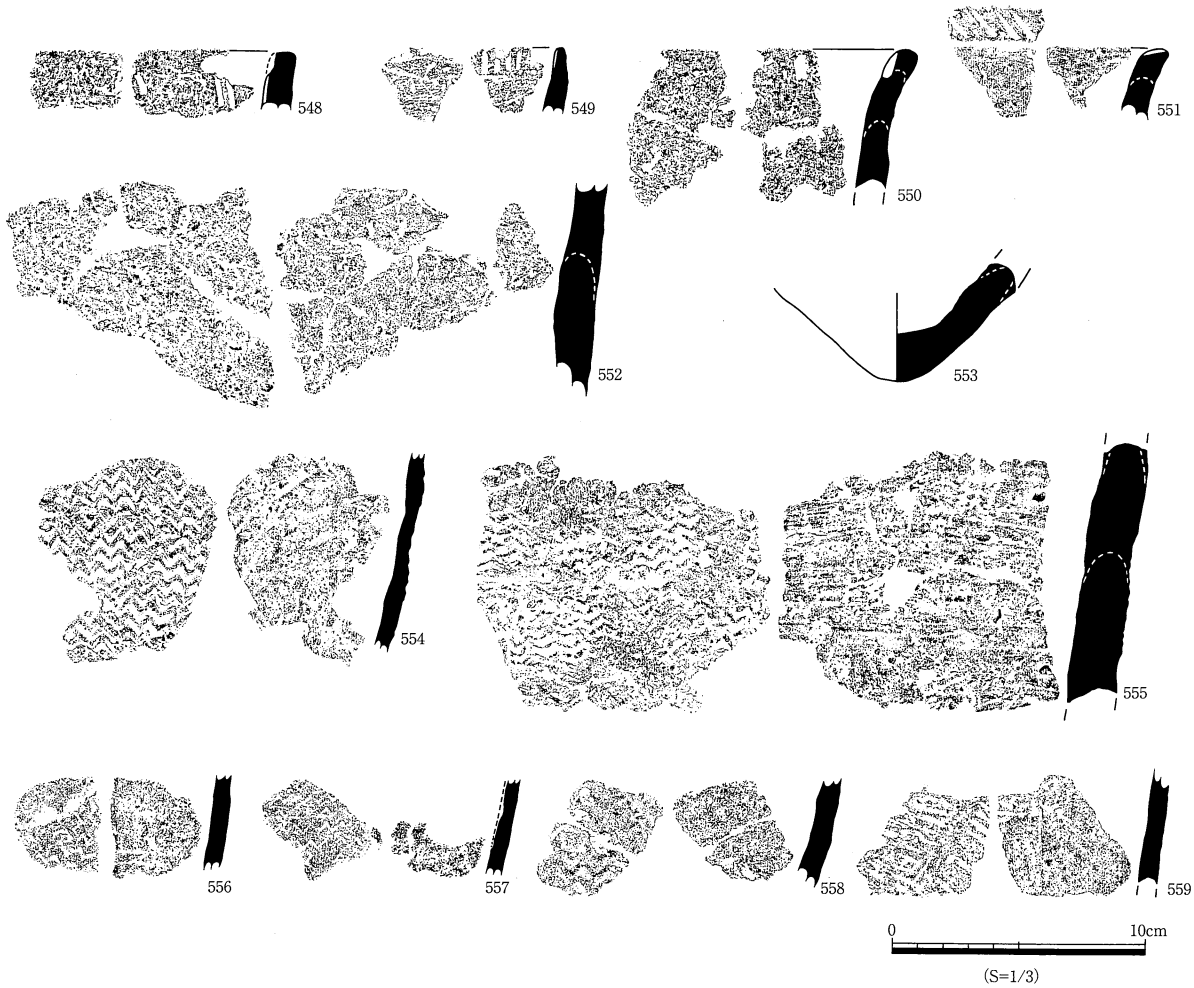
3．SX 2 遺構図及びSX 2 出土遺物

第４層上面で検出した不定形かつ性格の不明な遺構である。埋土は黒褐色(10YR3/2)であり、しまりは強く、粘性は低い。器種識別可能な出土遺物は119点である。その内訳は無文土器106点、押型文土器10点（山形文10点)、サヌカイト３点が出土した。そのうち12点を図示した。

548～553が無文土器、554～558が押型文土器、559が撚糸文土器である。土器の口縁部は個体識別を行った上で全点図示し、胴部・底部も個体識別を行った上で実測に耐えうる破片を図示した。

無文土器は548～551がその口縁部、552がその胴部、553がその底部である。口縁部はいずれも口縁部文様を有し、内面施文と上面施文に分けられる。548～550は内面施文であって直行文を施す。548は半截竹管状工具によるものであり、549は間隔の空いた柵状の直行文である。551は上面施文であって、面取りを行った上に右斜行文を施す。いずれも器面調整はナデである。552の器面調整はナデである。553は尖底を呈し、器面調整はナデである。

押型文土器はいずれも山形文胴部である。555は器厚が極めて厚く、無文土器と山形押型文土器の折衷として考えられる。内面には不鮮明な条痕が認められるが、二枚貝によるものの可能性が高い。基本的に横位に施文しているが、556は縦位に施文した下に横位に施文しているため、胴上部の破片として考えられる。



第67図　平成17年度調査　SX 2 出土土器(報告No.548～559)

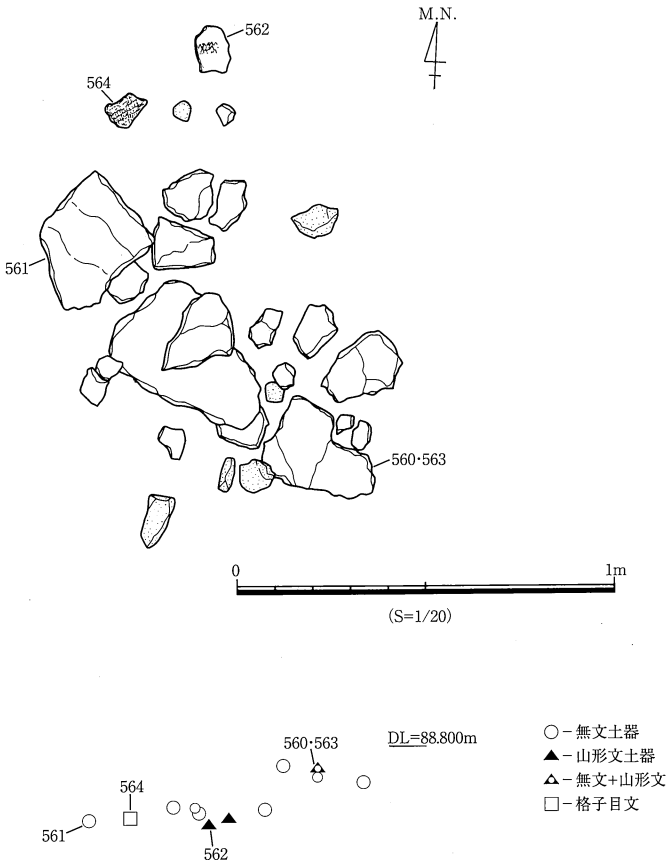
4．土器個体３出土状況図及び土器個体３出土遺物（第68・69図）

第４層上面で検出した土器個体である。掘り込みは確認できなかった。器種識別可能な土器片数は57点である。その内訳は無文土器51点、押型文土器５点（山形文４点、格子目文１点）、撚糸文１点である。そのうち５点を図示した。

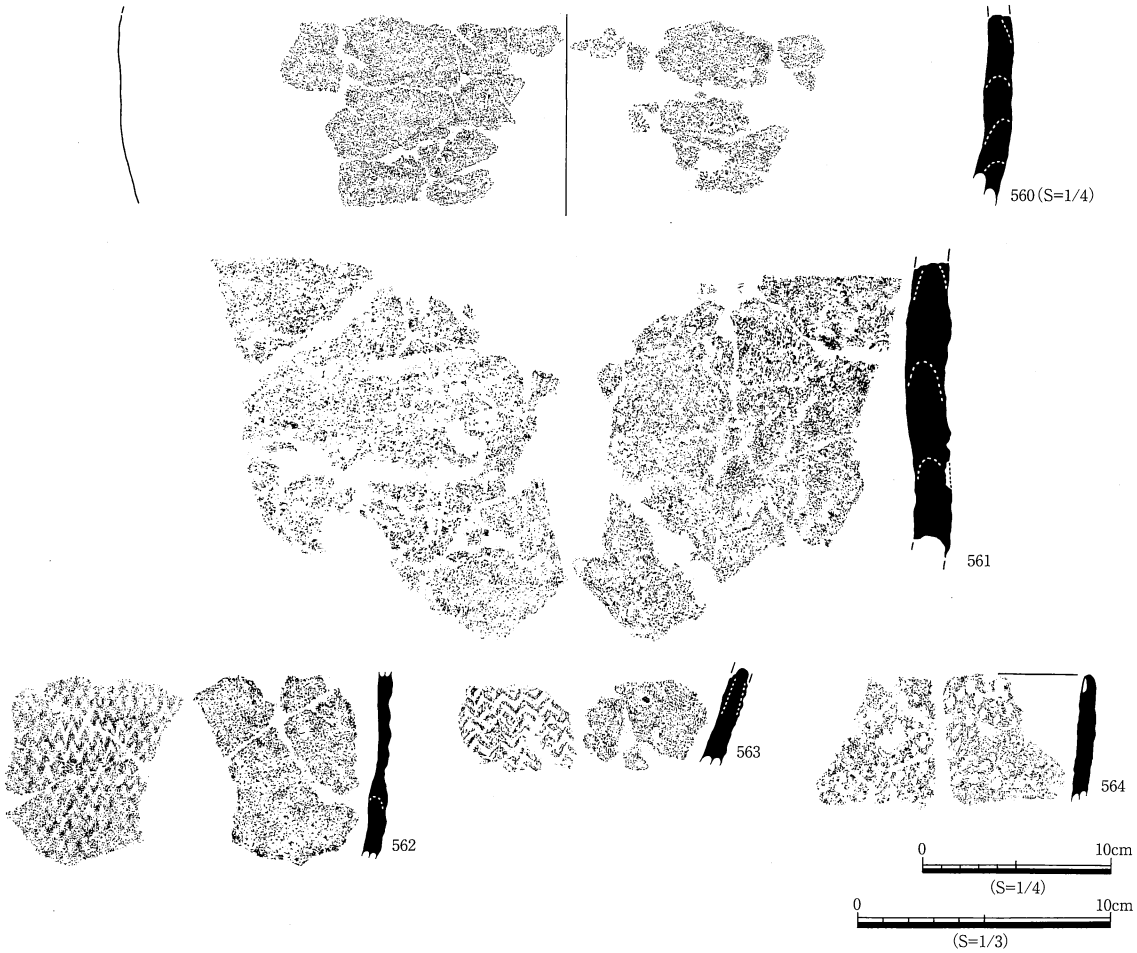
560・561は無文土器、562～564は押型文土器である。個体識別を行った上で実測に耐えうる破片を図示した。

無文土器はいずれも胴部であり、器面調整はナデである。

押型文土器は山形文と格子目文であり、562・563が山形文、564が格子目文である。山形文はいずれも胴部である。格子目文は口縁部であり、口縁部内面に直行文を施す。内面にも格子目文を有する。



第68図　平成17年度調査　土器個体３出土状況図及び垂直分布図



第69図　平成17年度調査　土器個体３出土土器(報告No.560～564)

第４節　第３層一括出土遺物（第70図）

第３層から出土した器種識別可能な土器片数は82点である。その内訳は無文土器70点、押型文土器12点（山形文11点、ポジティヴ楕円文１点）である。その内15点を図示した。

565～574が無文土器、575～579が押型文土器である。土器の口縁部は個体識別を行った上で全点図示し、胴部は実測に耐えうる破片を図示した。

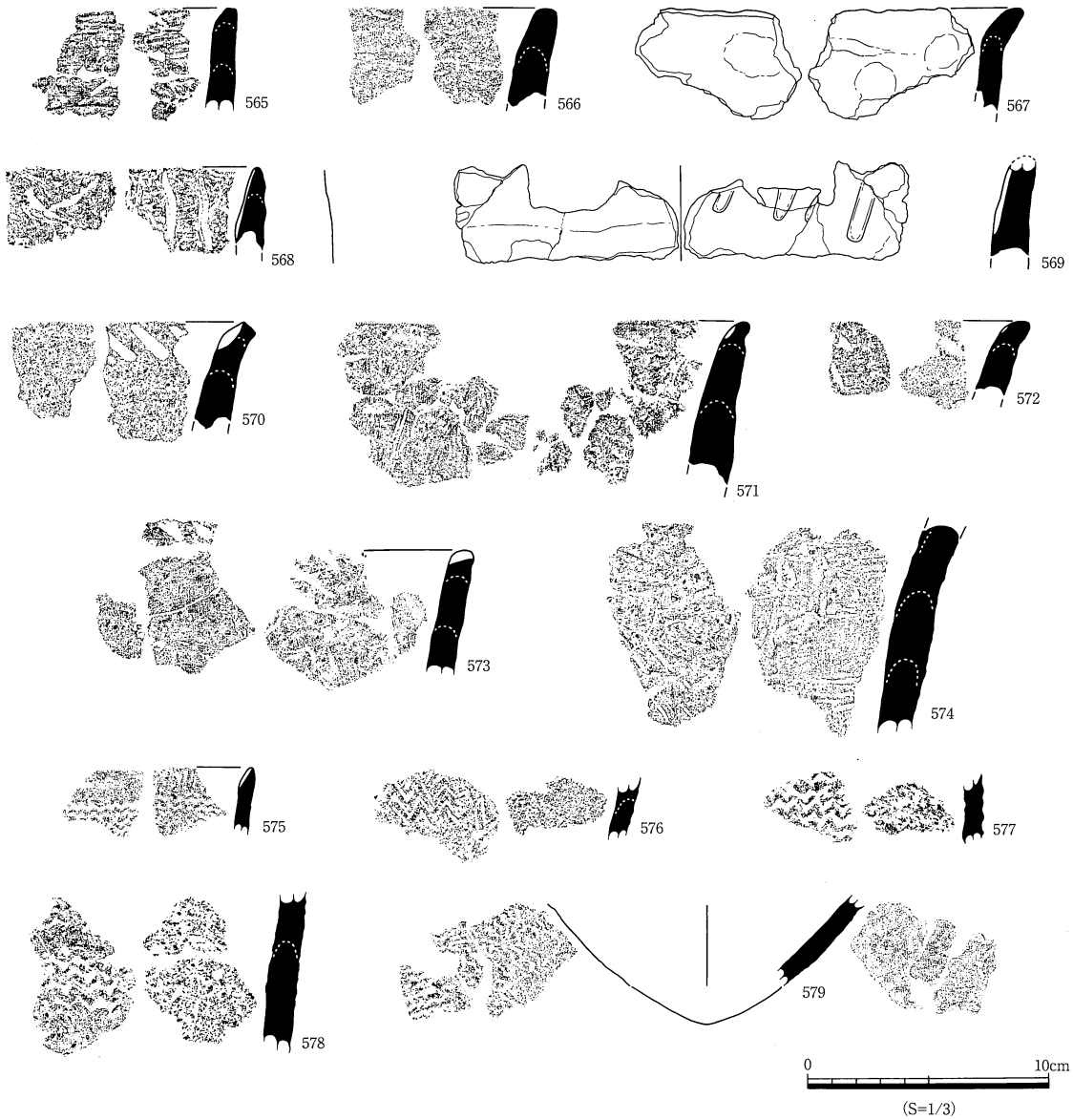
無文土器は565～573がその口縁部、574がその胴部である。口縁部は口縁部文様を有さないものと有するものに分けられる。

565～567は口縁部文様を有さない。器面調整は565が二枚貝条痕である他はナデである。口縁は外傾するが、567は端部が大きく外傾する。

568～573は口縁部文様を有する。文様を有する部位に差異が見られ、568～572は内面に、573は上面にそれぞれ口縁部文様を有する。内面に文様を有するものは直行文・左斜行文・右斜行文に分けられ、568は波打つ沈線により直行文を、569は左斜行文を、570～572は右斜行文をそれぞれ施す。573は外面から内面にかけて右斜行文を施す。これらの器面調整はいずれもナデである。

胴部は574の器面調整は二枚貝条痕である。

押型文土器は全て山形文である。575がその口縁部、576～578がその胴部、579がその底部付近である。575は内面に柵状文を施し、内外面に山形文を施文するが、口縁部外面直下に無文帯を有する。578は山形文の間に無文帯が配されるため、帯状施文を意識していると考えられる。579は尖底を呈する。



第70図　平成17年度調査　第３層出土土器（報告No.565～579）

第５節　第４層上層出土遺物（第71～74図）

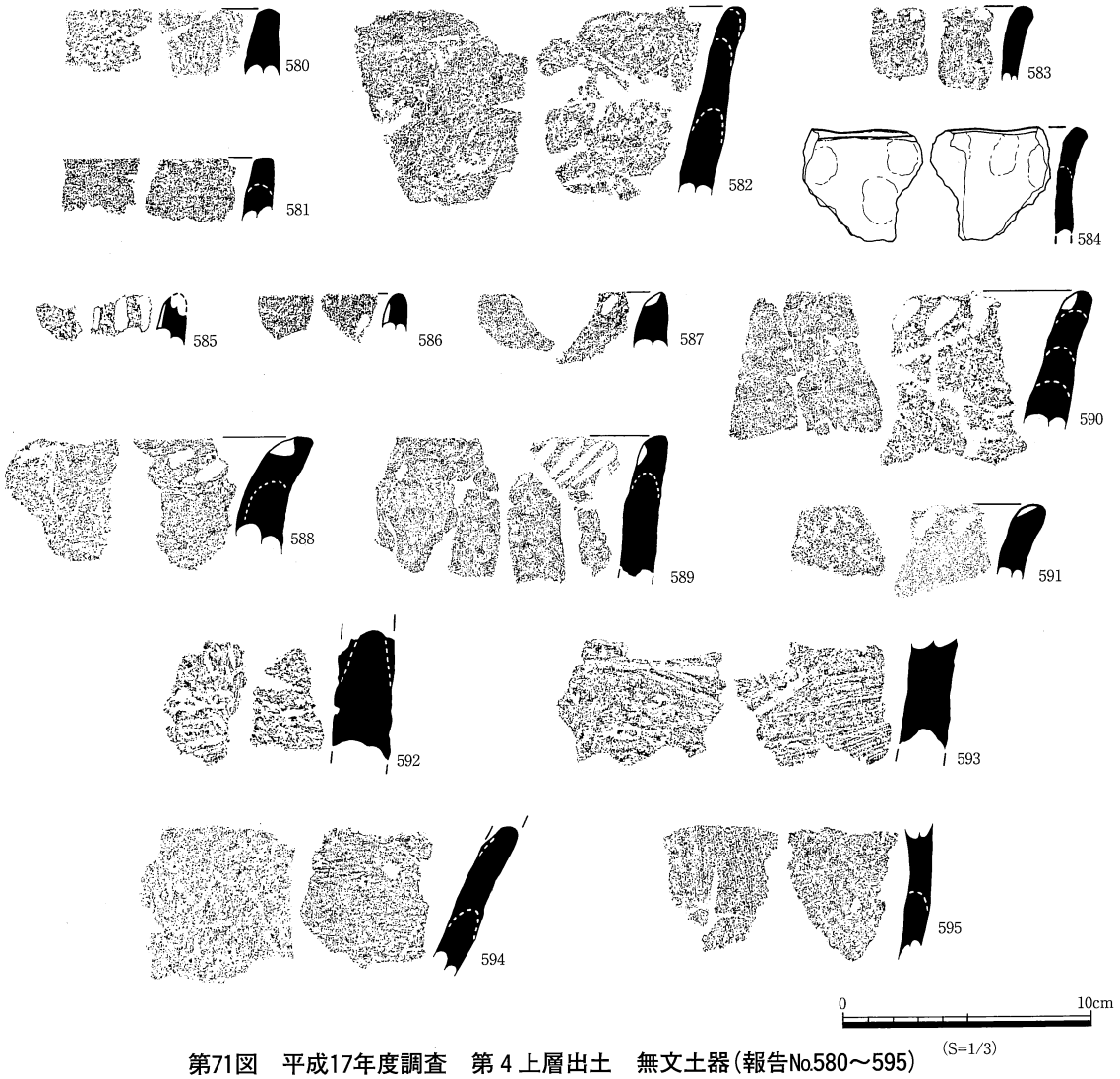
第４層から出土した器種識別可能な土器片数は657点である。その内訳は無文土器473点、押型文土器183点（山形文170点、ポジティヴ楕円文11点、格子目文３点）、撚糸文土器１点である。剥片石器は石鏃１点、礫石器は磨石１点が出土した。土器・石器合わせて43点を図示した。

580～595が無文土器、596～620が押型文土器、621が石鏃、622が磨石器である。土器の口縁部は個体識別を行った上で全点図示し、胴部・底部も個体識別を行った上で実測に耐えうる破片と器形が復元可能な破片を図示した。

無文土器は580～591がその口縁部、592～595がその胴部である。口縁部は口縁部文様有さないものと有するもの、胴部は器面調整が二枚貝条痕のものとナデのものにそれぞれ分けられる。

580～584は口縁部文様を有さない。器面調整は580が二枚貝条痕の可能性がある他はナデである。

585～591は口縁部文様を有する。口縁部文様はいずれも内面施文であり、直行文・左斜行文に分けられる。585は直行文、586～591は左斜行文を施す。いずれも器面調整はナデであり、口縁は外傾するものがほとんどであるが、588は口縁端部がやや強く外傾する。



第71図　平成17年度調査　第４上層出土　無文土器（報告No.580～595）

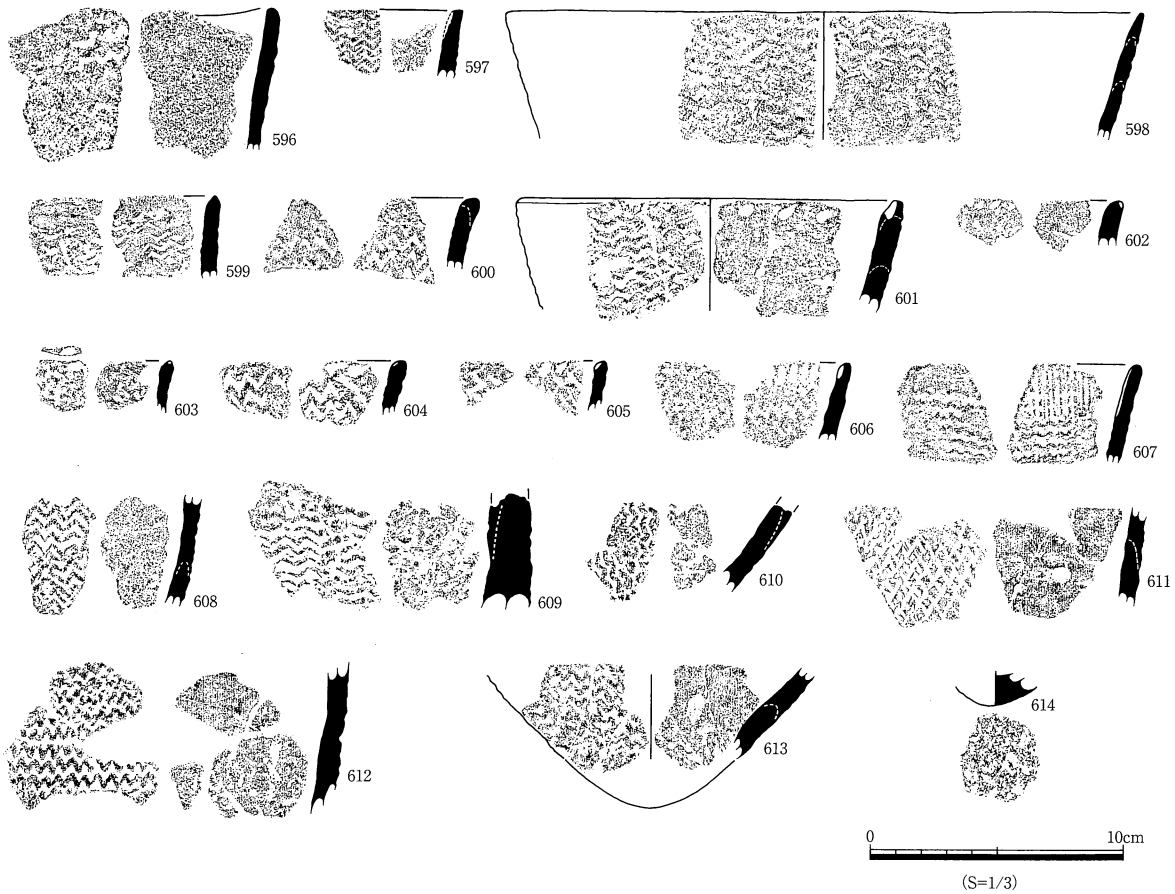
胴部は器面調整が592～594が二枚貝条痕、595がナデである。

押型文土器は山形文・ポジティヴ楕円文に分けられ、596～614が山形文、615～620がポジティヴ楕円文である。

山形文は596～607がその口縁部、608～612がその胴部、613・614がその底部である。口縁部は口縁部文様を有さないものと有するものに分けられる。

596～600は口縁部文様を有さない。外面のみに山形文を施文するものと内面にも山形文を施文するに分けられる。596は前者であり、波状を呈する。597～600は後者であり、599は口縁部内端を削ぐように面取りを施す。600は口縁部外面に無文帯を有する。

601～607は口縁部文様を有する。外面のみに山形文を施文するものと内面にも山形文を施文するものに分けられる。601～603は前者であり、いずれも口縁部外面直下から施文しているが、602が縦位に施文する他は横位に施文する。口縁部文様は内面施文・外面施文・上面施文に分けられ、601は内面に左斜行文、602は外面に左斜行文、603は上面に刺突文を施す。604～607は後者であり、604・605は口縁部外面直下から施文しているが、604は横位に施文するのに対し、605は縦位に施文している。606・607は口縁部外面直下に無文帯を有する。口縁部文様はいずれも内面施文であり、604～606は左斜行文であるが、606は他に比べて整然としており、二枚貝の表面を斜めに押し当てて施したと考えられる。607は柵状文を施す。



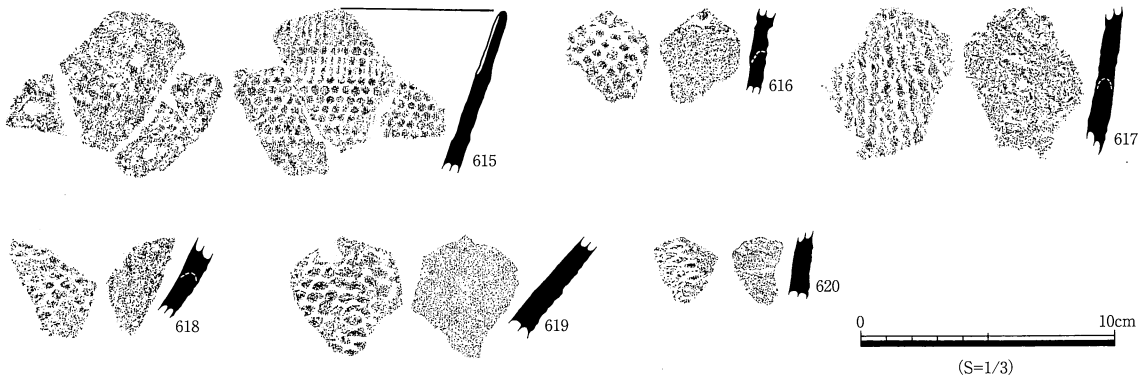
第72図　平成17年度調査　第４層上層出土　山形押型文土器（報告No.596～614）

胴部は胎土に差が見られ、608・609は繊維混入が見られる。また、609の器厚は極めて厚く、無文土器と山形押型文土器の折衷として考えられる。613・614は尖底であると考えられる。

ポジティヴ楕円文は615が口縁部、616～620が胴部である。

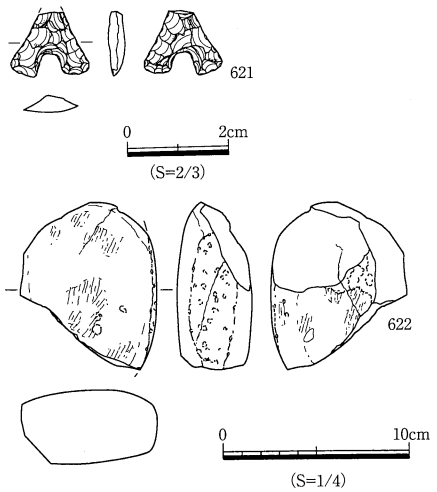
615は内面にもポジティヴ楕円文を施文し、口縁部文様として内面に柵状文を施す。外面に無文帯を有するかどうかは摩滅のため不明である。

616は内面にも押型文を施文するため、口縁部付近の部位であると考えられる。620は楕円文の横に不鮮明な細線文を施文している。



第73図　平成17年度調査　第４層上層出土　ポジティヴ楕円押型文土器（報告No.615～620）

621は石鏃であり。凹基式である。石材はサヌカイトである。622は磨石破片であり、表裏は丁寧な磨面を有する。右側縁に加工痕を有することから、隅丸方形のように整った形状になると考えられる。



第74図　平成17年度調査　第４層上層出土　石器（石鏃・磨石：報告No.621・622）

第６節　第４層下層出土遺物(第75～79図)

第４層下層から出土した器種識別可能な土器片数は412点である。その内訳は無文土器318点、押型文土器89点(山形文77点、ポジティヴ楕円文５点、格子目文７点)、撚糸文５点である。剥片石器は石鏃６点、礫石器は磨石４点である。土器・石器合わせて60点を図示した。

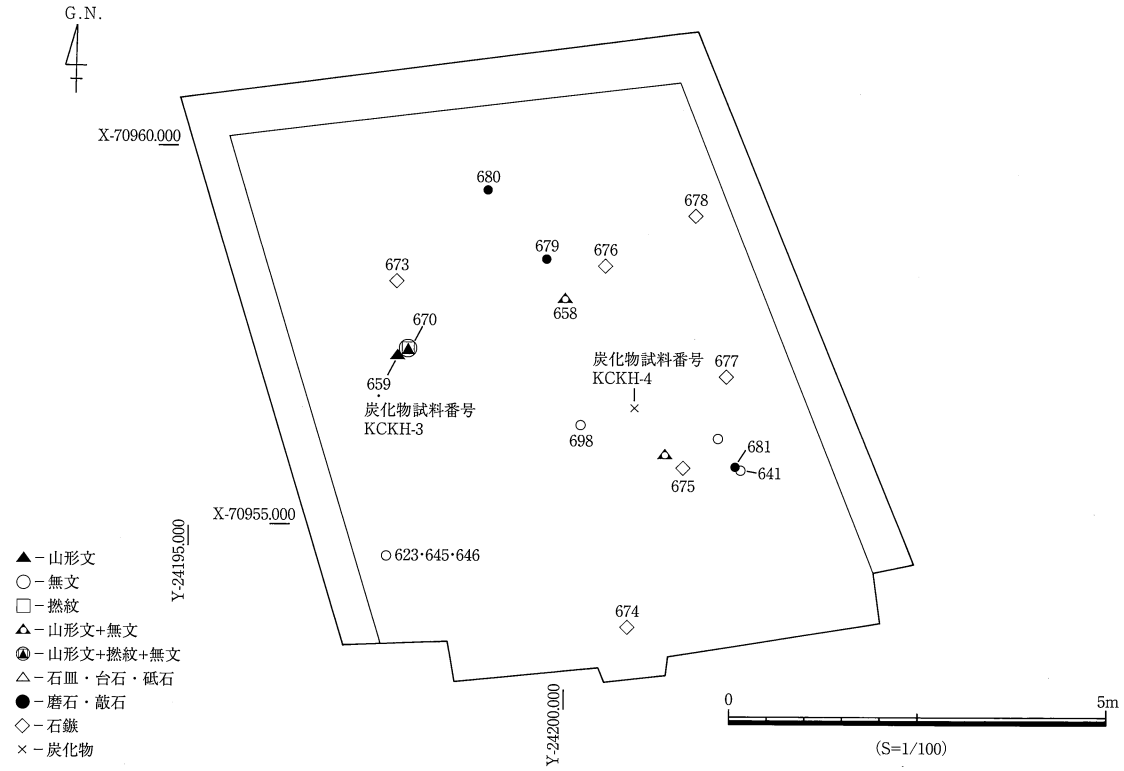
623～653が無文土器、654～669が押型文土器、670～672が撚糸文土器、673～678が剥片石器、679～682が礫石器である。土器の口縁部は個体識別を行った上で全点図示し、胴部・底部も個体識別を行った上で実測に耐えうる破片と器形が復元可能な破片を図示した。

無文土器は623～640がその口縁部、641～653がその胴部・底部であり、口縁部は口縁部文様を有さないものと有するもの、胴部・底部は器面調整が二枚貝条痕のものとナデのものにそれぞれ大別できる。

623～630は口縁部文様を有さない。器面調整はいずれもナデであり、口縁は外傾する。626・628・629は極めて薄く、器形も小さいものと考えられる。630は複数の小さい波状口縁を有すると考えられる。

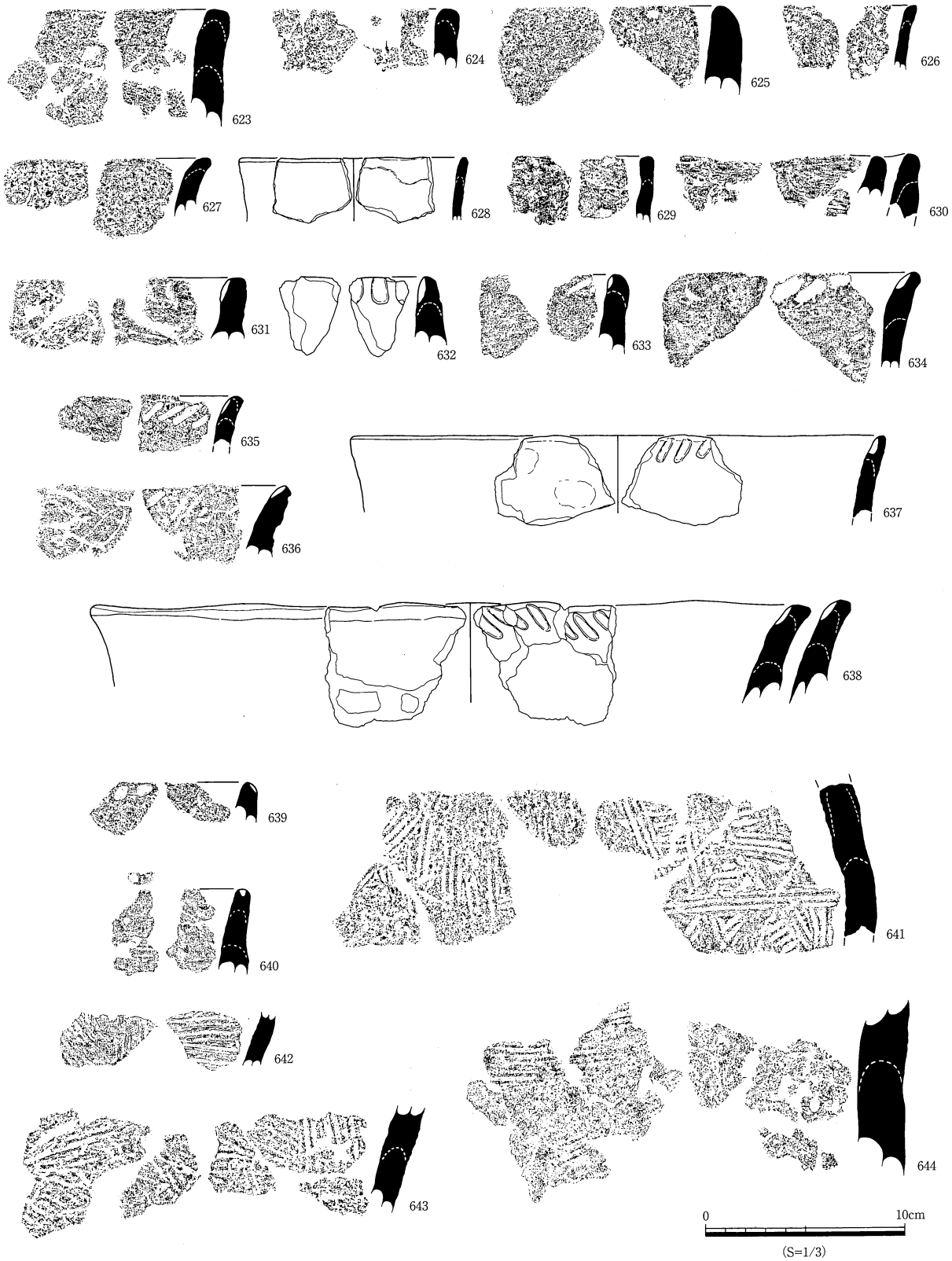
631～640は口縁部文様を有する。文様を有する部位に差異が見られ、631～638は内面に、639は外面に、640は上面にそれぞれ文様を有する。内面に文様を有するものは刺突文・直行文・左斜行文・右斜行文に、外面に文様を有するものは左斜行文に、上面に文様を有するものは刺突文にそれぞれ分けられる。

内面に文様を有するもののうち、631は二枚貝腹縁による刺突文と考えられ、632は直行文、633～637は左斜行文、638は右斜行文をそれぞれ施し、いずれも器面調整はナデである。口縁は外傾し、638は複数の小さい波状口縁を有すると考えられる。

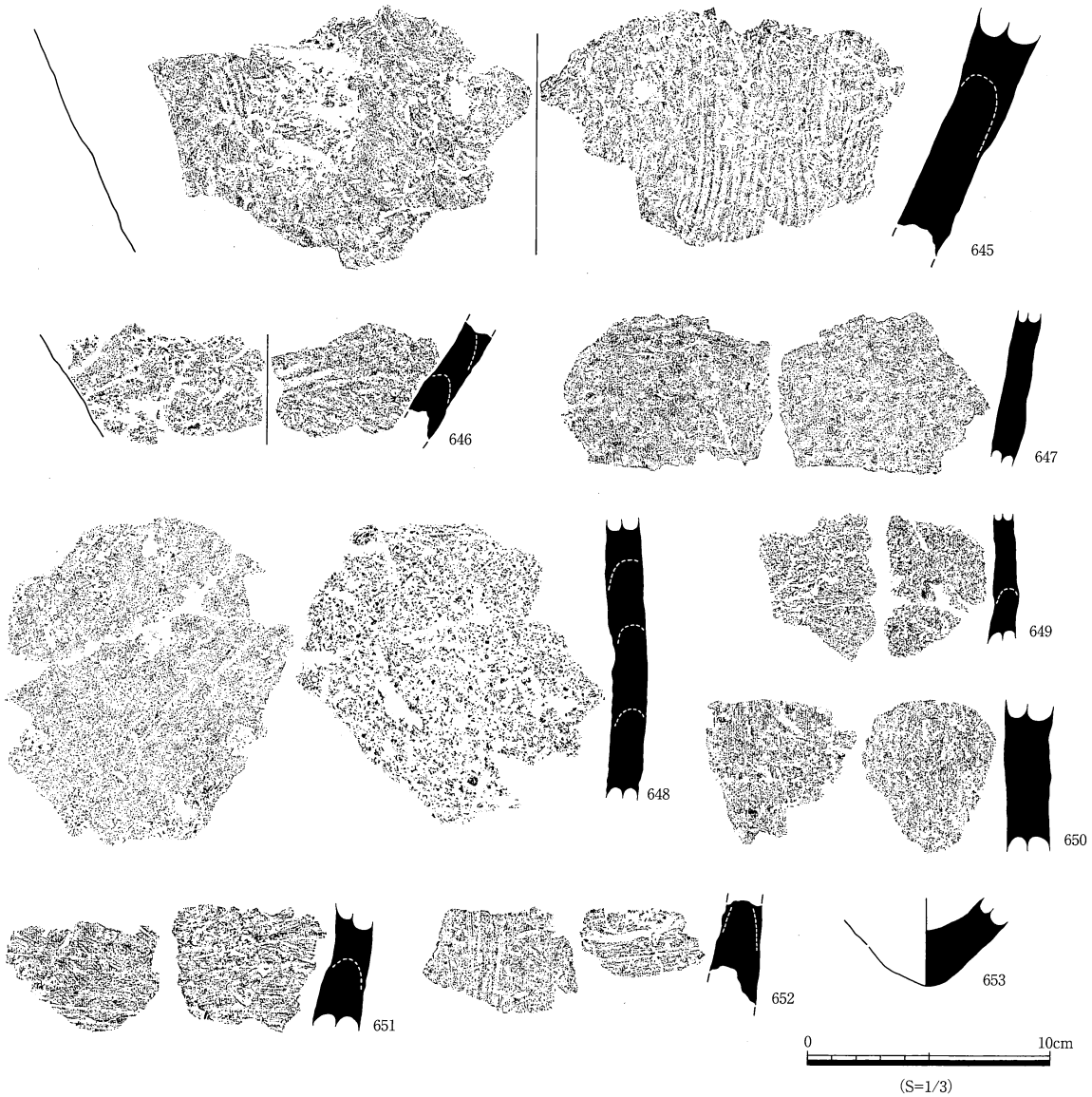


第75図　平成17年度調査　第４層下層出土遺物ドット分布図

外面に文様を有するものは639であり、左斜行文を施す。器面調整はナデであり、口縁は外傾する。



第76図　平成17年度調査　第４層下層出土　無文土器（報告No.623～644）



第77図　平成17年度調査　第４層下層出土　無文土器（報告No.645～653）

上面に文様を有するものは640であり、円形刺突文を施す。器面調整はナデであり、口縁は外傾する。

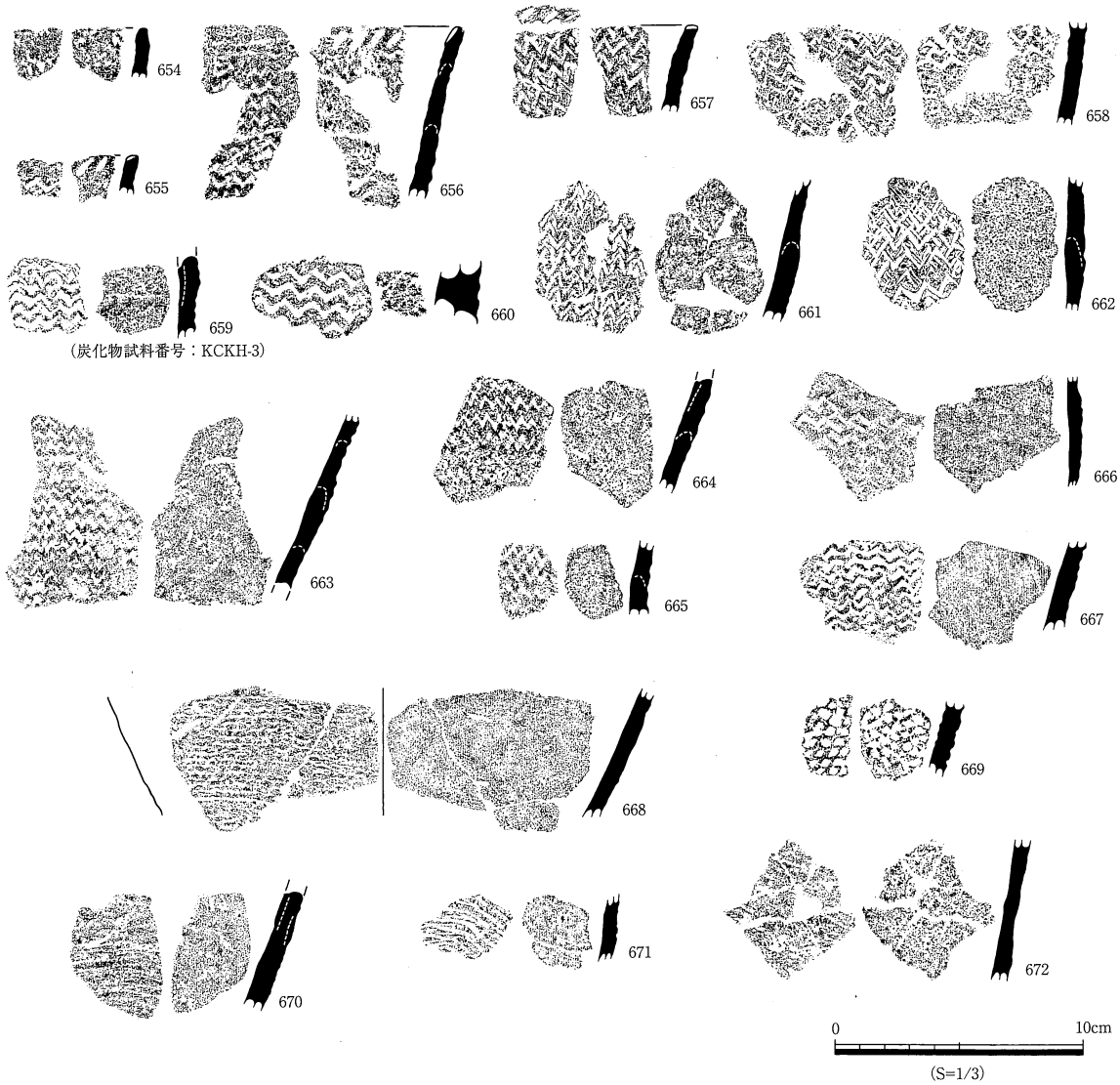
胴部については、器面調整が641～646は二枚貝条痕であり、647～652はナデである。いずれも胎土に繊維を混入させる。653は尖底を呈し、器面調整はナデである。

押型文土器は山形文・ポジティヴ楕円文・格子目文に分けられる。654～667が山形文、668がポジティヴ楕円文、669が格子目文である。

山形文は654～657がその口縁部、658～667がその胴部である。口縁部は口縁部文様を有さないものと有するものに分けられる。

654は口縁部文様を有さず、口縁部外面直下から施文している。

655～657は口縁部文様を有する。外面のみに山形文を施文するものと内面にも山形文を施文するものに分けられる。655は前者であり、口縁部外面直下から施文している。口縁部内面に左斜行文



第78図　平成17年度調査　第４層下層出土　押型文土器・撚糸文土器（報告№654～672）

を施す。656・657は後者であり、いずれも口縁部外面直下から施文している。656は口縁部内面に左斜行文を施し、657は面取りした口縁部上面に左斜行文を施す。

胴部のうち、658は内面にも山形文を施文しているため、口縁部付近の部位として考えられる。659は共に出土した炭化物の年代測定（KCKH-C３）により、8895±40[14]CBPという年代値が出ている。660は器厚が極めて厚く、無文土器と山形押型文土器の折衷として考えられる。

668はポジティヴ楕円文であり、楕円が連珠状に連なっている。

669は格子目文であり、内面にも格子目文を施文しているため、口縁部付近の部位として考えられる。

670～672は撚糸文土器であり、いずれも胴部であって、いずれも１段ｒと考えられる。

第79図　平成17年度調査　第４層下層出土　石器（石鏃・磨石・敲石：報告No.673～682）

673～678は石鏃である。いずれも凹基式であり、石材はサヌカイトである。

679～682は敲石である。679は左右及び上側縁に加工面を有する。半身が欠損するが、隅丸方形といった整った形状であったと考えられ、欠損の後も欠損部分を使用した可能性が指摘できる。680は左右側縁に加工面を有し、表裏に敲打痕を有する。681は右側縁のみに加工面を有し、表面に浅い敲打痕と磨面を有する。682は本来円形であったと考えられる。

第７節　第４層一括出土遺物（第80図）

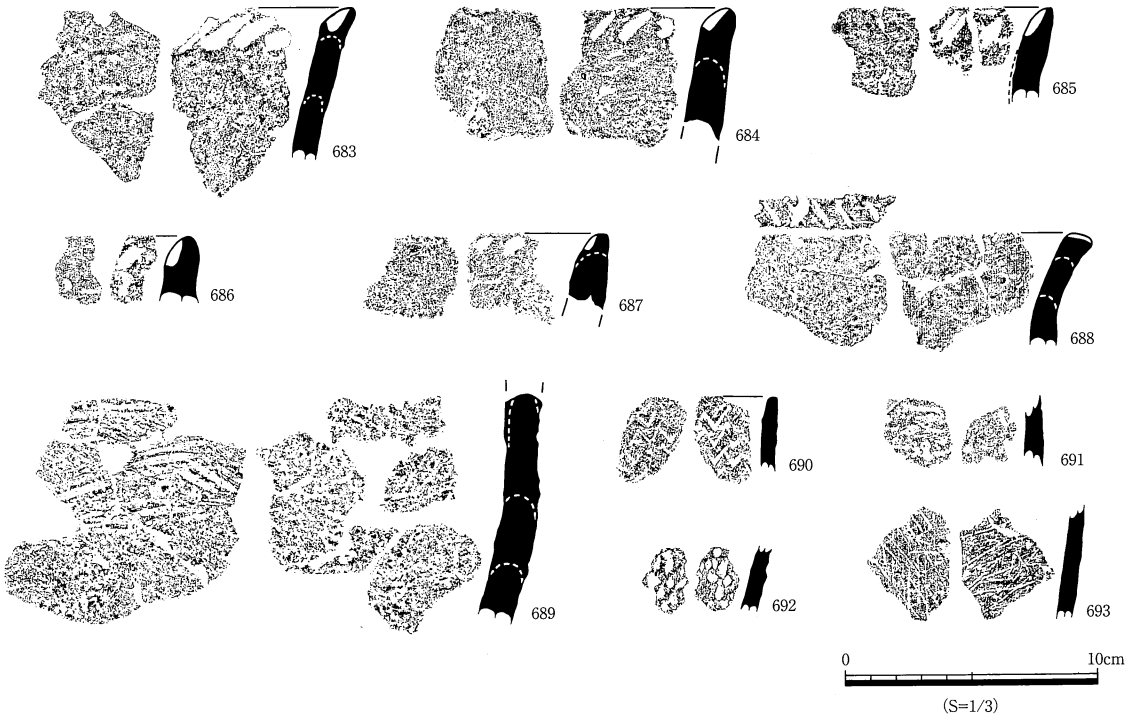
第４層一括として取り上げた器種識別可能な土器片数は19点である。その内訳は無文土器15点、押型文土器３点（山形文２点、格子目文１点）、沈線文土器１点であって、その内11点を図示した。

683～689が無文土器、690～692が押型文土器、693が沈線文土器である。土器の口縁部は個体識別を行った上で全点図示し、胴部は個体識別を行った上で実測に耐えうる破片を図示した。

無文土器は683～688がその口縁部、689がその胴部である。口縁部はいずれも口縁部文様を有する。文様を有する部位に差異が見られ、683～687は内面施文であり、いずれも左斜行文を施す。688は上面施文であり、口縁部上面を面取りした後に右斜行文を施す。いずれも器面調整はナデである。689の器面調整は二枚貝条痕である。

押型文土器は690・691が山形文であり、692が格子目文である。山形文は690が口縁部であり、口縁部文様は有さず、口縁部内外面直下から施文する。691は胴部であり、縦位に施文する。692は内面にも施文が見られるため、口縁部付近の部位であると考えられる。

693は沈線文として考えられるが、単なる植物茎を束ねたものによるナデの可能性も考えられる。



第80図　平成17年度調査　第４層一括出土　土器（報告No.683～693）

第８節　トレンチ出土遺物(西トレンチ・東トレンチ・北トレンチ)
(第81図～84図)

西トレンチから出土した器種識別可能な土器片数は211点である。その内訳は無文土器176点、押型文土器32点(山形文25点、格子目文６点、複合鋸歯文１点)、撚糸文土器３点である。土製品は１点である。土器・土製品合わせて23点を図示した。

694～707が無文土器、708～714が押型文土器、715が撚糸文土器、716が土製品である。土器の口縁部は個体識別を行った上で全点図示し、胴部も個体識別を行った上で実測に耐えうる破片を図示した。

無文土器は694～702がその口縁部、703～707がその胴部であり、口縁部は口縁部文様を有さないものと有するもの、胴部は器面調整が二枚貝条痕のものとナデのものにそれぞれ大別できる。

694・695は口縁部文様を有さない。いずれも器面調整はナデであり、いずれも薄手である。口縁は外傾する。

696～702は口縁部文様を有する。文様を有する部位に差異が見られ、696は波頂部のみに、697～701は内面に、702は上面にそれぞれ文様を有する。内面に文様を有するものは直行文・左斜行文・右斜行文・刺突文に分けられる。

696は波状口縁であり、波頂部に不鮮明な刺突を施す。器面調整はナデである。

内面に施文するもののうち、697は直行文を施し、口縁端部がやや強く外反する。698・699は左斜行文を施し、698は口縁が直立すると考えられ、左斜行文を施す。口縁部上面に面取り及び押圧を施す。699の口縁は外傾し、左斜行文を施す。700は右斜行文を施し、口縁部上面に面取りを有し、口縁は外反する。701は刺突文を施し、一部面取りを有する。これらの器面調整はいずれもナデである。702は口縁部外端に沈線による蛇行文を有する。器面調整はナデである。

703～707は胴部であり、703は二枚貝条痕、704～707はナデであって、いずれも胎土に繊維を混入させる。

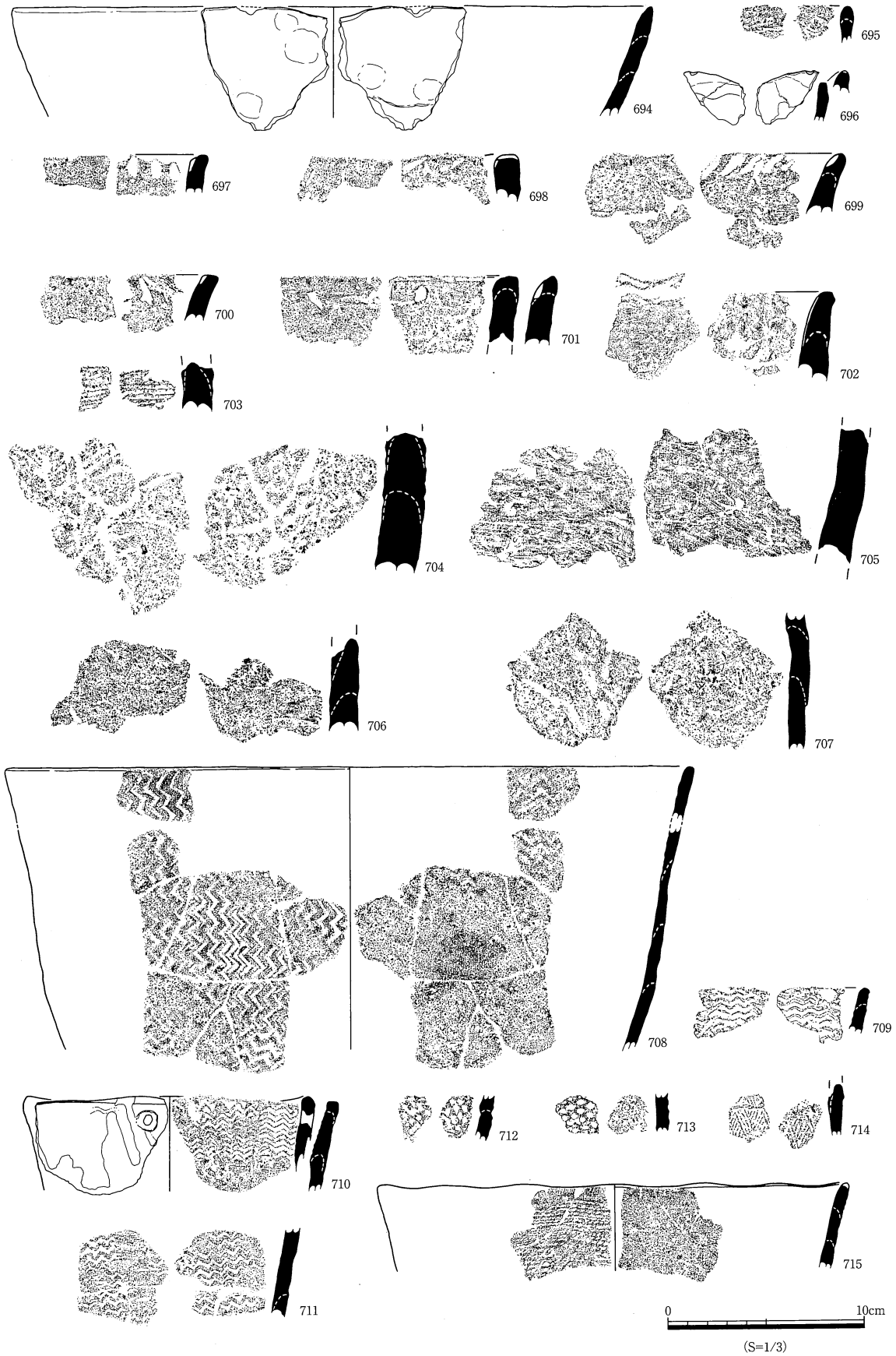
押型文土器は山形文・格子目文・複合鋸歯文に分けられる。708～711が山形文、712・713が格子目文、714が複合鋸歯文である。

山形文はいずれも口縁部である。口縁部文様を有さないが、内面にも山形文を施文する。708は口縁部外面直下に原体を縦位に５～６回転させて施文し、その下に横位施文を施す。710は外面の一部に山形文が見られるが、ナデで消されている。緩い波状を呈し、補修孔を有する。711は内面にも押型文を施文するため、口縁部付近の部位であると考えられる。

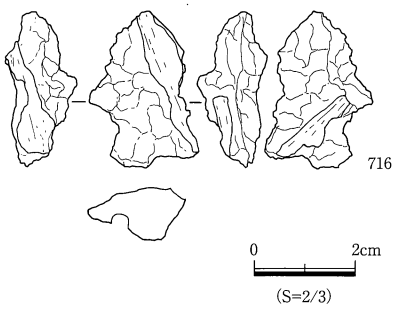
格子目文はいずれも胴部である。712は内面にも押型文を施文するため、口縁部付近の部位であると考えられる。

複合鋸歯文は胴部である。内面にも複合鋸歯文を施文するため、口縁部付近の部位であると考えられる。

715は撚糸文土器口縁部である。外面のみに１段ｒを施文する。



第81図　平成17年度調査　西トレンチ出土　土器(報告No.694～715)



第82図　平成17年度調査　西トレンチ出土　土製品(報告No.716)

716は土製品である。製品であるかどうかは判断が難しいが、竹管状工具を押圧した痕跡が確認できるため、何らかの意図を持って製作されたものとして考えられる。

東トレンチから出土した器種識別可能な土器片数は286点である。その内訳は無文土器238点、押型文土器47点(山形文38点、ポジティヴ楕円文７点、格子目文２点)、撚糸文土器１点である。そしてサヌカイト剥片３点である。その内20点図示した。

717～727が無文土器、728～735が押型文土器、736が撚糸文土器である。土器の口縁部は個体識別を行った上で全点図示し、胴部も個体識別を行った上で実測に耐えうる破片を図示した。

無文土器は717～722がその口縁部、723～727がその胴部である。口縁部はいずれも口縁部文様を有し、胴部は器面調整が二枚貝条痕のものとナデのものに分けられる。

口縁部文様はいずれも内面施文であり、直行文・左斜行文・刺突文に分けられる。717・718・721は直行文、719・720は左斜行文、722は刺突文をそれぞれ施し、いずれも器面調整はナデであって、口縁部はいずれも外反・外傾する。

胴部は723～726が二枚貝条痕、727はナデであり、いずれも胎土に繊維を混入させる。

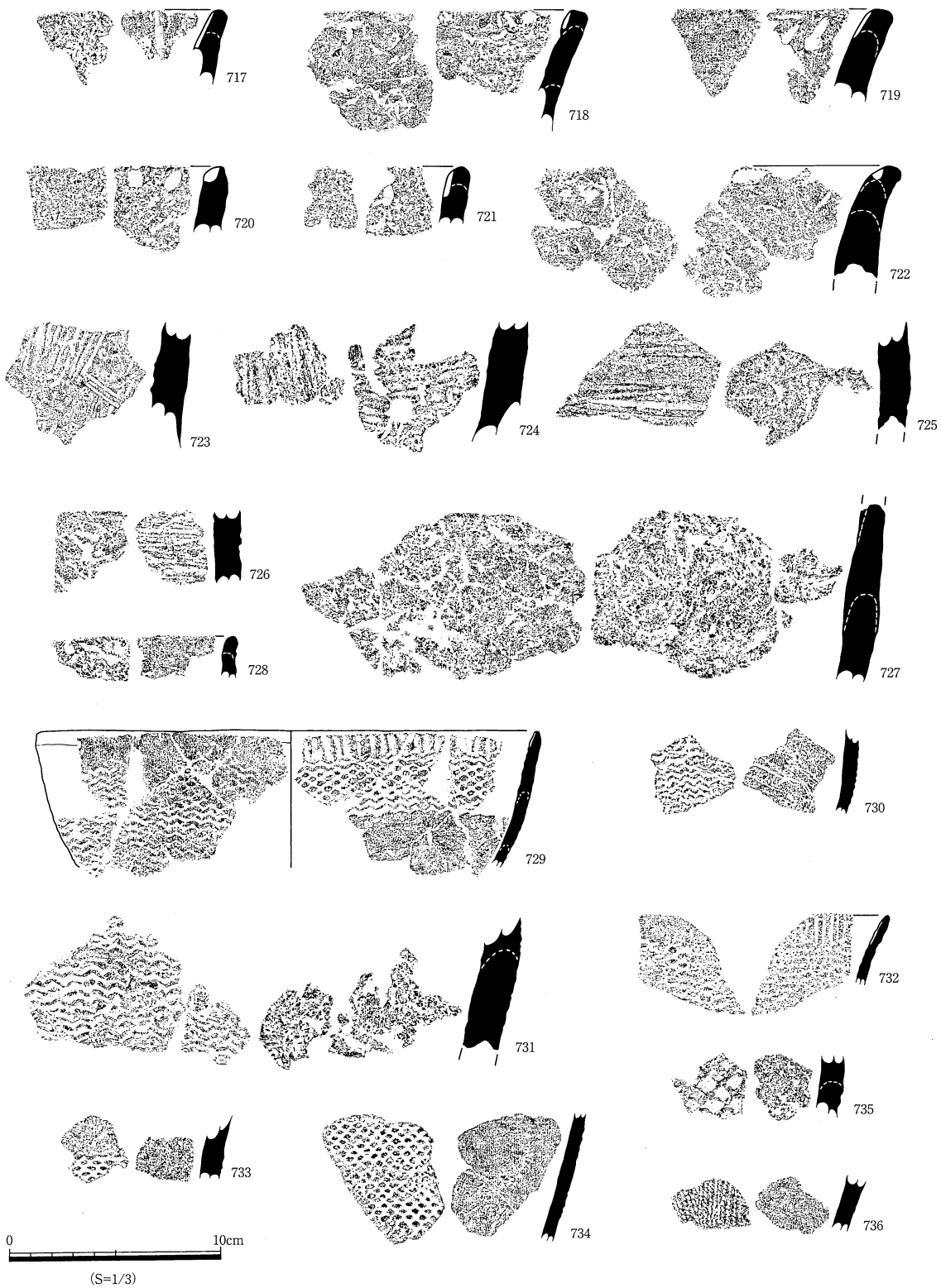
押型文土器は、山形文、ポジティヴ楕円文、格子目文に分けられる。

山形文は728・729がその口縁部、730・731がその胴部である。728は口縁部文様を有さず、外面のみに口縁部直下から施文している。729は口縁部内面に二枚貝表面で押圧を加えたような柵状文を施す。内外面に山形文を施文するが、外面は口縁部直下に無文帯を有する。内面の文様は山形文が上下で切り合ったためにポジティヴ楕円文様になっていると考えられる。730の内面の器面調整は二枚貝条痕であるが、それをナデで消している。731は器厚が極めて厚く、無文土器と山形押型文土器の折衷として考えられる。

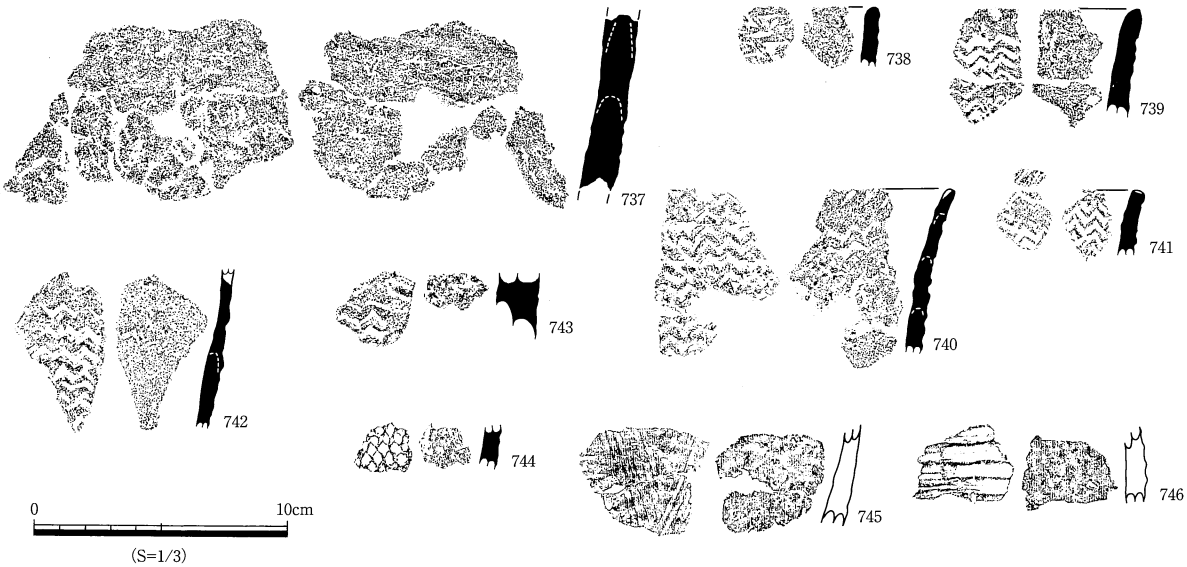
732～734はポジティヴ楕円文であり、732がその口縁部、733・734がその胴部である。732は口縁部文様を有し、内面に柵状文を施す。そして内面にも押型文を施文するが、外面は口縁部直下に無文帯を有する。

735は格子目文胴部であり、器厚が厚い。

736は撚糸文土器胴部であって、外面に１段ｒを施文する。



第83図　平成17年度調査　東トレンチ出土　土器(報告No.717～736)



第84図　平成17年度調査　北トレンチ出土　土器(報告No.737～746)

北トレンチから出土した器種識別可能な土器片数は50点である。その内訳は無文土器38点、押型文10点(山形文８点、格子目文２点)、弥生土器２点である。その内10点を図示した。

737が無文土器、738～744が押型文土器、745・746が弥生土器である。土器の口縁部は個体識別を行った上で全点図示し、胴部も個体識別を行った上で実測に耐えうる破片を図示した。

無文土器は737の胴部であり、器面調整はナデである。

押型文土器は山形文・格子目文に分けられ、738～743が山形文、744が格子目文である。

山形文は738～741が口縁部、742・743が胴部である。口縁部は口縁部文様を有さないものと有するものに分けられる。

738・739は口縁部文様を有さない。いずれも外面のみに山形文を口縁部直下から施文しており、738は縦位に原体を回転させている。両者とも口縁部内端に削ぐような面取りを有する。

740・741は口縁部文様を有する。文様を施文する部位に差異が見られ、740は内面施文であって、左斜行文を施す。741は上面施文であって、口縁部上面に面取りを行った後に左斜行文を施す。いずれも口縁部内外面直下に山形文を施文する。

742は補修孔を有し、743は器厚が厚いため無文土器と山形押型文土器の折衷として考えられる。

744の格子目文は米粒状の小さなものである。

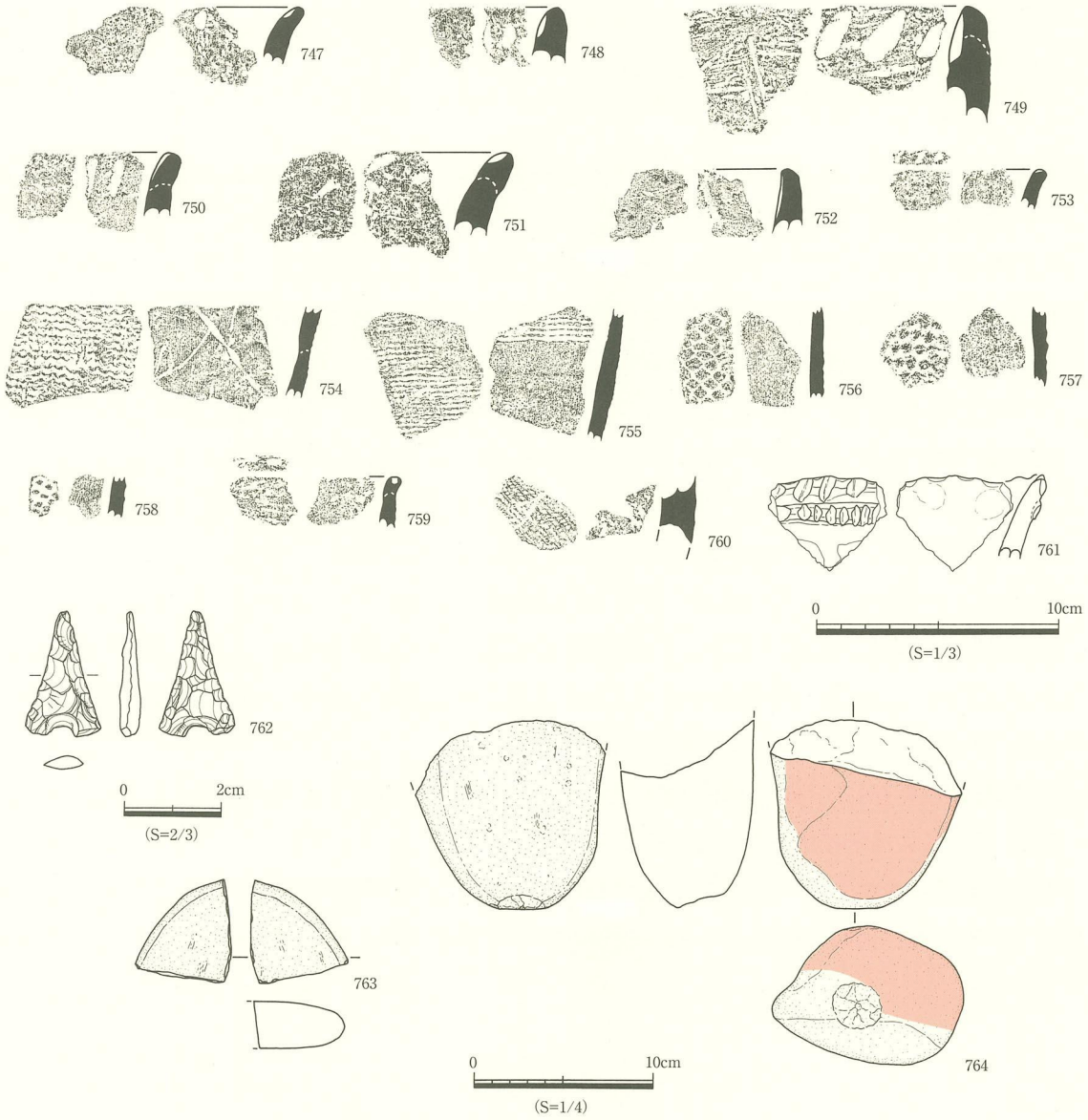
弥生土器はいずれも甕の胴部である。745は器面調整を二枚貝条痕で行った後に丁寧なミガキを加えているため、前期に位置づけられる。746は器面調整をタタキで行っており、後期に位置づけられる。

第９節　表面採集及び撹乱出土遺物（第85図）

747～753は無文土器である。いずれも口縁部であり、内面に口縁部文様を有する。747・748は直行文、749～751・753は左斜行文、752は右斜行文をそれぞれ施す。754～758は押型文土器であり、いずれも胴部である。山形文・ポジティヴ楕円文に分けられる。759・760は撚糸文土器であり、759が口縁部、760が胴部である。口縁部は上面に長楕円刺突を有し、いずれも外面に１段ｒを有する。

761は深鉢口縁部であり、口縁部外面に隆帯を添付し、そこと口縁部外端にキザミを有する。弥生時代前期と考えられる。

762は石鏃であり、脚が短い。石材はサヌカイト製である。763は磨石であり、砂岩製である。764は敲石であり、下端に敲打痕が見られる。一部赤変している。



第85図　平成17年度調査　表面採集及び撹乱出土遺物（報告No.747～764）

第Ⅵ章　高知県香美市刈谷我野遺跡の炭素14年代測定

国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ

概要

高知県香美市に所在する刈谷我野遺跡から出土した試料について、加速器を用いた炭素14年代測定を行ったので、その結果を報告する。試料の採取は2005年８月、2006年６月に遠部慎、2005年12月に小林謙一が行った。試料の出土層位や所属型式は、香美市教育委員会松本安紀彦氏と協議し、調整した。測定の結果、四国では数少ない縄文時代早期の遺跡の実年代を推定するうえで重要な測定結果を得ることができた。

１．測定試料

測定した資料は遠部・小林が採取した土器付着物７点（７個体）、炭化材４点である。試料については、一覧を表１に示す。前処理の結果、土器付着物の６点は炭素量不足で測定できず（表２）、結果的に１個体分しか測定結果を得ることが出来なかった。炭化材は４点とも年代測定することができた。

２．炭化物の処理

試料の処理作業は国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において行い（補注参照）、(1)酸前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）は遠部、(2)炭素抽出とグラファイト化は宮田・遠部・坂本が担当した。(3)測定については東京大学大学院工学系研究科のタンデム加速器施設（MALT、機関番号MTC）、パレオ・ラボで行った。

各試料の詳細、前処理の状況は表に附す。測定できた試料は総じて60%と高い炭素含有率を示しており、良好なサンプルといえる。

３．測定結果と暦年較正

測定結果は、注２に示す方法で、同位体効果を補正し炭素14年代、較正年代を算出した（図１）。表３に測定結果をまとめる。KCKH-34以外のδ^{13}C値は、すべて加速器による同位体効果補正のための測定であり、試料自体の正確な値とは言えない。表には参考値として（　）で記しておく。

４．測定結果について

土器付着炭化物（条痕文）では１点（8630±40BP）、炭化材試料では４点（8620±50BP、8580±45BP、8895±40BP、8860±25BP）、炭素14年代の結果を得た。以下、議論は較正年代（cal BC）で行うことにする。KCKH-34は95.4%の確率で、7730-7585cal BCの年代に含まれる。KCKH-C１は7750-7570cal BC（95.4%）、C２は7680-7535cal BC（93.9%）の年代値である。これら2004年度の試料は、土器付着炭化物・炭化材とも極めて近い年代値を示す。これに対し、2005年度の試料KCKH-C３は8240-7935cal BC（95.0%）、8205-7840cal BC（95.4%）とやや古めの年代値を示す。この年代値は、

SK 2から出土した種実(コナラ属クヌギ節)から得られた年代値8820±60BP(較正年代はRHcal3.1で再計算 8215-7715cal BC 95.4%)(古環境研究所2005)と近い。

以上の結果は、SK 2の時期幅と、山形押型文土器がまとまって出土した2005年度調査の時期を考える上で示唆的である。本遺跡から得られている年代値は、KCKH-34、C 1、C 2とKCKH-C 3及び古環境研究所測定試料では有意な差がある。このことから、SK 2の最終的な廃絶は2005年度調査資料よりも、新しく位置づけられる可能性を考える必要があろう。

本稿の測定成果は、平成18年度科学研究費補助金(学術創成研究)「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」(研究代表　西本豊弘　課題番号16GS0118)、平成18年度科学研究費補助金(C)「AMS炭素14年代を利用した東日本縄紋時代前半期の実年代の研究」(研究代表　小林謙一)、「西日本における縄文海進期の基礎的研究」(パレオ・ラボ第1期　若手研究者を支援する研究助成)の成果の一部を用いている。

暦年較正については今村峯雄、坂本稔の方法に従う。本稿は、註について遠部慎・宮田佳樹・坂本稔・松崎浩之(東京大学)の記載をもとに、全体を遠部・小林(以上、国立歴史民俗博物館)が協議して執筆した。

補注1　試料については下記の方法で処理した。

(1)前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄

AAA処理に先立ち、土器付着物については、アセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した(2回)。AAA処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液(1N HC 1)で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去(2回)し、さらにアルカリ溶液(NaOH、1回目0.01N、3回目以降0.1N)でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は、5回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理(1N HCl　12時間)を行いアルカリ成分を除いた後、純水により洗浄した(4回)。

炭化材の大半については自動処理器(Sakamoto et al. 2002)を用いた。炭化材は、80℃、各1時間で、希塩酸溶液(1N HC 1)で土壌などから混入する炭酸カルシウム等を除去(2回)し、さらにアルカリ溶液(1N NaOH)でフミン酸等を除去する行程を5回、さらに2回酸処理を行い中和後、純水を使って洗浄した(5回)。

分析した各試料については、AAA前処理を行った量(処理量)、処理後回収した量(回収量)、二酸化炭素を得るために燃焼した燃焼量、精製して得られた二酸化炭素の量に相当する炭素量(ガス)を表2に記す。

(2)二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼(二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で、850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこ

れを分離・精製した。

(3)グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

1.5mgの炭素量を目標に二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉で、およそ600℃で12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合させた後、穴径1㎜のアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

補注2　測定値について、以下の方法で較正年代を算出した。

年代データの^{14}CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した炭素14年代(モデル年代)であることを示す。炭素14年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差(1標準偏差、68%信頼限界)である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の^{14}C/^{12}C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した^{13}C/^{12}C比により、^{14}C/^{12}C比に対する同位体効果を調べ補正する。^{13}C/^{12}C比は、標準体(古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの^{13}C/^{12}C比)に対する千分率偏差δ^{13}C(パーミル，‰)で示され、この値を-25‰に規格化して得られる^{14}C/^{12}C比によって補正する。補正した^{14}C/^{12}C 比から、炭素14年代(モデル年代)が得られる。加速器による測定は同位体補正効果のためであり、必ずしも^{14}C/^{13}C/^{12}C比を正確に反映しないこともあるため、パレオ・ラボ測定分については、加速器による測定を参考として付す。

測定値を較正曲線IntCal04(炭素14年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004年版)(Reimeret al 2004)と比較することによって暦年代(実年代)を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラムRHCal(OxCal Programに準じた方法)を用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦calBCで示す。(　)内は推定確率である。

参考文献

今村峯雄(編) 2004 『課題番号13308009基盤研究(A・1)(一般) 縄文弥生時代の高精度年代体系の構築』(代表今村峯雄)

古環境研究所　2005 「第2節刈谷我野遺跡における放射性炭素年代測定」『刈谷我野遺跡Ⅰ－個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』 香北町教育委員会　pp70-71

小林謙一　2005 『縄紋社会研究の新視点』 六一書房

酒井均・松久幸敬　1996 『安定同位体地球化学』 東京大学出版会

Reimer, Paula J.et al.　2004　IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP　Radiocarbon 46(3), 1029-1058(30).

M. Sakamoto et al.　2002　An Automated AAA preparation system for AMS radiocarbon daging. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223-224： 298-301.

第１表　高知県香美市刈谷我野遺跡炭素14年代測定に関して採取した試料の情報

試料記号	採取場所	測定対象	時　期	土器型式	器　種	付着状況	付着部位
KCKH-31	第４層	土器付着物	縄文早期	山形押型文	深鉢	焦	胴部内面
KCKH-32		土器付着物	縄文早期	山形押型文	深鉢	焦	胴部内面
KCKH-33		土器付着物	縄文早期	楕円押型文	深鉢	煤	胴部外面
KCKH-34	03-KK Ⅱ区 第３層	土器付着物	縄文早期	厚手無文	深鉢	焦	底部内面
KCKH-35		土器付着物	縄文早期	山形押型文	深鉢	煤	胴部外面
KCKH-36		土器付着物	縄文早期	厚手無文	深鉢	焦	胴部内面
KCKH-37		土器付着物	縄文早期	山形押型文	深鉢	焦	胴部内面
KCKH-C1	SK２土坑	炭化材	縄文早期				
KCKH-C2	SK２土坑	炭化材	縄文早期				
KCKH-C3	05-KK 第４層	炭化材	縄文早期				
KCKH-C4	05-KK 第４層	炭化材	縄文早期				

第２表　高知県香美市刈谷我野遺跡炭素14年代測定に関して採取した試料の分析状況

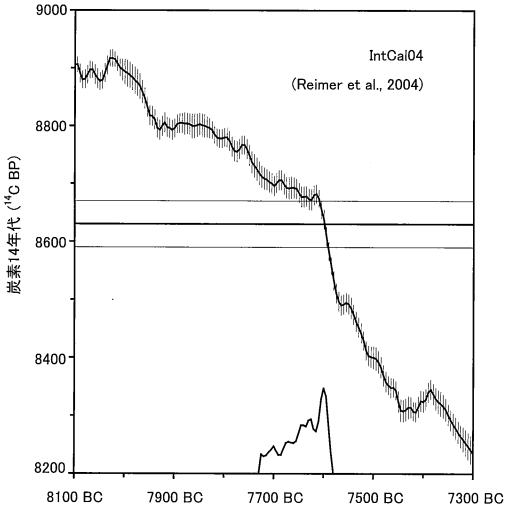
試料番号	採取量[1)] (mg)	処理量 (mg)	残量 (mg)	処理方法[2)]	回収量 (mg)	含有率 (%)	前処理後[3)] 状態	精製 (mgc)	ガス (mgc)	炭素含有率 (%)
KCKH-31	34.41	34.41		通常	0.0	0				
KCKH-32	12.5	12.5		通常	0.0	0				
KCKH-33	16.36	16.36		通常	0.0	0				
KCKH-34	46.68	46.68		通常	2.87	6.1	良	4.43	2.83	63.9
KCKH-35	9.03	9.03		通常	1.3	14.4		0.95	0.00	0
KCKH-36	13.83	13.83		通常	0.83	6.0		0.64	0.00	0
KCKH-37	27.12	27.12		通常	14.57	53.7		7.97	0.00	0
KCKH-C1		170.16	残	オート	39.05	23.0	良	3.04	1.93	63.5
KCKH-C2		148.12	残	オート	31.71	21.4	良	3.05	1.89	62.0
KCKH-C3	76.34	10.61	65.73	オート	3.03	54.9	良	3.03	1.81	59.7
KCKH-C4		20.63	残	オート	3.03	16.8	良	3.64	2.09	57.4

1）採取量のα及び残量の残は、残部が多いため、計量を測定していないが残量があることを示す。
2）処理方法の通常は補注(1)参照。オートは自動処理機で行ったことを示し、未処理は土壌であったり、採取量が少ないため、分析作業を実施しなかったもの。
3）前処理後の良／不良は、顕微鏡観察でミネラルなどの不純物を多く含むものを不良としている。

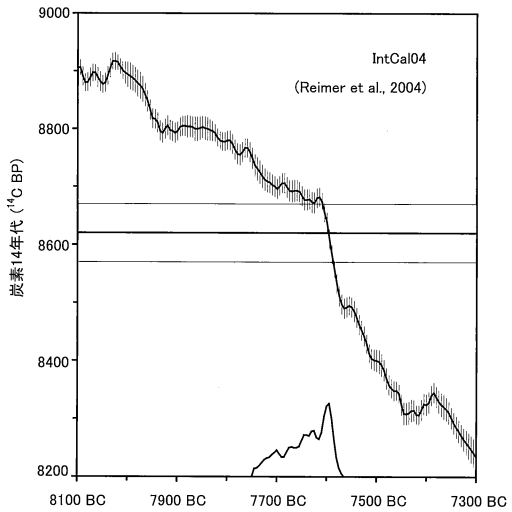
第３表　高知県香美市刈谷我野遺跡炭素14年代測定結果と較正年代一覧

試料番号	測定機関番号	δ13C (‰)	14C炭素年代 (B.P.)	暦年較正年代 (CalBC)	暦年較正年代 確率分布(%)	備　考
KCKH-34	Beta-210497	(-26.4)	8630±40	7730-7585	95.4	第８図-100
KCKH-C1	MTC-06735	(-26.4)	8620±50	7750-7570	95.4	
KCKH-C2	MTC-06735	(-26.7)	8580±45	7707-7695	1.5	
				7680-7535	93.9	
KCKH-C3	MTC-07414	(-24.0)	8895±40	8240-7935	95.0	第78図-659の山形押型文土器と共に出土。
				7920-7920	0.2	
				7885-7880	0.3	
KCKH-C4	PLD-6299	(-26.9)	8860±25	8205-8030	64.0	
				8120-7970	25.3	
				7925-7915	0.8	
				7895-7840	5.3	

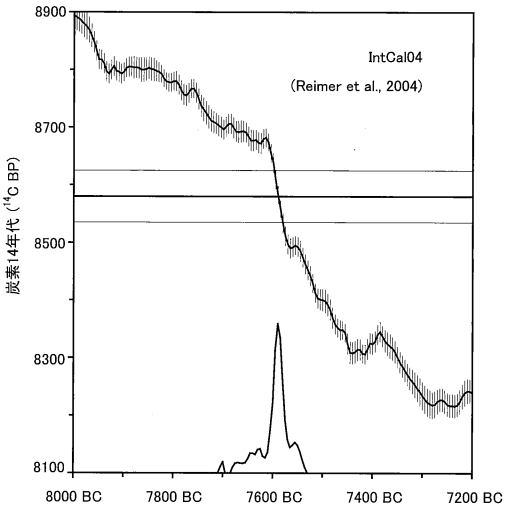
試料番号　KCKH-34
機関番号　Beta-210497
炭素14年代　8630±40 ^{14}C BP



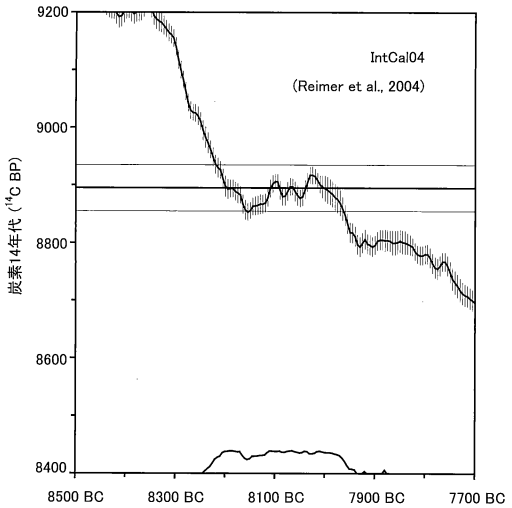
試料番号　KCKH-C1
機関番号　MTC-06735
炭素14年代　8620±50 ^{14}C BP



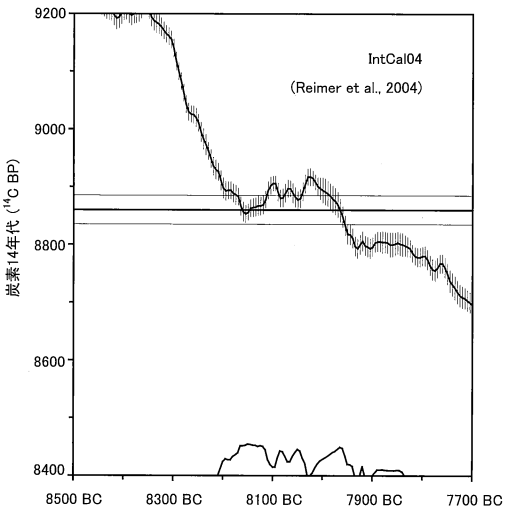
試料番号　KCKH-C2
機関番号　MTC-06736
炭素14年代　8580±45 ^{14}C BP



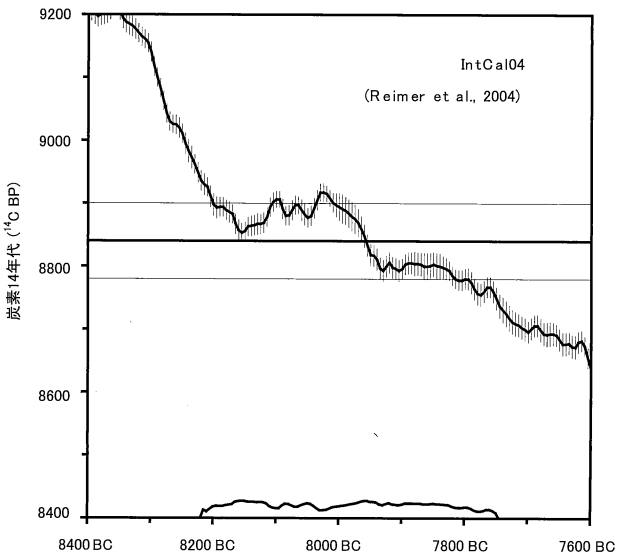
試料番号　KCKH-C3
機関番号　MTC-07414
炭素14年代　8895±40 ^{14}C BP



試料番号　KCKH-C4
機関番号　PLD-6299
炭素14年代　8860±25 ^{14}C BP



試料番号　No.1(古環境研究所)
機関番号　Beta-198719
炭素14年代　8840 ± 60 ^{14}C BP



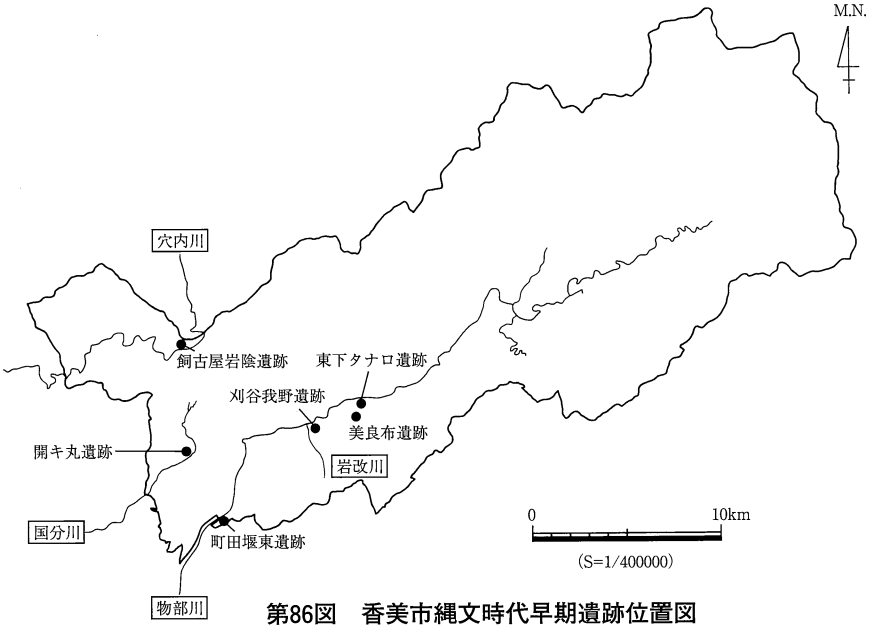
第４表　高知県香美市刈谷我野遺跡年代別測定グラフ

第Ⅶ章　まとめ

第１節　香美市の縄文時代早期遺跡について

高知県内で縄文時代早期の遺跡として知られるのは2006年度現在46遺跡であり、西南四国と四万十川及び仁淀川流域の県西部に集中している（木村1978・1987・1995、松村・畠中2003、畠中2005・2006、兵頭2007）。県西部から県中部そして東部に目を転じると、早期遺跡が集中するのは香美市域及び吉野川上流域であって、とりわけ香美市域では断続的に発掘調査が行われたため、高知県内で最も資料の蓄積が進んでいる（第86図）。

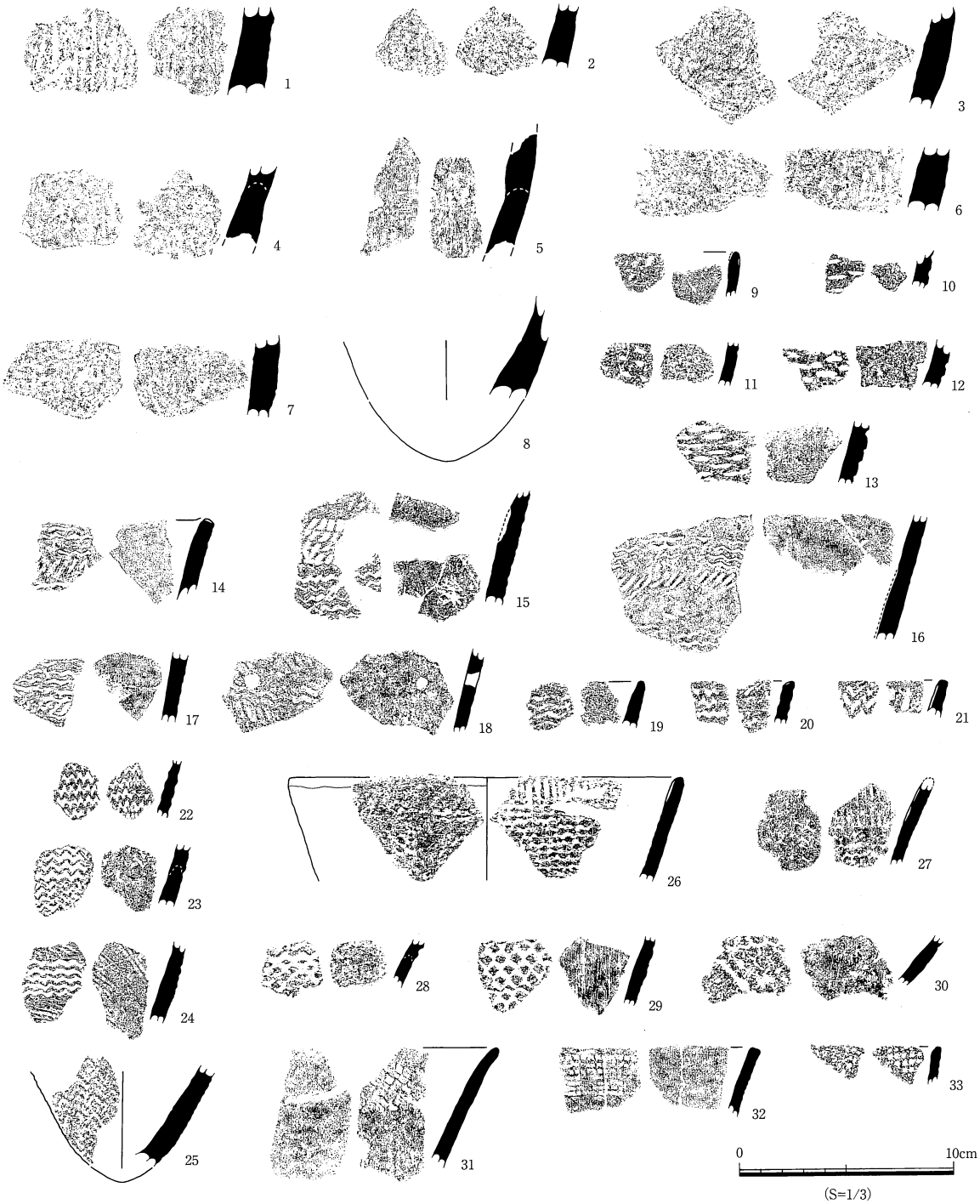
香美市域を流れる主な河川は、吉野川の支流である穴内川、国分川上流域の新改川、そして物部川であるが、穴内川水系には飼古屋岩陰遺跡（森田1983）、新改川水系には開キ丸遺跡（小林2002）、物部川水系には町田堰東遺跡（畠中2006）、刈谷我野遺跡（山崎2003、松本2005a・b・2006a・b・c）・東下タナロ遺跡（松本2005a・2006a）、そして美良布遺跡（出原1991、松本2005a・2006a）が所在するため、香美市に所在する縄文時代早期遺跡はいずれの河川流域にも所在することが明らかとなっている。また、穴内川を下れば吉野川を通じて瀬戸内・近畿方面へ、新改川・物部川を下れば西南四国～九州そして太平洋へ繋がっていることは、縄文人の動向を探る上で極めて興味深い地勢である。



第86図　香美市縄文時代早期遺跡位置図

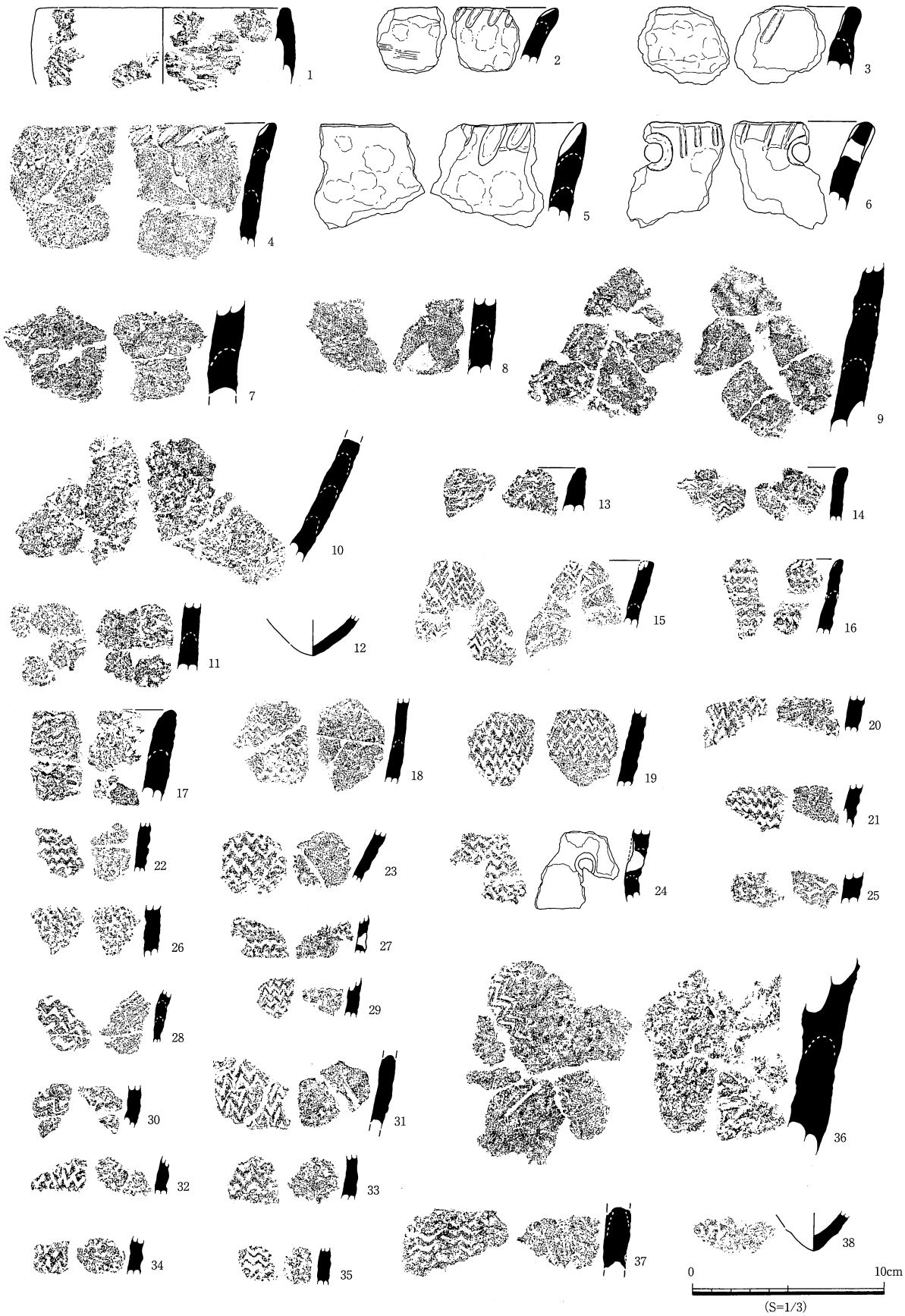
飼古屋岩陰遺跡（第87図）

穴内川水系に立地し、下流の徳島県吉野川流域には縄文時代早期の宝伝岩陰遺跡（森・松藤1999）が所在する。１～８が無文土器であり、胎土中の繊維量が刈谷我野遺跡出土の無文土器に比べると少なく、器厚も薄手である。９～33が押型文土器であり、９～13がネガティヴ楕円押型文、14～18が山形文＋短沈線文ないしは格子目文、19～25が山形文、26～30がポジティヴ楕円文、31～33が格子目文である。

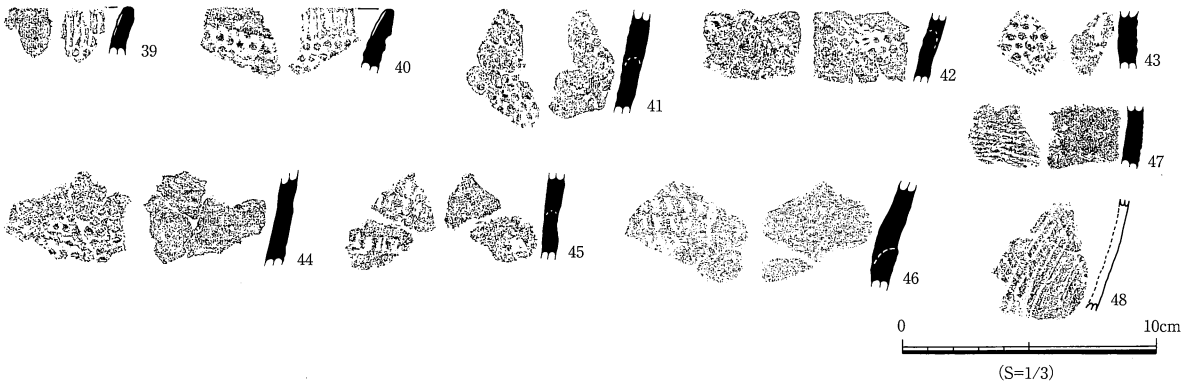


第87図　香美市土佐山田町　飼古屋岩陰遺跡出土土器

ネガティヴ楕円押型文が高知県内で出土し、現在まで保管されているのは飼古屋岩陰遺跡のみであるが、香美市土佐山田町町田堰東遺跡において採集されたという話もあり、南四国にはネガティヴ押型文の伝播が確実にあったものと考えられる。このネガティヴ楕円押型文及び山形文＋短沈線ないしは格子目文は近畿を中心に分布しており、前者は神宮寺式、後者は神並上層式として理解でき、無文土器及び山形文・ポジティヴ楕円文等に先行する土器型式として位置付けられる。



第88図　香美市土佐山田町　開キ丸遺跡出土土器①



第89図　香美市土佐山田町　開キ丸遺跡出土土器②

開キ丸遺跡（第88・89図）

国分川水系に立地し、下流の南国市には旧石器時代～縄文時代早期の遺跡として知られる奥谷南遺跡（松村・山本2001）が所在する。１～12が無文土器であり、１は口縁部無文、２～６は口縁部有文である。１は直立しており、器面調整は二枚貝条痕である。２～５は外傾し、器面調整はナデで、内面に左斜行文を有する。６は外傾すると考えられ、器面調整はナデで、内面に左斜行文及び外面に直行文を有する。そして焼成前穿孔を有する。

13～46が押型文土器であり、13～38が山形文、39～44がポジティヴ楕円文、45・46が格子目文である。山形文はいずれも胎土に繊維を混入させている。13～17がその口縁部であるが、16のみ口縁部内面に左斜行文を有し、柵状文は見られない。ポジティヴ楕円文はいずれも胎土が砂質である。39・40がその口縁部であるが、いずれも口縁部内面に柵状文を有しており、黄島式に相当する。山形文主体であることと口縁部文様に差異が認められることから、押型文土器には時期差を考慮しなければならない。

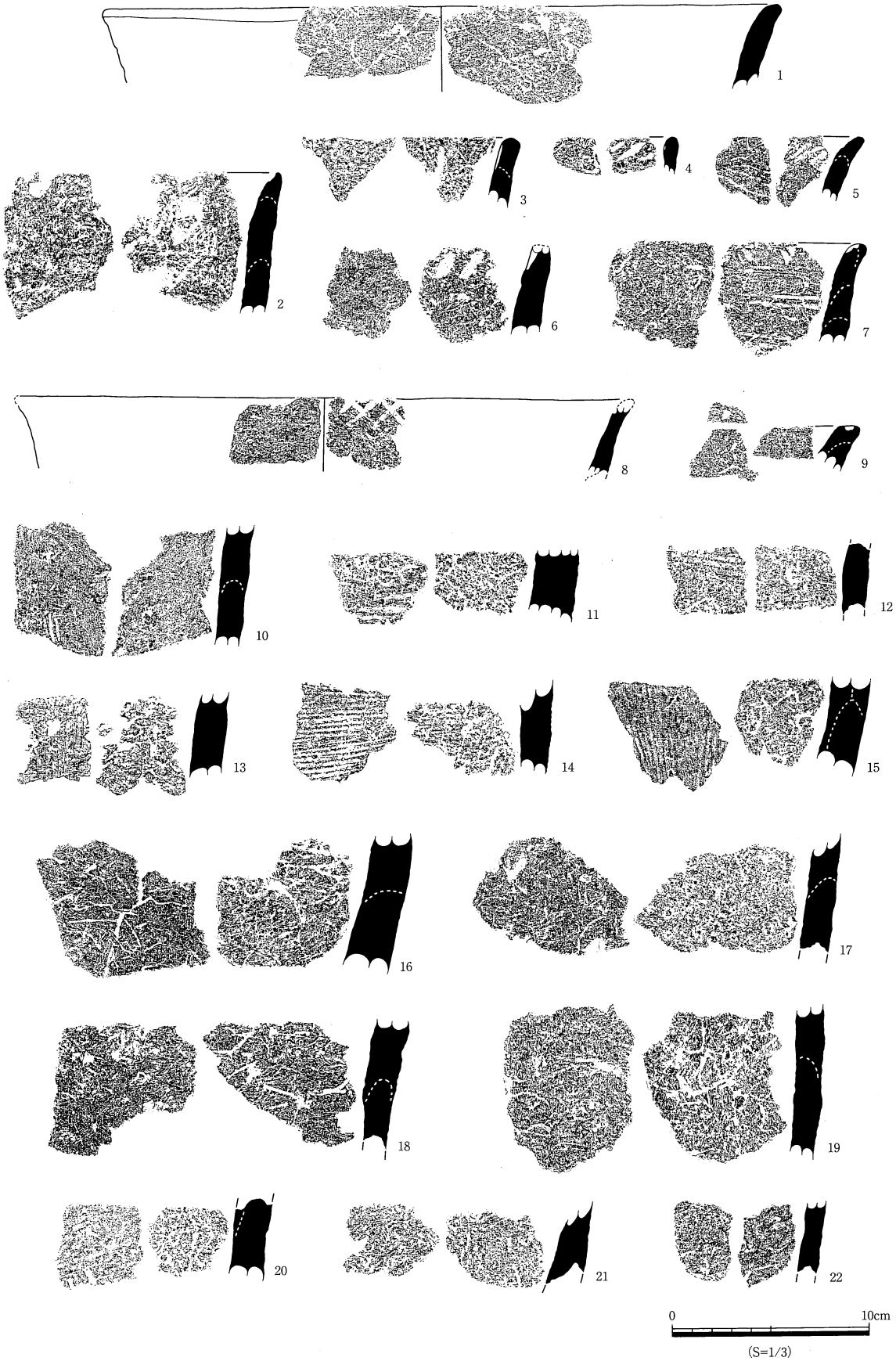
47は撚糸文土器、48は条線（痕？）文土器である。いずれも黄島式より古い段階に伴うと考えられる。

町田堰東遺跡（図無し）

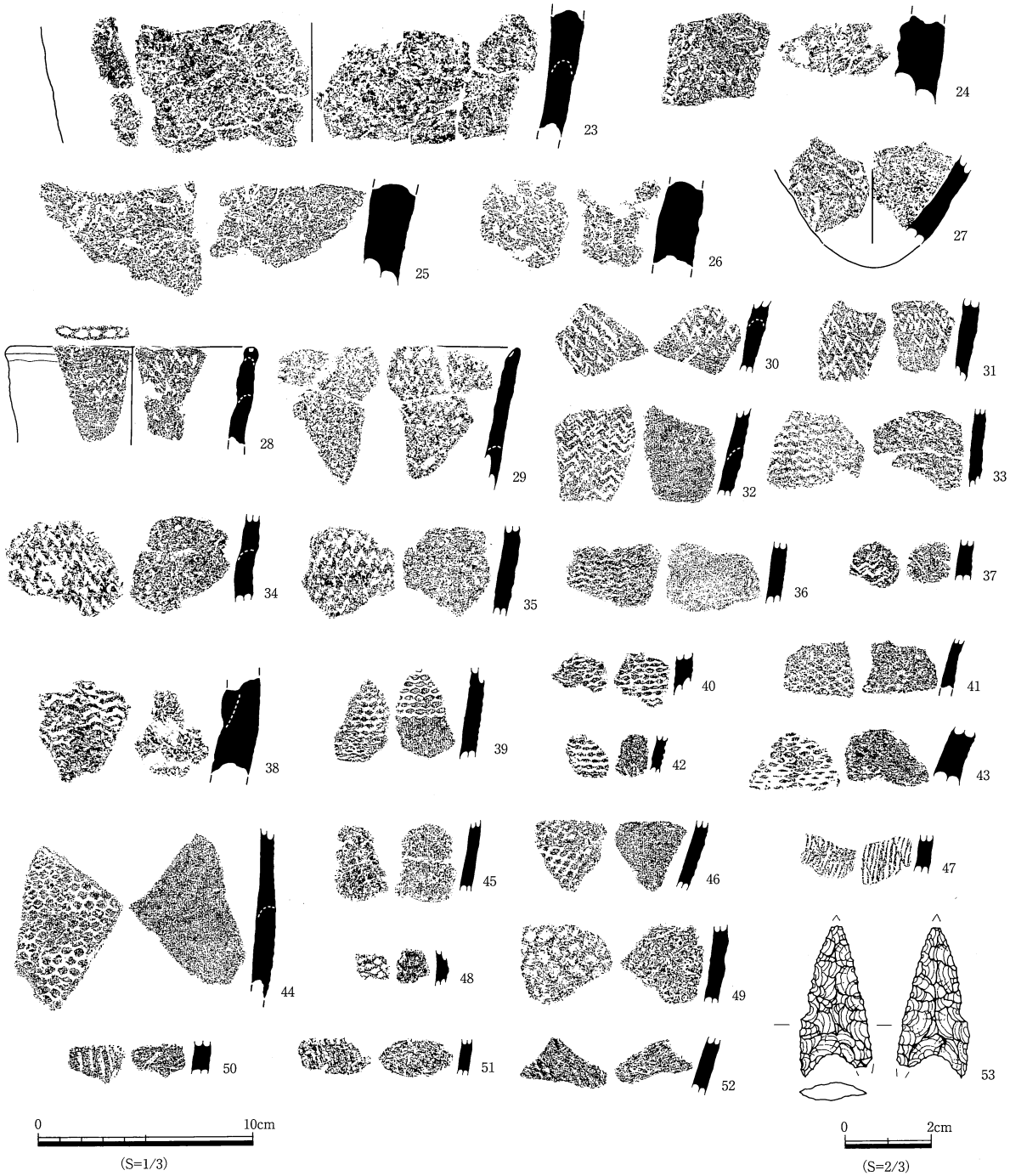
物部川下流に位置する遺跡であり、ネガティヴ楕円文が表面採集されたという。実測図は残されておらず、遺物自体の確認もできなかった。

刈谷我野遺跡（第90・91図）

物部川中流に位置する遺跡であり、図示した資料は試掘調査で得られたものである。１～27は無文土器であり、１～９が口縁部、10～27が胴部・底部である。口縁部はいずれも外傾傾向であり、口縁部文様は１・２には認められず、３～８は内面に口縁部文様を有する。８の口縁部文様は特殊であり、格子目状文である。９は口縁部上面に円形刺突文を有する。胴部は10～15の器面調整が二枚貝条痕である他はナデであり、器厚が厚いものが目立つ。また、27は底部であり、尖底を呈する。



第90図　香美市香北町　刈谷我野遺跡試掘調査出土遺物①



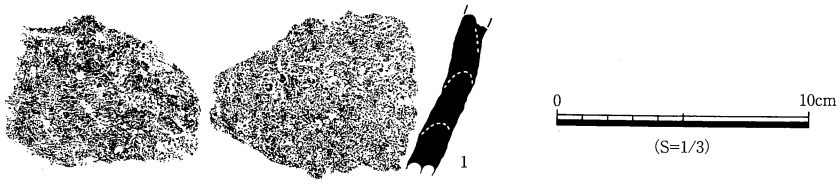
第91図　香美市香北町　刈谷我野遺跡試掘調査出土遺物②

28～49は押型文土器であり、28～38が山形文、39～46がポジティヴ楕円文、47が複合鋸歯状文、48・49が格子目文である。山形文のうち28・29は口縁部であり、28は口縁部上面に刺突を、29は口縁部内面に直行文を有する。30～38が胴部であり、山形文にもシャープなものとそうでないものの２種類が見られる。興味深いのは38であり、器厚が他のものに比べて極めて厚く、胎土に繊維を混入させる。無文土器と山形押型文土器の折衷として考えたい。ポジティヴ楕円文も長楕円のものと比較的整った楕円のものに分けられそうである。50～52が撚糸文土器であり、いずれも外面に撚糸文圧痕を施す。

53は石鏃であり、脚部が極めて短く、左右からの剝離が大きく整然としている。石材はサヌカイトである。

美良布遺跡（第92図）

物部川中流に位置する遺跡である。第1次美良布遺跡の調査時に表面採集された。胎土中に繊維を含み、指頭圧痕が顕著である。よって、早期に位置付けたが、刈谷我野遺跡の無文土器と一線を画す。



第92図　香美市香北町　美良布遺跡表面採集土器

東下タナロ遺跡（第93図）

物部川中流に位置する遺跡である。表面採集品であり、１～５が無文土器、６が山形押型文土器である。無文土器は刈谷我野遺跡出土のものと全く同じであり、町内に刈谷我野遺跡と同時期の遺跡が、まだ他に所在する可能性を示している。

第93図　香美市香北町　東下タナロ遺跡表面採集土器

第２節　刈谷我野遺跡の無文土器について（第94図）

『刈谷我野遺跡Ⅰ』において、SK２出土の無文土器・有文土器について分類を行った。本報告書では、大筋はそれに準拠するが、新しい分類項目を設ける必要が出てきたため、分類基準が異なっている。以後は本報告での分類を最終的なものとし、それに基づいて論を進めることを予め了承願いたい。

無文土器についてはA群として分類した。B群以降は押型文土器などの有文のものを意味する。A群は口縁部文様を有さないもの（１：Ａ１群）と口縁部文様を有するもの（２：Ａ２群）に分けられる。本報告書におけるＡ１群の出土点数は82点であり、第３層出土が32点、第４層出土が29点

で、層位における差は見られない。Ａ２群の出土点数は177点であり、第３層出土が66点、第４層出土が46点である。全体的に第３層が多い傾向にあり、Ａ２群に関しては第３層に多く見られる。

第２節－1：Ａ１群について

口縁が直立・内傾するもの（ｉ）と外傾・外反するもの（ii）に分けられる。それぞれ口縁の立ち上がり方について細分できる可能性がある。しかし、遺存した破片の大多数がそれを考えるのに残存長が足らないため、それ以上の細分は行わなかった。

ｉは第94図３のように、大形の砲弾形器形を呈すると考えられる。胴上部に最大径を有し、最大径部から口縁が内傾しながら立ち上がる傾向が見られ、１・２は特にその傾向が強い。これらは厚手の中でも比較的薄く、無文土器の中でも趣の異なった土器であって、平成15年度調査SK36と平成16年度調査SK１以外での出土は確認できなかった。器面調整は１・３がナデであるのに対して、２は内面に二枚貝条痕を有する。３固体のみで器面調整の傾向を記述するのは問題があろうが、薄手の無文土器胴部と共に考えた場合、この種の無文土器はナデを多用する傾向が多いものと推察できる。

ii は第94図５～９のように器厚が極めて厚く、大形の砲弾形器形を呈するものが一般的であるが、10～12のように薄手であり、器形も砲弾型にはならないような小形器形を呈すると考えられるものがわずかに認められる。また、12のように端部を強く外傾させるものが存在するが、個体数は極めて少ない。薄手のものは少数であり、資料の蓄積を経てから位置づけられるべきである。

第２節－２：Ａ２群について

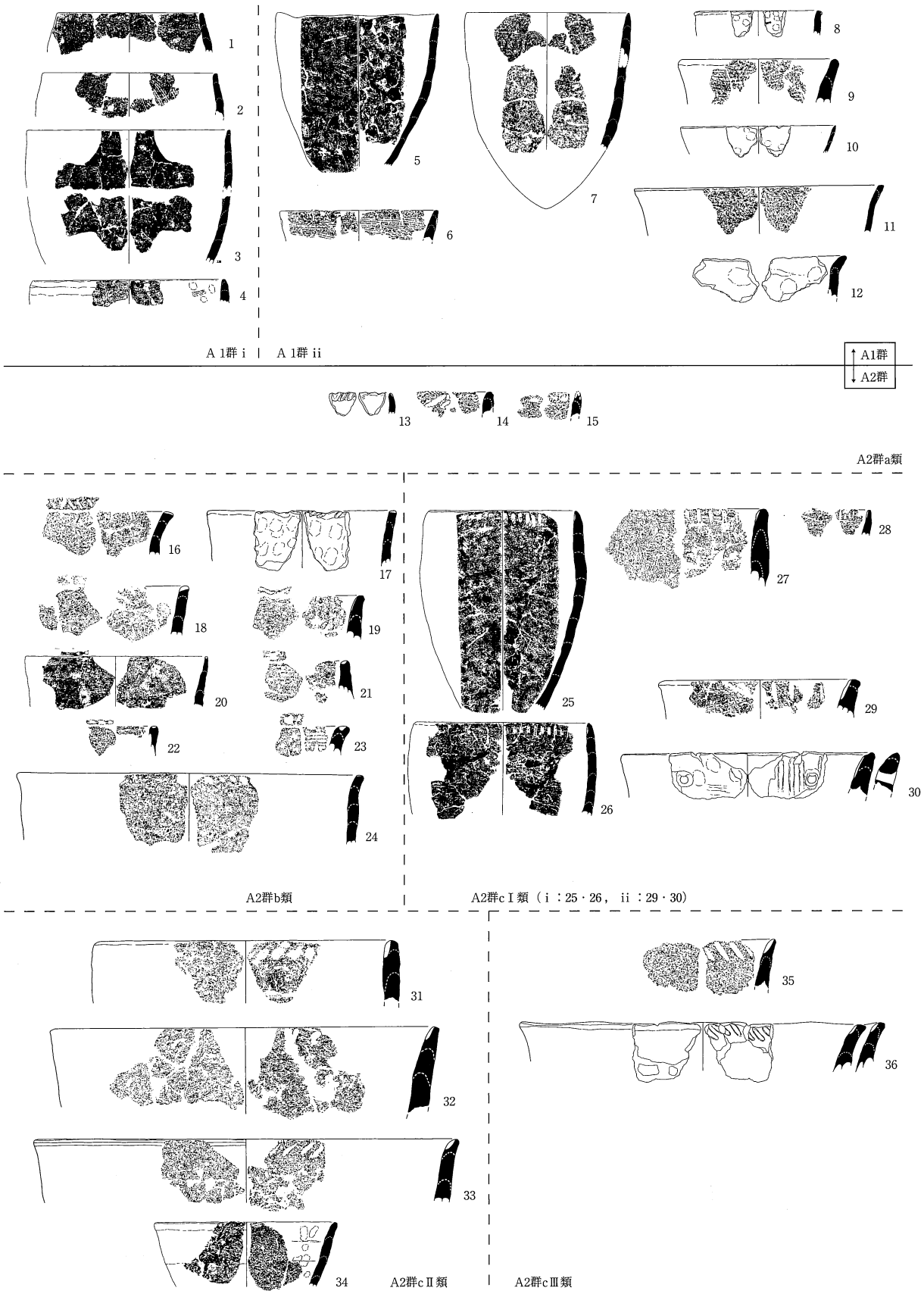
本報告におけるＡ２群は、外面施文（a類）・上面施文（b類）・内面施文（c類）に分けられる。文様種には沈線文（Ⅰ～Ⅳ）・刺突文（Ⅴ）・押引文（Ⅵ）・押圧文（Ⅶ）が見られる。とりわけ沈線文はヴァリエーション豊富であって直行文（Ⅰ）・左斜行文（Ⅱ）・右斜行文（Ⅲ）・蛇行文（Ⅳ）に分けられる。刺突文は円形・D字のものがあるが、明確に分類することが難しいものがあり、細分は控えた。以下、各類をアルファベットとローマ数字を組み合わせて記述する。例えばaⅠ類は「外面施文の直行文」を意味する。

a類の出土点数は177点中５点であり、極めて少ない。しかし、ヴァリエーションは沈線文及び刺突文が確認できる。出土傾向は不明である。

b類の出土点数は177点中23点であり、一定数を占める。ヴァリエーションは沈線文・刺突文・押引文・押圧文が認められる。沈線文はbⅡ類が３点、bⅢ類が５点、bⅣ類が１点、bⅤ類が13点、bⅥ類が１点であり、上面施文には刺突文が多い傾向が見られる。出土傾向は不明である。

c類の出土点数は177点中149点であり、主体を占める。ヴァリエーションは沈線文・刺突文が認められる。沈線文のうちcⅠ類が26点、cⅡ類が77点、cⅢ類が22点、cⅤ類が24点であって、左斜行文（Ⅱ）が多いと言える。出土傾向は出土量に比例して第３層が多い。

よって、刈谷我野遺跡の土器の傾向としては口縁部文様を有する無文土器（Ａ２群）が第３層を中心に主体となる傾向が指摘でき、その中においては口縁部内面に左斜行文（cⅡ類）を有するものが極めて多いと言える。



第94図　刈谷我野遺跡無文土器（A群）分類図

第３節　刈谷我野遺跡の有文土器－山形押型文を中心に－（第95図）

有文土器については、各種文様によりB～G群に分けた。それぞれ山形文（B群）・ポジティヴ楕円文（C群）・格子目文（D群）・異形文（E群）・撚糸文（F群）・爪形刺突様文（G群）となる。B群が一番多く、次いでC群→D群→F群→E群→G群と続く。口縁部に着目すると、口縁部文様を有さないもの（１：B～G１群）と口縁部文様を有するもの（２：B～G２群）に大別できる。また、押型文・撚糸文土器に関しては外面のみに施文するもの（a類）と内面にも施文するもの（b類）に細分できる。本節においては量的に充実している山形文口縁部74点について検討を行った。

第３節－１：B１群について

本報告書におけるB１群は74点中31点であって、第３層から６点、第４層から10点出土している。31点中、a類が11点（第３層中３点、第４層中４点）、b類が20点（第３層中３点、第４層中７点）であり、口縁部無文の山形押型文土器では内外面に施文するものが多い傾向がある。a類は胎土に繊維を混入させるものが大多数であるが、b類は砂質の傾向が強い。いずれも刈谷我野遺跡で製作・消費されたものとして考えた場合、両者には土器の生地を準備する時点での差、つまり製作技法の差があるため、時間差を考慮すべきである。

第３節－２：B２群について

本報告書におけるB２群は74点中43点であって、第３層から14点、第４層から20点出土している。a類とb類に分けられ、更に口縁部文様の施文部位が外面施文（Ⅰ種）・上面施文（Ⅱ種）・内面施文（Ⅲ種）に分けられる。各種の文様も、直行文（ⅰ）・左斜行文（ⅱ）・刺突文（ⅲ）・柵状文（ⅳ）に分けられる。

B２群a類はⅠ種が２点（第４層中２点）、Ⅱ種が３点（第３層１点、第４層中１点）、Ⅲ種が８点（第３層中１点、第４層中６点）であって、内面施文（３種）が卓越する。Ⅰ種は左斜行文（ⅱ）のみ見られる。Ⅲ種のうち２点が直行文（ⅰ）ないしは刺突文（ⅲ）であり、６点が左斜行文（ⅱ）である。よって内面施文で左斜行文を有するものが卓越すると言える。

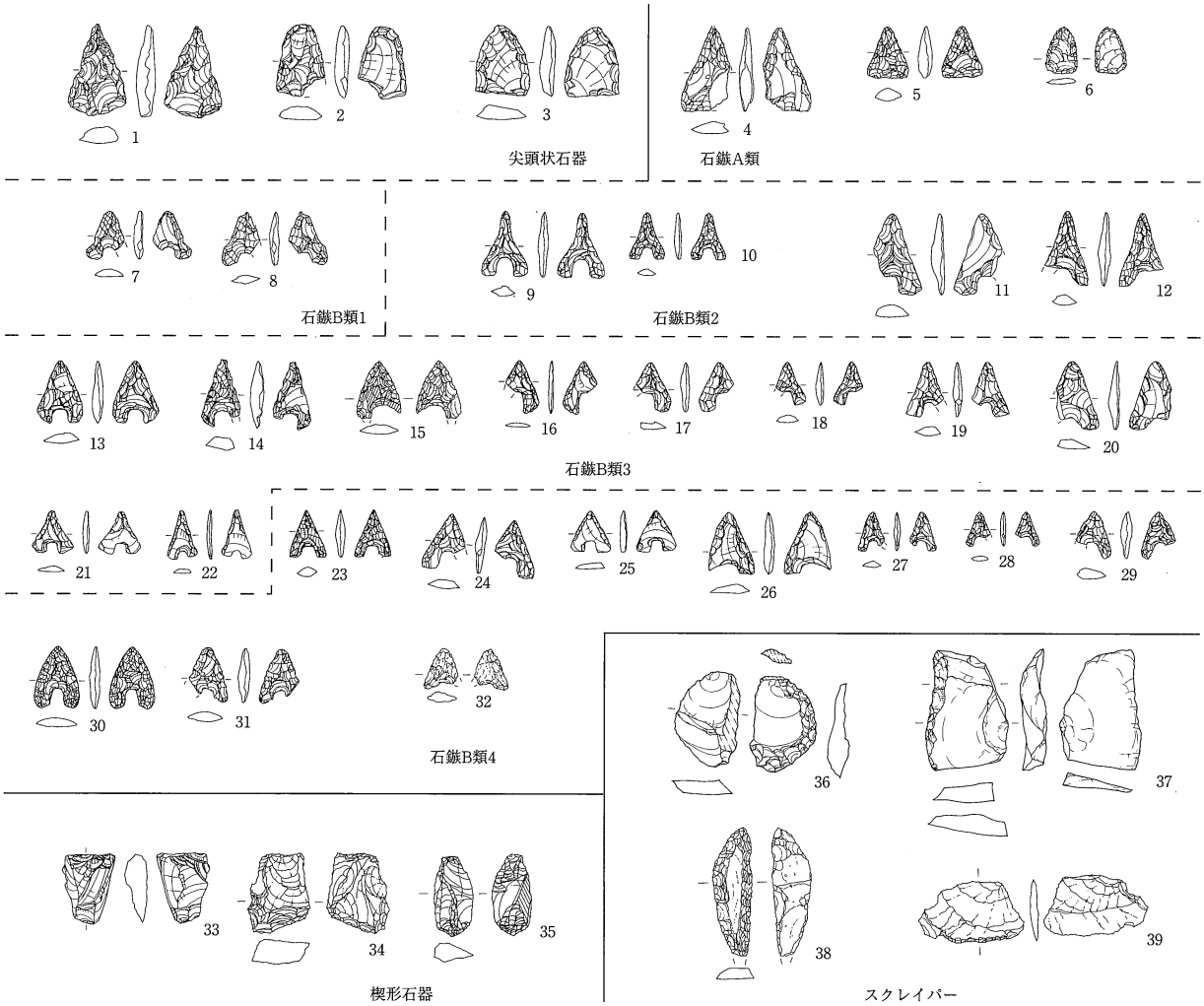
B２群b類はⅡ種が４点（第３層中１点、第４層中２点）、Ⅲ種が20点（第３層中11点、第４層中９点）である。Ⅲ種に関してはⅱが10点、ⅳが10点であって、左斜行文と柵状文の間に大差は見られない。

B群については、口縁部文様の発生とその変遷が考えられる。それは時間や系統に違いがあることを示唆しており、幾つかの段階を設定することが可能である。

第４節　刈谷我野遺跡の剥片石器について（第96図）

刈谷我野遺跡から出土した石器には剥片石器と礫石器があるが、これまで行われた調査全体での両者の出土量は前者が69点、後者が132点である。よって、礫石器とりわけ磨石・敲石や石皿・台石といった、一般的にドングリや地下茎などに代表される植物資源を加工するための道具として解釈されている石器が卓越していると言える。この様相は、これまで調査が行われてきた飼古屋岩陰

第95図　刈谷我野遺跡有文土器(B・C群)分類図



第96図　刈谷我野遺跡　剥片石器分類図

遺跡や開キ丸遺跡とは全く異なるものであり、石鏃等の剥片石器が多い飼古屋岩陰遺跡と開キ丸遺跡に対して、刈谷我野遺跡の礫石器の多さは群を抜いている。このことは飼古屋岩陰遺跡・開キ丸遺跡と刈谷我野遺跡では、縄文人の活動が異なっていた可能性つまり土地利用のあり方に違いがあったことを如実に示しているものであり、当遺跡で数多くの遺構が検出されたことからもそのことがうかがい知れる。

表面採集及び第３・４層一括出土のものを排除して考えると、第３層は剥片石器の比率が高く、平成15年度調査遺物集中群及び第４層では礫石器の比率が高い。

剥片石器として使用されている石材はサヌカイトが多数であり、その次にチャートや水晶が見られるが、チャートは遺跡近辺で採取可能である。サヌカイト及び水晶は遺跡近辺で採取するのは困難であって、とりわけサヌカイトに関しては確実に遠隔地からの搬入である。開キ丸遺跡から出土した石鏃の産地同定では、香川県金山東産の可能性が指摘されている（藁科2002）。本報告書では理化学分析による産地同定は出来なかったが、肉眼観察による開キ丸遺跡出土遺物及び香川県金山原産地との比較により、金山産サヌカイトとして認定した。これら剥片石器は狩猟具である尖頭状石器（１～３）・石鏃（４～32）と解体具である楔形石器（33～35）・スクレイパー（36～39）に大

別できる。

尖頭状石器に関してその大きさは石鏃と比較しても剝離が大きく粗い。そして法量も石鏃より3～5割ほど大きい。よって、石鏃とは異なった製作技術ないしはその機能があったことが考えられる。また、第4層でしか出土しておらず、その時期については限定されてくる可能性が指摘できる。

石鏃については平基式（A類）と凹基式（B類）に分けられる。A類（4～6）は極めて少なく、形態上は尖頭状石器と類似するものがある。しかしその剝離技術は石鏃同様に細かく緻密であるため、石鏃に含めた。B類（7～32）はその形態に着目し、3種に細分している。まずB類1種（7・8）であるが、脚部根元に比較的大きな剝離を行って抉りを作出している。B類2種（9～12）はアルファベットの「Y」に似た形状を呈するものであり、先端と脚部間が内に反るような曲線を描くように製作している特長を有する。B類3種（13～20）はアルファベットの「V」に似た形状を呈するものであるが、脚部に特徴があり、最大幅部から広角で内側へ向かう剝離を行うもの（ⅰ：13～20）とそれに比べて狭角で内側へ向かう剝離を行うもの（ⅱ：23～32）に分けられる。B類3種ⅰは二等辺三角形の傾向が強いのに対して、B類3種ⅱは比較的正三角形に近い傾向が見られる。そして、トロトロ石器を模倣した石鏃（30）もB類3種ⅱの範疇として理解したい。

第5節　刈谷我野遺跡の礫石器について（第97・98図）

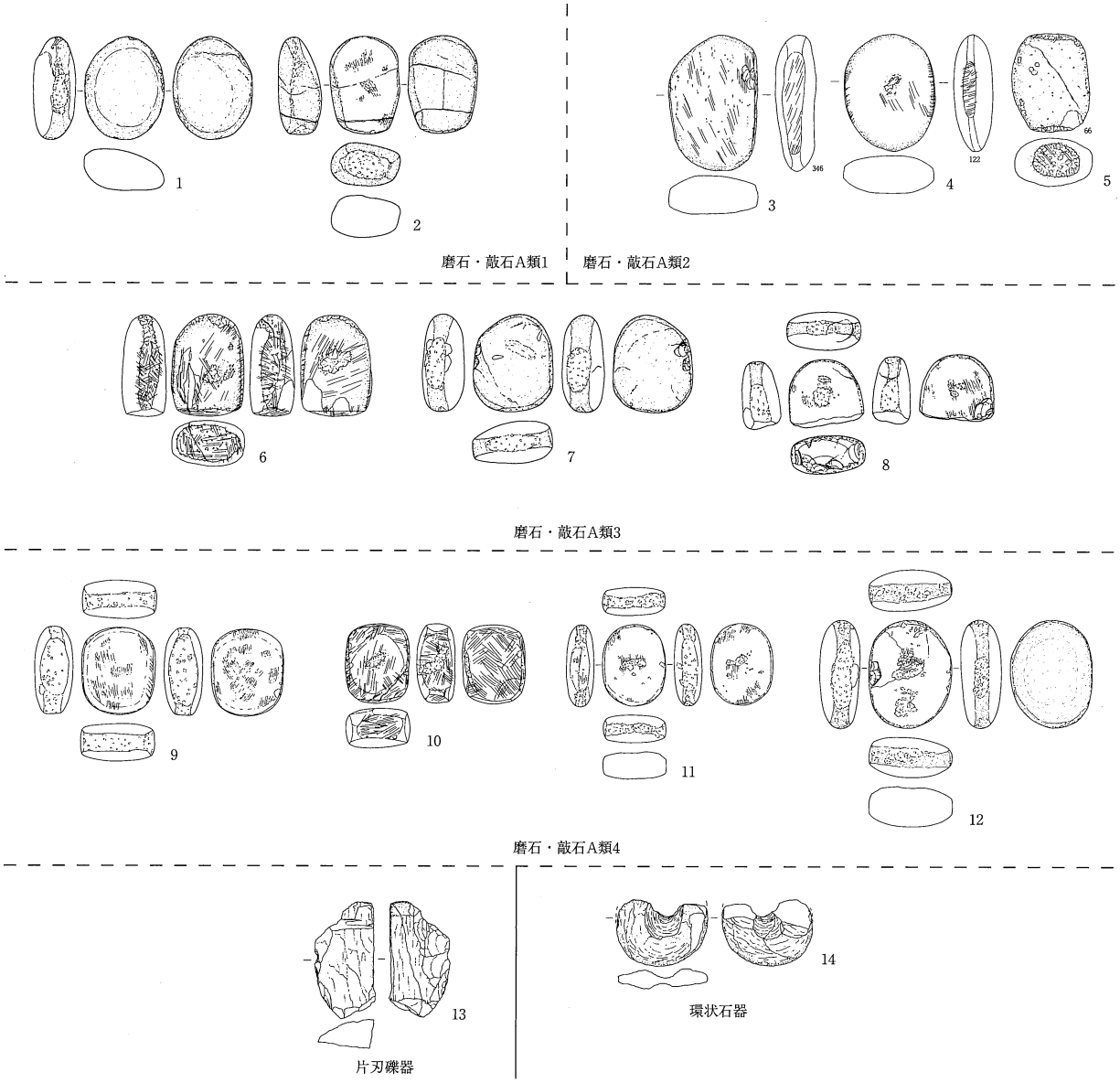
当遺跡で磨石・敲石及び石皿・台石が多いことは既に記述しているが、平成15年度調査で検出されたSK2から礫器と環状石器（『刈谷我野遺跡Ⅰ』で環状石斧としたもの）が1点ずつ出土しているため、礫石器の中には少なくとも石皿・台石の他に4つの器種があることが明らかとなっている。

磨石・敲石に関しては両者の境が不鮮明なもの、つまり1つの器種に“敲く”と“磨る”という2つの機能を有するものが大半を占めるために両者を分離させず、共に扱った。磨石・敲石には側縁に明瞭な加工面を有するものと有さないものがあり、前者をA類、後者をB類とした。両者の傾向として、A類は第4層にほぼ限定されるのに対して、B類は3層と遺物集中にほぼ限定されてくる。

本節においてはA類に着目し、側縁に明瞭な加工面を幾つ有するかで細分した（第97図）。A類1種は1面、A類2種は2面、A類3種は3面、A類4種は4面である。4面の明瞭な加工面を有するA類4種はその形状が方形ないしは隅丸楕円となり、他のA類1～3種と比べて定型化されていることを特徴とする。

各種の出土傾向を見ていくと、4類は確実に第4層に限定され、その層で主体となる。そして第3層における明確な出土は確認できていない。また1～3類は第4層でも少量見られるが、第3層及び遺物集中群において主体となるのはB類であって、第4層と第3層及び遺物集中群には有意な差が観察できる。

A類とりわけ4種に関しては「石鹸形磨石」として認定されるが、この形態を示す磨石は九州から近畿地方まで分布しており（第98図）、その所属時期は縄文時代早期前葉に限定されてくることが明らかとなっている（松本2006）。また、その起源を巡っては南九州での出現が全国でも先んじており、鹿児島県上野原遺跡（八木澤2002）や建昌城跡（深野2005）で見られるように縄文時代早

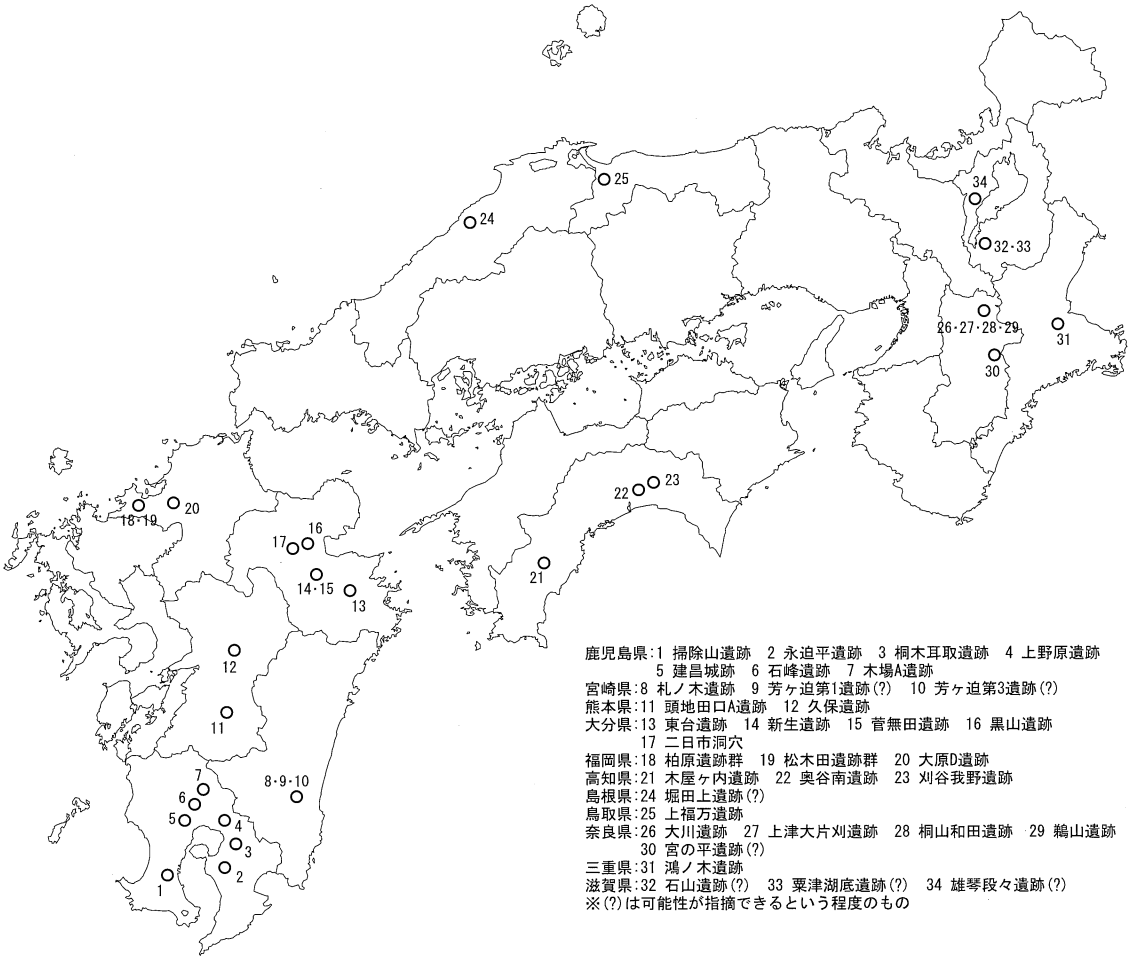


第97図　刈谷我野遺跡　礫石器分類図（磨石A類・片刃礫器・環状石器）

期前葉に南九州を中心に全盛期を迎え、そこから西へ広がっていることが指摘できる。この現象は、刈谷我野遺跡の磨石A類及び多量に出土した無文土器の出自と時期を考えるうえで重要である。

この石器の機能を巡っては、三重県鴻ノ木遺跡において細粒砂岩という石材に固執しており斉一性の高い形状であることが指摘されており、堅果類の調理・加工の他に皮鞣しという特殊な用途が既に想定されている（大下・久保1998）。刈谷我野遺跡でも石材の選択及び形状の斉一性は全く同じである。しかし、刈谷我野遺跡から出土したものには緻密な擦痕が認められることからして、加工対象をきめ細かく磨り潰す機能があったことを考慮すべきであるが、楔形石器の使用痕と考えられる溝状の敲打痕が認められることからして携帯目的の台石の機能も指摘したい。

今回の調査で一点の片刃礫器（13）が確認された。この器種は東九州では早水台式の石器組成に含められるとする研究がある（町田2003）。今回の調査では貴重な資料となったが、本遺跡の石器



第98図　磨石A類出土遺跡分布図

組成及び土器が東九州の類例と対比できる以上、刈谷我野遺跡の礫器保有数はもっと多い可能性が指摘できる。また、環状石器については九州押型文土器前後に伴う可能性が既に指摘されている(町田2003)。平成15年度調査SK 2から環状石器が出土しているが、共に出土した土器の時間幅が広いためどの段階に伴うのかは不明である。しかし、鳥取県上福万遺跡よりも古く、現在のところ西日本で最古の出土例と言える（遠部2006a)。

第6節　南四国における縄文時代早期の様相についてⅡ
－刈谷我野式の提唱とその意義－

これまでの学史とその問題点及び遺構については先に検討が加えられているので、そちらを参照願いたい（松本2005a・b、兵頭2006)。本節においては土器編年を構築することにより、遺跡の年代幅を示したいと思う。

西日本では押型文土器に多量の無文土器が伴うという先学の指摘（樋口1936）に従ってきた経緯があり、高知県では「不動ヶ岩屋Ⅱ式」(岡本1968）や「飼古屋Ⅱ式」(森田1983）がその指摘に従って型式設定されている。

刈谷我野遺跡における傾向は一見その指摘どおりであるが、当遺跡は新たな問題点を提示した。①無文土器は細分できるということ、②押型文土器は細分できるということ、③細分した両者は常に併行関係にあるのかないのか、という点である。つまり、押型文土器と無文土器が細分できる以上、両者の関係について再検討が迫られることを意味する。

第６節－１：無文土器の変遷

第２節で詳述したとおり口縁部無文のＡ１群と口縁部有文のＡ２群に大別が可能であると同時に、口縁部が直立・内傾するものと外傾・外反するものが確認できる点など、そこには変遷が想定できる。

刈谷我野遺跡で出土した無文土器の起源について探る場合、南四国はもちろん中国・近畿地方を概観しても無文土器を多量に出土する遺跡は確認されていないため、これらの地方に系譜を求めることはできない。しかし、大分県二日市洞穴（橘1980、竹野・綿貫編2004）の層位及び無文土器の底部形態の変遷が読み解かれており、東九州を中心に縄文時代草創期末から縄文時代早期前葉にかけての無文土器に関する編年構築が進んでいる（綿貫1999・2003)。刈谷我野遺跡の無文土器はその編年と対比させて考えることができる。

東九州編年によると、現在のところ一番新しい型式は陽弓式とされている。この土器型式の特徴は尖底であり、胴部中ほどよりやや上の部位で最大径を有し、口縁は内傾する。これらの特徴は刈谷我野遺跡における無文土器とりわけＡ１群ｉと極めて類似する。

しかし、陽弓式には口縁部外面を中心に“こぶ”状の突起を有するものが一定量認められるのに対し、刈谷我野遺跡から出土した無文土器には一切認められない。また、陽弓式及びそれに先行する土器には口縁部文様がほとんど認められないのに対して、刈谷我野遺跡における無文土器とりわけＡ２群は口縁部文様を有しており、その一群が主体になることは既に指摘したとおりである。つまり、陽弓式と刈谷我野遺跡の無文土器全体の間には地域差はもちろん時間差も指摘できる。

先に指摘した“こぶ”状の突起は北九州から東九州にかけて分布し、草創期末～早期初頭の柏原式（大塚1991）を起源に持つと考えられる。柏原式に認められる口縁部下の円形刺突は長期間にわたって存続したことが指摘されており（綿貫1999)、“こぶ”と刺突を合わせて柏原的技法とする見解がある（遠部2004)。

この“こぶ”状の突起は口縁部が直立・内傾する土器には必要であったものという指摘があるが(遠部2003b)、口縁が外反・外傾することによって“こぶ”状の突起を作出する必要が無くなったと考えた場合、刈谷我野遺跡の無文土器全般が陽弓式と同時期ないしは陽弓式に後続する可能性が指摘できる。また、口縁部下の円形刺突が認められず、器面調整がナデ主体である以上は刈谷我野遺跡の無文土器が陽弓式より遡る可能性は極めて低い。

現在のところ東九州で陽弓式に後続する無文土器は明らかになっていない。また、中四国地方においても蔦島式（樋口1936）とされる無文土器が型式設定されているが、その実態は極めて不鮮明であって、早期前葉から中葉にかけての様相は広島県帝釈峡遺跡群における神宮寺式の出土（矢野2003）といった断片的な遺跡の確認はされているものの、広域的にはほとんど白紙であるといっても過言ではない。このような状況で刈谷我野遺跡から出土した多量の無文及び山形文土器群は、南

四国において初めて確認された土器群であって、早期前葉でも限りなく中葉に近い時期に帰属し、その白紙の状態を打破する可能性を秘めている。

ここからA群の変遷について考えてみる。遺跡間の比較を行った場合、刈谷我野遺跡と重複する時間を部分的に有する開キ丸遺跡では刈谷我野遺跡におけるＡ２群cⅡ類が多数であって、他の群とりわけＡ１群は完全に欠落している。つまり、Ａ１群とＡ２群cⅡ類の間には時間差が考えられるため、無文土器群におけるＡ２群cⅡ類単独の段階が存在する可能性が指摘でき、刈谷我野遺跡SK19・32（『刈谷我野遺跡Ⅰ』参照）からもそのことがうかがい知れる。そして刈谷我野遺跡平成17年度調査遺物集中１からはＡ２群cⅡ類とＡ２群cⅢ類が共伴することから、口縁部内面に左斜行文を有するものと右斜行文を有するものの間には時期差は考えられない。ただし、左斜行文が卓越するのは既に指摘したとおりである。

問題はＡ２群cⅠ類ｉである。口縁が直立ないしはやや内傾する傾向が見られ、口縁部内面にスタンプ状刺突文を有している。また、陽弓式と比べると器厚は著しく厚く、胎土に多量の繊維を混入させるといった、極めて個性的な特徴を有する。口縁部無文から口縁部有文へと移り変わり、器形が直立・内湾から外傾・外反する変遷が考えられる以上、Ａ２群cⅠ類ｉは陽弓式の特徴を継承しながらも、口縁部文様という新しい要素を取り込んだ土器として解釈し、Ａ１群とＡ２群cⅡ・Ⅲ類の間に位置づけるのが妥当である。ただし、Ａ２群cⅠ類ⅱとしたものについては、口縁が外傾・外反しているが、胎土に繊維を多量に混入させる点と器厚が著しく厚い点を鑑み、Ａ２群cⅠ類ｉと同じ時間を共有するものとして理解したい。おそらくはこの段階から口縁が外傾・外反するものが顕在化してくるのであろう。そしてＡ１群ⅱも胎土と器厚の特徴からＡ２群cⅠ類に共伴するものとして考えたい。

ところで外面施文の一群（Ａ２群a類）・上面施文の一群（Ａ２群b類）であるが、前者の口縁の傾きを観察するに直立・内湾するように見える。また、後者の口縁部の傾きを観察するに直立・内湾から外傾・外反への過渡期にあるように思える。口縁部の傾きから考えると、口縁部文様が顕在化するのはおおよそこの段階に絞られてくる可能性が指摘できる。

つまり、刈谷我野遺跡においては東九州に伝統的に見られる口縁部無文の無文土器と類似する土器が存在しており、独自に口縁部内面施文を成立させた可能性が指摘できる。その後、口縁が外傾・外反するに従って、口縁が直立・内湾していた時に内面に施されていたスタンプ状刺突文が直行文化し、それが斜行文に変遷していったとして解釈するのが妥当と考える。

第６節－２：押型文土器の変遷－山形文を中心に－

第３節で詳述したとおりに細分が可能であり、そこには変遷が想定できる。とりわけＢ２群b類Ⅲ種ⅳの位置づけが問題となってくる。これは内外に山形文を施文し、口縁部内面に柵状文を有することから黄島式ないしは早水台式と認定できる一群であるが、この群は第３層及び平成15年度調査SK２のみに比較的多い出土が見られ、第４層では主体とはならない。よって、それ以外の山形文とは明確に区別すべきであって、Ｂ２群b類Ⅲ種ⅳで構成される段階が存在した可能性を考慮しなければならない。

第４層ではＢ２群b類Ⅲ種ⅳ以外のものが混在して出土しているため、これ以上それぞれの傾向

を層位で追うことは困難である。そこで刈谷我野遺跡平成15年度調査SK１・17・19・32・35（『刈谷我野遺跡Ⅰ』参照）及び刈谷我野遺跡平成17年度調査遺物集中１を引き合いに出す。これらの遺構にそれぞれ一括性を認定した場合、Ｂ２群b類Ⅲ種は含まれないため、これらとＢ２群a類及びＢ１群とは明確に区別できる。Ｂ２群b類Ⅲ種ⅱの内面斜行キザミは柵状文の祖形と考えられるため、黄島式ないしは早水台式に該当するＢ２群b類Ⅲ種ⅳに先行させ、それとＢ２群a類及びＢ１群の間に位置づけるのが妥当である。Ｂ２群b類Ⅱ種に関しても、その文様構成及び器厚や胎土の特徴から、Ｂ２群b類Ⅲ種ⅱと同じ時間を共有するとして理解したい。

次にＢ１群a・b類とＢ２群a類の関係を紐解くのに、Ｂ２群a類における口縁部文様の出現とＢ１群b類における内面施文の出現という現象に着目したい。つまりＢ１群a類に見られるように外面施文が基礎になければそれ以降の土器群が成立しえないことを想定したものであって、Ｂ１群a類（外面施文）・Ｂ１群b類（内外施文）→Ｂ２群a類（外面施文＋口縁部上外面キザミ・刺突）→Ｂ２群b類Ⅱ種（内外施文＋口縁部上面キザミ）・Ｂ２群b類Ⅲ種ⅱ（内外施文＋口縁部内面斜行キザミ）→Ｂ２群b類Ⅲ種ⅳ（内外施文＋口縁部内面柵状文）という変遷が考えられる。

この変遷を考えるにあたって、Ｂ２群b類については既述のとおりであるが、焦点となるのは口縁部文様の出現である。それについては刈谷我野遺跡SK１・19・32・35（『刈谷我野遺跡Ⅰ』参照）から紐解くことが可能である。これらの遺構にそれぞれ一括性を認定した場合、SK１から出土した山形文には口縁部文様は認められない。それに対してSK19からは口縁部に上面施文と外面施文を有する山形文が認められ、SK32からは不鮮明ながらも口縁部内面に施文を有する山形文が認められる。このことはＢ１群a・b類とＢ２群a類が時期的に分けられ、Ｂ１群a・bがＢ２群の類より先行する可能性を示すものである。

次にＢ１群a類とＢ１群b類についてである。SK35（『刈谷我野遺跡Ⅰ』参照）では外面施文つまりa類しか確認できないため、b類とは時期差があることが考えられる。また、その施文も前面に施されるものではなく、部分的に施されている可能性も考えられる。大分県新生遺跡（栗田1984）・市場久保遺跡（長田1996）・手崎遺跡（坂本1998）では内面無文つまりa類の帯状山形文が存在することが明らかになっており、これらと対比することが可能である。

第６節－３：刈谷我野式の提唱とその意義－無文土器と押型文土器の関係－

刈谷我野遺跡における炭素14年代測定においては、8600^{14}CBP前後の値と8860～8880^{14}CBPの値が測定されており、少なくとも２時期に区分されることが指摘されている（小林2006）。しかし、刈谷我野遺跡における遺物量の多さとその多様性を鑑みるとき、２時期という限定された時間ではなく、少なくとも両年代間の200～300年弱という年代幅を持った可能性を考慮したい（松本2006c）。つまり、刈谷我野遺跡の調査を今後新たに進める場合、層位・遺構を見極めてそれを十分に反映できる調査を行う能力が必要なのはもちろんであるが、8600^{14}CBP前後の値と8860～8880^{14}CBPの値の年代間を埋める可能性ないしはそれ以上の年代学的意義のある遺物及び炭化物が出土する可能性を十分に念頭に入れなければならないことを意味する。そして炭化物に関してはそれが人類の活動の結果である可能性が強く指摘できる以上、それらの層位を押さえた上での遺跡空間における分布の記録とそれらの年代測定は、遺跡の持つ年代幅と遺跡を残した人々の実態に迫ることを意味するの

であって、遺跡保存とそれに対する公的な説明責任という観点からも、その調査の必要と意義は十分にあることを指摘しておく。

さて、刈谷我野遺跡から出土した土器の多様性を鑑み、『刈谷我野遺跡Ⅰ』においては山形文を中心に刈谷我野Ⅰ期（SK17・35段階）→刈谷我野Ⅱ期（SK19・32段階）→刈谷我野Ⅲ期（SK１段階）→刈谷我野Ⅳ期（SK２段階）という四期区分を行った。その後、刈谷我野Ⅲ期のSK１出土遺物に再考を加え、刈谷我野Ⅰ（SK17・35段階）・Ⅲ期（SK１段階）→刈谷我野Ⅱ期（SK19・32段階）→刈谷我野Ⅳ期（SK２段階）という三期区分を提示した（松本2006d）。

これまでの２つの時期区分案において重視した点は、“山形紋盛行期”（赤塚2003）の存在と無文土器の関係性である。そして、両者の特徴とその組み合わせによって、“山形紋盛行期”が複数の段階に分けられる可能性が指摘できるようになってきた。これらの段階は黄島・早水台式に先行するものであって、“プレ・黄島式”として位置づけることができる。

この“プレ・黄島式”について、「刈谷我野式」という新型式を設定したい。これは押型文土器・無文土器といった個々の器種に対する型式設定ではなく、「様式」の概念に沿う型式設定であって、無文土器と押型文土器の組み合わせで成り立つ型式である。

この刈谷我野式は、旧稿における刈谷我野Ⅰ～Ⅲ期を包括したものであって、矢野編年１期（矢野1997）・兵頭編年Ⅰ期（兵頭2003）・山芦屋１～４期（熊谷2006）が該当しよう。尚、旧稿の刈谷我野Ⅳ期に関しては稲荷山式・黄島式・早水台式の範疇として理解し、ポジティヴ楕円文が一定量を占めるために“山形紋盛行期”以降の土器群として解釈できる。よって刈谷我野式の範疇から外すのが適切と考えて除外した。

さて、圧倒的多数の無文土器と少数の山形文を主体とする“プレ・黄島式”押型文土器の組成で成り立つ刈谷我野式であるが、本報告書で細分してきたとおりに段階設定が可能であると考えており、刈谷我野式１期→刈谷我野式２期（SK35）→刈谷我野式３期（SK１・17）→刈谷我野式４期（SK19・32）という変遷案を、それぞれの遺構出土資料に一括性を認めた上で提示したい。各期のおおよその傾向とその変遷については既述したとおりである。

刈谷我野式１期に関しては、刈谷我野式２～４期から除外した無文土器すなわちＡ１群及びＡ２群b類・ｃⅠ類を包括する。東九州の遺跡を管見する限り、外面施文の山形文が極少量伴うと考えられるが、遺構ないしは層位からその山形文を抽出するのが困難であったため、今後の調査の蓄積とその検討に委ねたい。

そして土器の製作技術は無文土器であるのに押型文を有する器厚の厚い土器が少なからず確認された。文様は山形文に限定され、無文土器と山形文の特徴を併せ持つことから両者間に“器種間交渉”が発生したことが指摘できる。これらは外面のみに施文が見られ、口縁部内面に左斜行文を有すること及び口縁部無文のものも存在する可能性が捨てきれないことから、ある程度の時間幅を持たせて刈谷我野式２・３期の範疇に納まるものとし、刈谷我野式２・３期までを南四国における“押型文土器出現期”として理解したい。

刈谷我野式１期において無文土器が圧倒的多数の状況の中で外面施文の山形文が伝播し、それが受容される中で両者の境界が曖昧になった結果として“器種間交渉”が発生し、それ以後は山形文

を中心に押型文土器全体が増加傾向を示すことが考えられるのである。刈谷我野遺跡の絶頂期は出土数の多さからして刈谷我野式４期の段階であろう。

この刈谷我野式を器厚や胎土の繊維量などの属性に則して厳密に考えれば、その分布は南四国に限定されてくる可能性が強い。しかし、愛媛県では押型文土器を伴わない無文土器の存在が既に明らかになっており、近年の燧灘沿岸での調査・研究成果からは口縁部内面にキザミ（本報告書の左斜行文に相当）を有する無文土器に少量の押型文土器が伴う一群の存在が明らかになってきた（兵頭2005・2006）。このことは刈谷我野式２～４期と同じ段階が南四国以外にも認められることを意味する。

刈谷我野遺跡は山形文が盛行する押型文土器出現期に多量の無文土器が伴う様相を明らかにし、黄島式には全く無文土器が伴わないとは断言しないまでも、それに伴うとされた無文土器は確認できないため、黄島式と無文土器の従来のセット関係に対して再考の必要を示した。これらの様相は九州からの影響と中四国以東からの影響で成立したものではあるが、四国独自の土器文化とその社会が縄文時代早期前葉から中葉にかけて存在したことを示すものであり、先に指摘した中四国地方の空白期間を埋めるものである。今後は数々の遺跡で不明な一群とされてきた早期無文土器の存在に注視し、それを序列化する作業が必要である。

参考・引用文献

赤塚亨　2003　「押型紋と無紋土器の関係について（予察）」　『利根川』24・25：215－219頁　利根川同人
大下明・久保勝正　1998　「Ⅶ考察　3.石器群の評価と問題点」　『鴻ノ木遺跡（下層編）』：238－256頁　三重県埋蔵文化財センター
大塚達郎　1991　「九州地方の縄紋草創期編年と泉福寺洞穴」　『縄文時代』2：143－154頁　縄文時代研究会
岡本健児　1968　「第一節 高知県の縄文式土器型式編年論」　『高知県史考古編』：17－71頁　高知県
遠部慎　2003a　「黄島貝塚再考」　『立命館大学考古学論集』Ⅲ：15－30頁　立命館大学考古学論文集刊行会
2003b　「九州における出現期押型文土器概観－赤塚亨氏に対するコメントにかえて－」『利根川』24・25：220－224頁　利根川同人
2004　「九州における押型文土器出現期（予察）」　『古代』第144号：1－20頁　早稲田大学考古学研究会
2006a　「瀬戸内地域における縄文時代早期の諸問題－高知県香美市刈谷我野遺跡を中心に－」『第17回中四国縄文研究会　早期研究の現状と課題－前葉を中心に』：93－104頁　中四国縄文研究会
2006b　「瀬戸内海最古の貝塚－豊島礼田崎貝塚の再評価とその現代的意義－」　瀬戸内海研究フォーラム
木村剛郎　1978　『高知県梼原の縄文遺跡と遺物』　土佐考古学叢書１
1987　『四万十川流域の縄文文化研究』　幡多埋文研
1995　『四国西南沿海部の先史文化』　幡多埋文研
熊谷博志　2006　「智頭枕田遺跡の編年的位置付け－黄島式の成立過程について－」『第17回中四国縄文研究会　早期研究の原状と課題－前葉を中心に』：18－50頁　中四国縄文研究会
栗田勝弘　1984　『新生遺跡　野津川流域の遺跡Ⅴ』　大分県野津町教育委員会
小林謙一　2006　「AMS14C年代測定による縄紋時代草創期・早期の年代研究」『九州縄文時代早期研究ノート』第４号：10－14頁　九州縄文時代早期研究会
小林麻由　2002　『開キ丸遺跡』　土佐山田町教育委員会
坂本嘉弘　1986　『菅無田遺跡　野津川流域の遺跡Ⅶ』　大分県野津町教育委員会
1998a　「２.縄文時代の包含層　包含層出土土器」『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　日田市高瀬遺跡群の調査２』：111頁　大分県教育委員会
1998b　「東九州の押型文土器研究の現状と課題」『九州の押型文土器－論巧編－』：25－44頁　九州縄文研究会
竹野孝一郎・綿貫俊一編　2004　『大分県二日市洞穴 分析編』　大分県九重町教育委員会
橘昌信　1980　『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』　別府大学付属博物館
出原恵三　1991　『美良布遺跡』　香北町教育委員会

敦賀啓一郎　2006　「中国・四国地方における縄文時代早期の石器－石器組成の分析を中心に－」
『第17回中四国縄文研究会　早期研究の現状と課題－前葉を中心に』：72－92頁　中四国縄文研究会
長田大輔　1996　『市場久保遺跡　宮原地区宅地造成事業に伴う発掘調査報告書』　大分県野津町教育委員会
畠中宏一　2005　「高知県の縄文時代早期－教材研究の補助資料として」　『土佐の教育　高知史学』第36号：10－20頁
高知県高等学校教育研究会社会科歴史部会
2006　「付編　高知県の早期について　2.高知県の縄文時代早期遺跡について」
『第17回中四国縄文研究会　早期研究の現状と課題－前葉を中心に』：111－127頁　中四国縄文研究会
樋口清之　1936　「讃岐蔦島貝塚之研究」　『史前学雑誌』第８巻１号：１－22頁　史前学会
兵頭勲　2000　「愛媛県における押型文土器について－上黒岩岩陰遺跡の資料を中心として－」
『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』　第５号：19－48頁　愛媛県歴史文化博物館
2003　「四国島の押型文土器－現状と課題－」　『利根川』24・25：225－236頁　利根川同人
2005　「福成寺・旦之上遺跡出土の縄文時代早期の土器群について」
『福成寺・旦之上遺跡－東予玉川線地域活性化道路緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
：453－468頁　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
2006　「北四国地域における早期土器研究の現状と課題」
『第17回中四国縄文研究会　早期研究の現状と課題－前葉を中心に』：１－17頁　中四国縄文研究会
2007　「押型文土器にみる縄文文化成立期の様相」『第58回歴博フォーラム縄文時代のはじまり愛媛県上黒岩遺跡の研究成果』：24－27頁　国立歴史民俗博物館
深野信之　2005　『建昌城跡』　鹿児島県姶良町教育委員会
町田勝則　2003　「押型文文化の石器を考えるにあたり」　『利根川』24・25：17－33頁　利根川同人
松村信博・山本純代　2001　『奥谷南遺跡Ⅲ』　高知県埋蔵文化財センター
松村信博・畠中宏一　2003　「南四国の押型文土器－無文土器と押型文土器をめぐって－」
『利根川』24・25：241－246頁　利根川同人
松本安紀彦　2005a　「南四国の縄文土器考（1）－物部川流域における押型文土器出現期について－」
『九州縄文時代早期研究ノート』第３号：36－47頁　九州縄文時代早期研究会
2005b　『刈谷我野遺跡Ⅰ－個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』　高知県香北町教育委員会
2006a　「考古（縄文・弥生）編」　『香北町史』：21－44頁　高知県香北町
2006b　「磨石考－石鹸形磨石の分布とその時期」
『第17回中四国縄文研究会　早期研究の現状と課題－前葉を中心に』：51－71頁　中四国縄文研究会
2006c　「高知県刈谷我野遺跡の調査成果から」
『九州縄文時代早期研究ノート』第４号：３－９頁　九州縄文時代早期研究会
2006d　「付編　高知県の早期について　3.刈谷我野遺跡の調査成果から」
『第17回中四国縄文研究会　早期研究の現と課題－前葉を中心に』：128－139頁　中四国縄文研究会
三森定男　1937　「讃岐小蔦島遺跡の研究－押型文土器に對する考察－」
『考古学論叢』第４輯：337－373頁　考古学研究会
森浩一・松藤和人　1999　『加茂谷川岩陰遺跡群』　同志社大学文学部考古学研究室
森田尚弘　1983　『飼古屋岩陰遺跡調査報告書』　高知県教育委員会
八木澤一郎　2001　『上野原遺跡 第２～７地点・第10地点』　鹿児島県立埋蔵文化財センター
矢野健一　1997　「中四国地方における押型文土器後半期の様相」
『シンポジウム押型文土器と沈線文』：167－184頁　長野県考古部会縄文時代（早期）部会
2003　「北部九州における押型文土器出現の時期－広島県帝釈峡弘法滝洞窟遺跡出土土器の検討から」
『立命館文学』第578号：126－136頁　立命館大学文学部
山崎真治　2003　「南四国の「無文土器」－兵頭氏の論文へのコメントとして－」
『利根川』24・25：237－240頁　利根川同人
綿貫俊一　1999　「九州の縄紋時代草創期末から早期の土器編年に関する一考察」
『古文化論叢』第42集：１－39頁　古文化研究会
2003　「九州の縄紋時代早期前半の土器－岡田憲一氏の原稿を読了した感想－」
『利根川』24・25：206－214頁　利根川同人
藁科哲男　2002　「第Ⅴ章　新改開キ丸遺跡出土安山岩製遺物の原材産地分析」
『開キ丸遺跡』：35－47頁　土佐山田町教育委員会

図の出典

第87～93図：筆者実測・浄書。　第94図：３・４・５・８・９・20・25・26は『刈谷我野遺跡Ⅰ』より転載。　第95図：６・11・13・15・21・24・25・28・31～33は『刈谷我野遺跡Ⅰ』より転載。　第96図：34・35・38・39は『刈谷我野遺跡Ⅰ』より転載。　第97図：３～５・６・10・13・14は『刈谷我野遺跡Ⅰ』より転載。

『刈谷我野遺跡Ⅱ』

遺 物 観 察 表

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分類	色調	備考
第5図	1	第3層	無文	口縁部	32.80	2.00	A1群ii	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：赤褐(2.5YR 4/8) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第5図	2	第3層	無文	口縁部	－	0.80	A1群i	内：褐(7.5YR 4/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：明赤褐(2.5YR 5/6)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第5図	3	第3層	無文	口縁部	－	1.80	A1群i	内：橙(7.5YR 6/6) 外：赤褐(5YR 4/8) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第5図	4	第3層	無文	口縁部	16.00	1.50	A1群ii	内：明赤褐(5YR 5/8) 外：明赤褐(5YR 5/8) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第5図	5	第3層	無文	口縁部	－	1.40	A1群ii	内：橙(2.5YR 6/8) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維量が極めて多く、0.5～1㎜大の砂粒を比較的多く含む。
第5図	6	第3層	無文	口縁部	－	1.30	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	
第5図	7	第3層	無文	口縁部	－	1.30	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を比較的多く含む。
第5図	8	第3層	無文	口縁部	－	1.20	A1群ii	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 6/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を比較的多く含む。
第5図	9	第3層	無文	口縁部	－	0.75	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第5図	10	第3層	無文	口縁部	－	0.70	A1群ii	内：灰褐(5YR 4/2) 外：にぶい赤褐(5YR 5/3) 断：褐灰(5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を比較的多く含む。
第5図	11	第3層	無文	口縁部	－	1.05	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を比較的多く含む。
第5図	12	第3層	無文	口縁部	－	0.80	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を比較的多く含む。
第5図	13	第3層	無文	口縁部	－	1.90	A1群i	内：赤灰(2.5YR 4/1) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を含む。
第5図	14	第3層	無文	口縁部	－	1.70	A1群ii	内：赤褐(5YR 4/8) 外：赤褐(5YR 4/8) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を極めて多く含む。
第5図	15	第3層	無文	口縁部	－	1.10	A1群ii	内：灰褐(5YR 4/2) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：明赤褐(2.5YR 5/6)	～0.1㎜大の砂粒を多く含む。 若干繊維混入。
第5図	16	第3層	無文	口縁部	－	1.30	A1群ii	内：赤褐(5YR 4/6) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：灰赤(2.5YR 4/2)	繊維混入。
第5図	17	第3層	無文	口縁部	－	1.30	A1群ii	内：橙(5YR 7/6) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：黒褐(10YR 3/2)	繊維混入。 1～4㎜大の砂粒を含む。
第5図	18	第3層	無文	口縁部	－	1.80	A1群i	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：灰褐(5YR 4/2)	繊維混入。 0.1～8㎜大の砂礫を含む。
第5図	19	第3層	無文	口縁部	－	1.30	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい橙(2.5YR 6/3) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第5図	20	第3層	無文	口縁部	－	1.10	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：明赤褐(2.5YR 5/6)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第5図	21	第3層	無文	口縁部	－	1.35	A1群ii	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第5図	22	第3層	無文	口縁部	－	1.00	A1群ii	内：橙(2.5YR 6/6) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第5図	23	第3層	無文	口縁部	15.70	1.00	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：明赤褐(2.5YR 5/6)	繊維混入。 0.5～5㎜大の砂礫を含む。
第5図	24	第3層	無文	口縁部	－	1.80	A1群i	内：にぶい橙(5YR 6/4) 外：にぶい橙(5YR 6/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.1～3㎜大の砂粒をわずかに含む。
第5図	25	第3層	無文	口縁部	－	1.20	A1群ii	内：橙(7.5YR 7/6) 外：橙(7.5YR 6/6) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第5図	26	第3層	無文	口縁部	－	1.40	A1群ii	内：灰褐(7.5YR 4/1) 外：赤褐(5YR 4/8) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第5図	27	第3層	無文	口縁部	－	0.70	A1群ii	内：にぶい褐(7.5YR 5/3) 外：にぶい褐(7.5YR 5/3) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	0.5～1㎜大の砂粒を含む。 薄手である。
第5図	28	第3層	無文	口縁部	－	0.60	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：明赤褐(2.5YR 5/6)	繊維混入。
第5図	29	第3層	無文	口縁部	12.20	0.70	A1群ii	内：にぶい黄橙(10YR 5/3) 外：黒褐(10YR 3/2) 断：黒褐(10YR 3/2)	繊維をわずかに含む。 ～1㎜大の砂粒を含む。
第6図	30	第3層	無文	口縁部	－	1.90	A2群cⅠ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第6図	31	第3層	無文	口縁部	23.60	1.80	A2群cⅠ類	内：にぶい橙(7.5YR 7/4) 外：橙(5YR 6/6) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 1～5㎜大の砂礫を含む。

第5表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表1

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第6図	32	第3層	無文	口縁部	－	1.80	A2群cⅠ類	内：橙(5YR 6/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を含む。
第6図	33	第3層	無文	口縁部	19.80	1.80	A2群cⅠ類	内：赤褐(5YR 4/8) 外：赤褐(2.5YR 4/8) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第6図	34	第3層	無文	口縁部	－	1.00	A2群cⅠ類	内：橙(7.5YR 6/6) 外：橙(7.5YR 6/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第6図	35	第3層	無文	口縁部	－	1.60	A2群cⅠ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：灰赤(2.5YR 4/2)	繊維混入。 ～0.1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第6図	36	第3層	無文	口縁部	－	1.40	A2群cⅠ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒をわずかに含む。
第6図	37	第3層	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅠ類	内：赤(10R 5/6) 外：赤(10R 5/6) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第6図	38	第3層	無文	口縁部	－	1.60	A2群cⅠ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 1～6㎜大の砂礫をわずかに含む。
第6図	39	第3層	無文	口縁部	－	1.80	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	
第6図	40	第3層	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅡ類	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第6図	41	第3層	無文	口縁部	－	1.50	A2群cⅡ類	内：橙(2.5YR 6/6) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第6図	42	第3層	無文	口縁部	－	1.30	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維若干。 0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第6図	43	第3層	無文	口縁部	39.40	2.00	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：褐灰(5YR 5/1)	
第6図	44	第3層	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：明赤褐(2.5YR 5/6)	繊維混入。
第6図	45	第3層	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅡ類	内：橙(7.5YR 6/6) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：赤灰(2.5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～6㎜大の砂粒を多く含む。
第6図	46	第3層	無文	口縁部	－	1.00	A2群cⅡ類	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：褐灰(10YR 6/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を比較的多く含む。
第6図	47	第3層	無文	口縁部	－	0.80	A2群cⅡ類	内：橙(5YR 6/6) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第6図	48	第3層	無文	口縁部	－	1.75	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第6図	49	第3層	無文	口縁部	－	0.80	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(5YR 4/3) 外：褐(7.5YR 4/6) 断：にぶい黄褐(10YR 5/3)	繊維混入。
第6図	50	第3層	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅡ類	内：にぶい褐(7.5YR 5/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/3) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第6図	51	第3層	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅡ類	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：にぶい橙(5YR 6/4) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第6図	52	第3層	無文	口縁部	－	0.85	A2群cⅡ類	内：橙(5YR 6/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/8) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。
第6図	53	第3層	無文	口縁部	－	0.95	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：灰褐(5YR 4/2)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第6図	54	第3層	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅡ類	内：にぶい橙(5YR 6/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒を含む。
第6図	55	第3層	無文	口縁部	－	0.80	A2群cⅡ類	内：橙(7.5YR 6/6) 外：赤(10R 5/8) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第6図	56	第3層	無文	口縁部	－	1.30	A2群cⅡ類	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：橙(2.5YR 6/8) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒をわずかに含む。
第6図	57	第3層	無文	口縁部	－	1.30	A2群cⅡ類	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：にぶい黄橙(10YR 7/4) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第6図	58	第3層	無文	口縁部	－	1.50	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/3) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/3) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第6図	59	第3層	無文	口縁部	－	1.90	A2群cⅡ類	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒を多く含む。
第6図	60	第3層	無文	口縁部	－	1.90	A2群cⅡ類	内：褐灰(7.5YR 5/1) 外：灰褐(7.5YR 5/2) 断：黒褐(2.5Y 3/1)	繊維混入。 1～5㎜大の砂礫を多く含む。
第7図	61	第3層	無文	口縁部	－	1.40	A2群cⅡ類	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第7図	62	第3層	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅡ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：赤灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。

第6表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表2

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分類	色調	備考
第7図	63	第3層	無文	口縁部	－	1.00	A2群cⅡ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第7図	64	第3層	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅡ類	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：橙(5YR 6/6) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	繊維混入。
第7図	65	第3層	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅡ類	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：明赤褐(5YR 5/6)	繊維混入。
第7図	66	第3層	無文	口縁部	－	1.35	A2群cⅡ類	内：橙(2.5YR 6/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第7図	67	第3層	無文	口縁部	－	1.00	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(5YR 4/3) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第7図	68	第3層	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第7図	69	第3層	無文	口縁部	－	1.60	A2群cⅡ類	内：にぶい橙(7.5YR 7/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：灰白(5Y 7/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第7図	70	第3層	無文	口縁部	－	0.75	A2群cⅡ類	内：にぶい黄褐(10YR 5/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：にぶい褐(7.5YR 6/3)	繊維混入。 1～3㎜大の砂粒を多く含む。
第7図	71	第3層	無文	口縁部	－	1.30	A2群cⅡ類	内：橙(2.5YR 6/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/8) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第7図	72	第3層	無文	口縁部	28.80	1.10	A2群cⅡ類	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：褐灰(10YR 6/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第7図	73	第3層	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅢ類	内：褐灰(7.5YR 4/1) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：赤褐(5YR 4/6)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第7図	74	第3層	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅢ類	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第7図	75	第3層	無文	口縁部	－	1.25	A2群cⅢ類	内：褐(7.5YR 4/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第7図	76	第3層	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅢ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：明赤褐(2.5YR 5/6)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第7図	77	第3層	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅢ類	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第7図	78	第3層	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅣ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：にぶい赤褐(5YR 4/3)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒をまばらに含む。
第7図	79	第3層	無文	口縁部	－	0.90	A2群cⅣ類	内：灰褐(5YR 4/2) 外：明赤褐(5YR 5/8) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第7図	80	第3層	無文	口縁部	－	1.50	A2群cⅣ類	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第7図	81	第3層	無文	口縁部	－	1.30	A2群cⅣ類	内：明赤褐(5YR 5/8) 外：明赤褐(5YR 5/8) 断：明赤褐(5YR 5/8)	繊維混入。 1～3㎜大の砂粒を含む。
第7図	82	第3層	無文	口縁部	29.00	1.50	A2群cⅣ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第7図	83	第3層	無文	口縁部	－	0.70	A2群a類	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第7図	84	第3層	無文	口縁部	－	0.90	A2群a類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第7図	85	第3層	無文	口縁部	30.00	1.40	A2群b類	内：橙(5YR 6/6) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：灰褐(7.5YR 5/2)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第7図	86	第3層	無文	口縁部	19.50	0.90	A2群b類	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第7図	87	第3層	無文	口縁部	－	1.70	A2群b類	内：橙(2.5YR 6/6) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：赤灰(2.5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第7図	88	第3層	無文	口縁部	－	1.40	A2群b類	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：灰褐(5YR 5/2)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第7図	89	第3層	無文	口縁部	－	1.30	A2群b類	内：赤褐(5YR 4/6) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第8図	90	第3層	無文	胴部	－	1.60	A群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第8図	91	第3層	無文	胴部	－	1.90	A群	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第8図	92	第3層	無文	胴部	－	1.90	A群	内：にぶい黄橙(10YR 6/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。
第8図	93	第3層	無文	胴部	－	1.70	A群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒をわずかに含む。

第7表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表3

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分類	色調	備考
第8図	94	第3層	無文	胴部	−	2.30	A群	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第8図	95	第3層	無文	胴部	−	1.60	A群	内：にぶい黄褐(10YR 5/3) 外：にぶい赤褐(5YR 5/3) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第8図	96	第3層	無文	胴部	−	1.10	A群	内：にぶい褐(7.5YR 6/3) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 1～7㎜大の砂礫を多く含む。
第8図	97	第3層	無文	胴部	−	1.80	A群	内：灰白(7.5YR 8/1) 外：にぶい黄橙(10YR 7/3) 断：灰(5Y 5/1)	繊維混入。 1～4㎜大の砂粒を極わずか含む。
第8図	98	第3層	無文	胴部	−	1.60	A群	内：褐灰(5YR 4/1) 外：黒(7.5YR 2/1) 断：黒(7.5YR 2/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第8図	99	第3層	無文	胴部	−	2.00	A群	内：橙(5YR 6/6) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第8図	100	第3層	無文	底部	−	2.20	A群	内：灰褐(5YR 5/2) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：褐灰(5YR 6/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第8図	101	第3層	無文	胴部	−	2.00	A群	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：灰黄褐(10YR 4/2) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第8図	102	第3層	無文	胴部	−	1.80	A群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～6㎜大の砂礫を多く含む。
第9図	103	第3層	無文	胴部	−	1.90	A群	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：灰褐(5YR 5/2)	繊維混入。 0.5～5㎜大の砂礫を多く含む。
第9図	104	第3層	無文	胴部	−	1.20	A群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/3) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第9図	105	第3層	無文	胴部	−	1.40	A群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第9図	106	第3層	無文	胴部	−	2.60	A群	内：にぶい褐(7.5YR 6/3) 外：にぶい橙(5YR 6/4) 断：褐灰(5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第9図	107	第3層	無文	胴部	−	1.65	A群	内：にぶい褐(7.5YR 7/4) 外：にぶい褐(7.5YR 5/4) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 1～2㎜大の砂粒を含む。
第9図	108	第3層	無文	胴部	−	1.90	A群	内：にぶい褐(7.5YR 6/3) 外：にぶい褐(7.5YR 6/3) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 1～3㎜大の砂粒を多く含む。
第9図	109	第3層	無文	胴部	37.20	1.65	A群	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 0.5～6㎜大の砂礫を多く含む。
第9図	110	第3層	無文	胴部	34.80	2.00	A群	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：赤褐(2.5YR 4/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒をわずかに含む。
第10図	111	第3層	無文	胴部	44.60	2.20	A群	内：にぶい橙(5YR 6/4) 外：にぶい橙(5YR 6/4) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 1～8㎜大の砂礫を多く含む。
第10図	112	第3層	無文	胴部	34.60	2.30	A群	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：にぶい褐(7.5YR 5/4) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 1～3㎜大の砂粒を含む。
第10図	113	第3層	無文	胴部	47.80	2.40	A群	内：にぶい橙(7.5YR 7/4) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第10図	114	第3層	無文	胴部	37.00	2.10	A群	内：橙(2.5YR 6/6) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～4㎜大の砂粒を多く含む。
第11図	115	第3層	無文	胴部	−	1.90	A群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第11図	116	第3層	無文	胴部	−	1.90	A群	内：灰褐(7.5YR 5/2) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：赤灰(2.5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第11図	117	第3層	無文	底部付近	19.00	1.70	A群	内：にぶい橙(7.5YR 7/4) 外：灰褐(7.5YR 5/2) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第11図	118	第3層	無文	胴部	−	0.85	A群	内：にぶい黄橙(10YR 7/2) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：赤灰(2.5YR 5/1)	繊維混入。 2～4㎜大の砂粒を含む。
第11図	119	第3層	無文	胴部	−	0.90	A群	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～5㎜大の砂礫を多く含む。
第11図	120	第3層	無文	底部付近	9.60	1.10	A群	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：にぶい褐(7.5YR 5/4) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	121	第3層	山形文	口縁部	15.40	0.70	B1群a類	内：灰褐(5YR 4/2) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：灰褐(5YR 4/2)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第12図	122	第3層	山形文	口縁部	−	0.65	B1群a類	内：灰褐(7.5YR 5/2) 外：灰褐(7.5YR 4/2) 断：にぶい褐(7.5YR 6/3)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第12図	123	第3層	山形文	口縁部	−	0.60	B1群a類	内：黒褐(10YR 3/1) 外：黒褐(10YR 3/1) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	124	第3層	山形文	口縁部	−	0.60	B1群b類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/3) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒をわずかに含む。

第8表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表4

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分類	色調	備考
第12図	125	第3層	山形文	口縁部	－	0.40	B1群b類	内：にぶい黄(2.5Y 6/3) 外：にぶい黄(2.5Y 6/3) 断：にぶい黄(2.5Y 6/3)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	126	第3層	山形文	口縁部	－	1.20	B1群b類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい橙(2.5YR 6/4) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	127	第3層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群a類 Ⅲ種ii	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：褐(7.5YR 4/3) 断：にぶい黄褐(10YR 5/4)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第12図	128	第3層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群a類 Ⅱ種	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 5/1)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	129	第3層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群b類 Ⅱ種	内：赤褐(5YR 4/6) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：にぶい赤褐(5YR 4/4)	0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第12図	130	第3層	山形文	口縁部	－	0.45	B2群b類 Ⅲ種ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第12図	131	第3層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群b類 Ⅲ種ii	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：褐(7.5YR 4/4) 断：褐(7.5YR 4/4)	0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第12図	132	第3層	山形文	口縁部	－	0.55	B2群b類 Ⅲ種ii	内：にぶい黄褐(10YR 5/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	133	第3層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群b類 Ⅲ種iv	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	134	第3層	山形文	口縁部	－	0.50	B2群b類 Ⅲ種iv	内：褐(7.5YR 4/3) 外：黒褐(10YR 3/2) 断：黒褐(10YR 3/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	135	第3層	山形文	口縁部	－	0.50	B2群b類 Ⅲ種iv	内：暗褐(10YR 3/3) 外：黒褐(10YR 3/2) 断：暗褐(10YR 3/3)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	136	第3層	山形文	口縁部	－	0.40	B2群b類 Ⅲ種iv	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：にぶい黄橙(10YR 7/4) 断：にぶい黄橙(10YR 7/4)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	137	第3層	山形文	口縁部	15.00	0.55	B2群b類 Ⅲ種iv	内：褐灰(10YR 4/1) 外：黒褐(2.5Y 3/1) 断：黒褐(2.5Y 3/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	138	第3層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群b類 Ⅲ種iv	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(5YR 5/3) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	139	第3層	山形文	口縁部	28.80	0.65	B2群b類 Ⅲ種iv	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：黒褐(7.5YR 3/1) 断：にぶい褐(7.5YR 5/4)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	140	第3層	山形文	口縁部 付近	－	0.60	B群	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：にぶい黄橙(10YR 6/4) 断：にぶい黄橙(10YR 6/4)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	141	第3層	山形文	口縁部 付近	－	0.60	B群	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：にぶい黄橙(10YR 6/4) 断：にぶい黄橙(10YR 6/4)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	142	第3層	山形文	口縁部 付近	－	0.70	B群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい黄褐(10YR 5/3) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	143	第3層	山形文	口縁部 付近	－	0.70	B群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～5㎜大の砂礫を多く含む。
第12図	144	第3層	山形文	口縁部 付近	－	0.80	B群	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：灰褐(7.5YR 4/2) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	145	第3層	山形文	胴部	－	0.80	B群	内：にぶい黄橙(10YR 6/3) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：灰黄(2.5Y 6/2)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	146	第3層	山形文	胴部	－	0.70	B群	内：橙(5YR 6/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	147	第3層	山形文	胴部	－	0.60	B群	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第12図	148	第3層	山形文	胴部	－	1.00	B群	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：褐(7.5YR 4/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	149	第3層	山形文	胴部	－	1.30	B群	内：褐灰(5YR 5/1) 外：橙(2.5YR 6/8) 断：褐灰(7.5YR 6/1)	繊維混入。 0.1～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第12図	150	第3層	山形文	胴部	－	0.85	B群	内：橙(7.5YR 7/6) 外：灰褐(7.5YR 5/2) 断：褐灰(10YR 6/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。 金雲母をわずかに含む。
第13図	151	第3層	山形文	胴部	－	0.75	B群	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：灰赤(2.5YR 4/2) 断：赤灰(2.5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第13図	152	第3層	山形文	胴部	－	0.80	B群	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：灰褐(7.5YR 5/2) 断：褐灰(10YR 6/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第13図	153	第3層	山形文	胴部	－	2.20	B群	内：橙(2.5YR 6/6) 外：にぶい橙(2.5YR 6/4) 断：褐灰(10YR 6/1)	繊維混入。 1～5㎜大の砂粒をまばらに含む。
第13図	154	第3層	山形文	胴部	－	2.00	B群	内：橙(2.5YR 6/6) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第13図	155	第3層	山形文	胴部	－	1.70	B群	内：にぶい橙(5YR 6/3) 外：にぶい赤褐(5YR 5/3) 断：褐灰(5YR 5/1)	繊維混入。 1～3㎜大の砂粒を多く含む。

第9表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表5

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第13図	156	第3層	山形文	胴部	－	1.70	B群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 1～3㎜大の砂粒を多く含む。
第13図	157	第3層	山形文	胴部	－	0.90	B群	内：赤褐(5YR 4/6) 外：赤褐(5YR 5/6) 断：にぶい褐(7.5YR 5/4)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒を多く含む。
第13図	158	第3層	山形文	胴部	－	0.80	B群	内：橙(5YR 6/6) 外：橙(7.5YR 6/6) 断：にぶい黄褐(10YR 5/3)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第13図	159	第3層	山形文	胴部	－	1.00	B群	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：黒褐(10YR 3/1)	～0.5㎜大の砂粒を極めて多く含む。
第13図	160	第3層	山形文	底部付近	16.00	0.65	B群	内：橙(2.5YR 6/6) 外：灰赤(2.5YR 5/2) 断：にぶい赤褐(2.5YR 5/4)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第13図	161	第3層	山形文	底部付近	11.80	0.80	B群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：橙(5YR 6/6) 断：にぶい橙(7.5YR 6/4)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第14図	162	第3層	ポジティヴ楕円文	口縁部	－	0.70	C1群b類	内：にぶい黄褐(10YR 5/3) 外：にぶい黄橙(10YR 6/4) 断：黄灰(2.5Y 4/1)	～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第14図	163	第3層	ポジティヴ楕円文	口縁部	－	0.50	C2群b類Ⅲ種ii	内：にぶい褐(7.5YR 6/4) 外：にぶい褐(7.5YR 5/4) 断：灰褐(7.5YR 4/2)	0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第14図	164	第3層	ポジティヴ楕円文	口縁部	－	0.40	C2群b類Ⅲ種ii	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：黒褐(5YR 3/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第14図	165	第3層	ポジティヴ楕円文	口縁部	－	0.65	C2群b類Ⅲ種iv	内：橙(7.5YR 6/6) 外：橙(7.5YR 6/6) 断：橙(7.5YR 6/6)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第14図	166	第3層	ポジティヴ楕円文	口縁部	－	0.70	C2群b類Ⅲ種iv	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：灰黄褐(10YR 4/2) 断：にぶい黄褐(10YR 5/4)	～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第14図	167	第3層	ポジティヴ楕円文	口縁部付近	－	0.70	C群	内：灰褐(7.5YR 5/2) 外：灰褐(7.5YR 5/2) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。
第14図	168	第3層	ポジティヴ楕円文	口縁部付近	－	0.70	C群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第14図	169	第3層	ポジティヴ楕円文	口縁部付近	－	0.70	C群	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：にぶい黄橙(10YR 7/4) 断：にぶい黄橙(10YR 7/4)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第14図	170	第3層	ポジティヴ楕円文	口縁部付近	－	0.50	C群	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第14図	171	第3層	ポジティヴ楕円文	口縁部付近	－	0.50	C群	内：にぶい赤褐(5YR 5/3) 外：にぶい赤褐(5YR 5/3) 断：橙(7.5YR 6/6)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第14図	172	第3層	ポジティヴ楕円文	口縁部付近	－	0.70	C群	内：にぶい黄褐(10YR 5/3) 外：にぶい黄褐(10YR 5/3) 断：にぶい黄褐(10YR 5/3)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。 金雲母を含む。
第14図	173	第3層	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.55	C群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：灰褐(7.5YR 5/2) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	繊維混入。
第14図	174	第3層	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.60	C群	内：褐灰(10YR 4/1) 外：橙(7.5YR 6/6) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	0.5～4㎜大の砂粒を多く含む。
第14図	175	第3層	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.60	C群	内：灰白(2.5Y 7/1) 外：にぶい黄橙(10YR 6/4) 断：褐灰(10YR 4/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第14図	176	第3層	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.65	C群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：にぶい赤褐(2.5YR 5/4)	～0.1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第15図	177	第3層	格子目文	口縁部付近	－	0.80	D群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：灰黄褐(10YR 5/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第15図	178	第3層	格子目文	口縁部付近	－	0.50	D群	内：橙(7.5YR 6/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：にぶい赤褐(5YR 4/4)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第15図	179	第3層	格子目文	胴部	－	0.90	D群	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：褐(7.5YR 4/3) 断：にぶい褐(7.5YR 5/3)	繊維混入。 1～3㎜大の砂粒を多く含む。
第15図	180	第3層	格子目文	胴部	－	0.70	D群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 1～3㎜大の砂粒を含む。
第15図	181	第3層	格子目文	胴部	－	0.70	D群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：灰黄褐(10YR 4/2)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第15図	182	第3層	格子目文	胴部	－	0.50	D群	内：にぶい橙(5YR 6/4) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	繊維混入。
第15図	183	第3層	格子目文	胴部	－	0.50	D群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：黄灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第15図	184	第3層	格子目文	胴部	－	0.60	D群	内：褐(7.5YR 4/3) 外：にぶい褐(7.5YR 5/4) 断：にぶい赤褐(5YR 5/4)	0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第16図	185	第3層	異形押型文	胴部	－	0.60	E群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/3) 断：灰黄褐(10YR 5/2)	～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第16図	186	第3層	異形押型文	口縁部	－	0.60	E群	内：褐(7.5YR 4/3) 外：褐(7.5YR 4/3) 断：黒褐(10YR 3/2)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。

第10表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表6

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分類	色調	備考
第16図	187	第3層	異形押型文	胴部	－	0.80	E群	内：にぶい黄橙(10YR 7/3) 外：にぶい黄橙(10YR 7/3) 断：褐灰(10YR 6/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第16図	188	第3層	異形押型文	口縁部付近	－	0.60	E群	内：にぶい赤褐(5YR 4/3) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：にぶい黄褐(10YR 5/3)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第16図	189	第3層	異形押型文	口縁部付近	－	0.60	E群	内：橙(5YR 6/6) 外：橙(5YR 6/6) 断：橙(5YR 6/6)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第17図	190	第3層	撚糸文	胴部	－	0.80	F群	内：にぶい黄橙(10YR 6/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第17図	191	第3層	撚糸文	胴部	－	0.65	F群	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第17図	192	第3層	撚糸文	胴部	－	0.85	F群	内：黒褐(7.5YR 3/2) 外：褐灰(10YR 4/1) 断：褐灰(10YR 6/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第17図	193	第3層	撚糸文	胴部	－	0.80	F群	内：灰赤(2.5YR 4/2) 外：灰赤(2.5YR 4/2) 断：灰褐(5YR 5/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第17図	194	第3層	撚糸文	胴部	－	0.60	F群	内：灰褐(7.5YR 5/2) 外：灰褐(7.5YR 5/2) 断：灰褐(7.5YR 5/2)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	法量(MAX) 全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	石材	備考
第18図	195	第3層	石鏃(B類3種ii)	1.89	1.48	0.40	0.7	サヌカイト	
第18図	196	第3層	石鏃(B類3種i)	2.18	1.51	0.39	0.7	サヌカイト	
第18図	197	第3層	石鏃(B類3種i)	1.97	1.40	0.38	0.7	サヌカイト	
第18図	198	第3層	石鏃(B類3種i)	2.10	1.35	0.20	0.3	サヌカイト	
第18図	199	第3層	石鏃(B類3種i)	2.71	1.55	0.55	1.5	チャート	
第18図	200	第3層	石鏃(B類3種ii)	1.68	1.60	0.30	0.4	サヌカイト	
第18図	201	第3層	石鏃(B類3種ii)	2.28	1.68	0.43	0.8	サヌカイト	
第18図	202	第3層	石鏃(B類3種i)	1.70	1.69	0.26	0.4	サヌカイト	
第18図	203	第3層	石鏃(B類3種i)	1.98	1.21	0.22	0.4	サヌカイト	
第18図	204	第3層	石鏃(B類2種)	3.00	1.78	0.52	1.4	サヌカイト	
第18図	205	第3層	石鏃(B類3種ii)	2.75	1.73	0.46	1.3	サヌカイト	
第18図	206	第3層	石鏃(B類3種ii)	2.53	1.84	0.44	1.7	チャート	トロトロ石器の模倣と考えられる。
第18図	207	第3層	石鏃(B類1種)	1.97	1.55	0.38	0.9	水晶	
第18図	208	第3層	石鏃(B類3種ii)	1.58	1.06	0.28	0.2	サヌカイト	
第18図	209	第3層	石鏃(B類3種ii)	2.24	1.60	0.48	1.1	チャート	
第18図	210	第3層	石鏃(B類3種ii)	2.53	1.88	0.44	1.4	サヌカイト	
第18図	211	第3層	石鏃(B類3種ii)	1.43	0.96	0.23	0.3	サヌカイト	
第18図	212	第3層	石鏃(B類3種ii)	1.88	1.57	0.28	0.7	サヌカイト	
第18図	213	第3層	楔形石器	2.90	2.15	0.99	5.1	サヌカイト	
第19図	214	第3層	磨石・敲石(B類)	10.90	0.81	3.60	460.0	砂岩	
第19図	215	第3層	磨石・敲石(B類)	9.65	6.60	4.95	450.0	砂岩	
第19図	216	第3層	磨石・敲石(B類)	10.05	9.00	4.10	530.0	砂岩	

第11表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表7

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	法量(MAX) 全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	石材	備考
第19図	217	第3層	磨石・敲石(B類)	9.70	8.90	4.10	540.0	砂岩	
第19図	218	第3層	磨石・敲石(B類)	8.70	6.90	3.90	360.0	緑色片岩	
第19図	219	第3層	磨石・敲石(B類)	20.90	7.00	4.80	991.0	砂岩	
第20図	220	第3層	台石	33.30	22.60	9.80	10000.0	砂岩	

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分類	色調	備考
第22図	221	第4層	無文	口縁部	−	0.70	A1群ii	内：黒褐(7.5YR 3/1) 外：にぶい褐(7.5YR 5/3) 断：にぶい褐(7.5YR 5/3)	0.5〜12㎜大の砂礫を含む。
第22図	222	第4層	無文	口縁部	−	1.70	A1群i	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：灰赤(2.5YR 5/2)	繊維混入。 1〜5㎜大の砂礫を多く含む。
第22図	223	第4層	無文	口縁部	−	1.40	A1群ii	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：にぶい黄橙(10YR 6/4) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維を極めて多く含む。 〜0.5㎜大の砂粒を含む。
第22図	224	第4層	無文	口縁部	−	1.40	A1群ii	内：橙(2.5YR 6/6) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：にぶい黄橙(10YR 6/3)	繊維混入。 0.5〜3㎜大の砂粒を多く含む。
第22図	225	第4層	無文	口縁部	−	0.90	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維を若干含む。 〜0.5㎜大の砂粒を含む。
第22図	226	第4層	無文	口縁部	−	1.10	A1群ii	内：赤褐(2.5YR 4/8) 外：赤褐(2.5YR 4/8) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 〜0.5㎜大の砂粒を含む。
第22図	227	第4層	無文	口縁部	−	1.10	A1群ii	内：褐灰(10YR 4/1) 外：赤褐(2.5YR 4/8) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5〜2㎜大の砂粒を多く含む。
第22図	228	第4層	無文	口縁部	−	0.80	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：灰赤(2.5YR 4/2) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5〜1㎜大の砂粒を含む。
第22図	229	第4層	無文	口縁部	−	1.10	A1群ii	内：赤褐(2.5YR 4/6) 外：赤褐(2.5YR 4/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維を若干含む。 0.5〜1㎜大の砂粒を多く含む。
第22図	230	第4層	無文	口縁部	26.20	0.70	A1群ii	内：にぶい黄橙(10YR 7/3) 外：灰黄褐(10YR 4/2) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 1㎜大の砂粒をまばらに含む。 微細な金雲母を含む。
第22図	231	第4層	無文	口縁部	−	1.40	A1群ii	内：暗褐(7.5YR 3/3) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5〜1㎜大の砂粒を多く含む。
第22図	232	第4層	無文	口縁部	−	0.60	A1群ii	内：褐灰(7.5YR 4/1) 外：褐灰(10YR 5/1) 断：褐灰(10YR 5/1)	〜0.5㎜大の砂粒を含む。
第22図	233	第4層	無文	口縁部	−	0.50	A1群ii	内：灰褐(5YR 4/2) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：灰褐(5YR 4/2)	繊維混入。 〜0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第22図	234	第4層	無文	口縁部	−	1.30	A1群ii	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：褐灰(7.5YR 4/1) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5〜1㎜大の砂粒を含む。
第22図	235	第4層	無文	口縁部	−	0.90	A1群ii	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：にぶい褐(7.5YR 5/4)	繊維混入。 1〜3㎜大の砂粒を含む。
第22図	236	第4層	無文	口縁部	−	0.60	A1群ii	内：にぶい黄橙(10YR 6/3) 外：褐灰(10YR 4/1) 断：にぶい黄橙(10YR 6/3)	0.5〜1㎜大の砂粒を多く含む。
第22図	237	第4層	無文	口縁部	−	1.10	A2群cⅠ類	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 〜0.5㎜大の砂粒を含む。
第22図	238	第4層	無文	口縁部	−	1.00	A2群cⅠ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5〜1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第22図	239	第4層	無文	口縁部	−	1.20	A2群cⅠ類	内：橙(7.5YR 6/6) 外：褐灰(7.5YR 4/1) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5〜2㎜大の砂粒を多く含む。
第22図	240	第4層	無文	口縁部	−	1.40	A2群cⅠ類	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：にぶい赤褐(2.5YR 4/4)	繊維混入。 〜0.5㎜大の砂粒を含む。
第22図	241	第4層	無文	口縁部	−	1.00	A2群cⅡ類	内：灰褐(7.5YR 4/2) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：明赤褐(2.5YR 5/6)	繊維混入。 〜4㎜大の砂粒を多く含む。
第22図	242	第4層	無文	口縁部	−	1.10	A2群cⅡ類	内：灰褐(5YR 4/2) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5〜1㎜大の砂粒を含む。
第22図	243	第4層	無文	口縁部	−	1.40	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：灰褐(7.5YR 4/2)	繊維混入。 1㎜大の砂粒を含む。
第22図	244	第4層	無文	口縁部	−	1.00	A2群cⅡ類	内：赤褐(5YR 4/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5〜3㎜大の砂粒を多く含む。
第22図	245	第4層	無文	口縁部	−	1.20	A2群cⅡ類	内：橙(7.5YR 6/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 0.5〜1㎜大の砂粒を多く含む。
第22図	246	第4層	無文	口縁部	−	1.00	A2群cⅡ類	内：赤褐(2.5YR 4/6) 外：暗赤褐(2.5YR 3/4) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。

第12表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表8

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分類	色調	備考
第22図	247	第4層	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅡ種	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第22図	248	第4層	無文	口縁部	－	1.15	A2群cⅡ種	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：灰褐(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第22図	249	第4層	無文	口縁部	－	1.00	A2群cⅢ類	内：にぶい赤褐(5YR 4/3) 外：にぶい赤褐(5YR 4/3) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～4㎜大の砂粒を含む。
第22図	250	第4層	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅢ類	内：橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/6) 断：にぶい橙(7.5YR 6/6)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第22図	251	第4層	無文	口縁部	－	0.80	A2群cⅢ類	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維を若干含む。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第22図	252	第4層	無文	口縁部	－	1.00	A2群cⅢ類	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を含む。
第22図	253	第4層	無文	口縁部	－	1.00	A2群cⅣ類	内：にぶい赤褐(5YR 4/3) 外：にぶい赤褐(5YR 4/3) 断：灰褐(5YR 4/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第22図	254	第4層	無文	口縁部	－	1.00	A2群cⅣ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第22図	255	第4層	無文	口縁部	－	1.80	A2群b類	内：橙(2.5YR 6/6) 外：橙(7.5YR 6/6) 断：明褐灰(2.5YR 7/1)	繊維混入。
第23図	256	第4層	無文	口縁部	47.40	1.60	A2群b類	内：赤褐(5YR 4/6) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第23図	257	第4層	無文	口縁部	－	1.40	A2群b類	内：灰褐(7.5YR 4/2) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。
第23図	258	第4層	無文	口縁部	－	1.20	A2群b類	内：にぶい褐(7.5YR 5/3) 外：赤褐(5YR 4/8) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第23図	259	第4層	無文	口縁部	－	1.10	A2群b類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.1㎜大の砂粒を含む。
第23図	260	第4層	無文	口縁部	－	0.90	A2群b類	内：赤褐(5YR 4/6) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：灰褐(5YR 4/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第23図	261	第4層	無文	胴部	－	2.20	A群	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第23図	262	第4層	無文	胴部	－	1.30	A群	内：にぶい橙(5YR 6/4) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：灰褐(5YR 4/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第24図	263	第4層	無文	胴部	31.20	2.10	A群	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：にぶい黄橙(10YR 6/4) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第24図	264	第4層	無文	胴部	－	2.40	A群	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：暗赤褐(5YR 3/3) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。 265・266と同一個体。
第24図	265	第4層	無文	胴部	42.60	1.90	A群	内：灰褐(7.5YR 5/2) 外：灰褐(7.5YR 4/2) 断：灰褐(7.5YR 4/2)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。 264・266と同一個体。
第25図	266	第4層	無文	底部	13.40	1.80	A群	内：橙(5YR 6/6) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 ～2㎜大の砂粒を多く含む。
第25図	267	第4層	無文	底部	4.80	1.70	A群	内：黒褐(2.5Y 3/1) 外：橙(7.5YR 7/6) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 ～1㎜大の砂粒を含む。
第27図	268	第4層	山形文	口縁部	12.60	0.80	B1群a類	内：にぶい褐(7.5YR 6/3) 外：にぶい褐(7.5YR 6/3) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第27図	269	第4層	山形文	口縁部	12.80	0.55	B1群b類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/3) 外：褐灰(5YR 4/1) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第27図	270	第4層	山形文	口縁部	24.00	0.90	B1群b類	内：赤褐(5YR 4/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第27図	271	第4層	山形文	口縁部	－	0.80	B1群b類	内：橙(5YR 6/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：橙(5YR 6/6)	繊維混入。 ～1㎜大の砂粒を含む。
第27図	272	第4層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群a類 Ⅲ種ⅰ	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：にぶい褐(7.5YR 5/3) 断：にぶい褐(7.5YR 5/3)	繊維混入。
第27図	273	第4層	山形文	口縁部	20.00	0.95	B2群a類 Ⅲ種ⅱ	内：褐灰(7.5YR 4/1) 外：灰褐(5YR 5/2) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第27図	274	第4層	山形文	口縁部	－	0.90	B2群a類 Ⅲ種ⅱ	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：灰黄褐(10YR 6/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第27図	275	第4層	山形文	口縁部	－	0.70	B2群a類 Ⅲ種ⅱ	内：橙(2.5YR 6/6) 外：灰赤(2.5YR 4/2) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	0.5～2㎜大の砂粒をまばらに含む。
第27図	276	第4層	山形文	口縁部	－	0.50	B2群a類 Ⅰ種	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(5YR 4/3) 断：褐灰(5YR 5/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第27図	277	第4層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群b類 Ⅱ種	内：黒褐(5YR 3/1) 外：黒褐(5YR 3/1) 断：灰褐(5YR 5/2)	繊維混入。 0.5～8㎜大の砂礫を含む。

第13表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表9

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第27図	278	第４層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群b類 Ⅲ種ii	内：にぶい褐(7.5YR 5/3) 外：褐(7.5YR 4/3) 断：灰褐(5YR 5/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第27図	279	第４層	山形文	口縁部	－	0.85	B2群b類 Ⅲ種ii	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：褐(10YR 4/6) 断：にぶい黄褐(10YR 5/3)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第27図	280	第４層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群b類 Ⅲ種iv	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：灰黄褐(10YR 5/2) 断：灰黄褐(10YR 4/2)	0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第27図	281	第４層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群b類 Ⅲ種iv	内：浅黄橙(10YR 8/4) 外：にぶい黄橙(10YR 7/4) 断：にぶい黄橙(10YR 7/2)	0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第27図	282	第４層	山形文	口縁部付近	－	0.50	B群	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：にぶい黄褐(10YR 5/3) 断；にぶい黄褐(10YR 5/3)	～0.5㎜大の砂粒を含む。
第27図	283	第４層	山形文	口縁部付近	－	0.70	B群	内：にぶい黄橙(10YR 6/3) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第27図	284	第４層	山形文	胴部	－	0.50	B群	内：橙(2.5YR 6/6) 外：暗赤灰(2.5YR 3/1) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維混入。
第27図	285	第４層	山形文	胴部	－	0.50	B群	内：灰黄褐(10YR 6/2) 外：にぶい黄橙(10YR 6/4) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 ～0.1㎜大の砂粒を含む。
第27図	286	第４層	山形文	胴部	－	0.75	B群	内：褐灰(5YR 5/1) 外：灰褐(7.5YR 5/2) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第27図	287	第４層	山形文	胴部	－	0.75	B群	内：褐(7.5YR 4/3) 外：褐(10YR 4/4) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第27図	288	第４層	山形文	胴部	－	1.90	B群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を含む。
第27図	289	第４層	山形文	胴部	－	0.70	B群	内：灰褐(7.5YR 5/2) 外：明褐(7.5YR 5/6) 断：灰褐(7.5YR 5/2)	～0.5㎜大の砂粒を含む。
第27図	290	第４層	山形文	胴部	－	0.80	B群	内：灰黄褐(10YR 4/2) 外：にぶい黄褐(10YR 5/3) 断：黄灰(2.5Y 4/1)	～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第27図	291	第４層	山形文	胴部	－	0.90	B群	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：灰褐(5YR 4/2)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を含む。
第27図	292	第４層	山形文	胴部	－	0.80	B群	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：にぶい褐(7.5YR 5/4) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維を若干含む。 0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第27図	293	第４層	山形文	胴部	－	0.80	B群	内：にぶい黄褐(10YR 5/3) 外：にぶい黄褐(10YR 5/3) 断：にぶい黄橙(10YR 7/3)	0.5～２㎜大の砂粒を多く含む。
第27図	294	第４層	山形文	胴部	－	0.65	B群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：橙(5YR 6/6) 断：橙(5YR 6/6)	0.5～３㎜大の砂粒を多く含む。 金雲母目立つ。
第29図	295	第４層	ポジティヴ楕円文	口縁部	－	0.60	C2群b類 Ⅲ種iv	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：にぶい黄橙(10YR 7/4) 断：褐灰(10YR 5/1)	0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第29図	296	第４層	ポジティヴ楕円文	口縁部付近	－	0.80	C群	内：にぶい黄橙(10YR 7/3) 外：にぶい黄橙(10YR 7/3) 断：褐灰(10YR 5/1)	～0.5㎜大の砂粒を含む。
第29図	297	第４層	ポジティヴ楕円文	口縁部付近	－	0.80	C群	内：灰褐(7.5YR 5/2) 外：灰褐(7.5YR 5/2) 断：褐灰(10YR 4/1)	0.5～５㎜大の砂礫を多く含む。 金雲母含む。
第29図	298	第４層	ポジティヴ楕円文	口縁部付近	－	0.60	C群	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：暗褐(7.5YR 3/3) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。
第29図	299	第４層	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.60	C群	内：にぶい黄褐(10YR 5/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：にぶい黄橙(10YR 7/4)	0.5～１㎜大の砂粒を含む。
第29図	300	第４層	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.50	C群	内：灰黄褐(10YR 5/2) 外：灰黄褐(10YR 5/2) 断：黒(N 2/)	～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第29図	301	第４層	ポジティヴ楕円文	底部付近	19.00	0.70	C群	内：明黄褐(10YR 7/6) 外：橙(2.5YR 6/8) 断：灰褐(7.5YR 6/2)	繊維混入。
第29図	302	第４層	ポジティヴ楕円文	底部付近	16.40	0.60	C群	内：にぶい黄橙(10YR 7/3) 外：褐灰(10YR 5/1) 断：浅黄(2.5Y 7/3)	～１㎜大の砂粒を多く含む。
第30図	303	第４層	組合押型文	口縁部	－	0.60	E群	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：灰黄褐(10YR 5/2) 断：褐灰(10YR 4/1)	～0.5㎜大の砂粒を含む。
第32図	304	第４層	格子目文	口縁部	－	0.60	D1群？	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/3) 断：褐灰(5YR 5/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第32図	305	第４層	格子目文	胴部	－	0.60	D群	内：にぶい黄(2.5Y 6/3) 外：灰黄褐(10YR 5/2) 断：灰黄褐(10YR 5/2)	0.5～４㎜大の砂粒を多く含む。
第32図	306	第４層	格子目文	胴部	－	0.60	D群	内：黒褐(10YR 3/1) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第32図	307	第４層	格子目文	胴部	－	1.20	D群	内：灰白(2.5Y 7/1) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：赤黒(2.5YR 2/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第34図	308	第４層	撚糸文	口縁部	22.20	0.70	F1群b類	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：灰褐(7.5YR 5/2) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～２㎜大の砂粒をわずかに含む。

第14表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表10

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第34図	309	第4層	撚糸文	口縁部	11.80	0.60	F1群b類	内：褐灰(5YR 4/1) 外：にぶい褐(7.5YR 5/3) 断：にぶい褐(7.5YR 5/3)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第34図	310	第4層	撚糸文	口縁部	－	0.60	F2群a類 Ⅱ種	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：灰褐(7.5YR 4/2) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第34図	311	第4層	撚糸文	胴部	－	0.70	F群	内：褐灰(10YR 4/1) 外：にぶい褐(7.5YR 5/3) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	法量(MAX) 全長(cm)	法量(MAX) 全幅(cm)	法量(MAX) 全厚(cm)	法量(MAX) 重量(g)	石材	備考
第36図	312	第4層	尖頭状石器	3.69	2.34	0.78	5.5	チャート	
第36図	313	第4層	尖頭状石器	2.84	2.21	0.63	3.7	サヌカイト	
第36図	314	第4層	尖頭状石器	2.92	1.95	0.58	3.2	サヌカイト	
第36図	315	第4層	石鏃(A類)	2.10	1.67	0.58	1.6	チャート	
第36図	316	第4層	石鏃(B類3種ｉ)	1.92	2.01	0.33	0.9	サヌカイト	
第36図	317	第4層	石鏃(B類3種ｉ)	2.63	1.63	0.46	1.4	サヌカイト	
第36図	318	第4層	石鏃	2.24	1.57	0.44	1.3	サヌカイト	
第36図	319	第4層	スクレイパー	3.80	2.65	0.90	9.0	チャート	
第38図	320	第4層	磨石・敲石(A類4)	9.43	7.33	3.26	346.5	砂岩	石鹸形磨石
第38図	321	第4層	磨石・敲石(A類4)	12.53	9.57	4.75	798.0	砂岩	石鹸形磨石
第38図	322	第4層	磨石・敲石(A類4)	10.25	8.56	4.45	660.1	砂岩	石鹸形磨石
第38図	323	第4層	磨石・敲石(A類2)	8.59	7.66	5.09	503.8	緑色片岩	石鹸形磨石
第38図	324	第4層	磨石・敲石(A類1)	11.33	8.08	5.04	645.1	砂岩	
第38図	325	第4層	磨石・敲石(A類2)	9.22	9.88	4.63	591.8	砂岩	
第39図	326	第4層	磨石・敲石(B類)	14.54	9.54	4.70	860.6	砂岩	
第39図	327	第4層	磨石・敲石(B類)	9.10	9.30	4.90	590.0	砂岩	
第39図	328	第4層	磨石・敲石(B類)	(6.30)	8.70	4.55	(313.0)	砂岩	
第39図	329	第4層	火きり臼？	(15.20)	(7.60)	(4.10)	(583.0)	砂岩	
第40図	330	第4層	石皿・台石	46.20	37.80	14.50	17500.0	砂岩	
第40図	331	第4層	石皿・台石	28.50	26.00	2.80	11000.0	砂岩	
第41図	332	第4層	石皿・台石	22.30	14.40	4.50	2040.0	砂岩	
第41図	333	第4層	石皿・台石	21.90	16.10	7.60	5000.0	砂岩	
第41図	334	第4層	石皿・台石	23.80	17.50	6.10	4000.0	砂岩	
第41図	335	第4層	石皿・台石	17.60	15.50	5.50	1598.0	砂岩	
第41図	336	第4層	石皿・台石	(13.80)	(10.90)	4.50	798.0	砂岩	

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第42図	337	第3・4層一括	無文	口縁部	－	1.10	A1群ii	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：黒(7.5YR 2/1)	繊維混入。 0.1～1㎜大の砂粒を多く含む。

第15表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表11

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第42図	338	第3・4層一括	無文	口縁部	−	1.3	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒をわずかに含む。
第42図	339	第3・4層一括	無文	口縁部	26.00	2.00	A2群cⅠ類	内：赤褐(5YR 4/6) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～5㎜大の砂礫を多く含む。 焼成前穿孔を有する。
第42図	340	第3・4層一括	無文	口縁部	−	0.80	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(5YR 3/4) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒を含む。
第42図	341	第3・4層一括	無文	口縁部	−	1.40	A2群cⅡ類	内：赤褐(5YR 4/6) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第42図	342	第3・4層一括	無文	口縁部	−	0.95	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 1～3㎜大の砂粒をわずかに含む。
第42図	343	第3・4層一括	無文	口縁部	−	1.10	A2群cⅡ類	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：黄灰(2.5Y 4/1)	繊維混入。 1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第42図	344	第3・4層一括	無文	口縁部	30.40	1.70	A2群cⅡ類	内：灰黄褐(10YR 5/2) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第42図	345	第3・4層一括	無文	口縁部	−	1.40	A2群cⅢ類	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：灰褐(5YR 4/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第42図	346	第3・4層一括	無文	口縁部	−	1.00	A2群cⅢ類	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第42図	347	第3・4層一括	無文	口縁部	−	0.90	A2群cⅢ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：暗灰赤(2.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第42図	348	第3・4層一括	無文	口縁部	−	1.40	A2群cⅢ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：灰赤(2.5YR 4/2)	繊維混入。
第42図	349	第3・4層一括	無文	口縁部	−	1.10	A2群cⅣ類	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒を含む。
第42図	350	第3・4層一括	無文	口縁部	−	1.30	A2群cⅣ類	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：橙(5YR 6/6) 断：浅黄橙(10YR 8/4)	繊維混入。 1～5㎜大の砂礫を含む。
第42図	351	第3・4層一括	無文	口縁部	−	0.80	A2群b類	内：灰褐(5YR 4/2) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：にぶい赤褐(5YR 5/3)	繊維混入。 0.5～6㎜大の砂礫をわずかに含む。
第42図	352	第3・4層一括	無文	口縁部	−	0.90	A2群b類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第42図	353	第3・4層一括	無文	口縁部	−	1.30	A2群b類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：灰赤(2.5YR 4/2)	繊維混入。 0.5～6㎜大の砂礫を含む。
第42図	354	第3・4層一括	無文	口縁部	−	1.60	A2群b類	内：橙(5YR 6/6) 外：橙(5YR 6/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第42図	355	第3・4層一括	ポジティヴ楕円文	口縁部	−	0.55	C群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：褐(7.5YR 4/3) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第42図	356	第3・4層一括	ポジティヴ楕円文	胴部	−	0.60	C群	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：明赤褐(5YR 5/6)	0.5～1㎜大の砂粒を含む。 金雲母を含む。
第42図	357	第3・4層一括	ポジティヴ楕円文	胴部	−	0.60	C群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：にぶい橙(7.5YR 6/4)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第42図	358	第3・4層一括	山形文	底部	14.40	0.80	B群	内：褐灰(10YR 4/1) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第42図	359	第3・4層一括	山形文	底部	6.00	1.30	B群群	内：にぶい橙(5YR 6/4) 外：灰褐(5YR 5/2) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	法量(MAX) 全長(cm)	法量(MAX) 全幅(cm)	法量(MAX) 全厚(cm)	法量(MAX) 重量(g)	石材	備考
第43図	360	第3・4層一括	石鏃(B類3種ii)	2.00	1.64	0.37	0.7	サヌカイト	
第43図	361	第3・4層一括	石鏃(B類3種ii)	2.02	1.50	0.36	0.6	サヌカイト	
第43図	362	第3・4層一括	石鏃(A類？)	2.05	1.27	0.41	0.9	サヌカイト	
第43図	363	第3・4層一括	楔形石器	2.82	2.39	0.62	4.3	サヌカイト	
第43図	364	第3・4層一括	磨石・敲石(A類2)	11.27	9.31	4.93	762.0	砂岩	
第43図	365	第3・4層一括	磨石・敲石(A類1)	11.98	9.27	4.88	717.8	砂岩	
第43図	366	第3・4層一括	敲石	5.20	4.45	4.13	112.2	砂岩	
第43図	367	第3・4層一括	磨石・敲石(B類)	10.90	7.50	4.50	498.0	砂岩	

第16表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表12

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	法量(MAX) 全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	石材	備考
第43図	368	第3・4層一括	磨石・敲石(B類)	8.60	6.00	4.60	360.0	砂岩	上下端部に溝状敲打痕が見られる。
第43図	369	第3・4層一括	磨石・敲石(B類)	10.35	7.63	3.93	497.0	砂岩	
第43図	370	第3・4層一括	磨石・敲石(A類4？)	11.21	6.61	5.04	548.3	砂岩	

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分類	色調	備考
第44図	371	表面採集	無文	口縁部	34.00	2.20	A1群ii	内：灰褐(5YR 4/2) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：暗灰(N 3/)	器高(43.1cm)繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第44図	372	表面採集	無文	口縁部	－	1.90	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：明黄褐(10YR 7/6)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第44図	373	表面採集	無文	口縁部	26.40	0.60	A1群ii	内：橙(7.5YR 6/6) 外：橙(7.5YR 6/6) 断：黒褐(10YR 3/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第44図	374	表面採集	無文	口縁部	－	1.30	A1群ii	内：橙(5YR 6/6) 外：橙(5YR 6/6) 断：褐灰(5YR 5/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第44図	375	表面採集	無文	口縁部	－	1.70	A1群ii	内：赤褐(2.5YR 4/6) 外：赤(10R 4/6) 断：赤黒(2.5YR 2/1)	繊維混入。 1～5㎜大の砂礫を多く含む。
第44図	376	表面採集	無文	口縁部	－	1.90	A2群Ⅰ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第44図	377	表面採集	無文	口縁部	－	1.90	A2群Ⅰ類	内：褐灰(7.5YR 4/1) 外：褐灰(7.5YR 4/1) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第44図	378	表面採集	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅡ類	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維を若干含む。 0.1～1㎜大の砂粒を多く含む。
第44図	379	表面採集	無文	口縁部	－	1.30	A2群cⅡ類	内：橙(7.5YR 7/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：明赤褐(2.5YR 5/6)	繊維混入。
第44図	380	表面採集	無文	口縁部	－	1.40	A2群cⅡ類	内：赤(10R 5/6) 外：赤(10R 5/6) 断：暗赤灰(10R 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第44図	381	表面採集	無文	口縁部	－	1.60	A2群cⅡ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：赤褐(2.5YR 4/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維を若干含む。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第45図	382	表面採集	無文	口縁部	32.60	1.40	A2群cⅢ類	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～4㎜大の砂粒を多く含む。
第45図	383	表面採集	無文	口縁部	－	1.00	A2群cⅢ類	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第45図	384	表面採集	無文	口縁部	－	0.90	A2群b類	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：赤褐(2.5YR 4/8) 断：黄灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第45図	385	表面採集	無文	口縁部	－	1.10	A2群b類	内：赤褐(5YR 4/6) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第45図	386	表面採集	無文	口縁部	－	1.40	A2群b類	内：赤褐(5YR 4/6) 外：赤褐(5YR 4/8) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第45図	387	表面採集	無文	口縁部	－	1.30	A2群b類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：赤灰(2.5YR 4/1) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 1～2㎜大の砂粒を含む。
第45図	388	表面採集	無文	胴部	－	1.90	A群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第45図	389	表面採集	無文	胴部	－	1.90	A群	内：黒褐(7.5YR 3/1) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を含む。
第45図	390	表面採集	山形文	口縁部	－	0.50	B1群b類	内：灰赤(2.5YR 5/2) 外：灰赤(2.5YR 5/2) 断：灰赤(2.5YR 5/2)	繊維混入。 1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第45図	391	表面採集	山形文	口縁部	－	0.60	B1群b類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：にぶい赤褐(2.5YR 5/4)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第45図	392	表面採集	山形文	口縁部	－	0.45	B2群a類Ⅲ種i	内：灰黄褐(10YR 5/2) 外：灰黄褐(10YR 5/2) 断：にぶい橙(7.5YR 6/4)	繊維混入。
第45図	393	表面採集	山形文	口縁部	－	0.40	B2群a類i種	内：灰黄褐(10YR 4/2) 外：灰黄褐(10YR 4/2) 断：黒褐(10YR 3/1)	～0.5㎜大の砂粒をまばらに含む。
第45図	394	表面採集	山形文	口縁部	－	0.70	B2群b類Ⅲ種iv	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：褐(7.5YR 4/3) 断：灰褐(7.5YR 4/2)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第45図	395	表面採集	山形文	胴部	－	1.20	B群	内：にぶい黄褐(10YR 5/3) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第45図	396	表面採集	山形文	胴部	－	0.60	B群	内：橙(7.5YR 6/6) 外：にぶい赤褐(5YR 5/3) 断：明黄褐(10YR 6/6)	～0.5㎜大の砂粒を含む。
第45図	397	表面採集	ポジティヴ楕円文	口縁部	32.00	0.60	C1群b類	内：にぶい黄褐(10YR 5/3) 外：褐灰(7.5YR 4/1) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。

第17表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表13

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第45図	398	表面採集	ポジティヴ楕円文	口縁部付近	－	0.70	C群	内：橙(7.5YR 6/6) 外：灰褐(7.5YR 5/2) 断：橙(7.5YR 6/6)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第45図	399	表面採集	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.60	C群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：褐灰(7.5YR 4/1) 断：褐灰(7.5YR 6/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第45図	400	表面採集	ポジティヴ楕円文	胴部	22.40	0.70	C群	内：にぶい黄橙(10YR 7/3) 外：橙(5YR 6/6) 断：黒褐(10YR 3/1)	0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第45図	401	表面採集	撚糸文	口縁部	－	0.80	F1群	内：にぶい褐(7.5YR 5/3) 外：にぶい赤褐(5YR 4/3) 断：橙(7.5YR 6/6)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種(分類)	法量(MAX) 全長(cm)	法量(MAX) 全幅(cm)	法量(MAX) 全厚(cm)	法量(MAX) 重量(g)	石材	備考
第46図	402	表面採集	石鏃(A類)	3.35	1.97	0.57	2.7	頁岩	
第46図	403	表面採集	石鏃(B類2種)	3.24	1.96	0.54	2.1	サヌカイト	
第46図	404	表面採集	石鏃(B類3種ⅰ)	2.47	1.87	0.45	1.5	サヌカイト	
第46図	405	表面採集	石鏃(B類3種ⅰ)	(1.26)	1.61	0.32	(0.5)	サヌカイト	
第46図	406	表面採集	石鏃(B類3種ⅱ)	1.90	1.42	0.46	0.8	サヌカイト	
第46図	407	表面採集	石鏃(B類2種)	2.63	1.90	0.43	0.9	サヌカイト	
第46図	408	表面採集	石鏃(B類2種)	1.89	1.42	0.30	0.5	サヌカイト	
第46図	409	表面採集	石鏃(B類3種ⅰ)	1.39	0.99	0.22	0.2	サヌカイト	
第46図	410	表面採集	石鏃(B類3種ⅰ)	1.75	1.20	0.33	0.4	サヌカイト	
第46図	411	表面採集	石鏃(B類1種)	2.16	1.57	0.41	0.9	サヌカイト	
第46図	412	表面採集	石鏃?	1.81	1.60	0.36	0.8	サヌカイト	
第46図	413	表面採集	二次加工剥片	3.46	1.70	0.61	2.9	サヌカイト	
第46図	414	表面採集	スクレイパー	4.90	3.40	0.85	15.0	サヌカイト	
第47図	415	表面採集	磨石・敲石(A類4?)	9.56	6.55	4.36	341.6	砂岩	石鹸形磨石
第47図	416	表面採集	磨石・敲石(A類4?)	7.66	7.87	4.11	321.8	砂岩	石鹸形磨石
第47図	417	表面採集	磨石・敲石(B類)	(9.1)	(8.6)	4.50	523.0	砂岩	
第47図	418	表面採集	磨石・敲石(B類)	4.60	4.20	4.40	92.0	砂岩	
第47図	419	表面採集	磨石・敲石(B類)	7.30	6.20	6.20	405.0	砂岩	
第48図	420	表面採集	石皿・台石	28.90	20.90	5.75	5100.0	砂岩	
第48図	421	表面採集	石皿・台石	27.40	14.50	3.90	2600.0	砂岩	
第48図	422	表面採集	石皿・台石	45.70	27.70	8.90	17000.0	砂岩	
第48図	423	H15SK2埋土水洗	石鏃(B類3種ⅱ)	1.72	1.04	0.28	0.3	サヌカイト	
第48図	424	H15SK2埋土水洗	石鏃(B類3種ⅱ)	1.46	1.24	0.33	0.3	サヌカイト	
第48図	425	H15SK2埋土水洗	石鏃(B類3種ⅱ?)	1.48	1.18	0.22	0.2	サヌカイト	
第48図	426	H15SK2埋土水洗	石鏃(B類2種)	1.80	1.23	0.35	0.5	サヌカイト	
第48図	427	H15SK2埋土水洗	石鏃(B類3種2)	1.34	1.48	0.30	0.4	サヌカイト	

第18表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表14

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分類	色調	備考
第52図	428	SK1	無文	口縁部	36.00	1.60	A1群 i	内：明褐(7.5YR 5/6) 外：にぶい褐(7.5YR 5/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～4㎜大の砂礫を多く含む。
第52図	429	SK1	無文	口縁部	29.90	1.70	A1群 i	内：明褐(7.5YR 5/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：灰褐(7.5YR 5/2)	繊維混入。 0.5～4㎜大の砂礫を多く含む。
第52図	430	SK1	無文	口縁部	－	1.30	A1群 ii	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：灰黄褐(10YR 4/2)	繊維混入。 1～5㎜大の砂礫をまばらに含む。
第52図	431	SK1	無文	口縁部	－	1.35	A1群 ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第52図	432	SK1	無文	口縁部	－	1.90	A1群 ii	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第52図	433	SK1	無文	口縁部	－	0.80	A1群 ii	内：灰褐(5YR 4/2) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第52図	434	SK1	無文	口縁部	－	1.00	A1群 ii	内：褐(7.5YR 4/6) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：黒(7.5YR 2/1)	繊維混入。 ～0.1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第52図	435	SK1	無文	口縁部	－	2.10	A2群cⅠ類	内：橙(2.5YR 6/6) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒をまばらに含む。
第52図	436	SK1	無文	口縁部	－	1.30	A2群cⅢ類	内：にぶい黄橙(10YR 6/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。口縁部上面に1㎜大の刺突を有する。
第52図	437	SK1	無文	胴部	－	1.60	A群	内：灰褐(7.5YR 5/2) 外：にぶい赤褐(5YR 4/3) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 1～4㎜大の砂粒を含む。
第52図	438	SK1	無文	胴部	－	1.60	A群	内：浅黄橙(10YR 8/4) 外：橙(7.5YR 6/6) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第52図	439	SK1	無文	胴部	－	1.20	A群	内：にぶい黄橙(10YR 6/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第52図	440	SK1	無文	胴部	－	2.50	A群	内：にぶい黄橙(10YR 7/3) 外：にぶい褐(7.5YR 6/3) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 1～3㎜大の砂粒を多く含む。
第52図	441	SK1	無文	胴部	－	1.35	A群	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第52図	442	SK1	無文	胴部	－	1.70	A群	内：橙(7.5YR 6/6) 外：明褐(7.5YR 5/6) 断：黒(7.5YR 2/1)	繊維混入。 ～1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第52図	443	SK1	無文	胴部	－	1.20	A群	内：橙(2.5YR 6/6) 外：灰赤(2.5YR 4/2) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 1～3㎜大の砂粒を多く含む。
第52図	444	SK1	無文	胴部	－	1.20	A群	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 1～6㎜大の砂礫を多く含む。
第53図	445	SK1	無文	胴部	－	1.20	A群	内：赤褐(5YR 4/6) 外：にぶい橙(5YR 6/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第53図	446	SK1	無文	胴部	－	1.10	A群	内：にぶい黄橙(10YR 7/3) 外：にぶい黄橙(10YR 7/3) 断：にぶい黄橙(10YR 7/3)	0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第53図	447	SK1	無文	胴部	－	2.10	A群	内：橙(5YR 6/6) 外：橙(5YR 6/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～5㎜大の砂礫を多く含む。
第53図	448	SK1	無文	胴部	－	1.40	A群	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：褐(7.5YR 4/3) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 1～3㎜大の砂粒をまばらに含む。
第54図	449	SK1	山形文	口縁部	－	0.90	B1群a類	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：褐(7.5YR 4/3) 断：灰黄褐(10YR 4/2)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第54図	450	SK1	山形文	口縁部	－	0.50	B1群a類	内：にぶい褐(7.5YR 5/3) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	0.5～1㎜大の砂粒を含む。 金雲母含む。
第54図	451	SK1	山形文	口縁部	－	0.60	B1群b類	内：灰褐(7.5YR 5/2) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	～0.5㎜大の砂粒を含む。
第54図	452	SK1	山形文	口縁部	－	0.60	B1群b類	内：黒褐(10YR 3/1) 外：褐灰(10YR 4/1) 断：灰黄褐(10YR 6/2)	～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第54図	453	SK1	山形文	口縁部	－	0.60	B2群a類 Ⅱ種	内：橙(7.5YR 6/6) 外：黒褐(10YR 3/2) 断：橙(7.5YR 6/6)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第54図	454	SK1	山形文	口縁部	－	0.60	B2群b類 Ⅲ種iv	内：黒褐(7.5YR 3/1) 外：褐灰(10YR 4/1) 断：黒(N 2/)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第54図	455	SK1	山形文	口縁部 付近	－	0.80	B群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：灰赤(2.5YR 4/2) 断：にぶい赤褐(5YR 5/4)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第54図	456	SK1	山形文	口縁部 付近	－	0.70	B群	内：灰黄褐(10YR 6/2) 外：褐灰(5YR 4/1) 断：にぶい黄橙(10YR 6/3)	繊維少量混入。 ～1㎜大の砂粒を含む。
第54図	457	SK1	山形文	口縁部 付近	－	0.70	B群	内：灰褐(5YR 4/2) 外：暗赤褐(5YR 3/3) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～7㎜大の砂礫を多く含む。
第54図	458	SK1	山形文	口縁部 付近	－	0.80	B群	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒をまばらに含む。

第19表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表15

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第54図	459	SK1	山形文	口縁部付近	－	0.90	B群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(5YR 5/3) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.1mm大の砂粒を極少量含む。
第54図	460	SK1	山形文	胴部	－	0.65	B群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：灰黄褐(10YR 4/2) 断：にぶい黄褐(10YR 5/3)	繊維混入。 ～0.5mm大の砂粒をわずかに含む。
第54図	461	SK1	山形文	胴部	－	0.70	B群	内：灰黄褐(10YR 5/2) 外：灰黄褐(10YR 5/2) 断：灰黄褐(10YR 5/2)	繊維混入。 0.5～2mm大の砂粒を含む。
第54図	462	SK1	山形文	胴部	－	0.90	B群	内：にぶい赤褐(5YR 4/3) 外：にぶい赤褐(5YR 4/3) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5mm大の砂粒を含む。
第54図	463	SK1	山形文	胴部	－	0.65	B群	内：赤褐(5YR 4/6) 外：褐(7.5YR 4/3) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1mm大の砂粒を多く含む。
第54図	464	SK1	山形文	胴部	－	1.10	B群	内：にぶい黄橙(10YR 7/3) 外：灰黄褐(10YR 5/2) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～4mm大の砂粒を多く含む。
第54図	465	SK1	山形文	胴部	－	1.30	B群	内：にぶい橙(2.5YR 6/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 1～2mm大の砂粒を多く含む。
第54図	466	SK1	山形文	胴部	－	0.70	B群	内：にぶい橙(5YR 7/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1mm大の砂粒を多く含む。
第54図	467	SK1	山形文	胴部	－	0.70	B群	内：灰黄褐(10YR 6/2) 外：灰黄褐(10YR 6/2) 断：灰黄褐(10YR 6/2)	0.5～3mm大の砂粒を含む。
第54図	468	SK1	山形文	胴部	－	0.70	B群	内：にぶい黄褐(10YR 5/3) 外：にぶい黄橙(10YR 7/3) 断：褐灰(10YR 5/1)	～0.5mm大の砂粒を含む。
第54図	469	SK1	山形文	胴部	－	0.85	B群	内：褐灰(10YR 4/1) 外：にぶい黄橙(10YR 6/4) 断：褐灰(10YR 4/1)	0.5～6mm大の砂礫を含む。
第54図	470	SK1	山形文	胴部	－	0.80	B群	内：にぶい黄橙(10YR 7/3) 外：灰黄褐(10YR 6/2) 断：褐灰(10YR 4/1)	～0.5mm大の砂粒を含む。
第54図	471	SK1	山形文	底部付近	8.40	0.70	B群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：橙(5YR 6/6) 断：黄灰(2.5YR 6/1)	0.5～1mm大の砂粒を多く含む。
第54図	472	SK1	ポジティヴ楕円文	口縁部	23.00	0.60	C2群b類Ⅲ種ii	内：にぶい黄橙(10YR 6/3) 外：灰黄褐(10YR 5/2) 断：にぶい黄橙(10YR 6/4)	0.5～1mm大の砂粒を多く含む。
第54図	473	SK1	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.45	C群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：灰褐(5YR 5/2)	0.5～1mm大の砂粒をわずかに含む。
第54図	474	SK1	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.60	C群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：褐灰(7.5YR 4/1) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	～1mm大の砂粒を多く含む。
第54図	475	SK1	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.70	C群	内：灰黄褐(10YR 6/2) 外：褐灰(10YR 5/1) 断：灰黄褐(10YR 6/2)	～1mm大の砂粒を含む。
第54図	476	SK1	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.40	C群	内：にぶい橙(5YR 6/4) 外：にぶい橙(5YR 6/4) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	0.5～1mm大の砂粒を多く含む。
第54図	477	SK1	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.70	C群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：にぶい黄橙(10YR 6/3)	0.5～1mm大の砂粒を多く含む。
第54図	478	SK1	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.80	C群	内：にぶい褐(7.5YR 6/3) 外：灰黄褐(10YR 6/2) 断：褐灰(10YR 4/1)	0.5～2mm大の砂粒を含む。
第54図	479	SK1	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.60	C群	内：にぶい黄褐(10YR 5/3) 外：にぶい黄橙(10YR 6/4) 断：にぶい黄橙(10YR 6/4)	0.5～1mm大の砂粒を多く含む。
第54図	480	SK1	格子目文	口縁部付近	－	0.80	D群	内：橙(5YR 6/6) 外：灰褐(5YR 5/2) 断：褐灰(5YR 5/1)	0.5～1mm大の砂粒を多く含む。
第54図	481	SK1	格子目文	口縁部付近	－	0.50	D群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～2mm大の砂粒を含む。
第54図	482	SK1	格子目文	口縁部付近	－	0.80	D群	内：褐(7.5YR 4/6) 外：褐(7.5YR 4/4) 断：灰黄褐(10YR 4/2)	繊維混入。
第54図	483	SK1	格子目文	胴部	－	0.50	D群	内：にぶい黄褐(10YR 5/3) 外：褐(7.5YR 4/6) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1mm大の砂粒を含む。
第54図	484	SK1	格子目文	胴部	－	0.55	D群	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：にぶい黄橙(10YR 4/3) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5mm大の砂粒を含む。
第54図	485	SK1	格子目文	胴部	－	0.70	D群	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：灰黄褐(10YR 4/2)	繊維混入。 0.5～1mm大の砂粒を含む。
第54図	486	SK1	格子目文	胴部	－	0.70	D群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：灰褐(7.5YR 5/2)	繊維混入。 0.5～2mm大の砂粒を含む。
第55図	487	第4層	爪形刺突様文	口縁部	－	0.60	G群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：灰褐(7.5YR 5/2) 断：にぶい褐(7.5YR 6/3)	～2mm大の砂粒を多く含む。 金雲母含む。
第55図	488	第4層	無文	口縁部	－	0.90	A1群ii	内：橙(7.5YR 6/6) 外：にぶい褐(7.5YR 5/3) 断：褐灰(10YR 6/1)	繊維混入。 ～1mm大の砂粒を含む。
第55図	489	第4層	山形文	胴部	－	0.80	B群	内：褐灰(10YR 4/1) 外：褐灰(10YR 4/1) 断：褐灰(10YR 5/1)	0.5～6mm大の砂礫を多く含む。

第20表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表16

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分類	色調	備考
第55図	490	第4層	異形押型文	胴部	－	0.60	E群	内：褐(7.5YR 4/6) 外：にぶい黄褐(10YR 5/4) 断：にぶい黄褐(10YR 5/4)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第56図	491	表面採集	無文	口縁部	－	1.00	A2群cⅡ類	内：橙(2.5YR 6/6) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第56図	492	表面採集	無文	口縁部	－	0.50	A1群ii	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：にぶい褐(7.5YR 5/3)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第56図	493	撹乱	ポジティヴ楕円文	口縁部	－	0.60	C2群b類Ⅲ種ii	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：灰黄褐(10YR 5/2) 断：灰黄褐(10YR 5/2)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第56図	494	撹乱	格子目文	胴部	－	0.80	D群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：にぶい橙(7.5YR 7/4)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒を含む。
第56図	495	表面採集	弥生後期壷	口縁部	9.80	0.60	－	内：橙(5YR 7/6) 外：橙(5YR 7/6) 断：浅黄橙(10YR 8/4)	1～3㎜大の砂粒をまばらに含む。
第56図	496	表面採集	弥生後期甕	胴部	－	1.00	－	内：褐灰(10YR 4/1) 外：にぶい黄橙(10YR 7/4) 断：黒(5Y 2/1)	0.5～8㎜大の砂礫を含む。
第56図	497	表面採集	弥生壷?	底部	5.80	0.60	－	内：灰(5Y 5/1) 外：橙(7.5YR 7/6) 断：灰(5Y 5/1)	1㎜大の砂粒を含む。
第56図	498	表面採集	弥生坏?	底部	4.40	0.60	－	内：橙(5YR 6/6) 外：橙(5YR 6/6) 断：黄灰(2.5Y 6/1)	1～2㎜大の砂粒をまばらに含む。
第56図	499	表面採集	弥生後期碗	口縁部	17.80	0.55	－	内：橙(5YR 7/6) 外：橙(5YR 7/6) 断：褐灰(10YR 4/1)	0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第59図	500	SK1	無文	口縁部	－	0.60	A1群ii	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：暗赤褐(5YR 3/3) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第59図	501	SK1	無文	口縁部	－	0.60	A1群ii	内：暗赤褐(5YR 3/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/8) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第59図	502	SK1	無文	胴部	－	1.30	A群	内：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第59図	503	SK1	無文	胴部	－	1.10	A群	内：明赤褐(5YR 4/6) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 1～5㎜大の砂礫を多く含む。
第59図	504	SK1	無文	胴部	－	1.60	A群	内：にぶい橙(5YR 6/4) 外：赤褐(2.5YR 4/6) 断：暗灰(N 3/)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を含む。
第59図	505	SK1	山形文	胴部	－	0.70	B群	内：黒褐(10YR 3/1) 外：にぶい黄褐(10YR 5/3) 断：黒褐(10YR 3/1)	～0.1㎜大の砂粒を含む。
第59図	506	SK1	格子目文	胴部	－	0.50	D群	内：にぶい赤褐(5YR 5/3) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：にぶい橙(7.5YR 6/4)	繊維混入。 ～1㎜大の砂粒を含む。

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	法量(MAX) 全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	石材	備考
第59図	507	SK1	石鏃	2.49	2.23	0.41	2.1	チャート	

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分類	色調	備考
第62図	508	遺物集中1	無文	口縁部	－	1.90	A2群cⅠ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第62図	509	遺物集中1	無文	口縁部	－	1.80	A2群cⅠ類	内：赤褐(2.5YR 4/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：黒褐(5YR 2/1)	繊維混入。 ～0.1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第62図	510	遺物集中1	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅡ類	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：赤褐(2.5YR 4/8) 断：赤黒(2.5YR 2/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第62図	511	遺物集中1	無文	口縁部	－	1.40	A2群cⅢ類	内：赤褐(2.5YR 4/6) 外：赤褐(2.5YR 4/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第62図	512	遺物集中1	無文	口縁部	－	1.10	A2群a類?	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：灰赤(2.5YR 4/2) 断：にぶい赤褐(2.5YR 5/2)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒をわずかに含む。
第62図	513	遺物集中1	無文	胴部	－	1.80	A群	内：灰赤(2.5YR 4/2) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維混入。 1～3㎜大の砂粒を含む。
第62図	514	遺物集中1	無文	胴部	－	1.70	A群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。
第62図	515	遺物集中1	無文	底部	11.60	1.90	A群	内：灰黄褐(10YR 6/2) 外：赤褐(2.5YR 4/8) 断：黒(N 2/)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第62図	516	遺物集中1	山形文	口縁部	－	0.80	B1群b類	内：にぶい橙(5YR 6/4) 外：灰褐(5YR 5/2) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第62図	517	遺物集中1	山形文	口縁部付近	－	0.70	B群	内：にぶい赤褐(5YR 4/3) 外：灰褐(7.5YR 4/2) 断：灰黄褐(10YR 4/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第62図	518	遺物集中1	山形文	胴部	－	0.45	B群	内：暗赤褐(5YR 3/3) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。

第21表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表17

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第62図	519	遺物集中1	山形文	胴部	－	0.60	B群	内：灰褐(7.5YR 4/2) 外：黒褐(7.5YR 3/2) 断：にぶい黄褐(10YR 4/3)	～0.5㎜大の砂粒を含む。
第62図	520	遺物集中1	山形文	胴部	－	0.50	B群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：明黄褐(10YR 6/6) 断：明黄褐(10YR 6/6)	0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第62図	521	遺物集中1	山形文	胴部	－	0.70	B群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：褐灰(5YR 4/1) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第62図	522	遺物集中1	山形文	胴部	－	0.60	B群	内：暗赤褐(5YR 3/4) 外：暗赤褐(5YR 3/3) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。
第62図	523	遺物集中1	撚糸文	口縁部	－	0.70	F1群a類	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：にぶい赤褐(5YR 5/4)	～0.5㎜大の砂粒を含む。
第62図	524	遺物集中1	撚糸文	胴部	－	0.80	F群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：赤褐(2.5YR 4/8) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第63図	525	遺物集中2	無文	口縁部	－	1.40	A1群ii	内：にぶい黄褐(10YR 5/3) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第63図	526	遺物集中2	無文	口縁部	－	1.00	A2群cⅡ類	内：橙(2.5YR 6/6) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：にぶい黄橙(10YR 7/2)	繊維混入。 ～2㎜大の砂粒を多く含む。
第63図	527	遺物集中2	無文	口縁部	43.80	1.50	A2群cⅡ類	内：橙(7.5YR 6/6) 外：にぶい褐(7.5YR 5/4) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	繊維混入。 ～1㎜大の砂粒を含む。
第63図	528	遺物集中2	無文	口縁部	31.80	1.40	A2群cⅡ類	内：にぶい褐(7.5YR 6/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第63図	529	遺物集中2	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅣ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。
第63図	530	遺物集中2	無文	口縁部	－	1.00	A2群cⅣ類	内：にぶい赤褐(5YR 4/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第63図	531	遺物集中2	無文	胴部	44.00	1.30	A群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第63図	532	遺物集中2	無文	底部付近	12.40	1.10	A群	内：にぶい黄橙(10YR 7/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第63図	533	遺物集中2	山形文	口縁部	－	0.70	B1群b類	内：にぶい赤褐(5YR 5/3) 外：にぶい赤褐(5YR 5/3) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第63図	534	遺物集中2	山形文	口縁部	－	0.70	B2群b類 Ⅲ種ii	内：灰黄褐(10YR 4/2) 外：灰黄褐(10YR 4/2) 断：黒褐(2.5YR 3/1)	0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。 金雲母を多く含む。
第63図	535	遺物集中2	山形文	口縁部付近	12.40	0.90	B群	内：にぶい黄橙(10YR 7/3) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	繊維混入。 1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第63図	536	遺物集中2	山形文	胴部	－	0.80	B群	内：褐灰(7.5YR 4/1) 外：にぶい褐(7.5YR 5/4) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	0.5～2㎜大の砂粒を多量に含む。
第63図	537	遺物集中2	山形文	胴部	－	0.50	B群	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：橙(5YR 7/6) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第63図	538	遺物集中2	格子目文	胴部	－	0.50	D群	内：褐灰(10YR 6/1) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を多く含む。

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	法量(MAX) 全長(cm)	法量(MAX) 全幅(cm)	法量(MAX) 全厚(cm)	法量(MAX) 重量(g)	石材	備考
第65図	539	遺物集中2	台石	24.60	20.70	7.60	4800.0	砂岩	
第65図	540	遺物集中2	砥石?	20.30	9.20	4.60	1009.0	粘板岩？	

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第65図	541	遺物集中1・2一括	山形文	口縁部付近	－	0.70	B群	内：にぶい赤褐(5YR 5/3) 外：にぶい褐(7.5YR 5/3) 断：にぶい赤褐(5YR 5/4)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第65図	542	遺物集中1・2一括	山形文	胴部	－	0.70	B群	内：にぶい黄橙(10YR 6/3) 外：暗褐(10YR 3/3) 断：橙(7.5YR 6/6)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第65図	543	遺物集中1・2一括	山形文	胴部	－	1.30	B群	内：橙(5YR 6/6) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：にぶい橙(7.5YR 6/4)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第65図	544	遺物集中1・2一括	山形文	胴部	－	0.95	B群	内：灰褐(7.5YR 5/2) 外：灰褐(5YR 5/2) 断：褐灰(5YR 5/1)	繊維混入。 ～3㎜大の砂粒をわずかに含む。
第65図	545	遺物集中1・2一括	山形文	胴部	－	0.75	B群	内：にぶい褐(7.5YR 5/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断；にぶい赤褐(2.5YR 5/3)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第65図	546	遺物集中1・2一括	ポジティヴ楕円文	口縁部付近	－	0.60	C群	内：灰褐(7.5YR 5/2) 外：にぶい褐(7.5YR 6/3) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第65図	547	遺物集中1・2一括	格子目文	胴部	－	0.80	D群	内：黒褐(7.5YR 3/1) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を含む。

第22表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表18

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分類	色調	備考
第67図	548	SX2	無文	口縁部	−	1.10	A2群cⅢ類	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：赤褐(2.5YR 4/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第67図	549	SX2	無文	口縁部	−	0.80	A2群cⅠ類	内：灰褐(7.5YR 4/2) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：灰褐(5YR 4/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第67図	550	SX2	無文	口縁部	−	1.10	A2群cⅠ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第67図	551	SX2	無文	口縁部	−	1.00	A2群b類	内：にぶい赤褐(5YR 4/3) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：灰黄褐(10YR 4/2)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第67図	552	SX2	無文	胴部	−	1.60	A群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤黒(2.5YR 2/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第67図	553	SX2	無文	底部	9.40	1.90	A群	内：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 外：橙(7.5YR 6/6) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第67図	554	SX2	山形文	胴部	−	0.80	B群	内：暗赤褐(2.5YR 3/4) 外：赤褐(2.5YR 4/6) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第67図	555	SX2	山形文	胴部	−	2.00	B群	内：にぶい橙(2.5YR 6/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～7㎜大の砂礫を多く含む。
第67図	556	SX2	山形文	胴部	−	0.70	B群	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：灰褐(5YR 5/2)	0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第67図	557	SX2	山形文	胴部	−	0.60	B群	内：橙(7.5YR 6/6) 外：橙(5YR 6/6) 断：灰黄褐(10YR 6/2)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第67図	558	SX2	山形文	胴部	−	0.90	B群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：暗赤褐(5YR 3/3) 断：灰褐(7.5YR 4/2)	～0.5㎜大の砂粒を含む。
第67図	559	SX2	撚糸文	胴部	−	0.70	F群	内：黒(N 2/) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：黒(N 2/)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第69図	560	土器個体3	無文	胴部	46.60	1.40	A群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：明赤褐(2.5YR 5/6)	0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第69図	561	土器個体3	無文	胴部	−	1.80	A群	内：黒褐(10YR 3/2) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：黒褐(10YR 3/2)	～1㎜大の砂粒を多く含む。
第69図	562	土器個体3	山形文	胴部	−	0.80	B群	内：明黄褐(10YR 6/6) 外：褐灰(10YR 4/1) 断：明黄褐(10YR 6/6)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第69図	563	土器個体3	山形文	胴部	−	0.75	B群	内：橙(5YR 6/6) 外：にぶい赤褐(5YR 5/3) 断：橙(5YR 6/6)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を含む。
第69図	564	土器個体3	格子目文	口縁部	−	0.70	D2群b類Ⅲ種ii	内：褐灰(7.5YR 4/1) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	～0.5㎜大の砂粒を含む。
第70図	565	第3層	無文	口縁部	−	1.15	A1群ii	内：赤褐(5YR 4/6) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：黒(10YR 2/1)	繊維混入。
第70図	566	第3層	無文	口縁部	−	1.50	A1群ii	内：赤褐(5YR 4/6) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：灰褐(5YR 4/2)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第70図	567	第3層	無文	口縁部	−	0.90	A1群ii	内：灰褐(5YR 4/2) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を含む。
第70図	568	第3層	無文	口縁部	−	1.10	A2群cⅠ類	内：赤褐(2.5YR 4/6) 外：赤褐(2.5YR 4/6) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 ～0.1㎜大の砂粒をまばらに含む。
第70図	569	第3層	無文	口縁部	29.60	1.50	A2群cⅡ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を含む。
第70図	570	第3層	無文	口縁部	−	1.40	A2群cⅢ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第70図	571	第3層	無文	口縁部	−	1.80	A2群cⅢ類	内：明赤褐(5YR 5/8) 外：明赤褐(5YR 5/8) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第70図	572	第3層	無文	口縁部	−	1.20	A2群cⅢ類	内：橙(2.5YR 6/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：暗灰黄(2.5Y 5/2)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第70図	573	第3層	無文	口縁部	−	1.10	A2群b類	内：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第70図	574	第3層	無文	胴部	−	1.70	A群	内：灰褐(5YR 4/2) 外：にぶい赤褐(5YR 4/3) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 ～2㎜大の砂粒を多く含む。
第70図	575	第3層	山形文	口縁部	−	0.65	B2群b類Ⅲ種iv	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：にぶい黄褐(10YR 5/3) 断：黒(10YR 2/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第70図	576	第3層	山形文	胴部	−	0.80	B群	内：灰褐(7.5YR 5/2) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(5YR 5/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第70図	577	第3層	山形文	胴部	−	0.80	B群	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：にぶい褐(7.5YR 5/4) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第70図	578	第3層	山形文	胴部	−	1.10	B群	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：にぶい褐(7.5YR 5/3) 断：褐灰(10YR 6/1)	繊維混入。 1～6㎜大の砂礫を多く含む。

第23表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表19

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第70図	579	第3層	山形文	底部付近	－	0.70	B群	内：赤褐(2.5YR 4/6) 外：赤褐(2.5YR 4/6) 断：赤褐(2.5YR 4/6)	～3㎜大の砂粒を多く含む。
第71図	580	第4層上層	無文	口縁部	－	1.40	A1群ii	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第71図	581	第4層上層	無文	口縁部	－	1.10	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第71図	582	第4層上層	無文	口縁部	－	1.40	A1群ii	内：橙(2.5YR 6/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：暗灰(N 3/)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第71図	583	第4層上層	無文	口縁部	－	0.80	A1群ii	内：橙(5YR 6/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 ～1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第71図	584	第4層上層	無文	口縁部	－	0.90	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：にぶい黄橙(10YR 7/4)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第71図	585	第4層上層	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅠ類	内：橙(2.5YR 6/6) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒をまばらに含む。
第71図	586	第4層上層	無文	口縁部	－	1.00	A2群cⅡ類	内：灰褐(5YR 4/2) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：灰赤(2.5YR 4/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第71図	587	第4層上層	無文	口縁部	－	1.30	A2群cⅡ類	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第71図	588	第4層上層	無文	口縁部	－	1.90	A2群cⅡ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 ～1㎜大の砂粒を多く含む。
第71図	589	第4層上層	無文	口縁部	－	1.40	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第71図	590	第4層上層	無文	口縁部	－	1.65	A2群cⅡ類	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第71図	591	第4層上層	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅡ類	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	～0.1㎜大の砂粒を極めて多量に含む。
第71図	592	第4層上層	無文	胴部	－	2.30	A群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第71図	593	第4層上層	無文	胴部	－	1.90	A群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：灰(N 4/)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第71図	594	第4層上層	無文	胴部	－	1.20	A群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第71図	595	第4層上層	無文	胴部	－	1.10	A群	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：灰黄褐(10YR 4/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第72図	596	第4層上層	山形文	口縁部	－	0.60	B1群a類	内：黒褐(7.5YR 3/1) 外：灰褐(7.5YR 4/2) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第72図	597	第4層上層	山形文	口縁部	－	0.65	B1群b類	内：褐灰(7.5YR 4/1) 外：褐(7.5YR 4/3) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第72図	598	第4層上層	山形文	口縁部	25.20	0.50	B1群b類	内：橙(7.5YR 6/6) 外：にぶい橙(2.5YR 6/4) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第72図	599	第4層上層	山形文	口縁部	－	0.70	B1群b類	内：にぶい黄橙(10YR 6/3) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：灰黄褐(10YR 5/2)	繊維混入。 ～1㎜大の砂粒を含む。
第72図	600	第4層上層	山形文	口縁部	－	0.75	B1群b類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第72図	601	第4層上層	山形文	口縁部	15.00	0.90	B2群a類Ⅲ種ii	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：灰黄褐(10YR 4/2)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第72図	602	第4層上層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群a類Ⅰ種	内：橙(5YR 6/6) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：にぶい赤褐(5YR 5/4)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第72図	603	第4層上層	山形文	口縁部	－	0.50	B2群a類Ⅱ種	内：灰褐(5YR 4/2) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：灰褐(5YR 4/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第72図	604	第4層上層	山形文	口縁部	－	0.70	B2群b類Ⅲ種ii	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：にぶい黄橙(10YR 6/3)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第72図	605	第4層上層	山形文	口縁部	－	0.50	B2群b類Ⅲ種ii	内：にぶい赤褐(5YR 5/3) 外：にぶい赤褐(5YR 5/3) 断：灰黄褐(10YR 6/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第72図	606	第4層上層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群b類Ⅲ種ii	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：にぶい橙(7.5YR 6/4)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。 金雲母多い。
第72図	607	第4層上層	山形文	口縁部	－	0.60	B2群b類Ⅲ種ii	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：にぶい黄橙(10YR 6/4) 断：にぶい黄橙(10YR 6/4)	0.5～3㎜大の砂粒を多く含む。 金雲母を多く含む。
第72図	608	第4層上層	山形文	胴部	－	0.60	B群	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：灰黄褐(10YR 4/2)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第72図	609	第4層上層	山形文	胴部	－	1.75	B群	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 4/3) 断：灰黄褐(10YR 4/2)	繊維混入。 0.5～6㎜大の砂礫を含む。

第24表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表20

挿図番号	報告番号	出土経緯	器　種	部　位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分　類	色　　調	備　　考
第72図	610	第４層上層	山形文	胴部	－	0.70	B群	内：にぶい赤褐(5YR　5/4) 外：にぶい赤褐(5YR　5/4) 断：黒褐(10YR　3/2)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を含む。
第72図	611	第４層上層	山形文	胴部	－	0.70	B群	内：灰黄褐(10YR　4/2) 外：にぶい黄褐(10YR　5/3) 断：黒褐(7.5YR　3/2)	～１㎜大の砂粒を多く含む。
第72図	612	第４層上層	山形文	胴部	－	0.90	B群	内：にぶい褐(7.5YR　5/4) 外：にぶい黄橙(10YR　7/3) 断：褐灰(10YR　5/1)	0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第72図	613	第４層上層	山形文	底部付近	13.00	0.80	B群	内：にぶい橙(7.5TYR　6/4) 外：橙(7.5YR　6/6) 断：にぶい橙(7.5YR　7/4)	繊維混入。 ～１㎜大の砂粒を含む。
第72図	614	第４層上層	山形文	底部	－	1.20	B群	内：黒褐(10YR　3/1) 外：にぶい褐(7.5YR　5/4) 断：黒褐(10YR　3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第73図	615	第４層上層	ポジティヴ楕円文	口縁部	－	0.65	C2群b類Ⅲ種iv	内：にぶい黄橙(10YR　7/3) 外：にぶい黄橙(10YR　7/3) 断：褐灰(10YR　5/1)	～１㎜大の砂粒を多く含む。
第73図	616	第４層上層	ポジティヴ楕円文	口縁部付　近	－	0.60	C群	内：灰黄褐(10YR　4/2) 外：灰黄褐(10YR　5/2) 断：黒褐(10YR　3/1)	0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第73図	617	第４層上層	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.80	C群	内：にぶい褐(7.5YR　5/3) 外：にぶい赤褐(5YR　5/4) 断：にぶい褐(7.5YR　5/3)	繊維混入。 0.5～８㎜大の砂礫を多く含む。
第73図	618	第４層上層	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.75	C群	内：にぶい橙(7.5YR　6/4) 外：にぶい褐(7.5YR　5/3) 断：にぶい褐(7.5YR　5/3)	0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。 金雲母を多く含む。
第73図	619	第４層上層	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.90	C群	内：にぶい黄褐(10YR　5/3) 外：にぶい褐(7.5YR　5/4) 断：にぶい褐(7.5YR　5/4)	0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第73図	620	第４層上層	ポジティヴ楕円文	胴部	－	0.70	C群	内：明赤褐(5YR　5/6) 外：灰黄褐(10YR　4/2) 断：明赤褐(5YR　5/6)	～0.5㎜大の砂粒を含む。 金雲母を多く含む。

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種(分類)	法　量(MAX) 全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	石　　材	備　　考
第74図	621	第４層上層	石鏃(B類3ii)	1.29	1.55	0.35	0.5	サヌカイト	
第74図	622	第４層上層	磨石・敲石(A類4?)	8.84	7.21	3.99	309.8	砂岩	

挿図番号	報告番号	出土経緯	器　種	部　位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分　類	色　　調	備　　考
第76図	623	第４層下層	無文	口縁部	－	1.60	A1群ii	内：にぶい赤褐(5YR　5/4) 外：赤褐(2.5YR　4/8) 断：黄灰(2.5Y　4/1)	繊維混入。 0.5～９㎜大の砂礫を含む。
第76図	624	第４層下層	無文	口縁部	－	1.20	A1群ii	内：赤褐(2.5YR　4/6) 外：赤褐(2.5YR　4/6) 断：黒褐(5YR　3/1)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を多量に含む。
第76図	625	第４層下層	無文	口縁部	－	1.75	A1群ii	内：橙(7.5YR　6/6) 外：明褐(7.5YR　5/6) 断：明赤褐(5YR　5/6)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を含む。
第76図	626	第４層下層	無文	口縁部	－	0.60	A1群ii	内：明赤褐(2.5YR　5/6) 外：灰赤(2.5YR　4/2) 断：黒褐(10YR　3/1)	繊維混入。 ～１㎜大の砂粒を多く含む。
第76図	627	第４層下層	無文	口縁部	－	1.00	A1群ii	内：にぶい赤褐(2.5YR　4/3) 外：橙(2.5YR　6/6) 断：橙(7.5YR　6/6)	繊維混入。 1～２㎜大の砂粒を多く含む。
第76図	628	第４層下層	無文	口縁部	11.20	0.50	A1群ii	内：褐灰(10YR　4/1) 外：褐灰(10YR　4/1) 断：褐灰(10YR　4/1)	0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第76図	629	第４層下層	無文	口縁部	－	0.70	A1群ii	内：橙(5YR　6/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR　4/3) 断：暗灰(N　3/)	繊維混入。 0.5～２㎜大の砂粒を含む。
第76図	630	第４層下層	無文	口縁部	－	1.30	A1群ii	内：赤褐(2.5YR　4/8) 外：暗赤褐(2.5YR　3/4) 断：暗赤灰(2.5YR　3/1)	繊維混入。
第76図	631	第４層下層	無文	口縁部	－	1.60	A2群cⅠ類	内：赤褐(5YR　4/8) 外：明赤褐(5YR　5/6) 断：黒褐(5YR　3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第76図	632	第４層下層	無文	口縁部	－	1.60	A2群cⅠ類	内：橙(5YR　7/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR　4/4) 断：赤灰(2.5YR　4/1)	繊維混入。 ～0.1㎜大の砂粒を多く含む。
第76図	633	第４層下層	無文	口縁部	－	1.30	A2群cⅡ類	内：褐(7.5YR　4/3) 外：にぶい赤褐(5YR　5/4) 断：黒褐(5YR　3/1)	繊維混入。 ～0.1㎜大の砂粒を多く含む。
第76図	634	第４層下層	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(2.5YR　4/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR　5/4) 断：赤灰(2.5YR　4/1)	繊維混入。 ～１㎜大の砂粒を含む。
第76図	635	第４層下層	無文	口縁部	－	0.90	A2群cⅡ類	内：黒褐(7.5YR　3/1) 外：赤褐(2.5YR　4/6) 断：暗赤灰(2.5YR　3/1)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を含む。
第76図	636	第４層下層	無文	口縁部	－	1.40	A2群cⅡ類	内：褐(7.5YR　4/3) 外：赤褐(5YR　4/6) 断：黒褐(10YR　3/1)	繊維を極めて多量に含む。 ～0.1㎜大の砂粒を含む。
第76図	637	第４層下層	無文	口縁部	26.80	0.90	A2群cⅡ類	内：明赤褐(5YR　5/6) 外：明赤褐(5YR　5/6) 断：褐灰(5YR　4/1)	繊維混入。 0.5～３㎜大の砂粒を多く含む。
第76図	638	第４層下層	無文	口縁部	37.40	1.60	A2群cⅢ類	内：明赤褐(2.5YR　5/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR　4/3) 断：暗赤灰(2.5YR　3/1)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を含む。

第25表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表21

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第76図	639	第4層下層	無文	口縁部	−	1.00	A2群a類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 〜0.5㎜大の砂粒を含む。
第76図	640	第4層下層	無文	口縁部	−	1.50	A2群b類	内：赤褐(5YR 4/6) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 〜0.5㎜大の砂粒を含む。
第76図	641	第4層下層	無文	胴部	−	1.60	A群	内：褐(7.5YR 4/4) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 〜1㎜大の砂粒を多量に含む。
第76図	642	第4層下層	無文	胴部	−	0.80	A群	内：暗赤褐(5YR 3/3) 外：暗赤褐(5YR 3/3) 断：暗赤褐(5YR 3/3)	繊維混入。 〜0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第76図	643	第4層下層	無文	胴部	−	1.50	A群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：黒(7.5YR 2/1)	繊維混入。 〜0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第76図	644	第4層下層	無文	胴部	−	2.40	A群	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5〜3㎜大の砂粒を含む。
第77図	645	第4層下層	無文	胴部	41.80	2.70	A群	内：赤褐(5YR 4/8) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5〜8㎜大の砂礫を含む。
第77図	646	第4層下層	無文	胴部	18.80	1.50	A群	内：褐灰(10YR 4/1) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5〜3㎜大の砂粒を多く含む。
第77図	647	第4層下層	無文	胴部	−	1.20	A群	内：褐灰(7.5YR 4/1) 外：赤褐(2.5YR 4/8) 断：にぶい赤褐(2.5YR 5/4)	繊維混入。 0.5〜2㎜大の砂粒を含む。
第77図	648	第4層下層	無文	胴部	−	1.60	A群	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：橙(7.5YR 6/6) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	繊維混入。 0.5〜3㎜大の砂粒を多く含む。
第77図	649	第4層下層	無文	胴部	−	1.10	A群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5〜2㎜大の砂粒を含む。
第77図	650	第4層下層	無文	胴部	−	2.00	A群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：黒褐(2.5Y 3/1)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒を含む。
第77図	651	第4層下層	無文	胴部	−	1.90	A群	内：赤褐(2.5YR 4/8) 外：赤褐(2.5YR 4/8) 断：暗灰(N 3/)	繊維混入。
第77図	652	第4層下層	無文	胴部	−	2.10	A群	内：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 断：灰(N 4/)	繊維混入。 〜0.5㎜大の砂粒を含む。
第77図	653	第4層下層	無文	底部	−	2.30	A群	内：にぶい黄褐(10YR 5/4) 外：黒褐(10YR 3/1) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5〜2㎜大の砂粒を極めて多く含む。
第78図	654	第4層下層	山形文	口縁部	−	0.60	B1群a類	内：赤褐(5YR 4/8) 外：赤褐(5YR 4/8) 断：赤褐(5YR 4/8)	繊維混入。 〜0.5㎜大の砂粒を含む。
第78図	655	第4層下層	山形文	口縁部	−	0.50	B2群a類 Ⅲ種ii	内：橙(7.5YR 7/6) 外：褐灰(7.5YR 4/1) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	〜0.5㎜大の砂粒を含む。
第78図	656	第4層下層	山形文	口縁部	−	0.70	B2群b類 Ⅲ種ii	内：橙(2.5YR 6/8) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：にぶい黄橙(10YR 7/2)	繊維混入。 0.5〜1㎜大の砂粒を多く含む。
第78図	657	第4層下層	山形文	口縁部	−	0.60	B2群b類 Ⅱ種	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 〜5㎜大の砂礫を含む。
第78図	658	第4層下層	山形文	口縁部付近	−	0.70	B群	内：暗赤褐(5YR 3/4) 外：黒褐(5YR 3/1) 断：灰褐(5YR 4/2)	繊維混入。 0.5〜1㎜大の砂粒を多く含む。
第78図	659	第4層下層	山形文	胴部	−	0.80	B群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 0.5〜1㎜大の砂粒を含む。
第78図	660	第4層下層	山形文	胴部	−	1.75	B群	内：赤褐(2.5YR 4/8) 外：赤褐(2.5YR 4/8) 断：暗赤灰(2.5YR 3/1)	繊維混入。 0.5〜5㎜大の砂礫を多く含む。
第78図	661	第4層下層	山形文	胴部	−	0.80	B群	内：にぶい赤褐(5YR 4/3) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 〜2㎜大の砂粒を含む。
第78図	662	第4層下層	山形文	胴部	−	0.80	B群	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：黒褐(10YR 3/2) 断：黒褐(2.5Y 3/1)	〜0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第78図	663	第4層下層	山形文	胴部	−	0.80	B群	内：灰褐(7.5YR 5/2) 外：にぶい褐(7.5YR 5/3) 断：にぶい黄橙(10YR 6/4)	0.1〜2㎜大の砂粒を多く含む。
第78図	664	第4層下層	山形文	胴部	−	0.70	B群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 断：にぶい黄橙(10YR 6/3)	〜0.5㎜大の砂粒を多く含む。 金雲母多い。
第78図	665	第4層下層	山形文	胴部	−	0.70	B群	内：橙(5YR 6/6) 外：橙(7.5YR 6/6) 断：灰褐(7.5YR 5/2)	0.5〜1㎜大の砂粒を多く含む。
第78図	666	第4層下層	山形文	胴部	−	0.60	B群	内：にぶい黄褐(10YR 4/3) 外：灰黄褐(10YR 4/2) 断：黒褐(10YR 3/1)	〜0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第78図	667	第4層下層	山形文	胴部	−	0.80	B群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：にぶい褐(7.5YR 5/4) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	〜4㎜大の砂粒を多く含む。 金雲母含む。
第78図	668	第4層下層	ポジティヴ楕円文	胴部	22.00	0.60	C群	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：明赤褐(5YR 5/8) 断：灰黄褐(10YR 5/2)	0.5〜1㎜大の砂粒を多く含む。
第78図	669	第4層下層	格子目文	口縁部付近	−	0.70	D群	内：にぶい黄褐(10YR 5/4) 外：赤褐(5YR 4/8) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5〜3㎜大の砂粒を多く含む。

第26表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表22

挿図番号	報告番号	出土経緯	器　種	部　位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分　類	色　　調	備　　考
第78図	670	第４層下層	撚糸文	胴部	－	0.70	F群	内：にぶい黄橙(10YR　7/3) 外：橙(7.5YR　6/6) 断：褐灰(10YR　5/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第78図	671	第４層下層	撚糸文	胴部	－	0.60	F群	内：赤褐(5YR　4/8) 外：暗赤褐(5YR　3/3) 断：黒褐(5YR　2/1)	繊維混入。 0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第78図	672	第４層下層	撚糸文	胴部	－	0.65	F群	内：にぶい黄褐(10YR　5/3) 外：にぶい赤褐(5YR　4/4) 断：黒褐(10YR　3/1)	～0.5㎜大の砂粒を多く含む。

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種(分類)	法　量(MAX) 全長(cm)	法　量(MAX) 全幅(cm)	法　量(MAX) 全厚(cm)	法　量(MAX) 重量(g)	石　　材	備　　考
第79図	673	第４層下層	石鏃(B類３種ⅰ)	1.92	1.29	0.33	0.5	サヌカイト	
第79図	674	第４層下層	石鏃(B類３種ⅰ)	2.03	1.89	0.44	1.3	サヌカイト	
第79図	675	第４層下層	石鏃(B類３種ⅰ)	1.67	1.42	0.30	0.3	サヌカイト	
第79図	676	第４層下層	石鏃(B類３種ⅰ)	3.08	2.16	0.52	2.5	サヌカイト	
第79図	677	第４層下層	石鏃(B類３種ⅰ)	2.56	1.78	0.57	1.8	サヌカイト	
第79図	678	第４層下層	石鏃(B類３種ⅱ)	1.90	2.21	0.38	1.1	サヌカイト	
第79図	679	第４層下層	磨石・敲石(A類４)	7.82	8.64	4.43	431.0	砂岩	石鹸形磨石を転用か？
第79図	680	第４層下層	磨石・敲石(A類２)	11.52	7.21	3.54	495.8	緑色片岩	
第79図	681	第４層下層	磨石・敲石(A類１)	11.58	10.25	5.46	964.4	砂岩	
第79図	682	第４層下層	磨石・敲石(B類)	10.90	7.10	4.20	380.0	砂岩	

挿図番号	報告番号	出土経緯	器　種	部　位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分　類	色　　調	備　　考
第80図	683	第４層一括	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(2.5YR　5/4) 外：赤(10R　5/6) 断：暗赤灰(10R4/1)	繊維混入。 0.5～２㎜大の砂粒を多く含む。
第80図	684	第４層一括	無文	口縁部	－	1.60	A2群cⅡ類	内：明褐(7.5YR　5/6) 外：明褐(7.5YR　5/6) 断：にぶい褐(7.5YR　6/3)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を含む。
第80図	685	第４層一括	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅡ類	内：明赤褐(2.5YR　5/6) 外：にぶい褐(7.5YR　6/3) 断：黒褐(10YR　3/1)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第80図	686	第４層一括	無文	口縁部	－	1.50	A2群cⅡ類	内：にぶい橙(7.5YR　6/4) 外：にぶい赤褐(5YR　4/3) 断：褐灰(5YR　4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第80図	687	第４層一括	無文	口縁部	－	1.45	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(5YR　5/4) 外：にぶい赤褐(5YR　5/4) 断：黒褐(5YR　3/1)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第80図	688	第４層一括	無文	口縁部	－	1.10	A2群b類	内：暗赤褐(5YR　3/4) 外：赤褐(5YR　4/6) 断：褐灰(7.5YR　4/1)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を含む。
第80図	689	第４層一括	無文	胴部	－	1.50	A群	内：にぶい黄橙(10YR　7/4) 外：明赤褐(2.5YR　5/8) 断：にぶい黄橙(10YR　7/4)	繊維混入。 0.5～２㎜大の砂粒を多く含む。
第80図	690	第４層一括	山形文	口縁部	－	0.60	B1群a類	内：にぶい赤褐(5YR　4/4) 外：にぶい赤褐(5YR　4/4) 断：灰褐(5YR　4/2)	繊維混入。 ～１㎜大の砂粒を含む。
第80図	691	第４層一括	山形文	胴部	－	0.80	B群	内：明赤褐(2.5YR　5/6) 外：褐(7.5YR　4/3) 断：灰黄褐(10YR　4/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。 黒雲母含む。
第80図	692	第４層一括	格子目文	口縁部付近	－	0.65	D群	内：褐(7.5YR　4/3) 外：にぶい赤褐(5YR　5/4) 断：黒褐(7.5YR　3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第80図	693	第４層一括	沈線文？	胴部	－	0.60	―	内：にぶい赤褐(5YR　5/4) 外：にぶい褐(7.5YR　5/4) 断：にぶい赤褐(5YR　5/4)	繊維混入。 0.5～２㎜大の砂粒を含む。
第81図	694	西トレンチ一括	無文	口縁部	32.60	0.80	A1群ⅱ	内：赤褐(5YR　4/6) 外：暗赤褐(5YR　3/3) 断：褐灰(5YR　4/1)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を多く含む。
第81図	695	西トレンチ一括	無文	口縁部	－	0.55	A1群ⅱ	内：明赤褐(5YR　5/6) 外：明赤褐(5YR　5/6) 断：褐灰(10YR　4/1)	繊維混入。 0.5～１㎜大の砂粒を含む。 金雲母含む。
第81図	696	西トレンチ一括	無文	口縁部	－	0.70	A2群cⅠ類	内：灰褐(7.5YR　5/2) 外：褐灰(7.5YR　4/1) 断：褐灰(7.5YR　4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第81図	697	西トレンチ一括	無文	口縁部	－	0.90	A2群cⅡ類	内：にぶい黄橙(10YR　6/3) 外：橙(2.5YR　6/6) 断：黄灰(2.5Y　4/1)	繊維混入。
第81図	698	西トレンチ一括	無文	口縁部	－	1.30	A2群cⅡ類	内：にぶい橙(5YR　6/4) 外：明赤褐(2.5YR　5/6) 断：暗灰(N　3/)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。

第27表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表23

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第81図	699	西トレンチ一括	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅡ類	内：橙(5YR 6/8) 外：橙(5YR 6/8) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒を比較的多く含む。
第81図	700	西トレンチ一括	無文	口縁部	－	0.90	A2群cⅡ類	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：明赤褐(5YR 5/6) 断：黒(10YR 2/1)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒を含む。
第81図	701	西トレンチ一括	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅣ類	内：黒褐(5YR 3/1) 外：暗赤褐(5YR 3/4) 断：暗赤褐(5YR 3/4)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒を含む。
第81図	702	西トレンチ一括	無文	口縁部	－	1.50	A2群B類	内：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第81図	703	西トレンチ一括	無文	胴部	－	1.60	A群	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒を含む。
第81図	704	西トレンチ一括	無文	胴部	－	2.10	A群	内：浅黄橙(10YR 8/3) 外：にぶい橙(7.5YR 6/4) 断：褐灰(10YR 6/1)	繊維混入。 0.5～5㎜大の砂礫を多く含む。
第81図	705	西トレンチ一括	無文	胴部	－	1.60	A群	内：赤褐(2.5YR 4/8) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。
第81図	706	西トレンチ一括	無文	胴部	－	2.00	A群	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：褐(7.5YR 4/3) 断：灰褐(7.5YR 4/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第81図	707	西トレンチ一括	無文	胴部	－	1.00	A群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：黒(10YR 2/1)	繊維混入。 0.5～4㎜大の砂粒を多く含む。
第81図	708	西トレンチ一括	山形文	口縁部	34.40	0.60	B1群b類	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 断：明赤褐(5YR 5/6)	0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第81図	709	西トレンチ一括	山形文	口縁部	－	0.60	B1群b類	内：灰褐(5YR 4/2) 外：にぶい褐(7.5YR 5/4) 断：灰褐(7.5YR 5/2)	～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。
第81図	710	西トレンチ一括	山形文	口縁部	14.20	0.80	B1群b類	内：褐灰(10YR 4/1) 外：黄灰(2.5Y 4/1) 断：黒褐(2.5Y 3/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第81図	711	西トレンチ一括	山形文	口縁部付近	－	0.70	B1群b類	内：にぶい黄橙(10YR 6/4) 外：にぶい黄橙(10YR 6/4) 断：にぶい黄橙(10YR 6/4)	～1㎜大の砂粒を多く含む。
第81図	712	西トレンチ一括	格子目文	口縁部付近	－	0.60	B群	内：暗赤褐(5YR 3/6) 外：赤褐(5YR 4/6) 断：にぶい赤褐(5YR 4/4)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第81図	713	西トレンチ一括	格子目	胴部	－	0.65	D群	内：黒褐(10YR 3/2) 外：暗褐(7.5YR 3/3) 断：赤褐(5YR 4/6)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第81図	714	西トレンチ一括	異形押型文	口縁部付近	－	0.70	E群	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	複合鋸歯文。 繊維混入。 0.5～4㎜大の砂粒を含む。
第81図	715	西トレンチ一括	撚糸文	口縁部	23.60	0.60	F群	内：にぶい褐(7.5YR 6/3) 外：灰褐(7.5YR 4/2) 断：灰褐(7.5YR 6/2)	0.5～6㎜大の砂礫を多く含む。

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	法量(MAX) 全長(cm)	法量(MAX) 全幅(cm)	法量(MAX) 全厚(cm)	法量(MAX) 重量(g)	石材	備考
第82図	716	西トレンチ一括	土製品？	6.20	3.80	2.00	－	土製品	無文土器と同じ粘土を使用。 繊維混入。

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第83図	717	東トレンチ一括	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅠ類	内：にぶい赤褐(5YR 5/3) 外：橙(5YR 6/6) 断：褐灰(5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第83図	718	東トレンチ一括	無文	口縁部	－	1.10	A2群cⅠ類	内：明赤褐(2.5YR 5/6) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～6㎜大の砂礫を多く含む。
第83図	719	東トレンチ一括	無文	口縁部	－	1.50	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第83図	720	東トレンチ一括	無文	口縁部	－	1.30	A2群cⅣ類	内：にぶい赤褐(5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第83図	721	東トレンチ一括	無文	口縁部	－	1.20	A2群cⅠ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第83図	722	東トレンチ一括	無文	口縁部	－	2.00	A2群cⅣ類	内：にぶい橙(5YR 6/4) 外：にぶい橙(2.5YR 6/4) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第83図	723	東トレンチ一括	無文	胴部	－	1.70	A群	内：灰黄褐(10YR 4/2) 外：にぶい赤褐(5YR 4/4) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 ～0.1㎜大の砂粒を多く含む。
第83図	724	東トレンチ一括	無文	胴部	－	1.80	A群	内：灰黄(2.5Y 6/2) 外：にぶい黄褐(10YR 5/3) 断：にぶい黄橙(10YR 7/4)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第83図	725	東トレンチ一括	無文	胴部	－	1.60	A群	内：にぶい黄橙(10YR 7/3) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：黄灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第83図	726	東トレンチ一括	無文	胴部	－	1.30	A群	内：暗赤褐(5YR 3/3) 外：暗赤褐(5YR 3/3) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第83図	727	東トレンチ一括	無文	胴部	－	1.60	A群	内：にぶい橙(2.5YR 6/4) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：赤灰(2.5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。

第28表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表24

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	法量(cm/MAX) 器厚	分類	色調	備考
第83図	728	東トレンチ一括	山形文	口縁部	−	0.60	B1群a類	内：にぶい橙(5YR 6/4) 外：にぶい黄橙(10YR 6/4) 断：にぶい橙(5YR 6/4)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒を多く含む。
第83図	729	東トレンチ一括	異形押型文	口縁部	23.60	0.60	B2群b類 Ⅲ種iv	内：灰黄褐(10YR 5/2) 外：にぶい黄橙(10YR 6/4) 断：黒褐(10YR 3/1)	0.5～2㎜大の砂粒を多く含む。
第83図	730	東トレンチ一括	山形文	胴部	−	0.70	B群	内：にぶい赤褐(5YR 4/4) 外：にぶい赤褐(5YR 5/4) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第83図	731	東トレンチ一括	山形文	胴部	−	1.80	B群	内：にぶい橙(5YR 6/4) 外：にぶい橙(5YR 6/4) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～8㎜大の砂礫を多く含む。
第83図	732	東トレンチ一括	ポジティヴ楕円文	口縁部	−	0.50	C2群b類 Ⅲ種iv	内：褐(7.5YR 4/3) 外：褐(7.5YR 4/4) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第83図	733	東トレンチ一括	ポジティヴ楕円文	胴部	−	1.10	C群	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：にぶい褐(7.5YR 5/3)	繊維混入。 0.5～3㎜大の砂粒を多く含む。
第83図	734	東トレンチ一括	ポジティヴ楕円文	胴部	−	0.60	C群	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：灰黄褐(10YR 5/2) 断：褐灰(10YR 5/1)	～0.5㎜大の砂粒を含む。
第83図	735	東トレンチ一括	格子目文	胴部	−	1.25	D群	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：褐(7.5YR 4/3) 断：褐灰(10YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第83図	736	東トレンチ一括	撚糸文	胴部	−	0.90	F群	内：にぶい褐(7.5YR 5/3) 外：にぶい褐(7.5YR 6/3) 断：明赤褐(2.5YR 5/6)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第84図	737	北トレンチ一括	無文	胴部	−	1.20	A群	内：褐灰(10YR 4/1) 外：橙(7.5YR 6/6) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第84図	738	北トレンチ一括	山形文	口縁部	−	0.60	B1群a類	内：にぶい赤褐(2.5YR 5/3) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/3) 断：にぶい赤褐(2.5YR 5/3)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第84図	739	北トレンチ一括	山形文	口縁部	−	0.70	B1群a類	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：にぶい黄橙(10YR 7/4) 断：暗灰黄(2.5Y 5/2)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第84図	740	北トレンチ一括	山形文	口縁部	−	0.70	B2群b類 Ⅲ種ii	内：赤褐(2.5YR 4/8) 外：にぶい赤褐(2.5YR 4/3) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を含む。
第84図	741	北トレンチ一括	山形文	口縁部	−	0.60	B2群b類 Ⅱ種	内：灰赤(2.5YR 4/2) 外：にぶい赤褐(2.5YR 5/4) 断：赤灰(2.5YR 4/1)	繊維混入。 0.1～1㎜大の砂粒を含む。
第84図	742	北トレンチ一括	山形文	胴部	−	0.70	B群	内：にぶい黄橙(10YR 7/2) 外：褐灰(7.5YR 4/1) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第84図	743	北トレンチ一括	山形文	胴部	−	1.60	B群	内：にぶい黄橙(10YR 7/3) 外：明赤褐(2.5YR 5/6) 断：褐灰(5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を多く含む。
第84図	744	北トレンチ一括	格子目文	胴部	−	0.70	D群	内：にぶい赤褐(5YR 5/3) 外：にぶい赤褐(5YR 5/3) 断：黒褐(5YR 3/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第84図	745	北トレンチ一括	弥生甕？	胴部	−	0.80	−	内：褐灰(10YR 5/1) 外：にぶい黄橙(10YR 7/3) 断：暗灰(N 3/)	0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第84図	746	北トレンチ一括	弥生甕	胴部	−	0.80	−	内：浅黄(2.5Y 7/3) 外：浅黄(2.5Y 7/3) 断：暗灰(N 3/)	0.5～2㎜大の砂粒を含む。
第85図	747	撹乱	無文	口縁部	−	0.90	A1種ii	内：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 外：赤褐(2.5YR 4/8) 断：黒褐(10YR 3/1)	繊維混入。 0.5～2㎜大の砂粒を含む。
第85図	748	撹乱	無文	口縁部	−	1.40	A2群cⅠ類	内：赤褐(5YR 4/8) 外：赤褐(5YR 4/8) 断：明赤褐(2.5YR 5/6)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第85図	749	撹乱	無文	口縁部	−	1.80	A2群cⅡ類	内：にぶい褐(7.5YR 5/4) 外：橙(2.5YR 6/6) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第85図	750	撹乱	無文	口縁部	−	1.00	A2群cⅡ類	内：灰黄褐(10YR 6/2) 外：にぶい黄橙(10YR 7/4) 断：褐灰(10YR 5/1)	繊維混入。 ～1㎜大の砂粒を多く含む。
第85図	751	撹乱	無文	口縁部	−	1.30	A2群cⅡ類	内：にぶい赤褐(5YR 5/3) 外：灰褐(5YR 4/2) 断：褐灰(7.5YR 4/1)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第85図	752	撹乱	無文	口縁部	−	1.10	A2群cⅢ類	内：にぶい赤褐(2.5YR 4/4) 外：灰赤(2.5YR 4/2) 断：にぶい赤褐(2.5YR 4/3)	繊維混入。 0.5～1㎜大の砂粒を含む。
第85図	753	撹乱	無文	口縁部	−	0.60	A2群B類	内：褐灰(7.5YR 4/1) 外：灰黄褐(10YR 5/2) 断：黒(10YR 2/1)	繊維混入。 ～0.5㎜大の砂粒を含む。
第85図	754	撹乱	山形文	胴部	−	0.60	A群	内：にぶい橙(7.5YR 6/4) 外：灰褐(7.5YR 5/2) 断：灰褐(7.5YR 5/2)	繊維混入。 ～1㎜大の砂粒をわずかに含む。
第85図	755	撹乱	ポジティヴ楕円文	口縁部付近	−	0.70	C群	内：にぶい褐(7.5YR 5/3) 外：褐灰(7.5YR 4/1) 断：褐灰(7.5YR 5/1)	～1㎜大の砂粒を多く含む。
第85図	756	撹乱	ポジティヴ楕円文	胴部	−	0.55	C群	内：暗褐(10YR 3/3) 外：にぶい褐(7.5YR 5/4) 断：黒褐(7.5YR 3/1)	～0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第85図	757	撹乱	ポジティヴ楕円文	胴部	−	0.60	C群	内：褐(7.5YR 4/3) 外：にぶい黄褐(10YR 4/3) 断：褐(7.5YR 4/3)	～0.5㎜大の砂粒を多く含む。 金雲母多量含む。
第85図	758	撹乱	ポジティヴ楕円文	胴部	−	0.60	C群	内：にぶい黄褐(10YR 5/3) 外：にぶい黄褐(10YR 5/4) 断：にぶい褐(7.5YR 5/4)	～0.5㎜大の砂粒をわずかに含む。

第29表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表25

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種	部位	法量(cm/MAX) 径	器厚	分類	色調	備考
第85図	759	表面採集	撚糸文	口縁部	−	0.60	F群	内：橙(2.5YR 6/6) 外：灰赤(2.5YR 5/2) 断：赤灰(2.5YR 5/1)	繊維混入。 〜0.5㎜大の砂粒を多く含む。
第85図	760	撹乱	撚糸文	胴部	−	1.40	F群	内：明赤褐(5YR 5/6) 外：にぶい赤褐(5YR 4/3) 断：にぶい黄褐(10YR 4/3)	繊維混入。 〜0.5㎜大の砂粒を含む。
第85図	761	表面採集	弥生前期甕	口縁	−	0.90	−	内：にぶい黄橙(10YR 7/4) 外：にぶい黄橙(10YR 7/4) 断：褐灰(10YR 4/1)	0.5〜1㎜大の砂粒を含む。

挿図番号	報告番号	出土経緯	器種(分類)	法量(MAX) 全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)	石材	備考
第85図	762	表面採集	石鏃(B類3)	2.61	1.59	0.45	1.1	サヌカイト	
第85図	763	撹乱	磨石	5.00	5.10	2.60	90.0	砂岩	
第85図	764	表面採集	敲石	10.20	10.20	7.40	789.0	砂岩	

第30表　刈谷我野遺跡Ⅱ　遺物観察表26

『刈谷我野遺跡Ⅱ』

写 真 図 版

図版１－１　刈谷我野遺跡平成16年度調査第４層中検出状況（北調査区）

図版１－２　刈谷我野遺跡平成16年度調査検出SK１完掘状況

図版 2

図版 2 - 1　刈谷我野遺跡平成16年度調査東壁土層（北調査区）

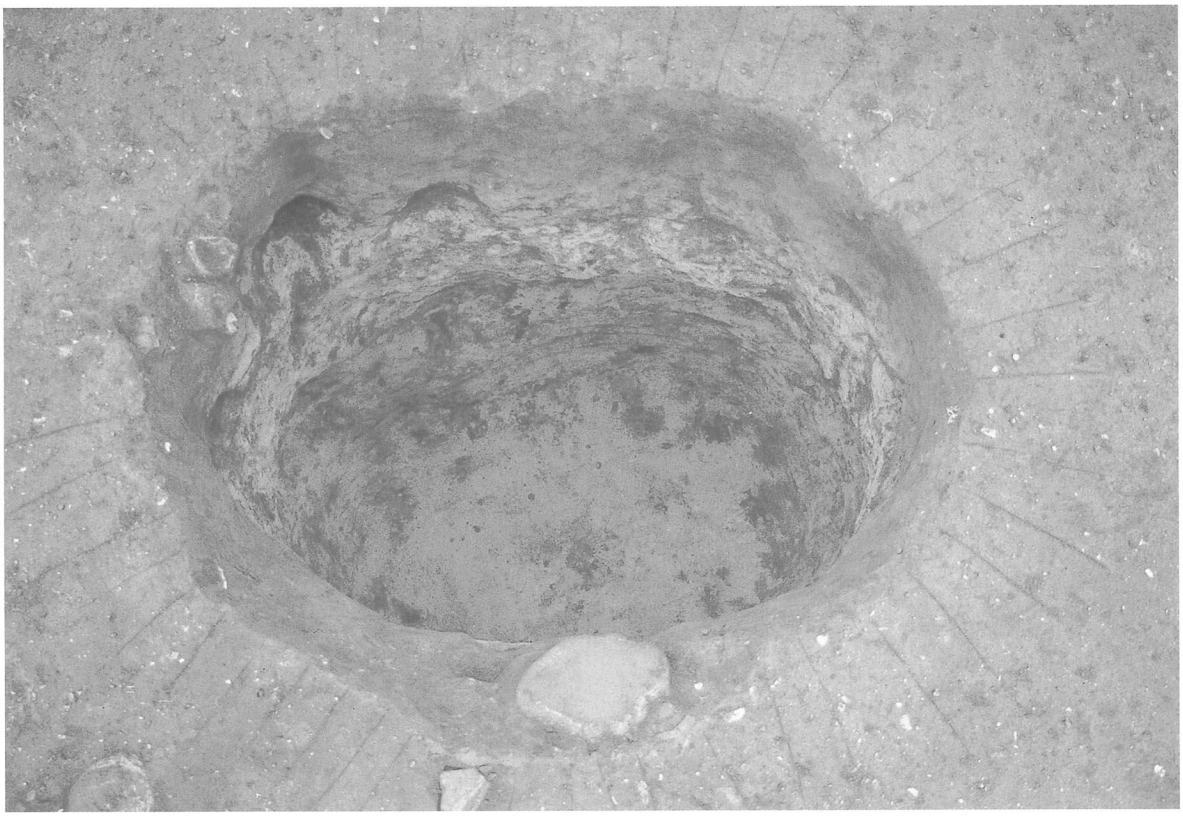
図版 2 - 2　刈谷我野遺跡平成16年度調査東壁土層SK 1 部分

図版 3 - 1　刈谷我野遺跡平成16年度調査第 5 層上面検出状況（南調査区）

図版 3 - 2　刈谷我野遺跡平成16年度調査東壁土層（南調査区）

図版 4

図版 4 - 1　刈谷我野遺跡平成17年度調査第 3 層中検出状況



図版 4 - 2　刈谷我野遺跡平成17年度調査第 3 層中検出SK 1 完掘状況

図版 5 - 1　刈谷我野遺跡平成17年度調査第 4 層上面検出状況

図版 5 - 2　刈谷我野遺跡平成17年度調査第 4 層上面検出遺物集中 1 ・ 2 出土状況